

広島藩における
近世用語の概説

六訂増補版

金岡 照 編

発刊にあたって

平成十一年五月に本書の五訂版を発刊したが、以後編者がはじめて目にする多くの用語の解説が必要になってきた。

そこで、やむなく「五訂版補遺」や「五訂版続補遺」を発刊せざるを得なかった。

しかし、その後も新しく見つかった用語の解説の必要に迫られ、その上古文書の勉強をされている方々から、「五訂版を是非再販してほしい」の要望を、度々聞くようになってきた。

そこで、「五訂版補遺」ならびに「五訂版続補遺」に記載している用語、また、新用語の概説、更には五訂版に記載しているいくつかの用語についての訂正や、補説を加えて、今回六訂版を発刊した。

編者はもちろん古文書に精通はしていない。また、郷土史の研究家でもない。従って、本書に記載している用語の概説のうち、独断や偏見になっているものがあるのではないかと懼れているので、忌憚のないご意見を承りたいと思っている。

なお本書は、県立文書館における古文書研究会や、その他の古文書研究会の方々のご協力、次女夫妻のパソコンによる原稿の作成によって上梓されたものである。ここに衷心より感謝の意を表するとともに、この六訂版が古文書を勉強されている方々にとって、少しでも役立つならば、編者には望外の喜びである。

平成十四年十月

金 岡 照

* 「六訂版」の発刊後、記事の若干の訂正・追加をし、「六訂増補版」として発刊する。（平成十七年三月）

* 誤植を直し、記事の一部を訂正する。（平成十七年十月）

* 誤植を直し、記事の一部を訂正・追加をする。（平成十九年八月）

目次

発刊に当たって 参考図書とその略号

あ

あいきゅうち 相給知……
あいくみ 相組↓町組……
あいざ 藍座……
あいたいかけあい 相對掛合……
あいたいすましれい 相對濟し令……
あいたいたいしやく 相對貸借……
あいたいちんせん 相對賃錢……
あいのこぶね 合の子船……
あいのじゆく 間宿……
あおさし 青刺……
あおびようし 青標紙……
あかおおぎ 赤大木……
あがりぎんそうば 上り銀相場……
あがりじ 上り地……
あがりしようもん 揚証文……
あがりだか 上り高……
あがりづめ 上り詰……
あがりひやくしよう 上り百姓↓片付百姓……
あがりまい 上り米……
あがりまいのさんしゅつ 上り米の算出……
あがりや 揚り屋……
あきおんな 秋女……

あきじのり 安芸路乗り↓地乗り……
あきなり 秋成……
あきめん 秋免……
あきめんせい 秋免制↓検見取法……
あげさかや 揚酒屋……
あけち 明知……
あげち 揚地↓上り地……
あげちれい 上地令……
あげまい 上げ米……
あげや 揚家……
あさいとぎん 麻糸銀……
あしがる 足輕……
あしこひきだか 足子引高……
あずかりてがた 預り手形……
あずかりどころ 預所……
あずかりはま 預り浜……
あつらえがみ 詔紙……
あとかぶ 跡株……
あとしき 跡式……
あとやく 跡役……
あぶらうんじようぎん 油運上銀……
あぶらかた 油方……
あぶらかたみだしのもの 油方見札の者……
あぶらごようしよ 油御用所……
あまごいきとうのひよう 雨乞祈禱の費用……
あみやくぎん 網役銀……
あゆかわやくぎん 鮎川役銀……
あらそぜい 荒芋税……

い

あらためただしか 改出高……
あらにぶね 荒荷船……
ありつけひやくしよう 有附百姓……
ありまい 有米……
ありまいもくろく 有米目録↓下見帳……
あれ 荒……
あれおこしじ 荒起し地……
あれかずき 荒園……
あわせほならし 合穂概し……
いえあらため 家改め↓水主役銀……
いえのきさんじよう 家軒三升↓三工役……
いかだのりなかも 筏乗仲間……
いけしたねんぐ 池下年貢……
いさばふね いさば船……
いせきしようもん 遺跡証文……
いせんどう 居船頭……
いちえいめ 壹永目……
いちぶほ 壹歩穂……
いちぶまい 壹歩米……
いちまち 市町……
いちみようみ 一名見……
いつくしままぜい 蔽島薪税……
いつさつ 一札……
いつしゅうがまい 一宗構……
いつしゅもの 一種物……
いつせきけつしよ 一跡闕所……
いっつわり 一斗割……

いっばかまい 一派構……
いっぴき 一疋……
いっぴきいっぼん 一疋一本↓馬持以上……
いならし 居概↓帳面概……
います 今杣……
いもじ 鋳物師……
いりさくひやくしよう 入作百姓……
いりづめわりふ 入詰割賦……
いりまい 入米↓込米……
いりみ 入実……
いりめ 入目……
いれおきまい 入置米……
いろりぎん 囲炉裏銀……
いわいやぎん 岩井屋銀……
いわしあみうんじよう 鰯網運上……
いんかじよう 印可状……

う

うえきぶぎよう 植木奉行……
うきかせぎ 浮稼ぎ……
うきぐみあしがる 浮組足軽……
うきしよむ 浮所務……
うきすぎ 浮過……
うきち 浮地……
うきちたねもみ 浮地種粃……
うきもうけ 浮儲……
うきやく 浮役……
うけおいりこ 請負煎海鼠……
うけしよ 請書……

うけたけぎん 請竹銀↓竹代銀……
うけまい 請米……
うけめん 請免……
うけやど 請宿↓町宿……
うけやま 請山……
うけやまごうんじよう 請山御運上……
うじがみさいれいにゆうよう
氏神祭祀入用……
うしだいぎん 牛代銀……
うちあいめん 打合免……
うちごもり 打籠……
うちしよむたか 内所務高……
うちたて 内立……
うちに 打荷……
うちまき 打撒……
うちわたしつぼつけ 打渡坪付……
うちわり 内割……
うまおいふだ 馬追札……
うまさし 馬差……
うままわりぐみ 馬廻り組……
うまもちいじよう 馬持以上……
うらかこ 浦水主……
うらかた 浦方……
うらきつて 浦切手……
うらぶれ 浦触……
うらべおくらうんちんまい
浦辺御藏運賃米……
うらべくらぶぎよう 浦辺藏奉行……

うらべしまかたけいせんまい
浦辺島方繫船米↓蒲刈繫船所……
うらぼん 孟蘭盆……
うらやくむら 浦役村……
うるしぎん 漆銀……
うわにぶね 上荷船……
うんじようぎん 運上銀……
うんじようば 運上場↓材木場……

え

えいあれ 永荒……
えいせん 永銭……
えいだいあげきり 永代上限り……
えいたいこく 永貸穀……
えいだいろく 永代禄……
えいりこく 永利穀……
えいりほうじようじゅ 永利法成就
↓永利穀……
えいろう 永牢……
えきしむけぎん 駅仕向銀……
えきばだいぎん 駅馬代銀……
えだごう 枝郷……
えどかわせごよう 江戸為替御用……
えどはんてい 江戸藩邸……
えどるすい 江戸留守居……
えぶぎよう 江波奉行……
えびすこう 胡講……
えびすやぎん 胡屋銀↓糒屋銀……
えんぜつしよ 演説書……

えんでんぜい 塩田税……

お

おいあげひやくしょう 追上げ百姓

↓片付百姓……

おいこめ 追込……

おいせまいり 御伊勢参り……

おうらいてがた 往来手形……

おおあおき 大青木……

おおあし 大足……

おおあたけせん 大安宅船……

おおいえ 大家……

おおさかおきがわせのせい

大坂置為替の制……

おおさかくらやしき 大坂蔵屋敷……

おおさかのぼせきんぎん 大坂登せ金銀……

おおさかのぼせまい 大坂登せ米……

おおさかのぼせまいはいしよ

大坂登せ米支配所……

おおさかやくにん 大坂役人……

おおじようや 大庄屋……

おおだわらとんや 大俵間屋……

おおどおり 大通り……

おおどしより 大年寄……

おおばしり 大走り↓走り……

おおばんがしら 大番頭……

おおぶぎよう 大奉行……

おおより 大寄↓小寄……

おおよりあい 大寄合……

おおわり 大割……

おおわりぎん 大割銀↓定小間銀……

おおわりしょうや 大割庄屋↓割庄屋……

おかげまいり 御蔭参り……

おかこいごようやま 御囲御用山……

おかちめつけ 御歩行目附……

おかねごや 御金小屋……

おかんじようしゅうぎまい 御勘定祝儀米……

おかんじようもくろく 御勘定目録……

おきじゅうぶいちうんじよう

沖十歩一運上……

おきせんどう 沖船頭……

おきつてまい 御切手米……

おきのり 沖乗り……

おきもみのせい 置粕の制↓詰米の制……

おきやくや 御客屋……

おぎんみかた 御吟味方……

おぎんわたり 御銀渡り……

おくぶね 奥船↓口船……

おくらきつて 御蔵切手……

おくらつみちんまい 御蔵積賃米……

おくらばらいぶまいにゅうさつちよう

御蔵払歩米入札帳↓米入……

おくらぶぎよう 御蔵奉行……

おくりきゆう 送り給……

おくりじんばわり 送り人馬割……

おくりてがた 送り手形……

おけだいうけ 御毛代請……

おこびと 御小人……

おこびときりまい 御小人切米……

おこびとまかないふだ 御小人賄札……

おさえしょうもんのせい 押証文の制……

おさえまい 押米……

おさびやくしろう 長百姓……

おし 御師……

おしむけうし 御仕向牛……

おしむけまい 御仕向米……

おすて 御捨……

おだいかんしよ 御代官所↓御役所……

おたてやぶ 御建藪……

おたてやま 御建山……

おちやこう 御茶講……

おちやや 御茶屋……

おちややうけおいぎん 御茶屋請負銀……

おちややさくじぶぎよう 御茶屋作事奉行……

おちややそうじきゆう 御茶屋掃除給……

おついでのごせんぎよう

御序の御前御用↓御直支配……

おてつやま 御鉄山……

おてばた 御手畑……

おどしつ 威筒……

おとめやぶ 御留藪……

おとめやま 御留山……

おとりかえせい 御取替制……

おどりぶ 躍り歩……

おなだい 御名代……

おにわばん 御庭番……
おねんぐくら 御年貢蔵……
おねんぐしたわけがよい
御年貢下分け通↓下分け……
おねんぐまいとりたてさんようちょう
御年貢米取立算用帳……
おねんぐまいつだしがよい
御年貢米津出し通↓下分け……
おのこしまい 御残し米……
おのこりまい 御残り米……
おのみちのかじや 尾道の鍛冶屋……
おめみえ 御目見……
おやごう 親郷↓本郷……
おより 小寄……
おりがみ 折紙……
おりねだん 折直段……
おれいせん 御礼銭……
おんかみがた 御紙方……
おんかみぐら 御紙蔵……
おんくらいれ 御蔵入……
おんじきしはい 御直支配……
おんたかがた 御鷹方……
おんななおし 女直し……
おんもとかい 御本飼……
おんもとかいかた 御本飼方……
おんやくしよ 御役所……
おんやなしよ 御築所……
おんやなしよ 御築所御用懸……

おんやまかた 御山方……
おんやまかたあらためやく 御山方改役……
おんやまぶぎよう 御山奉行↓御山方……

か

かいさいもくろく 皆済目録……
かいつぎばらいせい 買次払い制……
かいはどめ 改派留……
かいふ 改歩↓銀歩……
かいん 花廻……
かえもち 替持……
かかえ 抱……
かかえいれ 抱入……
かかりぶ 掛夫……
かきかぶ 蛎(牡蛎)株……
かきいれ 書入……
かきはおり 柿羽織……
かきやく 書役↓帳付……
かぎやく 鍵役……
かくいほり かくい掘……
かくせん 角銭……
かけおち 欠落……
かけさげ 掛下げ……
かけさげまい 掛下げ米↓指次ぎ米……
かけしよ 懸所……
かけもち 掛持↓抱……
かけもちはま 掛持浜……
かけもやい 掛模相↓家中模相銀……
かこいどめ 囲留↓追込……

かこいもみ 囲糶……
かこいもみふういん 囲糶封印……
かこいやま 囲山……
かこうら 水主浦……
かこやくぎん 水主役銀……
かじこのせい 梶子の制……
かじすみうんじようぎん 鍛冶炭運上銀……
かしらじようや 頭庄屋……
かしらひやくしろう 頭百姓……
かずきだか かずき(蘭)高……
かせん 過銭……
かたぎまい かたき米……
かたくちがみ 片口紙……
かたづけひやくしろう 片付百姓……
かたまち 片町……
かち 歩行……
かちめつけ 歩行目附……
かちゅうあげまい 家中上げ米……
かちゅうもやいぎん 家中模相銀……
かどまつ 門松……
かなら ……
かまがりけいせんしよ 蒲刈繫船所……
かまきり 釜切……
かまどさらい 竈さらい……
かまどめ 鎌留↓山論……
かみおぶぎよう 紙御奉行……
かみおんしいれ 紙御仕入……
かみがしら 紙頭……

かみぐら 紙蔵……
かみこうぞあらためやく 紙楮改役↓紙頭……
かみこうぞしいやく 紙楮支配役……
かみざ 紙座……
かみのぼせまい 上登せ米……
かみやかぶ 紙屋株……
からじりうま 軽尻馬……
からすがね 烏金……
からもの 唐物……
かりしき 刈敷……
かろう 家老……
かわぐちとおりにきつて
川口通り切手↓川口入津米……
かわぐちにゆうしんまい 川口入津米……
かわぐちばんしよ 川口番所……
かわせまい 為替米……
かわなり 川成……
かわなりまい 川成米↓指次ぎ米……
かわよけ 川除……
かわらずえ 航居……
かわりやく 代り役↓跡役……
かんきん 官金……
かんけつまい 間欠米↓欠米……
かんじょうぐみばんぐみ 勘定組番組
↓下代……
かんじょうぶぎよう 勘定奉行……
かんとぎん 官途銀……
かんな 鉄穴↓かなら……

がんにな 願人……
かんぬき 関貫……
かんのうがた 勧農方↓賞罰方……
かんぶつえ 灌仏会……
かんまい 欠米……
かんまい 間米……
き
きえんれい 棄捐令……
きじあみふだうんじよう 雉子網札運上……
きじぎん 雉子銀……
きじてつぼうふだうんじよう 雉子鉄砲札運上……
ぎぜつ 義絶↓久離……
ぎそう 義倉……
きぬざ 絹座……
きのえねまち 甲子待……
きもいり 肝煎……
きゆうじようや 給庄屋……
きゆうにん 給人……
きゆうにんほう 給人法……
きゆうち 給知……
きゆうばきとうにゆうよう 牛馬折俵入用……
きゆうやく 給役……
きゆうり 久離……
きようぎん 京銀……
ぎようじこう 行司講……
きようとはんてい 京都藩邸……
きようとやくにん 京都役人……

きようほうぎん 享保銀↓新銀……
きようます 京枡……
ぎよきこう 御忌講……
きりがね 切金……
きりがみ 切紙↓折紙……
きりせぶ 切畝歩……
きりそえ 切添……
きりちん 切賃……
きりばた 切畑……
きりまい 切米……
きります 切枴……
きりめん 切免……
きりもち 切餅……
きりもの 切者……
ぎんか 銀貨……
ぎんかけはんちん 銀掛判賃……
ぎんかた 銀方↓賞罰方……
ぎんさつあずかりきつて 銀札預り切手……
きんじゅうがしら 近習頭……
ぎんばこ 銀箱↓丁銀包……
きんばんしよ 勤番所……
ぎんぶ 銀歩……
ぎんぶぎよう 銀奉行……
ぎんみかた 吟味方……
ぎんみもの 吟味物……
く
くぎじかじ 釘地鍛冶……
くさてせん 草手銭↓村々入会……

くさやま 草山……
くじそしょう 公事訴訟……
くじでいり 公事出入↓公事訴訟……
くじとりせい 鬭取制……
くじやど 公事宿……
くすりこめ 薬込……
ぐそくひらき 具足開き……
くだされまい 被下米↓足子引高……
くちあいにん 口会人……
くちえい 口永↓口米……
くちがき 口書……
くちすぎ 口過……
くちぶね 口船……
くちまい 口米……
くちや 口屋……
くみがしら 組頭……
くみがしらひきだか 組頭引高↓役人引高……
くもんわび 公問佗……
くらいさがり 位下り↓掛下げ……
くらいりち 蔵入地……
くらしたねんぐ 蔵下年貢……
くらつきおしゅうぎまい 蔵付御祝儀米
↓給役……
くらばらい 蔵払……
くらばらいかんじょうもくろく
蔵払勘定目録↓中勘定……
くらばんきゅう 蔵番給……
くらまい 蔵米↓切米……

くらます 蔵枡……
くらもの 蔵物……
くらやど 蔵宿……
くりぎん 栗銀……
くりやかぶ 繰屋株……
くりわたじつめんうんじょう
繰綿実綿運上……
くるまがし 車貸し……
くろくせん 九六銭……
くろくわ 黒楸……
くろずみうんじょうぎん 黒炭運上銀……
くわさきしんがい 鋤先新開……
くわしたしんがい 鋤下新開↓鋤先新開……
くわしたねんき 鋤下年季……
ぐんかく 郡格……
ぐんがたぎんみやしき 郡方吟味屋敷……
ぐんがたしゅうだんとうしよ
郡方集談頭書……
ぐんごようたししよ 郡御用達所↓代官制……
ぐんごようやしき 郡御用屋敷……
ぐんざほう 郡座法……
ぐんしはい 郡支配……
ぐんだい 郡代……
ぐんたくわえぎん 郡貯銀……
ぐんたくわえまい 郡貯米……
ぐんちゅうざほう 郡中座法↓官途銀……
ぐんちゅうふせいすじただしかた
郡中不正筋札方……

ぐんながや 郡長屋……
ぐんぶわり 郡夫割……
ぐんまわり 郡廻り……
ぐんめんわりかた 郡免割方↓賞罰方……
ぐんもと 郡元……
ぐんやくしよ 郡役所……
ぐんようぎん 郡用銀↓郡貯銀……
ぐんようしよ 郡用所……
ぐんわり 郡割……
ぐんわりちやうのさくせい 郡割帳の作成……
け
がいしゅうさんぶつうようふだ
芸州産物通用札……
けきようせいど 化境制度……
げさくにん 下作人……
げしゅにん 下手人……
けじようこうろく 毛上合力……
げだい 下代……
けつけ 毛付……
けつげだか 毛付高……
げにん 下人……
けみとりほう 検見取法……
けむりぎん 煙銀……
けむりやくぎん 煙役銀……
けんぎよう 検校……
げんべい
こ
こうえんしよ 口演書……

こうぐら 郷蔵……
こうけ 後家……
こうさくあらためぶぎょう 耕作改奉行……
こうじやぎん 糶屋銀……
こうじようがき 口上書……
こうじようだい 口上代……
こうしんこう 庚申講……
こうぞおんうちがし 楮御内貸……
こうぞなえ 楮苗……
こうぞもとぎん 楮元銀……
こうそんいちばしようにん 郷村市場商人……
こうちよう 郷帳……
こうのいけぎん 鴻池銀↓岩井屋銀……
こうめつけ 郷目付↓惣山守……
こうりかみや 小壳紙屋……
こうりよくまい 合力米……
こうろく 合力……
こおりぶぎょう 郡奉行……
こかじずみうんじようぎん 小鍛冶炭運上銀……
こぎそ 扱芋……
こぎそかた 扱芋方……
こきりがみ 小切紙↓折紙……
こく 石……
こくぎんしよ 極銀所……
こくさんごようがかり 国産御用懸
↓諸品方……
こくせん 石銭……

こくだいのう 石代納……
こくだか 石高……
こくだかせい 石高制……
こくやぐぎん 国役銀……
こけにん 御家人……
こけん 沽券……
こしぶね 小越船……
こしくく 越石……
こしばやし 腰林……
こしびやくしろう 越百姓……
こしぶ 越夫……
こしまい 越し米……
こしうぐみ 小姓組……
こじようばん 御定番……
こしうや 小庄屋……
ごぜんごよう 御前御用↓御直支配……
こだまぎん 小玉銀……
こだわらとんや 小俵問屋↓大俵問屋……
こちよう 小帳……
こづかいぶ 小遣夫……
こどおり 小通り……
ごにんぐみ 五人組……
ごにんくみあいちよう 五人組合帳……
このはまい 小の葉米↓貫……
こばしり 小走り↓走り……
ごひやくかけそうば 五百掛相場……
ごひやくめつつみ 五百目包↓丁銀包……
こびろいちよう 小拾帳……

ごぶぎん 五歩銀↓十歩一銀……
ごふく 呉服↓太物……
ごぶしんいり 小普請入り……
ごほんざんさんこう 御本山三講……
こま 小間……
こまえびやくしろう 小前百姓……
こまかりよう 小間過料……
こまぎん 小間銀↓定小間銀……
こます 小升……
こまつなぎ 小間續↓水役銀……
こみじんば 込人馬……
こみまい 込米……
こむそうあいかん 虚無僧合鑑……
こめいれ 米入……
こめきつて 米切手……
こめぐら 米蔵↓浦辺蔵奉行……
こめそうばねつけしよ 米相場値付所……
こめとめぶぎょう 米留奉行……
こめとめふだ 米留札……
こめばかり 米計……
こめばらい 米払……
こめばらいぶまいにゆうさつ 米払歩米入札……
こめひきやく 米飛脚……
こめみのもの 米見の者……
こめやど 米宿……
ごめんぶぎょう 御免奉行↓郡廻り……
ごめんやま 御免山……

こもしき 薦敷……
 こもの 小者……
 こものなりぎん 小物成銀……
 こや 小家……
 こやまもり 小山守↓山番……
 ごようぎん 御用銀……
 ごようぼく 御用木……
 ごようまい 御用米……
 ごようやしき 御用屋敷……
 こわり 小割……
 こわりき 小割木……
 こんやばいぜい 紺屋灰税……

さ

さくじきまい 作食米……
 さくじきまいかぶん 作食米過分
 ↓浮地種籾……
 さくじしよやきいんふだ 作事所焼印札……
 さくとくまい 作得米……
 さけうんじよう 酒運上……
 さげふだ 下札……
 さしあげまい 指上米……
 さしがみ 差紙……
 さしがみだい 差紙代……
 さしきもち 座敷持……
 さしだし 指出……
 さしだしちよう 差出帳……
 さしつぎばらい 差次払……
 さしつぎまい 指次ぎ米……
 さしまい 刺米……
 さしむぎ 刺麦↓永貸穀……
 さしむら 指村……
 さだめち 定め地……
 さだめまい 定米……
 さつかいしよ 札会所……
 さつぎんあずかりきつて 札銀預り切手……
 さつば 札場↓札会所……
 さつみ 札見……
 さむらいたいしろう 侍大将……
 さんかんじよう 三勘定……
 さんくやく 三工役……
 さんせんまい 散錢米……

ざんち 残地……
 さんばい 生飯……
 さんぶぎん 三步銀……
 さんぶまい 三步米↓庄屋三步給……
 さんまい 散米↓打撒……
 さんようば 算用場↓勘定奉行……

し

しおき 仕置……
 しおそり 塩素凝……
 しおはまねんぐ 塩浜年貢……
 しかがわぎん 鹿皮銀……
 じかた 地方……
 じかたちぎようせい 地方知行制……
 しかてつぼうふだうんじよう 鹿鉄砲札運上……
 しきぎん 敷銀……
 じきこさく 直小作……
 じきさん 直参↓御家人……
 じきばらい 直き払い……
 しきりじよう 仕切状……
 じぐちせん 地口錢……
 じげにん 地下人……
 じげやくにん 地下役人……
 じこぶり 地こぶり……
 しじゅうかけそうば 四十掛相場……
 じしんばん 自身番……
 じそこまい 地底米……
 じぞり 自剃刀……

したみちよう 下見帳……
したやまばん 下山番……
したやまもり 下山守↓山番……
したわけ 下分け……
しちち 質地……
しちちしようもん 質地証文……
しちりんまい 七厘米↓厘米……
じっかんなり 十干成……
じつめ 地詰……
じとう 地頭……
しどうきん 祠堂金……
じどこぎん 地床銀↓地床米……
じとこまい 地床米……
じどりみ 地鳥見……
じない 寺内……
じならし 地概……
じならし 地槩↓地概……
じにん 神人……
じぬしてづくり 地主手作……
じのり 地乗り……
しばぎん 柴銀……
じふく 時服……
しほうぎん 四方銀……
しまぶしん 島普請……
じみやくにん 地見役人……
しもんせん 四文銭……
しゃくち 借知……
しゃそう 社倉……

しゃそうぎん 社倉銀……
しゃそうほうじようじゅ 社倉法成就
↓救麦……
しゃそうようがかり 社倉用懸……
しゃにち 社日……
しゃまい 社米……
しゃまい 車米↓車賃し……
しゆ 朱……
しゆいんだか 朱印高↓押知高……
しゆいんち 朱印地……
しゆうしあらためごようがかり
宗旨改御用掛……
しゆうしてがた 宗旨手形……
しゆうしにんべつあらため 宗旨人別改……
じゆうたくはま 住宅浜……
じゆうにんこう 十人講……
じゆうぶいちぎん 十歩一運上……
じゆうぶいちぎん 十歩一銀……
しゆうもんおくりてがた
宗門送り手形↓送り手形……
じゅうろう 十老↓檢校……
しゆくおくり 宿送り……
しゆくかこ 宿駕籠……
しゆぞうみようがきん 酒造冥加金……
しゆつせしようもん 出世証文……
しゆほうまい 趣法米……
じゆんけい 閏刑……
しよあしがるねんぶおさえまいしようもん

諸足輕年賦押米証文……
しようか 小家……
じようかこ 定水主↓浦水主……
じようがつさしとめ 正月差止め……
じようこまぎん 定小間銀……
じようし 上巳……
じようだい 城代……
じようとくのしんかく 正徳の新格……
じようどしゆうじゆうや 浄土宗十夜……
じようなり 定成……
じようのうぎんそうば 上納銀相場……
じようのうまい 上納米↓上げ米……
じようばつかた 賞罰方……
じようまい 春米……
じようまい 城米↓御用米……
じようみとりまい 定見取米↓見取米……
じようめんせい 定免制……
じようもちきゆう 状持給……
じようもちぶ 状持夫……
じようものなり 定物成↓物成……
じようや 庄屋……
じようやくだされきゆう
庄屋被下給↓庄屋三步給……
じようやさんぶきゆう 庄屋三步給……
じようやはんやく 庄屋半役……
じよくにんあらためちよう 職人改帳……
じよくにんみずやくぎん 職人水役銀……
じよぐんかみとりやく 諸郡紙見取役……

しょけ 所化↓能化……
 しょしなかいしょ 諸品会所……
 しょしながた 諸品方……
 しょだしべいぎん 諸出し米銀……
 しょだしまい 諸出米……
 じよち 除地……
 しょとりうんじょう 諸鳥運上……
 しょむ 所務……
 しょむやくにん 所務役人……
 しんがい 新開……
 しんがいだか 新開高……
 しんがいぶぎょう 新開奉行……
 しんぎん 新銀……
 しんせいぐみ 新整組↓浮組足輕……
 しんそう 神草……
 しんたて 新建……
 じんや 陣屋……
す
 すいちようば 水丁場……
 すえぶち 居扶持↓官途銀……
 すぎかみおんうちがし 過紙御内貸……
 すくいむぎ 救麦……
 ずくせん 銑錢↓鍋錢……
 すくみどり すくみ取り……
 すみくらしようもん 濟口証文……
 すんしぎん 寸志銀……
 すんしまい 寸志米……

せ
 せいけい 正刑……
 せいとうまい 政道米……
 せきしゅううんじょうぎん 石州運上銀……
 せがき 施餓鬼……
 せきぶね 関船……
 ぜに 錢……
 せんごくふ 千石夫↓壹歩米……
 せんちやかかりぎん 煎茶掛り銀……
 ぜんびこく 全備穀↓永利穀……
 せんわりかじ 千割鍛冶……
そ
 そういりあい 惣入会……
 そうぐんむしよ 惣郡務所↓郡御用屋敷……
 ぞうしきやく 雑式役……
 そうじや 総社……
 そうじようや 惣庄屋……
 そうばかいしよ 相場会所……
 そうびやくしろう 惣百姓……
 そうやまもり 惣山守……
 そえふだ 添札↓圖取制……
 そく 束……
 そくしゅう 束修……
 そさつりよう 粗札料……
 そではん 袖判……
た
 だいいち 大一……
 だいかん 代官……

だいかんしよ 代官所……
 だいかんせい 代官制……
 だいかんそうやくしよ
 代官惣役所↓郡御用屋敷……
 だいかんてつき 代官手付↓代官……
 だいこくまい 大黒舞……
 だいそく 大束……
 だいとうまい 大唐米……
 だいはんねがいしよ 代判願書……
 たうえまい 田植舞……
 たかかかりもの 高掛り物……
 たかごめ 高籠↓鉄山役高……
 たがたうけ 田方受……
 たかつき 高付……
 たかまえなつしよ 高前納所……
 たかもちひやくしろう 高持百姓……
 たかやくぎん 高役銀……
 たぐみ 田組……
 たくわえもみ 貯籾……
 たけうんじよう 竹運上↓竹代銀……
 たけだいぎん 竹代銀……
 たしだか 足し高↓足知の制……
 たしちのせい 足知の制……
 たしまい 足し米↓足知の制……
 たそんいりあい 他村入会↓村々入会……
 たたみおもてぜい 畳表税……
 たたら 鑪・炉……
 たたらふだ 炉札……

たちがえりぞうりゆう 起返造立……
 たてがみ 堅紙……
 たてきりがみ 縦切紙↓折紙……
 たてもの 立物↓前立……
 たにんばらい 他人払い……
 たねまいりそく 種米利息……
 たのみおさめしち 頼納質……
 たのみすき 頼漉↓詔紙……
 たのもし 頼母子……
 たばこうんじようぎん 煙草運上銀……
 たはたのばいばい 田畑の売買……
 ため 溜……
 ためあずかり 溜預……
 ためいけしたみぞした 溜池下溝下……
 ためしこうぞあらためやく 試楮改役……
 たもん 多門……
 だるまき 達磨忌……
 たわらかかりうんじよう 俵懸り運上……
 たわらくちいりみ 俵口入実……
 たわらづけまい 俵付米……
 たわらなおしちんまい 俵直し賃米……
 たわらもの 俵物……
 たんせん 段銭……
ち
 ちぎようしよぶぎよう 知行所奉行……
 ちぎようはんもつ 知行判物……
 ちくみよう 竹名……
 ちし 地子……

ちしりよう 地子料……
 ちなみたのもし 因頼母子……
 ちやぎん 茶銀……
 ちやのみとき 茶飲み伽……
 ちよういわい 帖祝……
 ちようがい 帳外……
 ちようぎり 帳切……
 ちようぎん 丁銀……
 ちようぎんつつみ 丁銀包……
 ちようせん 丁銭……
 ちようづけ 帳付……
 ちようめんならし 帳面概……
 ちようもく 鳥目……
つ
 ついいん 追院……
 つうこういんかん 通行印鑑……
 つぎようじ 月行司……
 つぎつみちん 継積質……
 つけあれ 付荒……
 つけこみちよう 附込小帳……
 つだしまい 津出米……
 つちめんせい 土免制……
 つつみぎん 包銀……
 つつみふうはんちんぎん 包封判賃銀……
 つどめ 津留……
 つなぎまいぎん 縹米銀……
 つぶれかぶ 潰株……
 つぼがり 坪刈↓検見取法……

つみちんもみ 積質粃……
 つみつぎこうせん 積次口銭……
 つめいん 爪印……
 つめまいのせい 詰米の制……
 つるのふくみほ 鶴の含穂……
 つるはん ……
て
 てあいぐみ 出合組……
 てあまりち 手余地……
 ていし 手医師……
 ていり 出入……
 てきぎん 出来銀……
 てじようおいこみ 手錠追込↓追込……
 てだい 手代……
 てつぎでら 手次寺……
 てつぎぼうず 手次坊主……
 てつぎ 鉄座……
 てつざんあずかりてがた 鉄山預手形
 ↓鉄山札……
 てつざんおろしまい 鉄山下し米……
 てつざんかくしき 鉄山格式……
 てつざんふだ 鉄山札……
 てつざんやくだか 鉄山役高……
 てつぼうあらためがかり 鉄砲改懸……
 てはんまい 出飯米……
 てめ 出目↓吹替……
 てめまい 出目米↓延米……
 てらうけしようもん 寺請証文……

てらきつて 寺切手↓寺請証文……
てわざべらし 手業減し……
てんかおくり 天下送り……
てんぱ 転派……
てんぼうつうほう 天保通宝……
てんまきもいりやく 伝馬肝煎役……
てんまぎん 伝馬銀……
てんましよ 伝馬所……
てんまやく 伝馬役……
と
といやば 問屋場……
とうあれ 当荒……
どうぎよう 同行……
どうぎようばね 同行ばね……
どうじよう 道場……
とうじようべいさつ 東城米札……
どうしん 同心……
とうぶんしようにや 当分庄屋……
とうようかた 当用方↓賞罰方……
とおみけみ 遠見検見……
とが 咎↓仕置……
ところばらい 所払い……
としとくじん 歳徳神……
とじめ 戸……
としよりかく 年寄格……
としよりやく 年寄役……
どじん 土神……
どそうしようにん 土倉商人……

とだい 斗代……
とびごう 飛郷……
とびち 飛地……
とめいけふだ 留池札……
とりおい 鳥追……
とりかえせい 取替制……
とりたてめん 取立免↓概免……
とりたてやく 取立役……
とりはなちどめ 鳥放留……
とりみ 鳥見……
とんやおんやくしよ 問屋御役所……
な
ないさい 内済……
ないみちよう 内見帳……
ないわし 菜鯛……
なうけにん 名請人……
ながえいじよう 長柄以上……
なかかんじよう 中勘定……
ながたずね 永尋……
ながわりかじ 長割鍛冶……
なげだししようにもん 投出し証文……
なだい 名代↓大坂蔵屋敷……
なつあがりふゆとりたて 夏上冬取立↓冬上り夏取立……
なつなり 夏成↓秋成……
なつものあらため 夏物改め……
なべせん 鍋銭……
なよせちよう 名寄帳……

ならしとだい 槩斗代……
ならしめん 概免……
なりたちひやくしように 成立百姓……
なわごころ 縄心……
なんざん 南山……
なんりよう 南鐮……
に
にご 荷紛……
にしほんがんにのころう 西本願寺の家老……
にじゅうさんやつきまち 二十三夜月待……
にしゅぎん 二朱銀↓南鐮……
にちよううり 荷帳売り……
にちれんき 日蓮忌……
にとうじよう 二答状……
にぶきん 二分金……
にもつひきやく 荷物飛脚……
にわちよう 庭帳……
にんじんざ 人参座……
にんそくよせば 人足寄場……
にんべつちよう 人別帳……
ぬ
ぬき 貫……
ぬきぶ 抜歩……
ね
ねうまのじんばあらため 子午の人馬改……
ねこく 根石……
ねつけしゅうかいしよ 直付集会所↓米相場値付所……

ねまち 子待……
 ねんあらし 年荒……
 ねんぎようじ 年行司……
 ねんぐあがりぎんそうば
 年貢上り銀相場↓上納銀相場……
 ねんぐさげふだ 年貢下札……
 ねんとうしゅうぎ 年頭祝儀……
 ねんとうおしゅうぎまい
 年頭御祝儀米↓給役……
 ねんぷしようもん 年賦証文……

の
 のうけ 能化……
 のざん 野山……
 のとりちよう 野執帳……
 のひにん 野非人……
 のべまい 延米……

は
 はい 盃……
 はいうんじよう 灰運上……
 はいきんしち 倍金質……
 はいちさがみ 配知差紙……
 はいちだか 拝知高……
 はいちもくろく 拝知目録……
 はいふきぎん 灰吹銀……
 はいりようけ 拝領家……
 はえまき 配巻……
 はえろくぶいり 配へ六步入……
 はかりあらため 秤改↓秤座……

はかりきり 斗切……
 はかりきりまい 斗切り米↓切枡……
 はかりぎ 秤座……
 はくぎん 白銀……
 はくしまくちやふねうんじよう
 白島口屋船運上……
 ばくふのだいかん 幕府の代官……
 はこそ 箱訴……
 はしり 走り……
 はしりはまこ 走り浜子……
 はしりびやくしろう 走り百姓……
 はしりみず 走水……
 はたぎん 畑銀……
 はたご 旅籠……
 はたもと 旗本……
 はちぶまい 八歩米……
 はちまい 鉢米……
 はちりんきゅう 八厘給……
 はつうしき 初卯式……
 はつうま 初午……
 はつさく 八朔……
 はつほぎん 初穂銀……
 はつほまい 初穂米……
 はつよせ 初寄……
 はとあみふだうんじよう
 鳩網札運上……
 はねまい 刎米……
 はまこ 浜子……
 はやご 早具……

はやみち 早道……
 はらいきりよまい 払切余米……
 はりがみねだん 張紙値段……
 はるこま 春駒……
 はるめん 春免……
 ばんきゅうまい 番給米……
 ばんぐみ 版組……
 ばんぐみ 番組……
 はんげしろう 半夏生……
 ばんさつせい 番札制……
 はんじようせん 半畳銭……
 ばんせんせい 番船制……
 はんせんひようしき 藩船標幟……
 はんたかば 反高場……
 はんたのみおさめ 半頼納……
 はんち 半知↓借知……
 はんちん 判賃……
 はんやく 半役……

ひ
 ひき 疋……
 ひきすてえず 引捨絵図……
 ひけだか ひけ高……
 ひきやくぶ 飛脚夫……
 ひぜにかし 日銭貸……
 ひぞんまい 日損米……
 ひつしゃ 筆者↓筆取……
 ひっそく 逼塞……
 ひでんしゅう 悲田宗……

ひとおさえ 人押え……
 ひとがえし 人返し……
 ひとつくるび 一來尾……
 ひとつなりあげまい
 一つ成上げ米↓家中上げ米……
 ひとばらい 人払い……
 ひとわり 人割……
 ひまち 日待……
 ひもりきゅう 樋守給……
 ひやくいちもん 百一文……
 ひやつびようえん 百俵塩……
 ひようにんおくりじよう 病人送り状……
 ひよりじゅう 日和中……
 ひよりもうし 日和申……
 ひらいぶ 拾歩……
 ひらたぶね 平田船……
 ふいごまつり ふうご祭
 ふいち 歩一……
 ふきかえ 吹替……
 ふきたて 吹立……
 ふきや 吹屋……
 ぶぎん 歩銀……
 ぶぎんわり 夫銀割↓足子引高……
 ふけしゅう 普化宗……
 ぶげんちよう 分限帳……
 ふじき 夫食……
 ふしみやしきばん 伏見屋敷番……

ふじゅふせは 不受不施派……
 ふしんのけんぶん 普請の見分……
 ふしんぶぎよう 普請奉行……
 ぶせん 夫銭……
 ふたいのくらい 不退位……
 ふだやくぎん 札役銀……
 ふちしよくにん 扶持職人↓拝領家……
 ふちまい 扶持米……
 ぶつさんがた 物産方↓諸品方……
 ぶつしまい 仏飼米……
 ぶつばんこう 仏飯譚……
 ふでとり 筆取……
 ふでとりきゅう 筆取給……
 ふともの 太物……
 ふなさし 船差……
 ふなづみきもいりやく
 船積肝煎役↓大坂登せ米支配所……
 ふなとこぎん 船床銀……
 ふなとしより 船年寄……
 ふなぶぎよう 船奉行……
 ふねあらため 船改め……
 ふねうんじよう 船運上……
 ふねかぶ 船株↓船改め……
 ぶはんまい 夫飯米……
 ぶまいだいぎんわり 夫米代銀割
 ↓足子引高……
 ぶやくぎん 夫役銀……
 ぶやくひきだか 夫役引高……

ふゆあがりなつとりたて 冬上り夏取立……
 ふりうりふだうんじよう 振売札運上……
 ふるあれ 古荒……
 ふれがきかいたつちよう 触書廻達帳……
 ふれがしら 触頭……
 ぶわり 夫割……
 ぶわりひきだか 夫割引高↓足子引高……
 ぶんせん 文銭……
 ぶんづけひやくしよう 分付百姓……
 ぶんまい 分米……
 べいぎんかた 米銀方……
 べいこくねつけしゅうかいしよ
 米穀値付集会所……
 べいさつ 米札↓米切手……
 へいもん 閉門……
 べざいせん 弁才船……
 べつこさく 別小作……
 べつとりたて 別取立……
 へんしろう 返抄……
 ほ
 ほいいじよう 布衣以上……
 ほうこうかまい 奉公構……
 ぼうしよ 亡所……
 ほうらい 蓬萊……
 ほうろくせい 俸禄制……
 ほかけえぼし 帆掛烏帽子……
 ほそわりかじ 細割鍛冶↓千割鍛冶……

ほつちゆうめつけ 法中目付……
ほのぎ 穂の木……
ほんけひやくしよう 本家百姓↓本百姓……
ほんごう 本郷……
ほんそく 本則……
ほんちよう 本帳……
ほんちようにん 本町人……
ほんと 本斗……
ほんとなり 本斗成↓見取免……
ほんものなり 本途物成……
ほんびやくしよう 本百姓……
ほんぼうじようじゆ 本法成就↓永貸穀……
ほんま 本馬……
ほんまい 本米……
ほんまつせいど 本末制度……
ほんやく 本役↓職人水役銀……

ま
まうちぎん 間打銀……
まえたて 前立……
まきせん 蒔銭……
まくらぎん 枕銀……
ますあと 升跡……
ますつき 升突……
まちかた 町方……
まちかたおさえまい 町方押米……
まちかたぎんみやしき 町方吟味屋敷……
まちがりおさえまい 町借押米
↓押証文の制……

まちぐみ 町組……
まちぐんちゆうきじんきゆうまい 町郡中飢人救米……
まちさいかくぎん 町才覚銀……
まちしゃそうぎん 町社倉銀……
まちしようや 町庄屋↓目代……
まちとしより 町年寄↓大年寄……
まちぶぎよう 町奉行……
まちぶぎようしはいぎん 町奉行所支配銀……
まちやくぎん 町役銀……
まちやど 町宿……
まめいた 豆板↓小玉銀……
まる 丸……
まわき 間脇……
まわりばかり 廻り計り↓米計……
まわしまい 廻し米……
まわりびきやく 廻飛脚……

み
みおぎん 水尾銀……
みおこしまい 見起米……
みかさづけ 三笠附……
みかんぎん 蜜柑銀……
みこみます 見込枡……
みずちよう 水帳……
みすてち 見捨地……
みずのみびやくしよう 水吞百姓……
みずやくかじ 水役鍛冶↓釘地鍛冶……

みずやくぎん 水役銀……
みずろん 水論……
みそかやまぶし 晦日山伏……
みぞしろまい 溝代米……
みだしまい 見出し米↓見起米……
みちしろまい 道代米……
みつ 見付……
みつげばた 見付畠……
みとりしんがい 見取新開……
みとりしんまい 見取新米↓見取米……
みとりまい 見取米……
みとりめん 見取免……
みはらさつ 三原札……
みまわりやく 見廻り役……
みみじろげに 耳白銭……
みようおんこう 妙音講……
みようがえい 冥加永……
みようがぎん 冥加銀……

む
むぎしようや 麦庄屋↓社倉……
むぎねんぐ 麦年貢……
むぎみつ 麦見付……
むしおくり 虫送り……
むしゆち 無主地……
むそくにん 無足人……
むたかち 無高地……
むちうきよすぎ 無地浮世過↓浮過……
むちようもの 無帳者……

むねべつせん 棟別銭……
むらうけせい 村請制……
むらかたさんやく 村方三役……
むらかたやくしよ 村方役所……
むらぎみや 村君屋……
むらきり 村切……
むらじゅういりあい 村中入会↓野山……
むらちよう 村帳……
むらにゆうよう 村入用……
むらまわり 村廻り↓歩行目附……
むらむらいりあい 村々入会……
むらやくにん 村役人↓村方三役……

め

めいあんりゅう 明暗流……
めいもくきん 名目金……
めつけ 目付……
めやすそじよう 目安訴状……
めやすばこ 目安箱……
めん 免……
めんかりまい 免借米……
めんぐみ 免組……
めんじよう 免状……
めんちよう 免帳↓小帳……
めんとりたて 面取立……
めんわりちよう 免割帳……
も
もうじんすえぶちふだ 盲人居扶持札……
もくだい 目代……

もちごめ 餅米……
ものがしら 物頭……
ものなり 物成……
もめんあみざ 木綿網座……
もめんかいしよ 木綿改所……
もめんかかりやく 木綿掛り役↓木綿改所……
もろはくしゆ 諸白酒……
もんばり 門張り……

や

やくぎうけしよ 役儀請書……
やくにんひきだか 役人引高……
やくめほんけ 役目本家↓本百姓……
やくや 役家↓本百姓……
やぐらおろし 矢くら下し……
やくりよう 役料↓足知の制……
やしきあらため 屋敷改め……
やしきばらい 屋敷払い……
やすみはま 休浜……
やせん 矢銭……
やどあずけ 宿預……
やどおくり 宿送り……
やどおくりやく 宿送り役……
やどふだ 宿札……
やどわり 宿割……
やなぎん 築銀……
やぶまわり 藪廻り……
やまあらため 山改め……
やまかたおんばしよ 山方御場所……

やまかたごようぎき 山方御用聞……
やまかたぶいちぎん 山方歩一銀……
やまかたやくしよ 山方役所↓材木場……
やまちよう 山帳……
やまてぎん 山手銀……
やまてせん 山手銭↓村々入会……
やまねんぐ 山年貢……
やまばん 山番……
やまぶぎよう 山奉行……
やまぶし 山伏……
やまふだ 山札……
やまめつけ 山目付……
やまもとしいれぎん 山元仕入銀……
やまもりきゆう 山守給……
やまもりやく 山守役↓惣山守……
やまろん 山論……

ゆ

ゆい 結……
ゆうずうぎん 融通銀↓六会法……
ゆがね 湯金……
ゆずりでんじ 譲田地……
ゆるしじよう 免シ状……
よ
よういん 容隠……
ようしよ 用所……
ようにん 用人↓近習頭……
ようば 用場……
ようばきゆう 用場給……

よこがみきり 横紙切↓折紙……
よこめ 横目……

よしぎん 葭銀……

よせむら 寄せ村……

よない 余内……

よぶ 余歩↓縄心……

よめん 余免……

よりあい 寄合……

よりき 与力……

よりぶね 寄船……

ら

らいし 礼紙……

らつきよ 落居……

り

りつげ 立毛……

りばいぎん 利倍銀……

りゆうさくじよう 流作場……

りゆうつば 立坪……

りよう 両……

りようちはんもつ 領知判物……

りようぶんついほう 領分追放……

りようくぐだされまい 旅行被下米……

りん 厘……

りんじかた 臨時方↓賞罰方……

りんまい 厘米……

る

るいぞくあらため 類族改……

るいち 類地……

るすい 留守居……
るすいぐみ 留守居組↓馬廻り組……

れ

れいび 礼日……

れきみよう 歴名……

れんぼん 連判……

れんれんさく 連々作……

ろ

ろうじ 臈次……

ろくがつがかりじようのうぎん

六月掛り上納銀……

ろくしやく 六尺……

ろくしやくきゆうまい 六尺給米……

ろくしよ 録所……

ろくどう 六道……

ろくぶ 六部……

ろくりぶみ 六里踏み……

ろつかいほう 六会法……

ろんでん 論田……

わ

わきひやくしろう 脇百姓……

わたうんじよう 綿運上↓綿座……

わたかいしよ 綿改所……

わたぎん 綿銀……

わたざ 綿座……

わたざあずかりきつて 綿座預り切手……

わたしもやい 渡模相↓家中模相銀……

わりきぶねうんじようぎん 割木船運上銀……

わりじようや 割庄屋……
わりぶぎよう 割奉行……

参考資料

広島藩と三次藩領……

広島城下の支配組織(文政年間頃)……

芸備塩田の開発年代……

所務役人・頭庄屋の人数……

広島藩の浦方……

広島藩の主な風水害旱魃等による被害状況……

広島藩の年貢所払いの村々……

町年寄を置いた市町……

十八世紀初の領地……

僧侶官位……

二十四節気……

將軍考現学……

広島藩御用紙の種類と産地・生産高。規格……

郡方吟味屋敷への引出費用……

伝馬・旅籠代……

子午の人馬改帳……

参考文献

芸藩志……

芸備国郡志……

事蹟緒鑑……

知新集……

青枯集……

尾道志稿……

芸藩志拾遺……

芸藩通志……

済美録……

堀川町覚書……

安芸風土記……

参考図書とその略号

芸藩志拾遺……………	芸志
芸藩輯要……………	芸要
広島藩御覚書帖……………	広覚
徳川幕府県治要略(柏書房)……………	徳川
地方凡例録(近藤出版社)……………	地方
広島県史(近世Ⅰ)……………	県一
広島県史(近世Ⅱ)……………	県二
広島県史(民俗編)……………	県民
新修広島市史(第二卷)……………	新二
新修広島市史(第三卷)……………	新三
新修広島市史(第四卷)……………	新四
海田町史(資料編)……………	海田
白木町史……………	白木
廿日市町史(資料編)……………	廿日
広島県川上村史……………	川上
沼田町史……………	沼田
原村史……………	原村
図解単位の歴史辞典(柏書房)……………	単位
日本史用語辞典(柏書房)……………	日用
日本史広辞典(山川出版社)……………	日広
古文書用語辞典(柏書房)……………	古用
日本法制史概説(弘文堂)……………	日法
江戸の刑罰(中公新書)……………	江戸

大名と領民(教育社)……………	大名
広島藩農村考(永井弥六著)……………	広農
広島藩の庄屋(永井弥六著)……………	広庄
広島藩の農村(永井弥六著)……………	広村
郷土史こぼればなし(永井弥六著)……………	郷史
剩語(永井弥六著)……………	剩語
剩語続篇(永井弥六著)……………	剩続
続老いのたわごと(永井弥六著)……………	続老
続九十年の枯葉(永井弥六著)……………	続九
横山家文書(旧沼田郡相田村)……………	横山
躍場家文書(旧佐伯郡畑村)……………	躍場
美多(三田郷土史研究会々報)……………	美多
郷土史辞典(朝倉書店)……………	郷土
日本国語大辞典(小学館)……………	国大
広辞苑(岩波書店)……………	広辞

あ

あいきゅうち 相給知 家老以外の給知は一村に複数の給人をつけることを原則とし、これを相給知という。従って、小身の

侍士の給知は多くの村に分散し、一村ごとの知行地高の規模は小さく、せいぜい百石前後、十石に満たないものも稀ではなかった。例えば、侍士寺西小平次(宝暦九年浦辺御蔵奉行)は元禄十三年(二七〇〇)に、高田郡桂村の内六〇石・高宮郡勝木村の内七〇石九斗九合・豊田郡福田村の内六九石九升一合、合計二〇〇石を藩主から充行われている。(県一・寺西家文書)

あいくみ 相組 ↓町組

あいざ 藍座 藍座は、文政三年(一八二〇)城下町の町人友屋彦右衛門らの願いによって、藍玉の製造専売権を認められて設けられた。その後文政十年(一八二七)に藩営の藍座(勘定所付属)として改められ、比治山東麓に設置された。藍座は、広島新開その他郡中において耕作する葉藍を買い上げ、これを藍玉として民間(紺屋)に売却し、利益を独占しようとしたが、耕作農民の抵抗をうけ、実は上がらなかった。なお、藍作村には藍座御用掛(庄屋ならびに組頭の中から選ばれ、文政十二年?沼田郡打越村では、藍座御用掛は年八匁六分(銀二両)の心付銀を藩から受けている)を置き、藍座の仕事を援助させられた。藍座は安政四年(一八五七)に新開方の所管に移され、元治元年(一八六四)に廃止された。(芸志・新三・横山)

あいたいかけあい 相对掛合 一般には、当事者同士の談合で

物事を決めることをいうが、特に藩が銀主に借銀の申し入れをする際に、銀高・利息・期限などについて、銀主と対等に交渉することを用いる。広島藩は宝暦十一年(二七六一)に、最大の銀主である鴻池善右衛門との間に、相对掛合を成立させ、藩債の年賦償還をはかることを妥結させた。(県二)

あいたいすましれい 相对済し令 幕府は享保四年(一七一九)

相对済し令を出し、金銀の貸借については当事者の相对で決めること、債権・債務に関する訴訟は取り上げないこととした。

その後も何回か相对済し令を出しているが、寛政元年(一七八九)には棄捐令を出し、旗本・御家人に対する六ヶ年以前までの債権を、いっさい棄捐させるという布告を行っている。広島藩では寛保二年(二七四二)に家中・町人の相对貸借を禁止し、延享三年(二七四六)には、四ヶ年以前までの貸借にかかわる訴訟は取り上げないという、相对済し令を出し、寛政九年(一七九七)には、その年の八月以前の貸借関係の訴訟は、いっさい受け付けないことを布告した。これは借財を踏み倒そうとする武士にとつては、有利であった。(県一・吉長公御代記)

あいたいたいしゃく 相对貸借 話し合いによって貸借を行う

ことをいう。芸備両国の村や町では、近世初頭から年貢・諸役の未進をはじめ、領主課役のために領民相互の相对貸借を行わざるを得ない状況におかれていた。しかし、広島藩は、寛保二年(二七四二)以降、家中・町人の相对貸借を禁止した。(県一・吉長公御代記) ↓糶屋銀

あいたいちんせん 相對賃錢 当事者間でとり決める駄賃錢を

いう。(県一)

あいのこぶね 合の子船 間の子船。和洋折衷の船をいう。(広辞)

あいのじゆく 間宿 江戸時代、本宿(宿駅)と本宿の中間にあり、通過する大名等が昼食をとり、または休憩のために立場茶屋程度の小駅が設けられた。これを間宿という。ちなみに、広島藩領の各宿駅間の駄賃は、寛永八年(一六三二)には一里につき銀三分、同十三年には銀十八文であった。ちなみに、草津は広島と廿日市の間宿で、当時の草津の町の長さは東西四町六間で、二百軒の家があったという。(文化財大野・県一)

あおさし 青刺 繩 刺(繩)とは千文を単位として、縄で錢の穴を通し結び貫いたものをいう(つまり一貫文)。青刺(繩)とは縄に紺染のものを貫いたもので、武士・庶民間において、進物などに用いた。なお、文政十三年(一八三〇)頃には、青刺一貫文は銀十匁に換算された。(日用・横山)

あおびようし 青標紙 江戸時代の武家に関する法度・制度を記した書で、天保十一年(一八四〇)・十二年に刊行された。大野広城著で二冊からなる。(広辞)

あかおおぎ 赤大木 綿の品種で、佐伯郡大竹村付近で栽培された。(県二)

あがりぎんそうば 上り銀相場 広島藩では、年貢米の代銀納については、広島町や領内在町の米穀相場を基準にして納入させていたが、寛永十一年(一六三四)にいたって、広島町の上米

相場の三匁上りを基準にして決定し(但し享保三年に生じた一揆の要求により三匁上りを廃したが、いつの頃から三匁上りに復した)、藩府(郡役所)から特定の割庄屋宛に、定期的に触れ示した。これを上り銀相場という。なお、触書を受領した特定の割庄屋は、触書を受領したという切紙を触書に貼り添え、次の割庄屋へ送った。こうして郡内の割庄屋全員へ順達した。また、割庄屋は触書が廻ってくる、「御触書写帳」をつくり、天保六年(一八三五)頃までは触書の全文を書き残した。しかしそれ以後は、相場(価格)のみを書き留めた。(県一・県立文書館資料)↓上納銀相場

あがりじ 上り地 *「上り田地」ともいい、罪科・逃亡・年貢未進などの理由で、百姓から没収した田地をいう。この田地は他の百姓へ割り渡すか、村中惣作として年貢を上納した。「上り田地」は、また揚田とも揚地ともよばれた。(郷土・日用)
*租米が高率なため、村に個人所有者がなく、止むなく村で経営し、租米を償っている土地をいう。(広農)

あがりしようもん 揚証文 例えば、年貢米未進の場合に、屋敷・田畑などを村に差し出し、その代償として、年貢米の上納を村に依頼するという趣旨を認めた証文を、揚証文という。

あがりだか 上り高 *福島正則は芸備受封の翌慶長六年(一六〇二)領内一円にわたる検地を行い、各村の生産高を公定した。その後、公定高より生産が多く、暮し向が豊かな村に対しては、公定生産高を相応に増加した。この増加分を上り高という。(海田) *検地の際に、村高の集計を誤算して、実際の村高より

多く公定した場合があり、また、今後村民等による耕地への開発が期待される土地をも含めて、村高を公定した場合があった。これらの場合に、実際の村高より多く公定された高をも上り高という。上り高に対する年貢米は村^{むら}闌^{かすき}にした。

あがりづめ 上り詰 免は時代により、また作物の豊凶等により変動することがあり、最も高率であった時の率を「上り詰」といい、最も低率であったときの率を「下り詰」という。ちなみに、高宮郡^{とげひら}桐原村では、「上り詰」は享保十四年（一七二九）から同十六年の間で「五ツ九歩五厘」、「下り詰」は寛文三年（一六六三）で、「二ツ七歩八厘」であった。（高宮郡三拾六個村郡中村々差出帖控）

あがりひやくしよう 上り百姓 ↓片付百姓

あがりまい 上り米 坪刈（升突）の際に、例えば下見帳に一步^{一坪}（一坪当りの粗）が一升となっている田地を坪刈りした結果、一升三合あった場合、多かった三合を「上り米」という。なお、これによって、全村の収穫量を三割増とみなした。（広農）

あがりまいのさんしゅつ 上り米の算出 升突は、下見で「一步穂」の多い田地二、三ヶ所について実施される。例えば下見で「一步穂」が「二升八合」の田地について、升突の結果が「二升一合九勺」あり、これは下見の「一步穂」中最多であったとする。この場合、下見の「一升八合」よりも「三合九勺」多かったことになる。この「三合九勺」は、下見の「一升八合」の「二割一步六厘六毛六弗」にあたり、これを升突の結果の「総有米」に乗じて得た有米が「上り米」である。（高田郡古屋村早

生中田下見帳）

あがりや 揚り屋 江戸時代の牢屋の一つで、江戸小伝馬町の牢屋敷に置かれ、御目見以下の御家人・陪臣・僧侶・医師・山伏などの未決囚を収容した雑居房をいう。（日用）

あきおんな 秋女 春秋二期の農繁期に、耕作の手助けをするために雇った女をいう。一期が四十日であったといわれている。

（広農）

あきじのり 安芸路乗り ↓地乗り

あきなり 秋成 ＊秋に収穫する米や大豆などをいう。＊秋期に納入する田の年貢のことをいう。畑年貢を夏期に納入することを夏成といっただので、この名称ができた。（日用）

あきめん 秋免 不作のため、春に決定した免（土免）を捨てて、秋に至り低率な免を設ける場合には、これを特に秋免と称したが、秋免の名は、享保十七年（一七三二）の大虫害の年以外には見出せない。（広村）

あきめんせい 秋免制 ↓検見取法

あげさかや 揚酒屋 酒の販売のみを専ら行うものをいう。酒の販売は、元来株仲間である造酒屋が直接売るのが建前であったが、広島藩は享保十一年（一七二六）揚酒屋に対し、酒株仲間の統制に服することを条件に免許者のみに商売を許可し、宝暦十二年（一七六二）には、城下の株酒屋に各一ヶ所ずつ出店として、揚酒屋を許した。（県二・松井家文書）

あけち 明知 元和六年（一六二〇）福島正則は、村を「蔵入」「明知」「給知」に分けた。「明知」とは、知行地村の内、知行地と

して侍士（給人）に与えた土地（給知）以外の残余分の土地や、元「給知」であつたが、何等かの理由で藩に没収された知行地をいう。なお、給人が他国その他への転勤等で知行地（給知）を支配することができなくなつた時は、藩へその管理を委託（委託期間中は藩より現米の支給を受けた）した。この場合にその知行地は明知同様となつた。但し他国等での勤務が終了帰国し、地所の返戻を願すれば許された。（県一・芸志）

あげち 揚地 ↓上り地

あげちれい 上地令 天保十四年（一八四三）六月、江戸幕府が江戸十里四方・大坂五里四方を直轄領とし、その地内にある私領を他へ移すことを定めた令をいう。当時は老中水野忠邦を中心に天保改革が遂行されており、この令もその一環として、幕府の強化を目的として計画された。しかし、強い反対があり、翌月撤回され、水野忠邦失脚の契機となつた。（日広・日用）

あげまい 上げ米 *幕府が諸藩に、藩主が家臣に課した献上米をいう。享保七年（一七二二）徳川吉宗が諸大名に対して一万石につき百石の上げ米を課し、旗本・御家人への扶持米などにあて、その代償として参勤交代を緩和（江戸在勤を半年）したが、享保十六年（一七三二）に廃止した。（日用） *広島藩では、「上納米」ともいい、宝永四年（一七〇七）に税制を改革した。その内容は、粟歩米などの高掛物の徴収を免除するとともに、郡村の諸給分・諸入役は藩庫から定額を支給することにし、同期間は蔵入地・明知より三万五千石、給知より一万五千石を「上げ米」として上納させるというものであつたが、これは貢租の増徴に

ほかならなかつた。宝永五年（一七〇八）凶作などにより農民の暴動が生じ、その要求を受けて「上げ米」の制は同年に撤回された。（県二） *藩中の家士より徴するもの（二つ成上げ米）。代官の指示により知行地より給主に納むべき租米の一部を藩へ納入した。（広農）家中上げ米・一つ成上げ米

あげや 揚家 近世において、遊里で客が遊女屋から太夫など高級の遊女を呼んで遊興する店をいう。大坂では明治まで続いたが、江戸吉原では宝暦十年（一七六〇）頃になくなつた。（日用）

あさいとぎん 麻糸銀 福島時代に蘭草の生産増大を図るため、植付農民に無利貸与した資金をいう。（県二）

あしがる 足軽 土分のうち歩行の下位にある者で、譜代の者もいたが原則として一代限りとされた。足軽は先手足軽組・側足軽組等の部隊を編成し、また、出合組・番組等の諸役方に配属されて下役に従事することが多かつた。（新二）

あしこひきだか 足子引高 「役人引高」「夫割引高」ともいう。村内の諸普請夫・諸遣夫などの夫役は農民の持高に应じて課せられていたが、庄屋・組頭には、足子分として課せられた夫役から一定の夫役が控除され、控除後の残りの夫役を負担した。この控除分を足子引高という。この制は寛政十年（一七九八）に廃され、村役人の給米を「被下米」^{くだされまい}という名目で増加し、上納年貢から差引いて与えられることとなつたが、村によつてはこの制度を廃止しないまま、明治に至つた例もある。足子引高は宝永元年（一七〇四）の定によると、庄屋の引高は、一人分高百石から二百石までの村では一〇石、高三百石から四百石まで

の村では一二石(以下略)、また組頭の引高は一人分一律に七石であった。(県一・広農・白木)↓役人引高

あずかりてがた 預り手形 宝永四年(一七〇七)諸藩における銀札通用禁止の幕令を受けた広島藩は、銀札の通用停止と、銀札は追って正貨に兌換することを布告した。しかし、直ちに兌換することができず、兌換に応じたのは四割にとどまり、残り六割は「預り手形」を交付して兌換時機まで凍結した。享保十五年(一七三〇)幕府は再度銀札の発行を許可したので、広島藩は再度銀札を発行するとともに、宝永四年(一七〇七)に兌換が保留されていた銀札を新銀札と交換した。(県一)

あずかりどころ 預所 幕府が近隣の遠国奉行や大名に、その管理を依頼した土地をいい、預知ともいう。管理費として奉行や大名は口米を徴収した。(日用)

あずかりはま 預り浜 塩田経営における浜小作をいう。浜主は経営を「預り主」に委嘱して、「預け浜料」を収取した。貞享元年(一六八四)竹原塩浜のうち、「預り浜」は三三軒で、そのうち下市居住者の所持塩田は一九浜・他町村居住者の浜は一四軒であったが、元禄十五年(一七〇二)には、二四軒に減少した。(県一)

あつらえがみ 詠紙 紙の生産において、割賦完納が困難な場合には、他村の余裕のある者に依頼し、必要量を漉いてもらうことがあった。これを詠紙とか頼漉とかいう。(県二)

あとかぶ 跡株 村落において、百姓が追放されたり、欠落したあとの百姓株をいい、潰式・潰株ともいう。古くは村中惣作

したが、のちに子孫・親類が引受け、年貢その他も引き続き行い、欠落人が戻り無罪ならば、その土地を返戻した。(日用)

あとしき 跡式 跡職・跡目・一跡ともいう。本人の死後もしくは隠居後、相続される遺領・家督・財産をいう。(日用)

あとやく 跡役 郡村役人の任命には、跡役及び代り役ということが言われた。跡役とは、親の役儀を子が受け継ぐべく任命されることで、代り役とは前役に縁故のない全くの別人が、新たに任命されることであつた。これは跡役となることは易く、代り役となることの困難な事実を言ったものと思われる。郡村の役儀には任期の定めがなく、失敗さえなければ終身勤続することができた。(広村)

あぶらうんじょうぎん 油運上銀 油運上銀は広島町へ領外から移入した者から徴収されるもので、元禄十二年(一六九九)に始まり、元禄・宝永期に一時的に実施され、宝永六年(一七〇九)に廃止された。(県一・吉長公御代記)

あぶらかた 油方 広島藩は文化八年(一八一二)から翌年にかけて、広島城下・尾道・三原・宮島に油座を設け、文政四年(一八二二)勘定所内に油方(官署は広島鍛冶屋町にあり)を置き、絞油業の取り締まりをいつそう徹底化する方針を打ち出し、きびしく統制した。すなわち、油の他国売りの禁止はもちろんのこと、菜種・綿実はすべて「他邦より拔群下直」で差し出させ、油御用所の「御入用残之分」を郡中の「絞屋」に配当するなどして、藩専売制の確立・強化をはかった。しかし、生産量は具体的に不明であり、大坂よりも取り寄せている。(県二・竹原市史)

あぶらかたみただしのもの 油方見糺の者 幕府は寛保三年

(一七四三)に、諸藩における菜種・綿実等の自由販売を禁止し、すべて摂津・河内・和泉の特権的製油業者に、回漕させるという政策を推進した。そのため、随時「油方見糺の者」を諸国へ派遣し、絞油業等について監察させるなど、徹底した統制を行った。(県二)

あぶらごようしよ 油御用所 寛政十年(一七九八)に、藩内の

絞油業者に活路を与え、また、絞油業者および灯油を統制する目的で、幕府の許可を得て、城下鷹匠町の野上徳三郎・狩留家村黒川新左衛門・上瀬野村野村太郎右衛門の水車製油所を買上げ、公設の油御用所を設けた。なお、油御用所には野上徳三郎らを油方頭取役に任じて、油の統制をはかるとともに、郡方においては割庄屋の中から一人を「郡中油種物登せ方諸元締間屋兼帯」に任じ、菜種・綿実の集荷組織を整備した。(県二)

あまごいきとうのひよう 雨乞祈禱の費用 宝暦十二年(一七

六二)の定では、高百石より五百石の村では十五匁、六百石より千石の村では十八匁、千石より二千石の村では二十一匁、二千百石より三千石の村では二十三匁(但し沼田・安芸郡の場合)であった。(宝暦十二年沼田安芸郡割免制方相しらべ書写)

あみやくぎん 網役銀 江戸時代の冥加金の一つで、海・川・

沼で漁撈に従事する漁師にかけられる小物成銀をいう。網の大小に応ずる場合と、村全体にかかる場合とがあった。(日用)

あゆかわやくぎん 鮎川役銀 小物成銀の一種で、元和六年(一

六二〇)から鮎の漁業権と引き替えに課税されるようになった。

元和六年(一六二〇)、高田郡三田村では、鮎百尾につき銀四匁を上納していた。(白木)

あらそぜい 荒芋税 はぎ取ったままの大麻の皮を荒芋といい、

元禄十年(一六九七)より、各郡から広島町ならびに他国に対して芋類を移出し売買する者に税銀を課した。これを荒芋税という。その後、享保二年(一七一七)より、広島への移出・売買については税を免除し、他国へ海路移出するものに限り税銀を徴収した。(芸志)

あらためだしたか 改出高 寛永期・正保期における地詰の際

に、竿入があった村では、おおむね村高が、福島検地の際の村高より増加している。この増加分を改出高という。広島藩は、寛文四年(一六六四)に、新田高一万七二八〇石余・改出高三万四三〇八石余を、また、貞享元年(一六八四)には、新田高一四〇三石余・改出高一〇六九石余を、それぞれ幕府に報告している。(県一・広寛)

あらにぶね 荒荷船 木材・竹材・石材・鉄材・石炭・砂など

の、荒っぽい大量の貨物を運ぶ船をいい、広島藩では扱芋・茶・つづら草・折敷等をも荒荷と称していた。高宮郡下四日市(河戸)の株船(船組合)は、高宮郡飯室・勝木・鈴張の各村、山県郡戸谷・都志見両村の荒荷を、広島へ直送していた。(広辞・元禄四年川筋船舶御改控写)

ありつけひやくしよう 有附百姓 その土地に以前より定着し

て、農業に従事している百姓をいう。

ありまい 有米 米の生産量をいい、「在米」とも書く。

ありまいもくろく 有米目録 ↓下見帳

あれ 荒 荒地・荒田のことをいう。荒には永荒・年々荒(災害によって半ば永久的)・当荒(一年限りの荒地)・付荒(百姓が窮乏のため離村して放棄したもの)の別があった。(国史大辞典)

あれおこしじ 荒起し地 高付の土地が荒れていたのを、再び開いたものをいう。荒起しをするには、毎年暮の内に来春荒起しをする旨を郡役所に届けた荒起しをする者がいない場合も届けた。荒起し地には若干の税(使用料)を村が課した。これを見出米と称した。(広農)

あれかずき 荒闔 「荒」は実際には耕作していない場合が多かったにもかかわらず、貢納地になっていたものについては共同で年貢を負担した。このことをいう。

あわせほならし 合穂概し 耕地の品等と実際の収穫高を確認・決定する方法の一つ。佐伯郡宮内村では明暦年中の火災で、年貢の課税台帳である「御本帳」を焼失したため、耕地の「地概」の必要が生じ、そのため改めて各耕地の坪刈りを行い、一坪からの収穫量を確認することが行われ、合穂概しと呼ばれた。この場合でも慶長検地の村高は変更されず、不足高は闔高とされた。(廿日)

い

いえあらため 家改め ↓水主役銀

いえのきさんじょう 家軒三升 ↓三工役

いかだのりなかも 筏乗仲間 宝永元年(一七〇四)には、すでに認められていた藩用材木の搬出に従事した太田川の筏流しの仲間(筏株も認められていた)をいう。筏師の中には割木・薪等を筏に積み、利を得ようとする者もあり、文政八年(一八二五)には、船持ちの一人が、買い取った長割木を断りなく筏で積み下した事件が生じた。それに対して船持仲間の抗議を受け、以後筏の上にいつさいの売買物資を積み込まないことになった。(県二)

いけしたねんぐ 池下年貢 農地を農業用水池等に転換した場合に、その農地に対して賦課されていた年貢米をいい、池下年貢は村闔で負担していた。ちなみに、藩の木蔵や作業所等に、その敷地を提供した場合には、年貢米は免除された。(横山)

いさばふね いさば船 五十集船・磯場船と書く。いさばもの(水産物)や薪炭などを主として運送する小廻船の一種で、二、三十石〜二、三百石積。船型は地域により異なるが、九州や瀬戸内海では弁財造りか、それを簡素にした形式が多い。(国大)

いせきしょうもん 遺跡証文 跡式相続権・分家・持参金待遇・離縁等について決めておく証文のことをいう。(日本法制史)

いせんどう 居船頭 おりせんどう。↓沖船頭

いちえいめ 壹永目 永とは永楽通宝の略で、室町期以降多く輸入され、徳川初期まで標準貨幣として重視された。慶長十三年(一六〇八)幕府は永楽銭の通用を禁止し、金と流通銭との交換基準に名目だけを残した。すなわち永壹貫目(壹永目)は金壹両、錢四貫文とした。

いちぶほ 壹歩穂 壹歩初。一坪当たりの粃の収量をいい、壹歩粃ともいう。また、坪刈りをした粃の収量、あるいはその見込量をいうこともあり、これらの場合の収量を一升五合穂などという。(広農)

いちぶまい 壹歩米 壹歩米は高掛上納米のひとつであり、福島時代(慶長六年)には千石夫と唱え、高千石につき一人の小人を徴して、城・江戸御上下の供・御台所入用の薪炭・馬屋入用の藁などを取り立てていたが、農民の請願により元和八年(一六二二)から高千石に対して米十石を納入させて、小人の扶持米及び荷物の運送・御台所の薪炭・御馬草藁糠・伝馬人足等の費用にあてた。なお、浦辺・島方は水主役を勤めるのでこの課税はなく、地方では寛文十一年(一六七二)以後、諸職工水役を命じられた本役に対しては一人につき五石、半役は二石五斗分を村高から免除し、その残高に対する壹歩米を上納した。享保三年(二七一八)以後、半方六月差次払、半方暮米納として取り立て、後には全額を米・銀子何れで上納してもよいことになった。(芸志)

いちまち 市町 村の中で、市の立つ所や町屋敷が設けられる所を市町という。瀬戸田町・忠海町・可部町・吉田町・海田市・四日市・吉舎町・比和町などにあった。市町には庄屋以外に町年寄が置かれていたが、その仕事は火用心の仕事を担当したり、宿場がある所では人足や馬の支配をするぐらいのもので、村政には関与しなかった。但し、可部町には農地がなかったので、庄屋は置かず町年寄が村政を司った。↓参考資料

いちみようみ 一名見 水・旱・虫害または猪・鹿の喰荒しによつて、限られた村の一部(村の三割未満)に作物の被害があるときは、農民の村役人への嘆願により、村役人等は升突をして損害額を調査し、当該分の年貢米を減免した(減免分は上告・請願して村かずき)。つまり、その損害を詳細に調査し人別に区分するので、一名見という。(芸志)

いつくしままぎぜい 厳島薪税 明暦元年(一六五五)以来、厳島山より伐り出す薪からは税銀を徴収した。この税銀は、四割は同島へ下賜し、残六割の内、厳島の伶人(音楽を奏する人)その他扶持人等の給米にし、もし残額があれば上納させ、不足すれば官より補給した。その後、島民には困窮者が多いので、正徳三年(二七一三)から十五年間この税銀は島民へ下賜し、扶持米は別に支給した。なお、十五年経過後も扶持米は別途に支出し、薪税は年々徴収された。(芸志)

いつさつ 一札 一通の文書・書状・手紙・あるいは一通の証文・手形をいう。(国大)

いつしゅうがまい 一宗構 僧に課せられる刑で、宗旨を追放されることをいい、別の宗旨に移るのは差し支えないが、同宗旨の別の派に移ることはできないことになっていた。(江戸)

いつしゆもの 一種物 酒・肴を参会者がそれぞれ一種ずつ持参して開く宴会、またはその肴をいう。平安時代、殿上人の間で行われたが、室町時代には一般に各人が金銭を出し合つて催す酒宴をいうようになった。(国大)

いつせきけっしよ 一跡闕所 獄門・火刑などの付加刑とし

て、財産を官に没収することを闕所という(付加刑には闕所のほか、領分追放刑に処せられた者のみへの「入墨」と、犯情最凶悪者のみへの「曝」があった)。その場合に、罪人一人の財産を没収することを一跡闕所といい、永牢以上の刑に対しては全部没収した。但し、追放刑(領分追放・郡追放・村追放・城下追放があった)の場合には、その犯情によって財産を妻子に交付することがあり、また没収もあった。文化九年(一八二二)沼田郡大町村百姓文兵衛(仮名)は、博奕宿をしたために、領分追放と付加刑として居家・家財の闕所を受けている。(芸志・横山)

いとわり 一斗割 小走り給に用いられた支給方法で、すべて村高の十分の一の高を一斗とみなすことをいう。例えば、千石の村は百石を一斗とみなし、五百石の村は五〇石を一斗とみなす。明・給知入組の村は一斗を明・給の高割にして負担した。なお、この制は宝永元年(一七〇四)から行われたようである。(沼田安芸郡割免割方相しらべ書写)

いっぱかまい 一派構 僧尼に課せられる刑で、同宗の中の一派を追放されることをいい、別の一派に入るのは差し支えなかった。(江戸)

いっぴき 一疋 *布類の二反をいい、古くは四丈、後には五丈二尺、または五丈六尺などと時代により異なっていた。* 銭十文のこと。江戸時代、金一両が銭四貫文(千文)に当たる標準相場によれば、金一両の四百分の一。(国大)

いっぴき いっぱん 一疋一本 ↓馬持以上

いならし 居概 ↓帳面概

いまます 今枡 江戸時代の一升枡は、方四寸九分・深さ二寸七分に統一されていたが(公定枡)、豊臣秀吉の定めた方五寸・深さ二寸五分のものが用いられていた頃、前者を今枡、後者を昔枡あるいは古枡と呼び分けた。(単位)

いもじ 鋳物師 鋳物を造る職人。いものし。鋳物師は株になつていて、勝手に営業することは禁止されていて、株所有の譲渡には、藩(郡役所)の許可を必要とした。(弘化三年上原村用諸控)

いりさくひやくしよう 入作百姓 他村の百姓であつて、当該村に田畑・山林を所有する者(他村よりみれば出作百姓をいい、また入作持ともいう。(目法・横山)

いりづめわりふ 入詰割賦 割り当てられた年貢米が出せないとき、その分を個々の百姓の持高にに応じて、他に割り当てることではないかと思われる。

いりまい 入米 ↓込米

いりみ 入実 入味。俵一俵の容量をいう。入実は時代により異なっていた。すなわち、寛文八年(一六六八)には藩領域の京枡統一が行われ、年貢米一俵は三斗俵で、京枡三斗二升七合とされた。その後、元禄四年(一六九二)年貢米の俵は三斗(正味三斗一升五合)に定められ更に三斗二升になり、享保一揆後の享保三年(一七一八)以降は三斗一升到統一されたが、厳密に守られていたかどうかは疑わしい。明治四年(一八七二)に四斗に改めた。入実はまた給知では、給人によって異なっていた。例えば、文化十年(一八一三)沼田郡大町村では、一俵の入実三斗

二升と、ほかに俵附米四合と定めた給人が四人、三斗二升と三合の俵附米と定めた給人が四人、三斗二升一合と俵附米三合と定めた給人が三人、三斗二升四合(俵附米なし)の給人が一人になっている。(広農・横山・玄徳公済美録)

いりめ 入目 入費、経費のことをいう。(日用)

いれおきまい 入置米 村において、年貢米などの運搬諸経費や、郡割銀にあてるために、村入用として百姓から徴収する米をいい、また、奉幣使の通行・参勤大名通行入用等にもあてた。ちなみに、文政十二年(一八二九)高田郡古屋村では、免割帳に入置米として、郡割(二三一匁七厘)・盲人割(五二匁九分一厘)・送り人馬(九匁二分五厘)・郡概し夫(八匁三分)・村内懸り合他村役人出飯米代(六七匁二分五厘)計三六八匁七分八厘を計上している。(古屋村免割帳)

いろりぎん 囲炉裏銀 小物成銀の一種で、村中が焚く薪に対して課税され、カマドの数がその対象になったようである。但し、詳細は不明である。ちなみに、年代は不詳であるが、高田郡井原村へは銀二六匁、同三田村へは銀一五五匁のいろり銀が課せられている。(白木)

いわいやぎん 岩井屋銀 広島藩では家中に対する金融の格別の配慮として、寛保元年(一七四一)には大坂町人岩井屋仁兵衛の融資によって、厘米方の扱いとして、知行切米を抵当にするという証文を書き入れさせ、十ヶ年賦償還による家中への貸銀を成立させた。この貸銀を岩井屋銀という。また、安永二年(一七七三)には大坂の鴻池の融資による鴻池銀を、知行高百石に

つき銀二五〇目、切米十石につき銀五〇目ずつの割合で、希望者に貸し付けることを行った。(新三)↓手入

いわしあみうんじょう 鯛網運上 広島藩では寛永十五年(一六三八)から課せられ、はじめは例年漁獲の実績によってその額を決定していたが、元禄末年か宝永初年頃から定運上に改め、掛引網一張分は銀四十五匁、地引網二十二匁五分、片手網十六匁二分五厘に決め、例年十二月に上納させた。その他鯛網などにも運上が課せられたものと思われる。なお、釣漁には課せられなかった。(芸志)

いんかじょう 印可状 諸学・諸芸・修行僧などに対し、師がその力量を認め印可したときに与えられる認可状をいう。(日用)

う

うえきぶぎょう 植木奉行 享保十二年(一七二七)に置かれた。その職務は林野の植林で、具体的には、領内林野の植生状況と荒廃林野の調査と植林・領内各種別林野の境界の調査と確定・種苗の準備であった。(県一)

うきかせぎ 浮稼ぎ 地主の土地を小作したり、賃仕事などによって稼ぎ、生計をたてることをいう。(県一)↓浮過

うきぐみあしがる 浮組足輕 文久三年(一八六三)広島藩では、講武所において物書役以下諸足輕の子弟もしくは藩士の家僕で、練兵技芸に熟達している者を選び、家禄・口俸を給して講

武所に所属させた。これを浮組足輕と称した。この浮組足輕は少壮にして技芸に長じたので、諸足輕の中では精銳の銃手であった。なお、明治元年（一八六八）に新整組と改称されるとともに、砲兵作業も兼務させた。（芸志）

うきしよむ 浮所務 * 中世末から近世における小物成の一つで、臨時の租税をいう。後の浮役に当たる。（日用） * 米・麦以外の大豆・小豆・そばなど、米・麦以外の農産物の総称をいう。（広村）

うきすぎ 浮過 十七世紀中期以降の商品経済の進展のなかで発生したもので、無高、ただしくは無地浮世過とよばれた階層である。その出現は、広島藩南部では寛文期に、内海の島々や中国山地部では元禄頃からである。浮過は特定の主家に隷属する身分からは解放されているが、耕地を持たないため地主の土地を小作したり、貸仕事などの浮稼ぎで生計を立てた。しかし、浮過層でも機会を得て土地を獲得し本家百姓に上昇する者もあった。ちなみに、福山藩では水呑百姓といわれた。（県一）

うきち 浮地 年貢の徴収などで窮乏し、欠落した百姓が残っていた土地で、引受人がいない土地をいう。その場合には、親類や五人組に耕作させるのが原則であったが、それでもなお浮地になった場合は、浮地分の年貢・諸役は村全体の責任になっていた。（日用）

うきちたねもみ 浮地種粃 藩が貸しつける種粃や作食米は、村高を対象に行うので、救済を必要としない高持百姓に渡り、救済を必要とする無高の小作百姓（浮過階層）には、一合の米も

渡らなかつた。この矛盾を少しでも緩和しようと、高田郡の庄屋が案出したものが、村かずき高に当る貸付の利用で、これを「浮地種粃」「作食米過分」と称した。これは借手のない種米や作食米（高持百姓中）の余米を、無高の小作百姓に村が貸しつけ、元利とも村割に入れて負担した。この施策は免割帳審査の際に、不審と指摘された。（九十年の枯葉拾遺）

うきもうけ 浮儲 炭焼・紙漉き・採薬等の副業的收益をいう。（広村）

うきやく 浮役 小物成の一種で（浮動して定まらない雑税という意である）、小物成の中には、郷帳に記載して年々一定の額を納入するものと、例えば、臨時に徴収したり、毎年徴収はするが年によって税額が一定しないので郷帳に記載できないものがあり、このようなものを総称して浮役といい、多くは銀納であった。（広農）

うけおいりこ 請負煎海鼠 煎海鼠は干鮑とともに「俵物」と呼ばれ、対清貿易の輸出品として重視されており、天明五年（一七八五）には、長崎会所（長崎貿易の外、長崎に係わる諸業務を行った）による幕府の独占とした。これを定直段にもとづいて、全国各浦に一定額を割り当て、その製造を請け負せたものが請負煎海鼠と呼ばれるものである。広島藩では、長崎会所の依頼で対馬屋忠八郎を「俵物糺し方」に任じ、寮内のナマコの集荷にあたった。なお、俵物の他売は禁止されていた。佐伯郡での海鼠網は、享保三年（一七一八）頃より始まったとされており、次第に沿岸浦々へ伝わり、明治年間には佐伯郡二十二ヶ村が海

鼠網を行っていた。(大野町所家文書)

うけしよ 請書 うけがき。承った旨を記して差し出す文書。「う

けぶみ」ともいう。(広辞)

うけたけぎん 請竹銀 ↓竹代銀

うけまい 請米 広島城下以外に置かれた御蔵所へ御米蔵の役人が出張し、運送の途上で検査・査収した年貢米をいい、その年貢米は所務役人の命を受けた頭庄屋が広島の大倉御蔵所へ送り(請米の運送は港の間屋の請負)、これに要した入用及び夫役については、御米蔵の認証を求めて郡役所へ報告することになっていた。請米の制は宝暦六年(一七五〇)に廃止され、年貢米はすべて広島御蔵所で収納されることになった。(広庄)

うけめん 請免 請免とは、切免が相当な地積を有する村内の一部落全般に亘って免を減じたのとは異なり、村内に散在する所々の悪田に対して免を減ずることをいう。つまり、免を完全に負担することが困難な悪田に対して、村が作人との間に、年々の作柄の豊凶によって税率(請免を定めていくものであった)と思われる。(広村)

うけやど 請宿 ↓町宿

うけやま 請山 藩より樹木の伐採を禁止している山林に対し、人民の請願によつて、止むを得ず一時的にその必用数だけ伐採を許可した山をいう。(芸志) 他村の山林の下草などを採取するため、年期証文を入れ、毎年小作料を納める制度をもういう。(大野町「続古文書への招待」↓山方御用聞)

うけやまごうんじょう 請山御運上 耕地の少ない山村など

の場合、薪炭稼ぎ等のため、村内の建山・留山など藩有林の一部の貸し下げを願い出て請山とすることが早くからみられるが、これについては年間定額の運上銀を差し出す定めがあった。この運上銀をいう。(廿旦)

うじがみさいれいにゆうよう 氏神祭礼入用 宝暦十年(一七六〇)以前の氏神祭礼入用は、一度分銀五匁以内と定められていたようであるが、この年に「地祭・鳥祭・夏祭、右入用銀五匁迄一度分、此員数を以可取計候」と定められた。なお宝暦十二年(一七六二)には、次のように改められた。すなわち「村高百石より四百石迄は十三匁、四百十石より七百石迄は十五匁、七百十石より千石迄は十七匁、但し千石以上の村は百石に付五分ずつ増」。(広農・沼田安芸郡割免割方相しらべ書写)

うしだいぎん 牛代銀 近世期の農耕は主に人力に頼っていたが、広島藩では牛を購入するための資金を農民に貸しつけた。これを牛代銀といい、利息は年二割で、その年中に元利返済することとされていた。ちなみに、文政十一年(一八二八)高田郡三田村では、牛一頭(牝)の値段が銀一三五匁であった。(県一・郷史)

うちあいめん 打合免 給知がある村では、土免が明知と給知では異なっている場合があった。それを一律に平均した税率を打合免と称したようである。例えば、高田郡市川村では、給主の知行高が僅少のため打合免を作ることが容易であったが、給主の人数や知行高の多い村では、打合免を作るとは困難であったと思われる。(続老)

うちごもり 打籠 地詰（新聞地詰は除く）や地概の際に、村高と

各等級分米との間に生ずる誤差をいう。地詰や地概の際に、分米の合計を既定の村高に一致させることは技術的に困難なため、分米の合計を村高より少し高く決め、村高との誤差を調整した。この場合の少し高くした分を打籠高という。（廿日）

うちしよむたか 内所務高 豊臣秀吉の朝鮮出兵により、毛利氏領国においては農民が戦場へ動員されたため、耕地の荒廃をもたらしした。毛利氏は家臣の給知高のうち、荒所となった耕地の高を除いた。除いた高を内所務高という。

うちたて 内立 内引。 ↓前立

うちに 打荷 船が風波にあい難船のおそれがあるとき、積荷の一部を海へ捨て船体や他の荷物の安全をはかることをいい、捨荷・別荷ともいう。また、その荷物をいう。なお、打荷にはそれが偽装海難でないことを証明するため、最寄りの村役人の海難証明書（浦証文）を必要とした。（日用・日広）

うちまき 打撒 供物供進の一方方で、米をまき散らすこと。

特に陰陽師が祓、病氣、出産などのとき、悪神を払うために米をまき散らすことをいう。また、その米を「散米」という。（国大）

うちわたしつぼつけ 打渡坪付 毛利氏は、天正十八年（一五

九〇）高田・佐東・佐西・安北・安南・豊田郡の検地を行い、一筆ごとの面積・分米（斗代）・分銭・名請人を決定して台帳（野取帳）を作り、その台帳を元にして各給人の給地坪付を作成し給人に与えた。給人に与えたこの坪付を打渡坪付という。（県

一）

うちわり 内割 ＊種々の場合に用いられている用語であるが、

年貢の場合には、村単位の割付状により、持高に応じて各人に割り当てることをいい、村入用の場合には、秋祭・雨乞・虫送など、法定の入用（宝暦元年（一七五二）に、村入用并給分の藩内画一の細則制定）で不足のとき免割に入れないで、内密に取り立てることをいう。宝暦八年（一七五八）賀茂郡堀村では「稲毛虫送り祈祷諸入用銀之辻」として、「銀拾六匁七分」（内、四分は灯明油壺合代・三分は実盛着物紙代・壹匁は右調申す手伝代並あら幸代共・壹分は右同断のぼり弊紙代・拾式匁は御酒壺斗式升代・壹匁は右祈祷の内鉄砲三度づつ打申候玉薬手伝代共・九分は社人上下式人認代・壹匁は社人へ礼物、尤近年迄銀式匁も遣候得共壹匁減申候を免割に計上している。しかし実施後の不足分については、ひそかに内割で取り立て、補填したと思われる。（広農・郷史） ＊宝暦五年（一七五五）沼田郡相田村へ、御役所の番組一人が免割以後入村し、昼休みをした時の入用三匁六分七厘について、藩から二分七厘、郡割で二分、残り三匁二分を村負担（内割）にしている。（横山）

うまおいふだ 馬追札 広島町で自由に飼馬をすれば、馬持渡

世者の営業に迷惑を及ぼすことになるので、寛永十六年（一六三九）広島で馬の不自由を感じさせない限り飼馬を認め、馬数に応じて許可札を下付した。これを馬追札といい、税銀（馬追札・馬追札運上ともいい、札一枚につき銀三匁）を徴収した。（県一・芸志）

うまさし 馬差 江戸時代に、宿駅で人馬の役を指図した宿役

人を行い、広島城下では伝馬肝入役・馬頭という。馬差には給米(廿日市では享保期は一石、寛政期は三石)が与えられた。(廿日)

うままりぐみ 馬廻り組 侍士(原則として百石以上の知行取)

は、大別して馬廻り組と小姓組とに編成され、騎馬を建前とした。馬廻り組は戦時に主力となるもので、元和五年(一六一九)には十二組、正保三年(一六四六)には十四組、慶応四年(一八六八)には五組に分けられていて、組にはそれぞれ組頭を置いて支配した。馬廻り組のうち一組は留守居組といい、また一組は交替で江戸詰となり、他は常時城詰になっていた。(新二)

うまもちいじょう 馬持以上 侍士の格式をいうもので、知行三百石以上の侍士をいう。馬を飼養し、槍奴を従えることから、俗に一疋一本ともいう。(新二)

うらかこ 浦水主 藩船を操船するのは船頭と定水主で、藩はそれぞれ数百人を召し抱えていたが、定水主で不足する部分を、浦方の水主役家の徴発でまかなった。これを浦水主といい、朝鮮信使や長崎奉行などの通行に際して、漕船や水舟の要員として徴発されていた。(県二)

うらかた 浦方 もと水主役の供給地として設けたもので、島嶼部・沿岸部の村や町が指定された。浦方における船改めや水主役家の支配には船奉行が当たったが、宝暦七年(一七五七)以後は、すべて町奉行や郡奉行の支配に改められた。(県二)↓参
考資料

うらきって 浦切手 浦証文・浦手形・浦状ともいう。江戸時

代、海難にあった船が打荷をした場合には、最寄りの港で代官・庄屋らの立ち会いのうえで作成する残存荷物、及び船具の現在目録をいう。それに基づいて打荷の共同海損が決められた。

(日用)

うらぶれ 浦触 難船や島拔など、海で起こった重要事件を取り締るために発した書付をいう。例えば、島拔に対しては、町奉行と勘定奉行よりの浦触が出された。(日用)

うらべおくらうんちんまい 浦辺御蔵運賃米 年貢米・その他種米・老歩米等を浦辺御蔵へ上納する際に、米老石につき米二升を添えて上納した。この米を浦辺御蔵運賃米といい、浦辺御蔵から広島御蔵までの運送費に充てるといったものであった。(広覧)

うらべくらぶぎょう 浦辺蔵奉行 勘定奉行の支配下にあり、知行取の侍士をその職に充て、慶安二年(一六四九)には、新たに設けた木浜(享保五年以後忠海へ変更、年貢米の受納郡は豊田郡の一部)・三津(同賀茂郡と豊田郡の一部)・竹原(同賀茂郡と豊田郡の一部)・三原(同豊田郡・御調郡の一部と、世羅・三谿・奴可・三上の各郡)・尾道(御調郡の一部)の各津出場に米蔵を設け、それぞれ浦辺蔵奉行を置き、米蔵を管理させ、貢米収納のとき出張して監督するとともに、広島・大坂への廻し米の責任者に充てた。ちなみに、吉田・深川(正徳三年廃止、深川蔵へ納入の村は広島櫛下蔵へ納入)・可部には、中継積替蔵が置かれ、広島には城内蔵(一之御丸・三之御丸)・本川沿い櫛下米蔵・平田屋川沿い鉄砲屋蔵等があり、町組・佐伯(佐西)・安北・安南(安芸)・山県・高

田・佐東(沼田)等の各郡の年貢米を収納した。また、三次藩では三次町に米蔵を設け、積出港として忠海にも米蔵を置いた。

なお、宝暦八年(一七五八)には広島新開組・竹原町へも米蔵を設けた。(県一)

うらべしまかたけいせんまい 浦辺島方繫船米 ↓浦刈繫船所

うらぼん 孟蘭盆 孟蘭盆齋。死者が死後に逆さに吊されるような、非常な苦しみを受けている者を救うために、旧暦七月十五日の中元に祭儀を設けて、祖先の霊を宗派の趣旨ときまりによつて供養する法会をいう。なおその際に齋食の供養があれば、これを孟蘭盆齋という。ちなみにこの法会は、僧侶の修行日でもあったと考えられる。孟蘭盆は、目蓮が餓鬼道に墜ちた母の苦しみ除こうとして行つたのが、起源とされている。(仏教大辞典・呉市史)

うらやくむら 浦役村 浦辺・島方で水主役を勤める村をいい、その代償として老歩米を免除した。

うるしぎん 漆銀 小物成銀の一種で、漆の木を上・中・下に分けて本数を調べて生産額を定め、漆十匁につき銀六分五厘を課した。漆の実銀は五升につき銀一匁を課した。(白木)

うわにぶね 上荷船 江戸時代の川船の一つで、本船と陸揚地の間を往復して、荷物を運ぶ二、三十石積の船をいう。(日用)

うんじょうぎん 運上銀 小物成(雑税)の一種で、領内の流通拠点を中心に、商工・漁獵・林業・鉱業などに従事する者に対する賦課税で、口屋運上・十歩一運上などがそれであり、一定

の税率をもつて賦課したところに冥加銀との差がある。運上銀の始まりは、寛永五年(一六二八)といわれ、この年広島藩では、廿日市・古江に口屋を設け、郡中からの林産物から、十分一運上銀を徴収している。ちなみに、腰林の松枝下刈りに対して課していた運上銀(二五%)は、享保一揆により免除された。鉄砲の運上銀は老挺につき一五分。竹運上の始りは元和七年(一六二二)・腰林の松枝下刈への運上銀(二五%)は、享保一揆以後免除される。(日用・県一)

うんじょうば 運上場 ↓材木場

え

えいあれ 永荒 洪水や山崩れなどによつて、半永久的に荒地になつたものをいう。(剩語)

えいせん 永銭 永・永楽ともいう。中国明の銅銭。明朝の永楽帝治下の「一四〇八年(永楽九年)初鑄。日明貿易によつて日本に流入し、国内で通用した。足利義持は国内通用の永楽銭を鑄造。江戸幕府は慶長十三年(一六〇八)以来通用を禁止し、鐙銭(悪銭一般の呼称)と同価値である寛永通宝に統一した。ちなみに永銭一貫文は千文であつた。(郷土)

えいだいあげきり 永代上限り 広島藩は財政の窮迫に伴い、御用銀の調達を重ねた。延享四年(一七四七)広島城下町の富士屋喜兵衛・茶屋次郎右衛門・肥後屋太郎兵衛は、御用銀としてそれぞれ銀二五〇貫・二〇〇貫・一五〇貫を献納し、各々三八

人扶持・三〇人扶持・二三人扶持を受けている。このように御用銀の藩への献納を「永代上限り」という。なお、これが先例となつて、町人・在町役人・村役人もこの例にならない、扶持人・苗字帯刀を許される者がでるようになった。(県一・新三)

えいたいこく 永貸穀 永貸穀とは、社倉に貯えられる麦(穀)

のうち、「救麦」以外に「救麦」の二分の一以上の量を貯え、農民に毎年三度(種麦用として九月・年貢皆済後の十一月・作食用としての一二月)に分けて貸し付けて、利殖をはかるとともに、飢饉の際に「救麦」を皆出した場合に、それを補充するために貯えた麦をいう。貸し付けの利息は、「救麦」の完備(社倉法成就という)までは五%(二石につき五升)・本法成就(「救麦」と「永貸穀」との完全貯穀をいう)後は無利息、但し、手間賃として麦一石に付三升の刺麦を徴収し、元利は稻植付後の六月に徴収した。なお、刺麦は蔵下年貢・社倉役人給・筆者給・枅取や雇人等の給米・鼠喰減耗等に充て、余剰分は「永利穀」へ繰り入れた。(矢野町史・海田町史・原村)

えいだいろく 永代禄 例えば五百石取の給主が、在世中の功により八百石になつても、その子が家督を相続する場合には加増分は認めず五百石とした。こうした場合の五百石を永代禄という。広島藩では享保三年(二七二八)の百姓一揆後、この制を実施している。文化八年(二八一二)、寺西直人は家督相続に際し、父盛登の拝知高一九〇石のうち、永代禄としての一六〇石を相続させられている。(寺西家文書)

えいりこく 永利穀 永利穀とは、社倉に貯える麦(穀)のうち、

「永貸穀」から別途積み立てた刺麦や、百姓の収穫高に応じて拠出した一〜二%の麦等を元麦とし、それを農民に貸し付けて利殖をはかり、「永貸穀」の減石補充にあてた麦をいう。貸し付けの利息は二〇%(五%の説あり)、毎年三度(九月・十一月・一二月)に分けて貸しつけ、利息は社倉の補修・水害復旧工事費・村の臨時費等に充て、元利は、五〜六月の麦の収穫期に徴収した。なお、「永利穀」の貯穀量は「永貸穀」と同量とされ、同量に貯穀された場合を永利法成就といい、救穀・永貸穀・永利穀まで貯穀した場合には全備穀という。(矢野町史・佐東町史)

えいりほうじょうじゅ 永利法成就 ↓永利穀

えいろう 永牢 広島藩では、獄門や火刑や遠島に処すべき重犯罪を犯した者でも、自訴した者・情状酌量をすべき者等に対しては、刑を軽減して終身牢獄に幽閉した。これを永牢という。なお、永牢以上の重い刑に処せられると、一跡闕所と称して財産を全部官に没収させられた。但し、追放の場合には犯情により、妻子に交付する場合と没収する場合とがあった。(芸志)

えきしむけぎん 駅仕向銀 広島藩は、四日市・海田市・玖波駅など、極端な窮乏を呈した宿駅には、駅仕向銀として、宿駅経営の基金を貸与し、保護・育成をはかった。しかし、それは低利とはいえ、しよせん貸与されるものであり、伝馬役負担農民の窮乏化等の防止には、必ずしもならなかった。(県二)

えきばだいぎん 駅馬代銀 駅馬の維持、買い替のために藩府から拝借銀が下附された。借り受けに際しては馬持一人一人が請人と共に田畠を抵当として書き入れ、人馬役を通じて郡役所

へ願い出た。ちなみに、廿日市では文政七年(一八二四)駄馬十疋に対し、銀三貫五百目を年三朱の利足五ヶ年賦で貸し付け
ている。(廿日)

えだごう 枝郷 新たに開発された部落、或いは分村をした場合に、本郷に対して枝郷という。(原村)

えどかわせごよう 江戸為替御用 藩の江戸諸入用にあてる「江戸仕送り金」の調達をする役をいい、広島藩はこの役を町人に委任した。例えば、元禄五年(一六九二)には、鴻池善右衛門にこの役と大坂蔵本役とを引き受けさせ、銀五〇枚を支給している。(県一)

えどはんてい 江戸藩邸 広島藩の江戸藩邸は幕府の拝領屋敷として、上屋敷(一般には邸内に大名とその家族の殿舎・政務のための諸役所・江戸詰の藩士らの長屋等があった)は桜田に、中屋敷(一般には上屋敷の予備邸・広島藩では向屋敷と呼ばれた)は赤坂に、下屋敷(一般には藩主の遊興・保養の場所)は青山に、蔵屋敷は鉄砲洲築地にあった。藩主は毎年江戸と広島との間を往復し、隔年に江戸の生活を過ごすので、多数の侍士・足輕が定府(定江戸)、または、江戸詰とよばれて江戸藩邸に勤仕した。なお、藩主の妻子は、原則として江戸を離れることは禁じられていた。なお、江戸藩邸で消費される経費は莫大な額で、主として大坂市場で売却した蔵米・蔵物の代銀を充てた。(県一・日広)

えどるすい 江戸留守居 江戸の藩邸に定勤する者の支配役をいい、特に幕府・諸大名との渉外関係を担当した。(新二)

えばぶぎょう 江波奉行 元和五年(一六一九)城の入口を扼す

る海上の要地としての江波に置かれたもので、後には江波御番と称せられた。しかし、平和の維持によって、抜荷改めなどの意義をもつようになった。(県一)

えびすこう 胡講 十月二十日に胡神を祭る行事で、市町や在中の小売人共に至るまで、胡神へ酒肴や御神灯を備え、或いは紙細工などの飾をつけ、因人を招き酒宴を催した。農家で胡神を信仰している者は、神酒を備えお祝いをした。

えびすやぎん 胡屋銀 ↓糶屋銀

えんぜつしよ 演説書 *江戸時代における訴訟記録の一つをいう。(日用) *領主から支配下の村々に対して、政道を説いたり財政的窮状を訴える申し渡し等が行われたとき、それらを書き留めた文書をいう。

えんでんぜい 塩田税 塩田所有者から徴収する税をいう。田畑を塩田にした者は貢租を上納し、磯浜等を塩田にした者は運上銀(塩田税)を上納することになっていたが、塩浜引高と唱えて一旦これを無税地とし、改めて税銀を課したようである。しかし、税額は少なく、しかも、塩田は石高外にしたため郡村諸費の賦課はなかった。これは製塩の拡大を奨励し、他藩の正金銀を吸収する政策のためであったともいわれている。(芸志↓
参考資料

お

おいあげひやくししょう 追上げ百姓 ↓片付百姓

おいこめ 追込 罪科のある者を単に獄に繋留すること

を追込(不埒)といい、日数は三日以上二十日以内であり、囲留ともいう。なお、手錠を施して獄に幽閉することを「手錠追込」といい、罪の軽重によつて、日数に長短があつたが、およそ七日以上二十日以内であつた。また、譴責の軽いのを単に「御叱り」といい、重いものを「急度叱り」という。ちなみに、出火による追込の場合は、代官所から三日間の追込処罰状と、三日後の赦免状とが渡された。但し、文化十年(一八一三)沼田郡大町村長百姓新左衛門は、御穩便中に居宅を焼失させたことにより、代官所から追込処罰状が渡され、九日後に赦免状が渡されている。(芸志・横山・続老)

おいせまいり 御伊勢参り 江戸時代における庶民階級の伊勢神宮への参宮をいう。伊勢参宮には「本参り」「抜参り」「御蔭参り」があつた。「本参り」はいわゆる伊勢講で、積金と利殖で団体で参詣をすることであり、「抜参り」は主人にも親にも誰にも告げずに一人或は若い男女の参宮をいい、限られた地方では往復の途時は巡礼同様に村人からの施行をうけ、善根宿(無料宿泊所)に宿泊、帰郷の節には逆迎を受けた。それは今日でいう一つの成年式の形態の意味を持っていたからである。「御蔭参り」は伊勢神宮の御師に躍らされた参宮である。↓御蔭参り

おうらいてがた 往来手形 商用廻国などで他国へ出る百姓・町人に、諸国の番所・関所通行許可証として下付されたもので、同時に身分証明書でもあり、往来証文・関所手形・通手形ともいう。発行者は元来所管役所であつたが、後には旦那寺や庄屋

が代用した。往来手形には、本人の住所・氏名・宗旨名・旅行目的を記し、途中で行き暮れた場合には、宿を与えてほしい。また、病死の節には御取捨になり、国元への通知は不要である等が書かれていた。なお、藩士は藩庁から受けた。明治八年(一八七五)以後廃止された。(日用・郷土)

おおあおき 大青木 綿の品種で、海田市付近で栽培された。(県二)

おおあし 大足 泥田に入る際に用いる板製の大型の足駄をいい、「おあせ」ともいう。(広辞)

おおあたけせん 大安宅船 毛利氏は、豊臣秀吉から朝鮮渡海用の軍船を作ること命じられた。この軍船をいう。(県二)

おおいえ 大家 資産と家格を持つ百姓は、村民の上位にあつて、政治に経済に文化に村を統禦した。この階層を特に大家という。なお、大家は郡村役人になる家格も有していた。(広農・広村)

おおさかおきがわせのせい 大坂置為替の制 藩内の商品販売者が、大坂市場で売却した諸物産の代銀を、いったん蔵元鴻池を通じて大坂蔵屋敷へ振り込み、帰国のうえ、城下の勘定所へ切手を出して、代銀に相当する銀札を受け取るという制をいう。正銀と銀札との交換比は、銀十貫につき銀札十貫二百六十目とされた。この制は藩の金銀増殖をねらつたものと思われる。(県二)

おおさかくらやしき 大坂蔵屋敷 蔵屋敷は、幕府・大名・旗本などが、年貢米・国産物販売のため、大坂・江戸・長崎・敦

賀・大津などの金融・商業に便利な主要都市に設けられ、倉庫兼取引所があった。広島藩の大坂蔵屋敷は中之島常安浦町にあった。大坂は天領になっていたので、表面上土地建物の所有はできず、藩所有の屋敷でありながら町人から借り受けた形式にしていた。この名義貸し町人を名代^{なだい}という。蔵屋敷の役員は蔵役人（業務全般の統括と対外折衝）及び蔵元蔵物の保管・売買掛屋（蔵物の売払代金を収納保管し、藩主の要求によって国許または江戸に送金する）などで、蔵役人は国許から派遣された藩士が任じられ、その重役は留守居と呼ばれた。（剰語）

おおさかのぼせきんぎん 大坂登せ金銀 大坂登せ米の売払代銀の大部分は、江戸諸入用・大坂勘定費の財源になっていたが、不足する場合には国元より調達した。この調達した金銀をいう。（県二）

おおさかのぼせまい 大坂登せ米 広島御蔵並びに竹原・木浜（後に忠海）・三原・尾道の各浦辺蔵より大坂市場に送って売払われる年貢米をいい、夫々の蔵から町人請負によって大坂蔵屋敷に廻送され、宝暦頃には七、八万石にも達していた。（県二）

おおさかのぼせまいはいしよ 大坂登せ米支配所 竹原における塩田の盛行に伴う流通量の増大は、大坂登せ米の廻米時期に船や水主の不足を生じさせた。そこで、藩は、正徳三年（一七二二）「御登せ米支配所」を設け、大坂廻米を町人請負制とし「船積肝煎役」（船主）を命じて米船の確保をはかった。しかし、それは廻船業の障害となり、船主の撤廃要求を受け入れて、享保十二年（一七二七）町人請負制の廃止を余儀なくされ、御蔵

方の直雇制に復した。その後また船積肝煎制に復したが、宝暦七年（一七五七）に廃し、宝暦十二年にこの制は復活した。（県一・広寛・吉長公御代記・事蹟緒鑑）

おおさかやくにん 大坂役人 大坂の藩邸に定勤する者の支配役をいう。大坂役人の下には、歩行の蔵奉行・勘定所吟味役等がおかれ、蔵屋敷を管理して、広島からの登せ米・紙・鉄・木材等の受払い等、一切の事務を司った。その他、藩の指定した蔵元・掛屋との折衝、大坂における藩債の調達等にも当たり、目付役も兼帯した。（新二）

おおじょうや 大庄屋 大割庄屋。大庄屋とは、福島時代に毛利氏の遺臣などで帰農した者など、家格の高い階層の中から任命された郡の役人をいい、浅野氏もこれを継承したと思われる。大庄屋は代官の補助役であり、郡方役人の旅費を郡割にして各村から徴収したり、一村で処理できない土木工事を共同で行うための郡夫の徴発などの職務をもっている。大庄屋には高五〇石につき、町升五石の役免米が支給されていた。大庄屋は寛永元年（一六二四）に置かれ、寛永十九年（一六四二）に廃止されたが、やがて復活し大割庄屋と改められた（時期不詳）。大庄屋と大割庄屋との相違は、大庄屋は村庄屋の上位にあり、身分的に庄屋とは一線を画していたが、大割庄屋は居村の庄屋を兼帯した。つまり、庄屋が本役で大割庄屋が加役であり、その権限も大庄屋より縮小されたものであったと思われる。やがて土地制度が整備し、浅野藩政が確立してくると、庄屋の中から有力な者が選ばれて、大割庄屋を勤めるようになったと思われる。享保三年（一七一八）代官制が復帰するに及び、大割庄屋は廃止され、

割庄屋が置かれたと思われるが、割庄屋の役目が見えてくるのは享保十一年（二七二六）頃からである。（白木）

おおだわらとんや 大俵問屋 元禄十二年（一六九九）以前は、

塩浜の高に対して年貢を徴していたが、以後は運上銀の上納制になり、塩の販売は全て藩の監督下にあり、竹原では米屋・小田屋・阿波屋の三問屋（大俵問屋と小俵問屋とがあったが行い、生産者の直接販売は許されなかった。大俵問屋とは、五斗一升入の大俵塩の販売を独占するものをいい、小俵問屋（中間屋）とは、一斗五升入の小俵塩の販売だけをするものをいう。なお、運上銀は大俵塩一俵に付銀三分であり、小俵塩は大俵塩に換算して納入した。竹原の三問屋扱いの大俵塩の領外売は、元禄十四年（二七〇一）には二四万四一三二俵、小俵塩は大俵になおして三八一七俵、町揚げ二九六九俵であった。（県一）

おおどおり 大通り 西国街道の通行者のうち、参勤大名・長

崎奉行・公儀代官・公儀目付・公儀医師・公儀勘定方などは大規模の通行で「大通り」と称し、大通りには郡中村々の寄人馬を動員して、伝馬役を果たしていた。（県二）

おおとしより 大年寄 福島時代に広島町の町人居住区域は、

白神・中島・広瀬・中通・新町の五組に分けられ、各組に大年寄（大年寄、各組一人）を、組内の各町ごとに年寄（町年寄、各町一人）・組頭（ほぼ各町二人）が置かれた。大年寄や年寄は有力町人から選ばれ（江戸後期には豪商の世襲の傾向となる）、その合議制によって町方の支配（年頭などに登城して酒肴代等の献上、藩主の参勤交代に際し、町年寄・組頭と共に帰城・東上の送迎、町年寄・

組頭の任命に際し推薦、町奉行所の寄合に参加し、政策決定に参画）に当たった。この制は浅野時代へ継承された。なお、尾道・三次・宮島の各町にも年寄の制があった。また、市町（吉田・海田市など）にも年寄がおかれたが、この年寄は町政（庄屋が司る）にはあらずからず、名誉職的なもので、例えば宿場のある町では、人足の手配をするぐらいのものであった。（県二）

おおばしり 大走り ↓走り

おおばんがしら 大番頭 江戸幕府の職名。五番方（大番・書院番・小姓組番・新番・小十人組番の一つである大番の隊長。大番は十二組からなるが、各組に番頭一人、またその下に組頭四人、番士五〇人、与力一〇騎、同心二〇人が属した。大番頭は五番方の中で最も高い職俸格式が与えられていた。享保三年に制定された役高は五〇〇〇石。従五位下。大名にも任じられた。（日広）

おおぶぎょう 大奉行 福島時代に設けられた職で、代官頭・郡代ともいわれていたようである。広島城詰と三原城詰とに分かれ、各郡の代官を指揮して、それぞれの地域総体にわたる郡政を統轄し、また、各村の免を決定していたようである。（県二）

おおより 大寄 ↓小寄 おより

おおよりあい 大寄合 塩田の場合、浜子の給与は、おおむね給銀と臨時給与、および飯米からなっていた。その中心は給銀であるが、それは、浜主総会ともいえる暮れの「大寄合」で決定され、前貸しされるといふ点に特徴があった。すなわち、暮

れの契約時に半分以上が渡され、残りは節句と盆前に渡された。これは労働に対する実際の賃銀でありながら「貸付」という表現がとられ、あくまでも浜主の恩恵的な意味をもっていた。(県一)

おおわり 大割 庄屋の出飯米・庄屋給・筆者給・初穂米・竹代銀など、村全体で一樣に負担するものをいう。(広農)↓水役銀

おおわりぎん 大割銀 ↓定小間銀

おおわりしょうや 大割庄屋 ↓割庄屋

おかげまいり 御蔭参り 近世末期の伊勢参宮人員は、年三十万人から五十万人だったといわれるが、「御蔭年」(約六十年を周期として発生には、御師が、大神宮のお札を庭や路上へ天から降ってきたように撒き、或いは貧家へ金を投げ込んだりして、参詣をするように扇動し、宝永二年(一七〇五)には閏四月上旬から五月二十九日まで三六二万人・明和八年(一七七二)には二〇〇万人・文政十三年(一八三〇)には五〇〇万人(当時の人口三〇〇万人)・慶応三年(一八六七)にはいわゆる「ええじゃないか」と関連し、五〇〇万人といわれている。「御蔭参り」は爆発的に生じ、貧富にかかわらず主人等の許可は不要で(日頃の圧迫からの解放)大群衆で参宮した。ちなみに、伊勢神宮の御師は右記の外、次の活動もしていた。

・伊勢暦を配って参宮への宣伝
・宿泊宿やその斡旋
・渡し場での出迎え
・神楽を演じ、信仰心を扇動
なお、江戸末期には、外宮側の山田には五五五軒、内宮側の宇

治には三〇九軒、併せて八六四軒の御師がいた。つまり、八六四軒の宿泊所があったことになる。しかも、神宮にはそれぞれ付属社(別宮一四・摂社四三・末社二四・所管社四二)があり、参宮者の中には内宮や外宮以外に「摂社めぐり」などする者もあったので、宿泊所は一〇〇〇軒はあったと思われる。(NHKの放送・新東海道五十三次)

おかいごようやま 御囲御用山 幕府・藩が緊急用材又は公用を含めた自家用材を、確保するために設定した保護林をいう。搬出便利の山を指定した。下草取・枯木取も許されなかった。

おかちめつけ 御歩行目附 目附の指揮を受けて、監察・探偵に従事した士分をいい、郡役所には年番制で一人を置いた。ちなみに、江戸幕府の御歩行目付の人数は四〇〇六〇人で、百俵五人扶持が支給されていた。

おかねごや 御金小屋 御金蔵。おかねぐら 江戸幕府及び諸藩がもつ貨幣の貯蔵、並びに出納機関。幕府では江戸・大坂・二条・駿府・甲斐にあった。江戸では年貢金・拝借返納金・諸品売却代金を収納し、払方で物品購入代金等を行った。大坂では、大坂定番支配の金奉行が出納事務を行った。(日広)

おかんじょうしゅうぎまい 御勘定祝儀米 給知百姓が年貢米皆済のとき、給人に納める祝儀米をいう。慶応元年(一八六五)賀茂郡原村の給庄屋増太郎は、給主山田他人丞(並寄合次席)へ御勘定祝儀米として、白米六升を納めている。(原村)

おかんじょうもくろく 御勘定目録 藩の米蔵に年貢米を納入すると、米蔵は請切手(領収書)を発行する。それを目録につ

けて、蔵払が完了したことを報告した文書を御勘定目録といい、代官は裏書をして再び庄屋・組頭に返した。(いりふね山)

おきじゅうぶいちうんじょう 沖十歩一運上 浦辺島方より船で積み出す柴・薪類に対しては、十歩一の運上銀を課した。

(広覚)

おきせんだう 沖船頭 江戸時代に実際に廻船を操縦(船長)した船頭をいい、乗船頭ともいう。これに対し廻船所有者を居船頭という(国大)

おきつてまい 御切手米 村方では、御米蔵へ納入する貢米(定物成・耄歩米・種米利息など)を一括して、御切手米と称した。(広農)

おきのり 沖乗り 近世の海運において、沿岸部を離れて沖合を航行することを「沖乗り」といい、内海では「中乗り」ともいわれ、靱——田島——弓削島——岩城島——鼻繰の瀬戸——御手洗——津和のコースをとり、西廻り海運の発展とともに、いっそう活発になっていった。(県二)

おきもみのせい 置粕の制 ↓詰米の制

おきやくや 御客屋 藩が賓客を接待する公設の施設をいう。

幕府や他藩の使臣・賓客を迎えることの多かった広島城下町では、はじめは町家の大家を十軒(承応年間には、白神一丁目に五軒・同二丁目に四軒・尾道町に一軒)借用して御茶屋としていたが、寛文・延宝年間に没落した十軒の大年寄の内の一軒(万屋長右衛門)の家を購入して公設の御客屋を設け、客屋守を置いて管理させた。(県二)

おぎんみかた 御吟味方 御勘定支配足輕五名で組織され、郡

御用屋敷全体を担当し、受持の郡は特に持たなかった。御用屋敷で吟味を行うほか、出浮吟味も場合によっては行った。(広農)

おぎんわたり 御銀渡り 雨池・樋・橋・土手などの修理のため藩より下附される銀貨をいう。

おくぶね 奥船 ↓口船

おくらきつて 御蔵切手 年貢米の上納が完了すると、蔵奉行から代官へ各村の貢米受領証を出した。これを御蔵切手という。

(芸志)

おくらつみちんまい 御蔵積賃米 物成米・口米・見取米・種米利息等を藩の蔵に納入する際には、人夫によるそれらの俵の蔵への積賃として、いくらかの米を納めていたようであり、この米を御蔵積賃米という。文政八年(一八二五)佐伯郡小栗林村では、一〇石につき五升の割合で御蔵積賃米を納入している。

(小栗林村三井家文書)

おくらばらいぶまいにゆうさつちよう 御蔵払歩米入札帳

↓米入

おくらぶぎよう 御蔵奉行 御蔵奉行は勘定奉行の支配下にある、知行取の侍士をあて、広島城下の藩の米蔵の責任者として出納を司った。慶安二年(一六四九)には浦辺蔵(尾道・三原・木浜・竹原・三津)にも置いた。(県二)

おくりきゆう 送り給 領主などの荷物運送に従事する者への扶持をいう。

おくりじんばわり 送り人馬割 郡割費目(郡により異なる)の

うち、宝暦十年(一七六〇)高田郡では、他郡代官・御歩行・番組の廻郡の際の人足足し銀、同じく郡中村々泊り休賄銀、宗旨奉行・当郡代官・御歩行・番組の村々にての泊休賄銀、御小人・山目付村々泊休賄銀を総称して「送り人馬割」と称した。

右記の費目の内、他郡代官・御歩行・番組に対する人足足し銀等については、次のように郡割で負担した。すなわち、人足足し銀は一里に付米六合七勺(郡足しで一度定めると不変)、馬は軽尻一疋に付夫二人立・本馬一疋は夫四人立・掛馬(競走馬)一疋は一人立であった。賄足し銀については、自他郡代官・自他郡御歩行・自他郡番組・宗旨奉行の泊りは米一升三合四勺・昼賄米は二合七勺、御小人・山目付の泊りは米二合、昼賄米は米二合七勺であった。なお賄に要する内夫については、宿泊一人一人は一人立・四人より二人立、昼賄は一人一人は五歩立であった。(白木)

おくりてがた 送り手形 宗門送手形・送一札・送り証文ともいう。縁組・引越などで住居を移動する場合に、当人の続柄・移動理由などを記し、切支丹でないことを証明した送籍状で、寺手形を添えて先方の庄屋へ送った。この手形が受理されると、相手方の庄屋から請込一札が発行された。(日用)

おけだいいうけ 御毛代請 本家の所持高のうち、その一部を本家に代わって請け負うことをいう。つまり、請け負った高は、本家から完全に分与されたものではなく、まだ分家としては認められないことを意味する。(大領)

おこびと 御小人 藩庁の使丁をいい、御小人の扶持米・諸雑

費・藩外への出張旅費等は老歩米から、藩内の出張旅費は厘米より支給した。御小人は藩庁の給仕・使丁・飛脚・諸荷物の運搬等にあたり、足軽より下位で、従って苗字はなく、旅行以外は大刀を帯びることを許されず、また、軍夫に従事することもあった。御小人は明治六年(一八七三)に廃禄となり、制度上解体された。なお、明治三十年に旧御小人八十二名が復禄を請願したが、不成功に終わった。ちなみに、幕府所属の御小人は約五〇〇人おり、切米一五俵と一人扶持を受けていた。御小人の泊りは米二合・昼賄は二合七勺を郡割で負担した。

(芸志・日用・県史近代Ⅰ・沼田安芸郡割免割方しらべ書付)

おこびときりまい 御小人切米 藩から御小人に支給される切米(歩米や厘米から春・夏・冬に分割支給)をいう。但し、文政十年(一八二七)十一月以前には、御小人在住の村においては、自村居住の御小人への冬支給分に限り、藩(御小人方)から送付されてきた差紙(米巻)によって、村が支給していたようである。

しかも、「下方限りの村」(広島近村や米収の少ない村の意か)に対しては、年貢米の差次納を許可していたようである。しかし文政十年十一月以後、藩の「年貢米は全部米納させる」という趣旨から差次納を止めさせ、「正米当分預切手」(御小人当分預切手ともいう)を村へ下付して、村から自村居住の御小人に切米を支給させた。また、年貢米については、支給した切米分を差し引いた額を納入させた。ちなみに「正米当分預切手」とは、「村が支給した切米は、藩は当分の間預り、後刻返却する」という

意の切手と思われる。しかし、後日返却したか否かは疑わしい。

(横山・芸志)

おこびとまかないふだ 御小人賄札 御小人認札 御小人が
藩用で郡中(主として郡役所)へ出張する際には、藩発行の賄札(紙製で認札ともいう)を持参した。この札を、御小人賄札という。

この札にはエト印(文政八年に「エト印相止候」の触書布令)と御勘定所役印が押印してあり、賄料(諸人用米札は七合、宿賃米札は二合七勺、泊り分は九合七勺)が記されている。御小人が賄札を昼食や宿泊をしようとする村(村は指定されていた)へ差し出すと、その村は事前に配布されている御勘定所役印の押印と照合し、札と引換に、厘米の中から札に記入されている米の相当料で賄った。但し、指定村以外の村で昼食等をしようとする場合には、年寄(格)のいる村が引き受けた。なお、村が受け取った賄札は、三、四月頃に組毎に割庄屋元へ集められ、郡役所へ提出された。また、村が負担した賄料は、郡割にして各村が負担した。(躍場・横山・広覚・地御前村御触控帖)

おさえしようものせい 押証文の制 町借押証文の制とも、

町借押米の制ともいう。享保三年(一七一八)広島藩は藩財政の逼迫に伴い、藩は家中の借銀に応じ難くなったので、町方金融を家中に対しても受けさせるために、この制を創始した。この制は、家中・町方の相対借銀に際しても、代官(給人の場合)や勘定所吟味役(切米取りの場合)が保証人となり、家中の者の知行物成や切米を抵当にして、請負証文を書いて保証に立ち、町方から借銀させる制度である。なお、借銀の利息は月一步三朱以下、十ヶ年以内の年賦償還とし、返済できなければ抵当物を

押さえるというものであり、給人の中には、知行地からの年貢の大半を、町借押米として差し引かれる者もあった。この方法は、町方金融を円滑にするものであり、家中の中には物成・切米高を「不残書入」て借銀する者も現れた。このため、藩は享保八年(一七三三)一定の制限(物成・切米高の半分以下の借銀)を加え、さらに、享保十六年には知行高百石につき二〇石・切米十石につき四石までと制限し、同年、藩士の町借のすべてを藩が肩代わりして、月利八朱に改め、勘定所から三ヶ年賦で返済することにした。この後、寛保二年(一七四二)以降は、家中・町人の相対貸借を禁止して、すべて勘定所貸銀方の統制下で行わせることにした。すなわち、同年の暮れ、広島の高商糶屋吉右衛門・胡屋市左衛門を勘定所用聞とし、家中の押証文による借銀はすべて両名の扱いとし、「借受度面々ハ」あらかじめ貸銀方の許可を必要とした。その後、寛政四年(一七九二)に、家中押米の借銀の返済は八朱に利下げ、五ヶ年賦返済を藩は申し渡している。(県一・堀川町覚書)

おさえまい 押米 おしまい。藩主から家臣に貸与した債権に

対して、年々償還させた米をいう。また、藩士が町方から借銀した場合の、いわゆる「町借押米」をも押米という。(白木↓押証文の制)

おさびやくしよう 長百姓 長百姓は本百姓の代表であるばかりでなく、郷(十数戸ないし数十戸からなり、地勢上まとまりのある

集落)の代表で、郷長(郷頭)を兼ねた。長百姓は庄屋が任命し(原則的には無給。但し、文政三年(一八二〇)世羅郡赤屋村では、一石九斗を給している。なお、村外へ出張した際には一日一升五合の出飯米

を支給した、庄屋・組頭の職務の補助・免割の審議にあたり、その他必要に応じて村民の総代となった。定員は郷の数に等しく、大村では二十名、小村では三〜四人。なお、長百姓は、諸制度が整備する延宝頃、初めて置かれたと思われる。文化十三年（一八一六）世羅郡赤屋村では、長百姓五人に対し、計巻石六斗を給していた。但し五人同額ではなかった。（白木・甲山町史）

おし 御師 祈禱に従事する身分の低い祠官をいい、神への信仰を説得し、信徒を獲得した。江戸時代には、御師と信徒は強い師檀関係を結び、その区域は地域単位・同族単位にまで及んでおり、御師のもつ権利は、株として売買された。御師は伊勢神宮（オシシという）・金比羅宮・富士山の浅間神社・大山・立山・白山・出羽三山などの山岳信仰のメッカには必ずいて、季節ごとに檀家を廻って喜捨を集めた。（日用・江戸の旅）

おしむけうし 御仕向牛 御仕向馬 土質が悪く、旱魃や長雨による被害が大きい村に対しては、藩が牛馬を購入して与え、労力の削減をはかった。こうした牛馬をいう。ちなみに、延享年間の頃、藩は世羅郡に対して、三〇貫目程の牛馬を買い与えている。（理勢志）

おしむけまい 御仕向米 種々の事情で百姓が離村したりして、年貢の納入ができない村に対して、それらを防止するために、広島藩は米を下げ遣した。この米を御仕向米とも被下米ともいう。この米は百姓の離村を減少させ、年貢米納入の足にも用いられた。ちなみに、延享年間の頃、広島藩は世羅郡に対して御仕向米を毎年一五〇〇石ずつ十年間与えている。（理勢志）

おすて 御捨 貸借関係を破棄することをいう。広島藩では、寛政二年（一七九〇）に、一定の条件をつけて、今までの貸借関係を破棄する達を出している。（躍場）

おだいかんしょ 御代官所 ↓御役所

おたてやぶ 御建藪 藩の所有・管理下にある藪をいう。（県二）

おたてやま 御建山 みたてやま。従来、藩の直轄林野は「留山」と呼ばれていたが、寛永八年（一六三二）に「御建山」と「御留山」の二種にした。御建山は藩用に供するためのもので、松・杉・檜などの良木の育成が可能な場所が指定され、そこでは樹種を問わず伐採は禁じられた。但し、許可を得て税を払えば、下刈りができた。ちなみに、享保十六年（一七三二）広島藩は、御建山・御留山で違法行為があれば、本人だけでなく長百姓・五人組まで、処分することを布達している。（県一・上原村諸扣）
↓御留山

おちやこう 御茶講 旧賀茂郡仁方村（現呉市）では、「茶講中間」といい、講中の者が毎月二十八日親鸞上人の忌日に当番の家に集まり、僧一人を招いて阿弥陀を拝み、改悔文（蓮如作で信仰生活の規範を示したものを）を読経し、その主意を仏に誓い、一念の信心を仏からお授け下され、未来極楽世界への往生を願った。また、改悔文の主意に応じない者に対しては、僧が改め応ずるように諭した。応じない者は齋飯を食べ終って退散しなければならぬことになっていたが、仁方村には左様の者はいなかった。なお、この講の掟を守らない者に対しては「講中間はずし」、煙草の火も貸さなかった。もともと仁方村には左様のこともな

かった。(呉市史)

おちやや 御茶屋 藩府の賓客を接待するなどのため宿駅に置

かれた施設で、広島藩は寛永十年(一六三三)に領内二十五ヶ所に三軒ずつ設けたが、このうち西国街道など主要道に設けられたものは、後に本陣として利用されるものが多かった。しかし、駅所でもなく他に転用のきかないもの、維持費の過重になったものの多くは廃された。御茶屋には御茶屋番を置いた。なお、享保年間頃の郡方の御茶屋は、可部(宝暦元年廃)・吉田(享保五年廃)・八木・海田・西条・本郷・吉舎・甲山・尾道にあった。(県一・広寛)

おちややうけおいぎん 御茶屋請負銀 御茶屋請負銀とは、

大名などの宿泊費に対する郡割銀ではないかと思われる。宝暦十一年(一七六一)以前には、宿泊は三五匁、昼休は二〇目宛郡割で負担していたが、宝暦十二年以後は、宿泊二〇目、昼休は一〇匁宛藩より支給するようになった。(宝暦十二年沼田安芸郡割免割方相しらべ書写)

おちややさくじぶぎょう 御茶屋作事奉行 広島藩は、寛永

十年(一六三三)幕府巡見使の巡察に際し、領内の茶屋・道路・橋等の施設を整備するため、御茶屋作事奉行・道橋奉行・一里塚奉行を置いて、その任に当たらせた。(県一)

おちややそうじきゆう 御茶屋掃除給 宝暦十一年(一七六一)

までは御茶屋掃除夫に対し、年七五匁を郡割にして支給していたが、宝暦十二年(一七六二)以後は、大名宿泊の節は掃除夫一日五人の四日分、都合二十人、一人に付八分五厘、昼休の節は

一日三人三日分、都合九人分を郡割で支給した。(宝暦十二年沼田安芸郡割免割方相しらべ書写)

おついでのごぜんごよう 御序の御前御用 ↓御直支配

おてつやま 御鉄山 一般に藩営の炉・鍛冶屋で使用する炭材を、確保するための藩有林をいう。(県二)

おてばた 御手畑 八代將軍吉宗は、薬用人参(朝鮮人参)の栽培を奨励し、全国数ヶ所に植えさせた。この畑を御手畑という。ちなみに、島根県の大根島もそのひとつである。

おどしつ 威筒 猪・鹿による農作物の被害をふせぐための空鉄砲をいう。「安永十年・上原村覚書」には、威筒を貸与してほしいという願書や、獵師を雇うための費用(一日一人玉薬代共七分・飯米木錢共九匁)を、認めてほしいという願書を、代官宛に提出している。

おとめやぶ 御留藪 藩の管理下におかれている藪をいう。(県二)

おとめやま 御留山 御建山の立木を藩用に伐採した後、五十年間伐採を禁じた山・水源確保の山・山論が生じ鎌止めになつてそのままになっている山などをいう。なお、種目換によつて、御留山が御建山になった山を、新建(山)という。また、百姓所有の山でも管理権が藩にあった山をも、御留山といったのではないかと思われる。なお、山論等の差縛れのある草山を、村方の便利(税を払って採草する)によつて新建にすることもあった。(県一・広農・横山)

おとりかえせい 御取替制 広島藩は年貢の未進を解消するた

め、御取替制と呼ばれる公借制を採用した。この制は、村として年貢米の一部が調達できない場合に、村は願により藩の貸付を受け、年三割の利息を、翌年の年貢米とともに、返済あるいは年賦返済をするというものであった。(県一)

おどりぶ 躍り歩 広島町方では、質物なしの高利貸しについては、一般に「先ン歩」が行われるとともに期限を殊に短くして、「躍り歩」などといって、契約を更新することに、その月の利息を二重に計算する方法が行われた。これは、いわゆる「相対済し令」などに対して、債権者が危険回避をはかる意味から行われたものであった。(新三)↓先ン歩・相対済し令

おなだい 御名代 広島藩では、勘定奉行の管下に属し、藩札(銀札)の発行に際しては、金銀貨兌換担当の公商を定め銀札元とした。これを御名代と称した。御名代はその姓名を銀札中に連署し、兌換の責任を明らかにした。(芸志)

おにわばん 御庭番 八代將軍吉宗が創始した幕府の職で、將軍の目や耳となり活動する隠密の一派をいう。彼等は表向き、將軍やその家族の身辺警備・取次などを勤めていたが、いったん命令が下ると、姿を変えて、各地で情報収集に当った。のちにはその家筋から、幕政に重用される人材を生むこともあった。(中央公論社、江戸城御庭番)

おねんぐくら 御年貢蔵 給主が給知から収納する年貢米を、保管するために、各村に設けた蔵をいう。(不動の月)

おねんぐしたわけがよい 御年貢下分け通 ↓下分け

おねんぐまいとりたてさんようちょう 御年貢米取立算用

帳 組頭の手許には、水帳に基づいて作成した高寄帳(割高帳)があつて、組内の人別高辻がわかつていた。この人別高辻の書き抜きに、取立免を乗じて各人の納租額を明らかにしたのが、御年貢米取立算用帳である。(広農)

おねんぐまいつだしがよい 御年貢米津出し通 ↓下分け

おのこしまい 御残し米 広島藩は、慶応二年(一八六六)藩内各地護郷兵の養兵費用に充てるため、蔵入地・明知・給知・新開地をとわず、村高百石につき十石の割合で村に貯米させ、藩へ納入させた。この米を御残し米といい、翌年にはこの制は廃止され、米札(一合・二合・一升・二升・一斗・二斗の六種で、いつでも米に換えられる)を以てこれに換えた。当時の藩士の家禄は「四つ物成」(生産高の四割を物成として百姓から取立てること)であつたので、例えば、高百石の藩士の物成は四十石、これに対し御残し米は十石、従つて三十石の物成になり、藩士にとつては大きな負担であつた。(芸志・横山)

おのこりまい 御残り米 御口屋番または御蔵番などに勤めている者のうち、郡中に在住している者の扶持米等は、在住している村方より支給した。この米を御残り米という。米収の少ない村での御残り米は、六月までに帳面上での決算をし、支給は七月からは新米ができるので、それを充てた。(廿日)

おのみちのかじや 尾道の鍛冶屋 尾道へ積み出される奴可郡産の鉄を加工し、釘や碇、農具などを生産する鍛冶細工が、尾道の特産品であつた。しかし、化政期以降の尾道の不況、近隣地区での農具・釘生産の開始、原料の鉄や木炭の値上りによつ

て、尾道の鍛冶屋は経営困難に陥り、これを凌ぐため拝借銀を願い出るようになった。これ以前にも文政二年（二〇貫目）、同十二年（同）、天保七年（同）、弘化三年（三百両）年に拝借したことがあった。（県立文書館資料）

おめみえ 御目見 貴人に謁見することをいうが、將軍直参の士の中で、將軍にまみえる資格のある者を「御目見以上」といい、ない者を「御目見以下」という。広島藩では享保年間以降、銀六〇目以上を藩に差し出せば、農民であっても藩主廻在の時には、御目見が許された。（日用）

おやごう 親郷 ↓本郷

おより 小寄 真宗門徒の多い安芸国では、講中はそのまま同行の寄り合いとして、毎月小寄と称し僧を招いて法話を聞いた。もともと、地域によっては、男の寄り合いを大寄、女の寄合を小寄という場合もあるが、年一回の報恩講を大寄、月々の寄合いを小寄と呼んだようである。（県二）

おりがみ 折紙 全紙（堅紙）を横に二つに折って用いたものを折紙といい、全紙を縦に二等分、あるいは必要な巾に切ったものを縦切紙といい、横に二等分したものを横切紙という。また、料紙（用紙）を必要な大きさに小さく切ったものを小切紙という。

おりねだん 折直段 御年貢取立直段ともいう。毎年十月の免割前に、上り銀相場並びに御蔵前御払直段や町相場を聞き合わせ、村役人・年行司等が集まって、村の年間の諸入役についてまとめた上で、一石当りの米の直段を定めた。これを折直段と

いい、その上で免割をした。（横山）

おれいせん 御礼銭 広島藩では、功績等のあった侍士に対しては、藩主から太刀や馬の購入代金（又は現物を与えることがあり、これに対して返礼として差し出す銭をも御礼銭と唱えたようである。嘉永元年（一八四八）広島藩では、御省略中（節儉中の意）のため、夏・年頭の御礼銭は受けないが、太刀や馬代に對する御礼銭は差し出すようにとの触を出している。（国前寺文書）

おんかみがた 御紙方 紙・楮の生産販売は、浅野氏入封以来、農民の自由に任せていたが、正保三年（一六四六）に増産と統制をはかるため御紙方を設けた。御紙方（紙御蔵奉行を置く）は、郡中より出した紙について、公用に供するもの、家中に売るもののほかは、特定の紙商人に払い下げた。（県一・芸要）

おんかみぐら 御紙蔵 広島藩は、延宝二年（一六七四）に広島と廿日市に紙蔵を設けた。紙蔵は紙の需給状況を考慮し、漉かせる紙の種類と生産量などを決定し、それを各村の紙漉人に割り当て、また、原料の楮もすべて藩で買い上げ（天保十二年楮一駄——三十貫——を、その年の十月の米一石の相場紙漉人に交付した。所要の楮が不足する場合には、他郡・他国産のものを購入し支給した。紙はすべて検査の上買い上げ、紙蔵に収納するものには官印を捺し、公用に供するものや、家中に売るものの外は特定の商人に払い下げ、民間用に販売させた。（県二）

おんくらいれ 御蔵入 *藩の御蔵に、直接年貢米を納めることをいう。この納米は三斗入一俵に、込米として二升四合乃至

二升七合を加えた。(広農) *藩の直轄地(蔵入地)の略称としても用いられた。

おんじきしはい 御直支配 御側詰以上の役職は、任命の際に藩主自らが口頭で伝える定めとされていた。これを御直支配、あるいは「御前御用」と呼んだ。なお、蔵奉行・銀奉行・武具奉行はこれに準ずる格式として、「御序の御前御用」と呼ばれた。(新二)

おんたかがた 御鷹方 御鷹役所におかれた職で、鷹を預かり、鷹狩に際しては鷹を差し上げたり、飼育などもした。なお、御鷹方は文久三年(一八六三)に廃止された。(芸要)

おんななおし 女直し 年貢米を藩の御蔵に納入する場合に、大唐米などの悪質米・粗米を除くための仕事を主として女子に従事させた。このことを女直しといい、石につき五合を支給した。男子の場合には二合五勺を支給した。

おんもとかい 御本飼 鷹狩りに使う鷹を飼育する御小人をいう。寛政六年(一七九四)広島藩の鷹狩においては、「御小人賄札」により所相場で昼泊り賄代を支払っている。(踊場)↓御小人賄札

おんもとかいかた 御本飼方 もと本とは鷹などの猛禽類を数える単位として用いられた。特に、狩に使う鷹の調教や、訓練をする者を御本飼方という。寛政六年(一七九四)広島藩の鷹狩りにおいては、御本飼方一人に付き、一日一匹分として、白米五合(朝二合・昼夕は一合五勺ずつ)を所相場で、外に木銭として一分一厘を、それぞれ直払をしている。(国大・踊場)

おんやくしよ 御役所 御役所とは、元来郡奉行が執務する役所の謂で、代官が執務する役所は代官所である。しかし、代官が郡奉行の執務する御城郡御役所の内に席を与えられた場合には、「〇〇郡御役所」といい、郡奉行の御役所を離れて郡御用屋敷で執務した場合には、「〇〇郡代官所」という。(白木)

おんやなしよ 御築所 御築所(藩営)の最初の設置年は不詳であるが、元文三年(一七三八)高宮郡深川村から同郡下四日市の河戸に移され、その後寛延三年(一七五〇)河戸の御築所を廃して、いやが瀬(河戸の川上)と深川の二ヶ所に設けた。御築所は御築奉行として御歩行組が始終勤番をし、川番が見廻りをして農民の密漁の取り締りを行った。なお、河戸で捕獲した鮎は將軍へも献上することになっていた。太田川筋の河戸より川上の村々では漁の時期が規制され、小百姓らはわずかに雑魚をとって渡世の助けにしていた。御築所には多くの竹木を要したので、御建山・腰林から調達したが、それは沼田郡にも及んでいた。ちなみに、文化十年(一八一三)沼田郡相田村では、「なよ竹」二束(但し二尺手把)を供出している。(可部町史・横山)

おんやなしよごようかかり 御築所御用懸 築に使用する竹木の買い上げ、鮎の幕府などへの献上後の払い下げ、密漁等の取り締まりに従事する役を、藩府から任せられた者をいう。御築所御用懸には庄屋が充てられたよう。文化九年(一八二二)沼田郡筒瀬村の当分庄屋直三郎と庄屋庄右衛門は連名で、この許可申請願書を、御築奉行宛に提出している。(横山)

おんやまかた 御山方 広島藩は山林管理のため、御山方とい

う職制を設け、山林に関する一切の事務をとらせた。最初は慶安三年（二六五〇）に御山奉行を置いたが、正徳五年（一七一五）十二月にこれをやめて、勘定奉行が御山方の事務を取り扱った。享保十二年（二七二七）二月には、一時「郡廻り」がこれを行ったが、同十八年十一月に再び専任の御山奉行を置き、宝暦八年（一七五八）二月には廃し、また「郡廻り」の扱いになった。その後、天明五年（二七八五）九月にまた勘定奉行の扱い、さらに「郡廻り」の兼務（期間不詳）、文政十一年（一八二八）には材木場一円が勘定奉行の引受、その後山奉行を設置（期間不詳）、天保八年（二八三七）山奉行の職制を止め、山方・材木場が勘定奉行の引受となった。このように、管理官庁は目まぐるしく変動した。（県一・横山・天佑公済美録・温徳公済美録）

おんやまかたあらためやく 御山方改役 横山家文書（旧沼田郡相田村）の「文政十年郡諸控」に、左の記事がある。「南下安・西原村両村二而不正之粉六拾式枚併杉板七間、御山方改役打越村八郎兵衛見当り（後略）」。従って、御山方改役とは、山目付役の補佐役として、村役人格の者から選ばれたのではないかと思われる。

おんやまぶぎょう 御山奉行 ↓御山方

か

かいさいもくろく 皆済目録 *村方全体の年貢米が完納され

ると、代官（給知では給人）は割り当てられた年貢米が皆済されたことを記した書付を村に下付した。これを皆済目録という。

*給庄屋は年貢米を完納すると、給主に納入すべき定物成・種米利息等の合計から、社米・庄屋給・上ケ米等を差し引いた残りの米納額を記した報告書を、年一回給主（支配人宛）に提出した。なお村庄屋は蔵入地・明知について、給庄屋と同様に、定物成・種米利息等について記した報告書を、年一回割庄屋に提出した。給庄屋・村庄屋がそれぞれ提出した報告書をも、皆済目録ともいわれた。（横山）

かいつぎばらいせい 買次払い制 御調郡では年貢米の差次払

いは認められず、米銀何れで上納してもよいとされていた。しかるに、御調米の市場価格が高まってくると、買次払いと名づけて尾道において商人に売米の相場を立てさせ、その売米を村方に購入させ、直ちにその米を上納させた。御調米は良質であるが故に上り銀相場も他より高く、従って、藩は御調米を吸収するためにこの制をはじめた。（県一・芸志）

かいはどめ 改派留 転派を禁止することをいう。広島藩では、

十八世紀以降の社会的・経済的変動に伴い、真宗寺院のうち、西本願寺派より東本願寺派に転派するものが出てきた（例えば寛永三年、広島城下では十七か寺が転派、その後、仏護寺・本山の対策により九か寺が西本願寺派に復帰）。そこで、天明六年（一七八六）仏護寺は、藩に対して「改派留」の触を要請し、それでひとまず沈静したが、その後も同触を出しているが、その成果については明らかでない。（県二）

かいぶ 改歩 ↓銀歩

かいん 花梱 花びらで作ったむしろ。美しいむしろの意。(山陽記念館資料)

かえもち 替持 近世中期における製塩業の危機(生産過剰・塩価

の低落)の打開策として考案されたもので、塩田地場を二分して、一日に半分ずつ作業することをいう。これによって経費を節約した。(県二)↓休浜

かかえ 抱 本人の居住する居屋敷とは別に、買得所持された屋敷をいい、又掛持ともいう。「大身成者」がむやみに方々へ抱屋敷を持つことは禁止されていた。(廿日)

かかえいれ 抱入 家康より家綱までの四代の間に、大番与力・同心等に召し抱られ、及び五代以後に召し抱えられたすべての御目見以下の幕臣をいう。(日法)

かかりぶ 掛夫 人夫役をいう。助郷役・伝馬役・臨時の水夫・城内の普請などのため、村高に応じて徴発された。後には夫米・夫銭化され、租税の一部として課せられるようになった。

かきかぶ 蛎(牡蛎)株 牡蛎株仲間のことをいう。成立はほぼ元禄・享保の頃で、草津村と仁保島の牡蛎屋は牡蛎株仲間を結成し(草津古株二一組・仁保島新株一四組)、その地先での生産と、大坂への積寄せ販売を独占した。しかし、養殖や大坂積寄せの資本は、大坂の船宿や牡蛎間屋からの借入のため、大坂商業資本の前貸の支配を招き、種々の問題を生じた。(県二)

かきいれ 書入 書入田地。寛文・延宝期には、質屋営業の内容として質入と書入とがあった。書入とは、抵当物件を記入し

た証文を書いて、金子を借用することをいう。田地を抵当にする(書入田地)場合には、田地の字・位・面積・返済できない時には、金主にその土地を渡す等を記した証文(書入証文)を差し出した。なお、証文には庄屋が加印し地主が耕作した。なお、年貢や諸役は質取人(金主)が負担した。(地方・県二)

かきはおり 柿羽織 諸事取締りの簡略奉行の配下(足輕)をいい、柿色の羽織を着用していたから、その呼称がある。(元禄御畳奉行の日記)

かきやく 書役 ↓帳付

かぎやく 鍵役 牢屋において、牢の鍵を管理し、囚人の出入りに関する一切の事務を扱った役人をいう。(江戸)

かくいほり かくい堀 「灯し」にするために、松の太木の根を掘ることをいう。城下広島の水が、太田川の運ぶ土砂の堆積によることが多いので、藩はその防止策として「かくい堀」を禁止した。(県二)

かくせん 角銭 天明四年(一七八四)仙台で幕許の上、領内限りとして発行した「仙台通宝」や鉄一文銭(寛永通宝の鉄製の一文銭のこと、元文四年(一七三九)江戸の銭座で鑄造、その後各地で鑄造した)の俗称で、この銭は撫角型であるところから、「なかぐくせん」とも呼ばれた。(国大)

かけおち 欠落 逐電ともいう。近世では欠落者が出ると、その親類・町村役人などを尋人として日限尋ねが代官所から命じられ、一回が三十日、六回まで尋ねさせ、それでも発見できない場合は人別帳から外させた。(日用)

かけさげ 掛下げ 懸下げ。土地が土砂で埋没し、その土地の

位が下がることをいう。「位下り」ともいい、低下したために
生じた石高は、閘高として村全体が共同負担した。(広農)

かけさげまい 掛下げ米 ↓指次ぎ米

かけしよ 懸所 掛所。*錫しゃくしやう 杖をかけて滞留するという意

味で、法主巡化しゅんげ(巡回して説法し化導すること)の際などに、駐留
休泊する所をいう。また、地方の別院・説教場等を、昔は多く
掛所と称した。(真宗辞典) *真宗大谷派本山の地方出張所を
いう。(広辞)

かけもち 掛持 ↓抱

かけもちま 掛持浜 竹原塩田経営のうち、竹原下市及び近

在居住の浜主が、町方では他業を兼営し、それぞれ通いで経営
していることをいう。貞享元年(一六八四)竹原塩浜には、掛持
浜が三五軒あったが、元禄十五年(一七〇二)には三八軒を数え
た。(県一)

かけもやい 掛模相 ↓家中模相銀

かけや 掛屋 江戸時代、大坂において諸藩の蔵物の売却代銀

を収納保管し、その藩の必要に応じて、その出納送金の任に
当たった町人をいい、銀掛屋とも言った。掛屋には鴻池屋・加
島屋・辰巳屋など信用ある大町人が任ぜられ、通常出入の藩か
ら扶持米を受け、苗字帯刀を許されていた。このほか蔵物売却
代銀を無利子で保管していたので、その金利を利し、また、他
藩、または同藩へ貸付を行い、その利息を収めるなど諸種の特
権を持った。ちなみに鴻池屋善右衛門は、加賀・岡山・広島・

阿波・柳川藩の掛屋を勤め、尾州藩の用達をも兼ね、その扶持
米だけでも合計一万石に達したという。(郷土)

かこいどめ 囲留 ↓追込・追籠

かこいもみ 囲舂 備荒食料として貯えた粃(早稲・中田)をい

う。広島藩は幕令により、宝暦三年(一七五三)に、高一万石に
対して粃千俵(三斗五升俵)の割で、粃一万四九二七石五斗を村
から差し出させ、各郡数ヶ所に設けた郷倉に貯えさせた。その
後、凶作に際しては度々放出し救恤に充てた。宝暦七年(一七
五七)く九年まで、この制は中断したが、宝暦十年から再びは
じまり(一万石に付粃千俵、二ヶ年分(宝暦十・十二)を貯穀して、
宝暦十二年からは詰め替え方式で実施(古い囲米は払い下げたし
た。その後安永三年(一七七四)正月、前年の豊作により一年分(一
万石に付粃千俵)を余分に詰め加え(計二ヶ年分)たので、その後
は「三ヶ年廻り」に詰替えを行うことになった。更に幕府は寛
政元年(一七八九)九月、諸大名に対し、翌年より高一万石につ
き正米五〇石の割合で、五ヶ年間の囲米を命じ、さらに文化二
年(一八〇五)・同七年・同八年にも高一万石に付、粃千俵の囲
米を命じた。囲舂高は幕府に報告しなければならなかったが、
凶作・飢饉に際しては放出を願い出て、豊年には新しく囲舂を
増すなどして適宜運用されたので、幕府への報告の有無は疑わ
しく、また凶作等による損毛の甚大なときには、粃の詰戻しを
する余裕などはなかったものと思われる。なお、囲舂は社倉穀
への補充へも転用したようである。例えば、文政十年(一八二七)
沼田郡の囲舂七三石四斗八升のうち、七一石九斗五升を、
社倉穀への見込分として貯えている。例えば、文政六年上原村

では囲初(麦代用)五石九斗二升を社倉蔵へ補充して、それにより上原村の救麦と永代麦とを完備している。もちろん、この場合の補充分はのちに囲初蔵へ返納している。また、社倉穀同様に貸し付けも行っている。例えば、文久元年(一八六二)沼田郡西山本村では、囲初四四石四斗五升の内、二一石九斗五升を農民に貸し渡している(新三・県二・踊場・横山・御触書宝暦・天明・天保集成)

かこいもみふういん 囲初封印 囲初蔵の入口の錠前に貼りつけた封印をいい、それには代官名の記入とその押印があつた。

かこいやま 囲山 囲林ともいう。幕府・藩が緊急用材または公用を含めた自家用材を確保するために設定した保護林をいい、搬出便利の山を指定し、下草取・枯木取も許さなかつた。広島藩では、御囲御用山と呼んだと思われる。(日用)

かこうら 水主浦 水主浦とは、幕藩制下にあつて、海上航行に必要な労力奉仕を行わせることの代償として、一定の範囲の海面について、優先的に漁場用益権が認められている漁村をいう。福島正則改易後の広島藩では、佐西・佐東・安南・賀茂・豊田・御調の沿岸島嶼部に、本浦七十一と、それを補助する附浦十二を水主浦として指定した。指定された水主浦は、藩の船手方に苦・縄を納め、幕府その他公用船の通航に際して、漕船その他海上の諸役を勤めるなどの水主役を負担した。なお、水主浦は水主役があるため壱歩米の負担はなく、厘米も地方に比べて低率であつた。(県一)

かこやくぎん 水主役銀 郡中・広島新開は年貢地なるが故

に、畝数を定めていたが、広島町組には畝・段の定がなく、年貢に代わるものとして、元和六年(一六二〇)に広島町組に賦課されたもので、津船手役所が徴収する水主役の代納銀制として創始され、大年寄や年寄を除く家持町人から家の表間口に応じて、銀子を上納するように定めた(小間一間につき一両五分、但し所により一両又は七分五厘)。これは、実質的には広島町組の地子的なものとなつた。三原町では、慶長十七年(一六二二)福島正則は家改めを行い、水主役家(三五一軒)として、銀一貫一七〇目を納めさせているが、これも水主役銀といわれた。(県一・三原志稿・広覚)

かじこのせい 梶子の制 上下蒲刈島では、出漁中の櫓を押すために、年少の者を養い子として貰う制があつた。この制をいう。この養い子は実子と同じように扱われ、長じて嫁をもらうと船を一艘造ってもらつて、独立するのが一般的であつた。(県二)

かじすみうんじょうぎん 鍛冶炭運上銀 鍛冶を営む者に対する課税で、使用する炭(松炭)の量によつて税額を決定し、毎年十二月に徴収した。享保三年(一七一八)高田郡三田村では、炭十俵分の鍛冶炭運上銀は四匁であつた。(広村)

かしらじょうや 頭庄屋 正徳二年(一七二二)代官制が廃止され、所務役人のもとに郡中に八十一人の頭庄屋を設け(大体五百石前後に一人で殆ど居村庄屋が兼ね、組下村数は三〇一八村、享保三年(一七一八)正徳新格廃止により廃止)、農村支配を強化した。頭庄屋は有力農民から選び、二人扶持と役料三百目(町村により異

なる藩と郡村で折半）が給され、「御扶持人」格とされ、出張や郡中往来には、「村廻り」・大割庄屋なみの荷馬や賄料が下付され、旅費はすべて郡割で支給した。家老給知においては、農村支配のあり方が小給知とは異なり、上田氏の場合では、藩の郡奉行——郡役所——割庄屋のラインの支配系列のもとにあると同時に、独自の知行所奉行——村方役所——頭庄屋の系統によって支配していた。しかも、正徳の新格廃止後も、頭庄屋の名称は残していた。（県一）

かしらひやくしよう 頭百姓 五人組の頭をいう。慶安年中に五人組が結成されると、庄屋・組頭の下に、組内の五人組頭（頭百姓）を設けた。なお延宝年中からは庄屋・組頭・組の内長百姓となった。（剰語）

かずきだか かずき（闔）高 検地や地概の際に、古荒川成・古荒などに割り当てられた年貢米や、「掛け下げ」や「上り高」によって生じた不足分や増加分の年貢米は、毛附高（村高からかずき高を引いたもの）によって負担した。これらの負担分を「かずき高」という。地概以後に地損が生じても、新しく「かずき高」を決めず、元のままの「かずき高」を踏襲し、その代わり村から一定の額を「地損分かずき高」に対して、直接地損の百姓に補償した。この補償米（指次ぎ米）は、川成米・掛下げ米・溝の代米の名で補償された。なお、この米はのちには土地から離れ資産視されて、株のように勝手に売買されるようになった。

（剰語）

かせん 過銭 科銭とも書き、罰金や科料の金銭をいう。

かたぎまい かたき米 百姓は、日常生活に必要な品物を求めるため市町へ米を持参した。その米を「かたき米」と称した。

（郷史）

かたくちがみ 片口紙 半紙の別名をいい、広島藩では諸口紙とともに、多く生産（享保初年三三七〇丸）されていた。（県一）

かたづけひやくしよう 片付百姓 貢米を期限までに上納しない場合には、家屋・田畑・山林・家財等まで残らず未進方に没収せられ（形式的には本人が自発的に差し出している）、居所を退去させられることがあった。こうした百姓をいい、また、「潰れ百姓」「追い上げ百姓」「上り百姓」ともいう。（芸志・続九）

かたまち 片町 町とは、本来両側に家が立ち並んでいる様をいい、片側しか家がないのを片町という。

かち 歩行 侍士に次ぐ士分の階級で、藩主に謁見するとき、侍士が直接応答を許されたのに対し、歩行は言葉を賜るだけとされた。（新二）

かちめつけ 歩行目附 *江戸幕府の職制で、徒士目附・徒目附とも書き、目附の指揮を受けて、監察・探偵に従事した士分をいう。（日用） *広島藩では、宝暦七年（一七五七）以前には、歩行組の者を村廻りと称して各郡に配属し、代官の補佐にあたらせていた。しかし、以降は歩行目附と唱え、代官所の事務を離れて郡奉行直属の目附役となり、時々入郡して番組・村方役人の非違を監察し、また「郡方公事出入吟味調役」などを担当した。しかし、当初は年番で一部の者は郡方に常駐していたらしいが、いつの頃かこの制は取り止めになり、文化十年（一八

一三)再びこの制は復活した。ちなみに、宝暦五年(一七五五)「村廻り」の一行が、沼田郡相田村に入村し、昼休みをした時の入用の五匁九歩六厘は、五分四厘が御銀出・四分が郡割・残りを相田村が負担している。(新二・横山)

かちゅうあげまい 家中上げ米 いわゆる借知のことで、藩が家中の知行米や切米・扶持米から、一定の率で強制的に借り上げる制で、藩財政の補填策として、寛永十六年(一六三九)から始められ、延宝三年(一六七五)に恒常化し、幕末に至った。ちなみに、広島藩の享保四年(一七一九)の家中上げ米は「一つ成」(年貢率を五つ成とした場合には、知行物成は四つ成になる)であった。(県一)

かちゅうもやいぎん 家中模相銀 掛模相ともいい、切米五十石以上の侍士・徒士は、すべて毎年禄米を受け取る時に共同経費として受領額に応じて、一定の銀を拠出し、藩勘定所に積み立てた。これを家中模相銀といい、普請奉行が管轄した。この銀は、参勤交代に従ったり、江戸・大坂の藩邸詰に派遣されたり、その他公用で旅行に出る時などに、該当者は一定の模相銀(本模相・定模相という)の交付を受けた(渡模相という)。なお、年積立額は年により増減があったが、延宝元年(一六七三)に毎年定額とし、物成百石につき、家老・馬廻り・与力の侍士は銀百六十匁、小姓組・医師・その他役方の者は銀百十二匁にした。但し、正徳五年(一七一五)より家老・与力の外は廃止した。(県一・広覧)

かどまつ 門松 年頭に広島城内の「三の丸」「学問所」や、「南

御屋敷」等の飾用として、広島近郊の給知百姓から、門松を藩府へ差し出していた。安政五年(一八五八)高宮郡上町屋村の給人寺川九十九が、同村へ通達した給人法には、「年頭鰯用差出シ候儀、闌旧例ニ相見、勝手次第可被差出、員数鳥目貳百文たるべく候、其余闌無用たるべく候」と定めている。このことからして、門松の差し出しは、かなり以前から行われていたと思われる。なお、この制は明知・蔵入地にはなかった。(可部町史)かなら 「鉄穴」のことで砂鉄の採集をいう。広島藩では「鉄穴」のことを「カンナ」と読むほか、カナラ・カナナ・カコラともよんでいる。(県二)

かまがりけいせんしよ 蒲刈繫船所 かまがりかけふねしよ。蒲刈三之瀬は、停船基地・朝鮮信使・幕府使臣・参勤大名等の往来に利用される海駅として重要であり、広島藩は、沿海の土豪を蒲刈繫船方支配に任じて差配させていたが、承応二年(一六五三)に蒲刈繫船所を設け、藩船・船頭・水主を配備し、船頭・水主への扶持・切米支給のため、浦辺島方繫船米を徴収する制度を始めた。寛文十一年(一六七二)には規模を拡充して、繫船奉行を置き(天保十二年(一八四二)佐伯郡中村では定物成三九石四斗二升の内七斗五升六合を出している)、繫船米の制を整備し、佐伯(二六石七三二)・安芸(三三石四九五)・賀茂(三三石六四八)・豊田(三〇石三六〇)・御調(三一石七九六)の各郡より計百四十四石三升を入用米(蒲刈繫船米)として徴収(半方六月銀納・九月半方米納)し、繫船奉行を蒲刈に置いて、繫船の管掌・抜荷改・海上の警護等に当たらせた。(新二・玄徳公済美録)

かまきり 釜切 期限を切つて「夫」を雇うことをいう。ちな

みに、享保十年（一七二五）頃竹原塩田においては、釜切一八〇月切といった月切がみられる。（県一）

かまどさらい 竈（かまど）さらい 不法滞在者の一斉摘発をいう。広島

藩では天保四年（一八三三）十月十三日に広島町で行っている。

（梅颯日記）

かまどめ 鎌留 ↓山論

かみおぶぎょう 紙御奉行 日々紙蔵役所へ出頭し、郡中より

差し出す諸紙を引受、御用の余は御家中初め市中紙商の者へ、払い下げのことを専務とした。（芸要）

かみおんしいれ 紙御仕入 紙御仕入銀。紙蔵より村（紙漉人）

に割り当てた漉き紙（種類とその量）の原料としての皮楮は村へ有料で配布した。その場合に、村は購入費（全部又は一部）を藩から借入することがあった。それを紙御仕入といい、その代銀を紙御仕入銀といい、藩（紙蔵）は当年中に、来年度分を貸与した。

かみがしら 紙頭 紙漉村では、紙楮改役・庄屋格で村毎におかれ

たによって、村内で一、二名を紙頭に任命した。紙頭は村内の紙や楮のことについて世話（算用など）をするとともに、御紙方役人の廻村の節には、その世話も行った。（横山）

かみぐら 紙蔵 広島藩は紙に対して統制を加え、延宝二年（一

六七）紙蔵を広島と廿日市に設けた。その後宝永三年（一七〇六）広島三川町に紙蔵を設け、紙・楮の専売制を実施した。紙蔵は紙の需給状況を見計らいながら、漉かせる紙の種類と生産

量などを決定し、それを各村の紙漉人に割り当てた。また、原料の皮楮もすべて買い上げ、これを紙漉人に有料で交付し、漉き上げた紙はすべて検査のうえ買い上げ、公用に供するもの、家中に売るもの以外は、特定の紙商人に払い下げた。文政期の買い上げ価額は一丸につき並半紙は五四〜六四匁、上質半紙は七〇〜九〇匁、諸口は五〇匁、塵紙は一五〜二〇匁であった。

ちなみに、高田郡では皮楮を井原村に集めた。その際、井原村に道程三里以上の村に対しては、皮楮一〇貫単位で一里につき丁銭七文の半駄賃銭を交付した。ちなみに文政初年における紙漉村数は佐伯（三二）・山県（二三）・沼田（一〇）・高宮（六）・高田（六）・恵蘇（五）・世羅（五？）・三谿（四）・三次（四）・甲奴（二）・豊田（二）・三上（二）であった。なお、公用の半紙等を淡茜色に着色したのは享保八年である。（県一・芸志）↓丸・参考資料

かみこうぞあらためやく 紙楮改役 ↓紙頭

かみこうぞしいやく 紙楮支配役 紙や楮の生産・集荷の

責任者として、郡毎に割庄屋格の紙楮支配役を、また、村毎に庄屋格の元締役・改役・見取役を置いた。彼等は専売制のきびしい統制のもとに、抜売買に対しての取り締まりや、巡視の任を負わされていた。なお、紙楮支配役に対しては、紙蔵から年六十目の給銀を、二回に分けて支給した。（県二）

かみざ 紙座 宝永三年（一七〇六）に藩が設定した機関で、紙座

は紙の領内産出の自由売りを禁止し、藩が一手販売を行う、いわゆる藩専売制実施のために設置したもの以外ならない。なお、紙座の設置は、藩財政の強化をはかる積極的な政策の一つでも

あった。ちなみに、家老上田氏も元禄十三年（一七〇〇）に、佐伯郡小方村に紙座を設けている。（県一・和田家旧記書抜）

かみのぼせまい 上登せ米 浦辺御蔵に収納された年貢米は、広島蔵へ廻漕されるものであったが、寛文期になると御船手方の管理のもとで、直接大坂蔵屋敷へ廻漕されるようになった。この米を「上登せ米」という。

かみやかぶ 紙屋株 宝永三年（一七〇六）広島藩は紙を専売制にして、生産から流通にいたるまで統制していたが、享保の頃広島町に設けられた紙屋株の仲間の者に、人員を限定して紙を払い下げた。紙屋株は、頭取が責任者となつて販売権を握るとともに、無株者の抜売りの取締りにあたつた。なお、紙屋株は広島以外の在郷町にも設けられた。（県二）

からじりうま 軽尻馬 空尻馬 宿駅におかれた馬をいい、人が乗る場合は五貫目までの荷物を、荷物だけのときは二十貫までを乗せることができた。可部町より広島迄の駄賃は九六文。

（日用）

からすがね 烏金 借金の一形態で、一夜を経て、夜明けに鳥の鳴く頃返済する意で、日歩で借る高利の金銭で、貸した翌日その元利を取りあげるものをいう。なお、これには借用証文は不要であつた。

からもの 唐物 外国舶来品に対する一般的呼称。平安時代には支那から渡来したものを唐物と呼んだのが起り。江戸時代には支那以外にオランダなどとも交易が行われ、唐紅毛荷物と称されたが、一般には唐物と言つた。広島藩では文化九年（一八二二）

唐物改問屋を廃し、白神一丁目脇本陣裏に、「唐物改所」を設けた。なお、享保五年（一七二〇）には浦島の村役人に、抜荷の取締りを命じ、翌年には白神組一丁目の富士屋喜兵衛に唐物改方を命じ、享保九年には御手洗町に、唐物抜荷改番所を設けている。（郷土・知新集・吉長御代記・新二）

かりしき 刈敷 春先に山野の若草を刈り取つて田畑に敷き込み、肥料にすることをいい、刈り取り場はほとんどが入会地で、入会権は本百姓にあつた。（日用）

かろう 家老 家老は家臣団の頂点にあつて藩政を統轄し、おむね世襲であつた。広島藩では、元禄頃までは三家老が月番交代で、直接藩政を運営していたが、宝永六年（一七〇九）の職制改革で顧問格になり、それまでの加判役を年寄として実務を執らせることになった。家老給知は、給知村の地域的な一円性はなかったが、一村丸抱えが普通であつた。（県二）

かわぐちとおりにきつて 川口通り切手 ↓川口入津米

かわぐちにゆうしんまい 川口入津米 広島町へ船で搬入される移入米をいい、年貢米納入期の六ヶ月間（七月～二月）は停止されていた。また、年貢米でも広島への搬入には、村役人の手形を必要とし、それ以外の米は、勘定所の「川口通り切手」の交付を受ける必要があつた。なお、宝暦十一年（一七六一）・安永八年（一七七九）・寛政三年（一七九二）・文化十年（一八三三）には、川口入津米差止めの間中は、領内での他国米の売買をも禁止する触を出している。なお、文化十年（一八一三）の触では川口入津米の差留中は、雑穀類については、積出しは禁止し、

入津は認めるという触を出している。(県一・久松家文書・横山)
かわぐちばんしょ **川口番所** 川口番所は勘定奉行の支配下に

あり、元禄十二年(二六九九)九月広島城下の川口六ヶ所(本川・京橋川・西堂川・平田屋川・小屋川・六丁目川)に置かれ、侍士をその職に充てた。川口番所は米・鉄・紙の出入の検問・抜荷の取り締り・運上の取り立てに当たった。正徳二年(一七一二)六つの川口に川口番所を置いた。(県一・事蹟緒鑑27)

かわせまい **為替米** *高田郡北部の村では、寒冷のため米の品質が劣り、年貢米納入のとき別米になることが多いので、米入を通じて可部町で米を銀貨で購入し、その米を上納することもあった。この米を為替米という。為替米は禁止されていたが、依然として存続していたようである。(広庄)↓鉄山下し米 *山県郡では寛文期以前から、為替米とよぶ「鉄山下し米」制を採用している。(県一)

かわなり **川成** 洪水などによって、高のついている耕地が流失して、川になったものをいう。川成は年貢の対象地になっている場合が多く、その分は村閭にされた。(広農)

かわなりまい **川成米** ↓指次ぎ米

かわよけ **川除** 堤防(主に堤防の内側の下部補修)を堅固にし、川底をさらい、河川の氾濫を除く作業をいう。(日用)

かわらずえ **航居** 「航」は竜骨のことで、船に竜骨を取りつけることをいう。また、「骨」は「かわら」ともよむ。

かわりやく **代り役** ↓跡役

かんきん **官金** 官銀。座頭金・盲金ともいい、座頭の貸金を

いう。元来、盲人が検校の官を得るために利殖する金であって、その意味で官金と称するようになったが、後には盲人の貸金はすべて官金と称するようになった。みな高利であった。(日法)

かんけつまい **間欠米** ↓欠米

かんじょうぐみばんぐみ **勘定組番組** ↓下代

かんじょうぶぎょう **勘定奉行** 勘定奉行は、藩府の予算・決算・家中の知行・切米に関する事務を担当した。はじめの頃は御算用奉行と称し、役所を算用場といったが、慶安元年(一六四八)それぞれ勘定奉行・勘定所と改め、三人を定数とした。正徳五年(一七一五)の藩政改革により、勘定方三人・郡方五人・山方二人、計十人の勘定奉行を置き、それぞれ交替勤務した。享保三年(一七二八)「郡廻り」を復して郡方・山方のことはその管掌に復したので、勘定奉行は本来の勘定のみを担当になった。その後、寛保四年(一七四四)年貢収納関係は、すべて勘定奉行の支配に改められ、五、六人を定数とし、郡方・勝手方を分掌して後世に及んだ。(県一)

かんとぎん **官途銀** 広島藩においては、宝暦六年(一七五六)、

盲人の廻在(当時盲人は国内を自由に廻在し、奉加銀・廻在費用等を強要)を止めさせ、その代償として居扶持並びに官途銀の制を設けた。居扶持の制は、同年における藩内の全盲人の数を定員とし、盲人の官位の高下にかかわらず、座頭一人一日米五合、盲女一人一日三合として、惣郡一六郡へ高に応じてその郡の相場で銀で取り立て、毎年六月と十一月に検校へ、更に検校から村役人へ渡し、月々居村の村役人より支給した。なお、定員は

広島藩全体を一区域として定めたので、甲郡の欠員を乙郡で補充することはできたが、広島町で補充することは禁じてあった。それは、広島町の居扶持の総額は、二二七石八斗八升に定められていたからである。なお居扶持米の仕出書は毎月組合毎に割庄屋宛に差し出していたが、村の失費になるので、天保二年（一八三二）十一月分よりは、座頭・盲女の増欠がある場合にのみ、組合毎に割庄屋へ差し出すように改めた。盲人の廻在禁止後は官途銀として五貫目、ならびに検校方失脚入用銀として二百目、計五貫二百目を諸郡の高に応じて取り立て、それを毎年十一月中に検校に交付し、同人より藩内の盲人に分配させた。官途銀は、盲人が京都へ官位を受けに行くときの費用にも使われた。盲人には、広島土手町に検校屋敷が、また各郡元には郡中座法と称する組織があり、強力に団結していた。郡中座法では「御家運の御繁栄万々歳」と称して郡中の各戸から、富にに応じて祝儀を徴した。（広農・白木・理勢志・横山・本郷町史）↓検校・居扶持米・盲人居扶持札

かんな 鉄穴 ↓かなら

がんにな 願人 *請願する人。訴願書に署名した人・祈願する人。*願人坊主の略。願人坊主とは、人に代わって願かけなどをして金を乞う者をいう。（国大）なお、願人坊主は京都鞍馬寺の大蔵院・勝泉院（元禄年間に円光院に交代）を本寺とする乞食僧で、近世では江戸・大坂・駿府の町方にみられ、共同組織を形成した。組織末端の願人や弟子たちは、路上で経を唱え踊りなどを演じ、施しを乞い生計をたて、上位の者への金銭上納も行った。（日広）

かんぬき 関貫 家中屋敷と町屋敷との境界に設けられた木戸をいい、町方が管理し、町人が家中屋敷に自由に出入りできないように、居住地の区分を明確にした。（県二）

かんのうがた 勸農方 ↓賞罰方

かんぶつえ 灌仏会 釈迦の降誕日の陰暦四月八日に、その像に甘茶を注ぐ仏事。種々の花で飾った小堂を作り、水盤に釈迦の銅像（誕生仏）を安置し、甘茶をたたえ、参詣者に小柄杓で釈迦像の頭上に注がせる。参詣者は甘茶を持ち帰って飲む。記録上は承和七年（八四〇）に始まる。（広辞）

かんまい 欠米 年貢米等の輸送の途中で生ずる欠損米を補充するため、あらかじめ徴収する付加米をいう。また、沼田郡相田村では、間欠米といわれていたようである。（広農・横山）

かんまい 間米 意味不詳であるが、免割から免割の間に徴収する米の意で、貫の一種ではないかと思われる。（広農）↓貫

き

きえんれい 棄捐令 旗本・御家人救済のため、寛政元年（一七八九）九月に出した法令で、天明四年（一七八四）以前の債権は無条件に破棄（棄捐）し、天明五年以降の債権については、一八％であった年利を六％にさげて年賦償還。寛政元年夏以降の債権は一二％にした。なお、猿屋町貸金会所を新設し、打撃を受けた札差に対しては、無利息または低利の公金貸し下げを行い、札差の金融を統制した。（日広）

きじあみふだうんじよう 雉子網札運上 雉子網の鑑札に對

する税で、一枚について銀四匁を課し、六月・九月に半額ずつ上納した。(芸志)

きじぎん 雉子銀 小物成銀の一種で、雉子一羽につき銀一匁五分を課した。(芸志)

きじてつぽうふだうんじよう 雉子鉄砲札運上 元和六年(一六二〇)に制定された猟銃の鑑札に對する税で、一挺につき五匁を課し、六月・九月に半額ずつ上納した。(芸志)

ぎぜつ 義絶 ↓久離

ぎそう 義倉 豪農等からの義援によつて創設された倉で、凶作や災害等により、一般大衆が飢饉に襲われた際に、貯穀を放出してこれを救済した。但し、広島藩では創設されていない。(不動の月)

きぬざ 絹座 明和六年(一七六九)に広島町白神一丁目に設けた藩の機関で、蚕糸の買付・機業の生産指導・絹をはじめ、一切の呉服物類の商品統制に当たった。天保十四年(一八四三)には絹座に木綿改所を併置し、他国移出の布木綿をすべて検査した。なお、安政三年(一八五〇)に、絹座は綿座役所内に移転した。(県二・新三)

きのえねまち 甲子待 「まち」は祭りの意。甲子の日、子の刻(午後十一時から午前一時)まで起きていて、商売繁盛などを願つて大黒天をまつることをいい、大豆・黒豆・二股大根を縁起物として供え、特に正月初甲子は盛大に祭った。(国大)

きもいり 肝煎 *集団組織の中で、あれこれ世話をすること、

また、その人をいう。近世においては、庄屋・名主などの村役人・年寄役・大庄屋などの代称として、また商人や職人の組合では、組員から選出された世話人などの別称としても用いられた。(郷土) *広島藩では、町年寄から雇われ給料(文政二年廿日市では三二匁を支給している)を得て、その町の事務に専念するものをも肝煎と称した。(新二)

きゆうじようや 給庄屋 給知におかれた庄屋で、与庄屋・給与頭ともいい、給人が・給知百姓の中から、筆頭の高持で人格のすぐれている者(江戸中期以降は割庄屋や庄屋が推薦した者)を任命した。給庄屋は給主の年貢米を取り立て納入するのが職務で、給米はだいたい高百石につき米三斗であった。なお、給庄屋の数は一定せず、村内に給人が少ない場合には庄屋・組頭等が兼ねたようであり、また、一人で数組の給庄屋を兼ねる者もいた。(県一)

きゆうにん 給人 給主。知行地(給知)を与えられた藩士(百石以上)をいう。給人は支配下の給知について、年貢を徴収する等の権限を有していたが、知行地を荒廃させないこと、給知百姓の公事出入りに干渉しないこと、勝手に百姓を召し使わないこと、灌漑用の諸費を負担する等の義務が課せられていた。なお、給人が徴する年貢米が給知高の「三ツ」にも達しない時は、藩から「足シ米」を与えられることになっていた。明治二年(一八六九)沼田郡緑井村の給人は二四人いた。(県一・芸志・広寛・高岡家文書)

きゆうにんほう 給人法 給人がその知行地に布達した法令を

いい、知行地割替のたびに、新知行地に布達するのを原則とした。給人法には、年貢その他の諸算用を明確にすること、耕作に精を出すことなど藩法と同趣旨のもの外、餅米・社米・門松料、さらには諸祝儀などにいたるまで成文化されていた。ちなみに、これらは同一村内の明知方には見られず、知行地百姓としてのみの負担規定であった。(県二)

きゆううち 給知 藩主から百石以上の藩士に与えられた知行地をいう。家老の給知は一村丸かかえが多く、家老以外の藩士は一村に複数の給人をつけ(例えば慶応二年沼田郡上安村では、持高六二〇石五斗九升八合に対し十人の給人)、小身の藩士の給知は多くの村に分散した。年貢米は給人の元へ納入した。なお、給知割は、家老給知は元和五年(一六一九)より、他の侍士は元和六年から実施された。以後割替は寛永十一年(一六三四)・寛永十六年(一六三九)・慶安二年(一六四九)・元禄十三年(一七〇〇)・宝永七年(一七二〇)・文政三年(一八二〇)・天保九年(一八三八)に行われていることがわかつている。給知は延宝三年(一六七五)から元禄十一年(一六九八)まで代官支配地になり、給主は藩から禄を受けていたが、元禄十二年給知村の代官支配をやめ、知行所戻しが行われた。さらに、享保十八、九年(一七三三、四)、宝暦四年(一七五四)から同六年まで、それぞれ全知行地が召し上げられ、藩の直接支配(代官の支配)が行われたが、それ以外はこの制が採用され、版籍奉還まで続いた。(県一・横山・顕妙公済美録・刺語)

ぎゆうばきとうにゆうよう 牛馬祈禱入用 宝暦十二年(一七六二)に次のように定めている。高百石より四百石の村迄は七

匁、高四百十石より七百石の村迄は八匁、高七百十石より千石の村迄は九匁。但し、千石以上の村々は百石に付三分ずつ増。(宝暦十二年沼田安芸郡割免割方相しらべ書写)↓日和中

きゆうやく 給役 給人から任命された給庄屋・給組頭をいう。給役は年貢米の取立・納入が任務で、村政には全く関与しなかった。給役は年三度(正月の年頭祝儀・九月蔵付祝儀——最初の貢納米を蔵付という——暮の勘定祝儀)白米五升前後(幕末頃には鳥目二百文位)を、広島の給人宅に持参して挨拶をした。そのほか、臨時の祝儀として給人の江戸出足・屋敷替などに祝儀米五升ぐらいを持参したようである。なお、給役人は、文政期以前は給人が割庄屋・庄屋に推薦を依頼して任命(拒否もあった)していたが、以後は給人が推薦方を代官(又は番組)に依頼し、更に代官から庄屋に依頼して推薦させ、任命していたようである。なお、給人が独自に給庄屋を選し、任命することは少なかった。(白木・横山・可部町史)

きゆうり 久離 江戸時代に発生した語例であり、すでに欠落をしている者に対して縁を切ることをいう。久離にされた者は永久に生在所から追放となった。久離は目下の者にだけしかなされず、目上の親族に対しては禁止されていた。しかし、同等の親族に対しては久離ができ、この場合は特に義絶といわれた。士分の久離も義絶という。(郷土)

きようぎん 京銀 近世前期、京都の本店・両替屋・金貸しなどから、借り出した営業資金をいう。(単位)

ぎようじこう 行司講 旧賀茂郡仁方村(現呉市)や近村の村で

は、座頭仲間の内六・七人が四季折々に寄り合い、「御国恩祭行司講不浄の人御断」と表札を出し、大般若心経を誦し、武運長久・国家安全・五穀成就・災難がないように祈念したという。(呉市史)

きようとほんてい 京都藩邸 広島藩の京都藩邸は、はじめ五

条松原通りにあった。それ以前は不明であるが、寛永六年(一六二九)五二貫六〇匁六分で総面積一一六五坪(京間坪数)の屋敷・建物などを買上げ、藩邸に使用した。その後、享保十三年(一七二八)には、この五条松原通りの屋敷と東洞院通りの平野屋五兵衛掛持屋敷を交換して新しい藩邸とし、以後明治にいたるまで存続した。なお、京都藩邸には納所奉行がおかれ、江戸・国元で用いる納戸用品の調達に大きな役割を果たした。(県二)

きようとやくにん 京都役人 京都の藩邸に定勤する者の支配

役をいう。朝廷・所司代との折衝が主な任務。その他、伏見屋敷番とともに、呉服物等の仕入・京銀の起債及び処理に当ることも多く、その他目付役も兼ねた。(新二)

きようほうぎん 享保銀 ↓新銀

きようます 京枅 京升・京番・京判ともいう。秀吉が検地を

行い、石高を統一算定するに定めた枅をいう。京都で布令したので、この名があり、いままでの一升枅より二合多く入った。つまり、当時一般に通用の一升枅は、いまの八合ほどになっていたと見られる。ちなみに京枅は方四寸九分・深さ二寸七分の大きさであった。(単位)↓つるはん

ぎよきこう 御忌講 浄土宗開祖法然坊源空の忌日(二月二十五

日)に、寺へ参詣する講をいう。陰暦一月(現在は四月十九)二十五日に、本山の知恩院以下の浄土宗・浄土宗西山派の諸寺院では、法会を行っている。(日広)

きりがね 切金 *借金返済法の一つで定期に分割して払うこ

と、また、その分割額をいう。 *金箔を細く切ったものをいう。(広辞)

きりがみ 切紙 ↓折紙

きりせぶ 切畝歩 *一筆の土地を切り売りすることをいう。

その場合に、売価を高くするため壺畝分の面積を実際より広くし、売人の手元に残した畝でかせぐという慣行があった。広島藩では寛保二年(一七四二)に郡中法度でこれを戒め、以後もその趣旨をたびたび布達している。(県二) *例えば、水帳に壺反歩と記している田地を、五畝歩か三畝歩地主方に残し、其余の地面を質入れることを切畝歩といい、これは禁止されていた、もし犯した者があれば「残地」同様に罰せられた。(地方) ↓残地

きりそえ 切添 個々の農民たちが、農耕の余暇をさいて自分

の田畑の周囲にある小規模の未耕地などを開発することを行う。(日用)

きりちん 切賃 金銀貨を銭に切り替える手数料をいい、また、

物を切った賃金をいう。(広辞)

きりばた 切畑 切替・切替畑ともいう。数年ごとに山野を畑

にかえて地力ある間は耕作し、なくなると放置して、他の場所

に移り、数年して元の場所に帰り、これを繰り返す形式の畑作をいう。切畑にはふつう高はつけなかった。(郷土) ちなみに元和三年(一六一七)福島氏は切畑の竿入をしているので、この頃から切畑の一部が本計(本途)に入れられたと考えられる。(広農)

きりまい 切米 *蔵米ともいい、知行地を持たない中・下級武士に与えられた俸禄米をいう。広島藩では百石未満の侍士に対し、勘定所の発行する差紙によって、藩の蔵米を現物で、春

(二月十五日)・夏(七月一日)・暮(十一月十五日)・但し旅請の者は十一月(一日)の三度に分けて支給した。但し春・夏分は貸米と称した。渡し方については、例えば六〇石の切米取で在国の者へは、春貸米は七石・夏貸米は四石・暮切米は四九石、また、他国に勤務する者へは、春貸米は八石・夏貸米は四石・暮切米は四八石であった。(新二・広寛) *幕府の場合は、旗本・御家人に対して、浅草御蔵から支給した。はじめは一度に支給していたが、やがて夏・冬の二回支給になり、享保八年(一七二三)以降は、二月に四分の一の春借米・五月に四分の一の夏借米・十月に四分の二の冬切米の、年三回の支給になった。(日広)

きります 切枡 小枡。庄屋給など、村入用の米を量る枡をいい、また小枡ともいう。これで量った米を「斗(計)切り米」といい、高田郡三田村では、切枡の一石六升は蔵枡では一石に見なされた(六升は込米とされた)。但し、時代により異なり、例えば文化十三年(一八一六)には、切枡の一石七升五合が蔵枡一石に見なされた。(広農)↓蔵枡

きりめん 切免 特定の悪所(田畑)に対して免を「一つ成」(一割)減免することという。減免分は村で償った。切免が認められたのは江戸初期が多かった。それは藩政が不安定の時期であったからである。財政難の後期には切免の認可は困難になった。

なお、切免所には郡割が免除される所もあった。(広農)↓概免

きりもち 切餅 江戸時代、一分銀百個、すなわち二五両を方形に紙に包んで封じたものをいう。(形が切餅に似ていたからいう。)(広辞)

きりもの 切者 きれもの。切人ともいう。主君に気に入られて権勢をふるう人・手腕のある人という。(広辞)

ぎんか 銀貨 銀貨には丁銀(ナマコ形の長楕円形・重さ約四三匁前後)と、小玉銀(豆板銀ともいい、円形・指頭大・重さ約四匁三分前後)の二種があり、ともに秤量貨幣で、通用の際は秤にかけるか、前もって一定量目にして受け渡しを行った。秤量単位(銀目)は貫(千匁)・匁(十分)・分(十厘)・厘(十毛)であった。なお、銀一両とは銀四匁三分、銀一枚とは銀四三匁(銀十両で、銀一包は銀五百目で、これを二十包入れたものを銀一箱といい、主に上方で用いられた。丁銀の表面には大黒の像・常是の字・宝の字の三種の極印があり、また、小玉銀にもこれらの極印の一部が表されている。(単位)

ぎんかけはんちん 銀掛判賃 大坂において諸藩の蔵物の売却代銀を収納保管し、その藩の必要に応じて、出納・送金に当たった町人を銀掛(銀掛屋の略称)といい、諸藩は、銀掛屋が所有している自藩の銀子の善悪を吟味させ、包にして銀相場の印判

を押させた。藩はこれに対して判賃（銀掛判賃という）と包賃とを支払った。なお、銀掛屋は藩札の札元も引き受け、藩はそれに必要な費用を負担した。鴻池善右衛門は、広島藩その他四藩の銀掛屋をつとめていた。ちなみに、広島藩は鴻池善右衛門に對し、宝永四年（一七〇七）には、大坂売米口銭として新銀二分と、掛屋料として銀五〇枚を与えている。（頼妙公済美録）

ぎんかた 銀方 ↓賞罰方

ぎんさつあずかりきつて 銀札預り切手 嘉永元年（一八四八）

正月、広島藩は改印札（弘化札、最初の発行は弘化四年（一八四七）を発行し、旧札（明和札）との引替えの両替屋を、城下の豊島屋円助（白神組一丁目）・大原屋才次（銀山町）の二人に命じ、のち平野屋儀右衛門（播磨屋町）・加藤忠左衛門（細工町）ら数名を加えて改印札の通用を促進するとともに、豊島屋・平野屋には「銀札預り切手」の発行を許した。しかし、この切手の発行は、藩札価の下落を側面から助長する結果になった。（県二）

きんじゆうがしら 近習頭 宝永六年（一七〇九）の職制改革に

よって置かれた役職で、後には用人と改称された。藩主に直属して機密にあずかり、いわば年寄見習ともいえる位置にあった。（県一）

ぎんばこ 銀箱 ↓丁銀包

きんばんしよ 勤番所 広島藩は文久三年（一八六三）一月の郡政改革として、従来の十六郡を統合して九局（安芸五・備後四）にし、各郡の郡役所（郡元御用所）には代官一人、手附二〜三人を派遣して郡政を司り、代官勤番制を採用して「代官勤番所」を

佐伯郡玖島村・山県郡戸谷村・高田郡吉田町・賀茂郡四日市・豊田郡本郷村・御調郡市村・世羅郡西上原村・奴可郡西城町・三次郡畑敷村に置いた。なお、同年七月には「郡廻り」や代官・歩行目付の受郡制を廃し、翌年元治元年（一八六四）には三次郡上里村・恵蘇郡比和村に勤番所を置いた。（県二）

ぎんぶ 銀歩 歩銀ともいい、両替屋や商人等が金銀貨と藩札

との両替をする場合の、両替歩合（手数料に相当）を銀歩という。広島藩では文政九年（一八二六）に、両替屋は高直の銀歩で取引をしてはならない、両替屋以外の者が高銀歩で売買してはならない、という触を出し、また、両替歩合（銀歩）等を次のように定めている。すなわち、金銀貨の場合は払金払札・払銀払札とも一割二分を、また、改歩（金銀貨の鑑定料と思われる）を金貨は両に付一分六厘一毛、銀貨は百目に付二分五厘を、それぞれ両替屋に納入すること。（県史近世資料編）

ぎんぶぎょう 銀奉行 銀奉行は勘定奉行の支配下にあり、知

行取の侍士をあて、広島城下の藩の銀蔵の出納責任者であった。（新二）

ぎんみかた 吟味方 御勘定支配五名で組織され、郡方御用屋

敷での吟味を司り、特に受持の郡はなく全体を担当した。なお、出張しての吟味も行った。↓賞罰方

ぎんみもの 吟味物 いわゆる刑事事件で藩の主導で開始され、

百姓の喧嘩口論から百姓一揆・盗賊・傷害・殺人などが、吟味物として扱われた。すでに被害者が特定され逮捕され、白状の強要により判決を下した。一般には重刑が課せられ、縁坐や連

坐に処せられることが多かった。なお、実際の裁判については、行政機関と司法機関とは分化しておらず、広島藩では家中は家老、百姓の出入りは郡奉行扱いと一応決まっており、侍や給人の関与は禁じられていた。家老や郡奉行で解決できないことは、藩主の直裁判も行われるようになっていた。(県一)



くぎじかじ 釘地鍛冶 小規模の鍛冶をいい、水役鍛冶ともい

う。長割鍛冶で生産した鉄が、農具等の材料を目的としたものではなかったので、農民の嘆願により、享保四年(一七一九)奴可郡に民営の釘地鍛冶が許可された。製品は釘の下地を主にづくり、その他、農具・包丁・大工道具などの地鉄をつくった。

(県一)

くさてせん 草手銭 ↓村々入会

くさやま 草山 稗などの採取を目的とした場所(山)をいう。多くの場合近接の数ヶ村共有の入会地として存在した。藩によっては草場・草刈場・肥草山などと呼称した。(日用)

くじそしょう 公事訴訟 近世の裁判には、吟味物(刑事事件)

と出入物(民事事件)とがあり、公事訴訟とは、一般に出入物を称した。公事訴訟は原告が目安訴状を提出することから、或いは一方の提訴により始まる。訴状提出の経路は、郡方個人では百姓——五人組——組頭——庄屋——割庄屋——代官、村方相互間の争論は、村役人——割庄屋——代官であり、越訴は禁じ

られていた。しかし、村役人が訴状を握りつぶすことがあれば、郡廻りや代官への直訴が認められていた。(県一)

くじでいり 公事出入 ↓公事訴訟

くじとりせい 鬩取制 広島藩は給人に対して、くじ引きで知行地(給知)を与えた。こうした制度を鬩取制という。くじ取り

のしくみは、まず、給人に知行判物が下されると同時に、各村々へは給人名とその知行地高が代官から通達される。村方はそれを受けて、村内をいくつかの石組に分けた鬩帳(札)を作成して郡役所に提出する。鬩帳(札)は一冊ごとに田畑の善悪・百姓数・牛馬数など公平に組合せ、これは例えば、七〇石組・三〇石組・一石以下(添札という・但し一石未満でも石札という例あり)のように数十冊を用意する。ついで代官から各給人に対して、くじ取りの日時を案内し、代官立ち会いの上で鬩帳(札)についでくじを引かせる。そして合計がその村の知行地高となるように数冊の帳面を引くと、そこに記載された百姓が知行地百姓となり、その持高の合計が知行地高(給知)となる。文化十三年(一八一六)沼田郡相田村では、満田九郎右衛門が新たに相田村に給知(二五石八斗三升)を給されたことにより、鬩札(三石札十三枚・一石札二枚・八斗五升三合の添札一枚・八升三合の添札一枚)をつくり、代官宛に差し出している。(県一・横山)

くじやど 公事宿 百姓宿・江戸宿・郷宿ともいう。江戸時代、

公事人(訴人)を止宿させ、謝礼を受けて、ひそかに訴訟当事者のため、斡旋することを業とした宿をいう。(日用)

くすりこめ 葉込 幕府の職名。元来は銃に玉葉をつめこむ役

であったが、後には広敷用人に属して女中の警固を担当した。また、時に応じては密命を奉じて諸国の探索を行う隠密でもあった。(江戸城御庭番)

ぐそくひらき 具足開き 具足始ともいう。武家の正月行事の一つで、武具甲冑を飾り、鏡餅を供え、祝賀の儀を行った後、

鏡餅を欠き割って参列者に配布した。徳川家は正月二十日を祝いの日としたが、家光の忌日が二十日のため、承応元年(一六五二)からは期日を十一日とし、諸家もこれにならった。(日広)

くだされまい 被下米 ↓足子引高・御仕向米

くちあいにん 口会人 盗賊を首領に紹介して世話をもらう稼業人という。また、仲介に立つ人すなわち仲人をもいう。

くちえい 口永 ↓口米

くちがき 口書 こうしよ。足輕以下・百姓・町人の裁判、その他訴訟取り調べの際に、双方の主張並びに取り調べに対するその返答や自白を、その申し立て通りに書き留め、当事者にその通りですと爪印を押させた調書をいう。裁判ではこれに基づいて判決を申し渡した。なお、武家・僧侶・神官以上は、これを口上書という。(古用)

くちすぎ 口過 毎日の食物を得ること。転じて暮らしを立てること。(国大)

くちぶね 口船 江戸時代、長崎に入港する清国の貿易船のうち、寧波や南京からくる船をいう。これに対して、比較的遠方からくる船を「奥船」という。(日用)

くちまい 口米 付加米の一種で、代官所の経費に当てるとい

う名目で、物成に付加するものをいう。広島藩では物成の二%を口米として徴収した。なお、金納の本租に付加するもの、つまり貨幣で納入するものを口永という。(県一・日用)

くちや 口屋 口屋とは、勘定奉行の支配を受け、侍士を口屋番としてこれにあて、林産物・その他物資の流通や十歩一運上

銀・口屋運上銀の徴収等に当たった機関をいい、元和五年(一六一九)浅野氏が、可部口・廿日市・深川・玖波・友田などに材木留奉行を置いて、材木の搬出を取り締ったのが口屋の起りといわれている。寛永五年(一六二八)廿日市・古江を最初として、明暦ごろまでに、つぎつぎと口屋ないしは十歩一所を設置した。すなわち、佐伯郡には廿日市・古江のほか三ヶ所に口屋を大野村ほか十ヶ所に十歩一所を、賀茂郡には竹原下市村と竹原沖口に十歩一所を、豊田郡には木浜に口屋と田野浦と沖に十歩一所を、御調郡には向島に口屋を、安芸郡には矢野村ほか四ヶ所に十歩一所を設けた。口屋ないし十歩一所は、郡中からの薪炭・木地等の林産物に、口屋運上銀や十歩一運上銀を課した。例えば、古江口屋では、割木(一尺廻百把)に一分五厘、黒炭・鍛冶炭(四貫目入一俵)に五厘の口屋運上銀を課し、廿日市口屋では、葛籠草(一駄)に一匁、漆実(一駄)に三匁の口屋運上銀を、佐伯・山県・石州の薪炭その他山林荷に対し、十歩一運上銀を課した。(県一)↓十歩一運上

くみがしら 組頭 与頭。庄屋の補佐役で「郡廻り」と代官の詮議によって村内の家柄・財産を有する者から任命され、与頭とも書く。組頭は、元来、蔵入・明知の役人で、定員も村高によつて定まり、年貢米の取収に当たるだけであったが、延宝四

年（二六七六）から元禄初年にかけて、次第に庄屋の事務全般を補佐するようになった。人員は、一町村を数区に分け、大村は五〜六名、小村は一名であった。（村高一五〇石以下は置かないのが例）。組頭の給米は宝永元年（一七〇四）の定めでは、村高に關係なく一様に一人につき米一石五斗とされていた。但し、明知混在のときは明知方が負担したが、宝暦頃からは八厘給または九厘給という制が始まり、組頭が扱う定物成百石につき八斗または九斗を給した。但し、各村一様ではなかった。なお、組頭は自身で筆遣いする格で、庄屋の如く年中書き物をする役ではないので、筆者は付属していなかった。また、「小走り」は使えなかった。（芸志・白木・剩統）

くみがしらひきだか 組頭引高 ↓役人引高

くもんわび 公問佗 公問とは「公文」の意で庄屋を指す。つまり庄屋に侘びる意。犯罪者を代官に訴えないで、僧侶や年寄などが罪を評定して、庄屋に進言し、庄屋がそれによって、罪の処分を決めることをいう。延宝三年（一六七五）、高田郡三田村の百姓太郎兵衛・三右衛門（兩人とも仮名）の兄弟は、未進と借財に苦しみ、郷蔵の米二石余を盗んだ。村では代官に報告せず、村内両寺の住職及び村の年寄が公問佗を行い、兩人が村から自発的に立ち去り、村に帰ってこないことを誓約させるとともに、未進・借財及び盗んだ米は、家屋及び麦の立毛等を処分して、年寄が整理するという二条件で、村限りで処理している。

（広農）

くらいさがり 位下り ↓掛下げ

くらいりち 蔵入地 藩の直轄地をいう。年貢は藩庫に納められ、領内の主要地域が充てられて、知行地になることはなかった。（県一）

くらしたねんぐ 蔵下年貢 村共有の郷倉等の、敷地に対して賦課されていた年貢米をいい、村闔で負担した。但し、社倉蔵の場合は刺麦より納入した。なお、藩営の船蔵や木蔵等に敷地を提供した場合には、その敷地に賦課されていた年貢米は、免除された。ちなみに、社倉蔵の設置に当たっては、その趣旨が備荒救済であるため、多くの場合、敷地は庄屋が提供し、建築資材等は村内の篤志家が提供した。しかし、庄屋や篤志家への謝礼的なものは、一切なかった。（天保十二年上原村文書・横山）

↓刺麦

くらつきおしゆうぎまい 蔵付御祝儀米 ↓給役

くらばらい 蔵払 年貢米を藩の御蔵所へ納入することをいう。蔵払は村毎に行ったが、それは「米入」の任務で、庄屋や組頭が村の蔵払状況を視察のため、勝手に広島への出張は禁止されていて、代官が命令した数人の庄屋が、郡を代表して広島出張した。（白木）

くらばらいかんじょうもくろく 蔵払勘定目録 ↓中勘定

くらばんきゆう 蔵番給 宝永元年（一七〇四）には、蔵入・明知に対して次のように定めている。「村に寄、御年貢蔵番給米有之、自今以後無用ニ可仕候、廻り廻り相勘可申、尤高割ニ可仕事、但給知之分者可差除事」。（広農）その後、宝暦十二年（一七六二）には、蔵入・明知の蔵について、次のように定めている

る。すなわち、蔵番は百姓が代わるがわる勤めること、沼田郡割庄屋共は給銀七〇目宛・安芸郡割庄屋共は九〇目宛、それぞれ郡割で請け取っているが、今後とも続けること。(宝暦十二年沼田安芸郡割免割方相しらべ書写)

くらまい 蔵米 ↓切米

くらます 蔵枅 御米蔵に納入する米を量る枅をいい、これで量った米を蔵米という。蔵枅で量った米一石は、高田郡三田村の切枅では一石六升になっていたが、六升は込米として百姓が承知していた。なお、廃藩により蔵枅は廃された。(広農・剰語)

くらもと 蔵元 江戸時代、大坂・大津・酒田などにおかれた藩の蔵屋敷に於いて、蔵物の出納を掌るものをいう。はじめは、諸藩より派遣された蔵役人がこれにあたったが、寛文二六六一〜七三以後は町人がこれにあたった。この町人蔵元は掛屋を兼帯する場合も多く、いずれもこの時代の大町人で、大名より扶持米を受け、また苗字帯刀を許され、掛屋とともに非常に優遇された。(郷土)↓掛屋

くらもの 蔵物 江戸時代、蔵屋敷に幕府・大名・旗本が回送した年貢米、およびその他の国産品の総称をいう。(日用)

くらやど 蔵宿 家中の中には、押証文の手続による借銀のほか、高利の町借に苦しんだ者も多く、最も広く行われたのは蔵宿(家中の士卒が知行米・切米などの余剰を売却する便宜上、あらかじめ指定した城下の米穀問屋をいい、禄米の受取や売払いを扱っていた)から禄米を抵当として借銀することであった。しかし経済が逼迫してくると、蔵宿は受け取るべき禄米を抵当として、金

銀を融通することを一般に行った。これは押証文によるものが藩府の統制下にあったのとは違って、全く相對の貸借、しかも禄米を抵当にするので、確実な金融として盛んに行われ、家中の中には、数年分の禄米を蔵宿の借財に押えられて、生活の破綻を来す者も少なくなかった。(新三)

くりぎん 栗銀 小物成銀の一種で、一斗の栗に対して銀一匁を課した。(芸志)

くりやかぶ 繰屋株 綿は安芸・佐伯郡で主に栽培され、実綿のまま取り引きされたり、また、農家や町家の家内工業として繰綿に加工され、さらに、布木綿に織られて売買された。この場合、繰綿への加工は株仲間によって行われたらしく、その株仲間を繰屋株と称したのではないかと思われる。(横山・県二くりわたじつめんうんじょう 繰綿実綿運上 元禄十年(二六

九七)より広島町から他国へ積み出す繰綿・実綿に対しては運上銀を課した。(広寛)

くるまがし 車貸し 十石の米を、作徳米のある田を担保として借り、年四石ずつ五年間均等に元利償還する制度をいい、年々の償還米を車米という。この制度には未詳の点が多いが、貸付は一对一ではなく、貸米を小口に分けて数人で借り、互いに確実な担保であることを認め合い、償還期に車米を集めて、一口で返済するというものである。この制度は、借りる者には少ない担保で多額の米を借りる便宜があり、貸す者には良田を担保にすることができ、また、土地を所有するのと異なり、年貢・御役目の心配がなく、確実に作得米を得る便宜があった。な

お、この制度は元禄頃盛んに行われたらしい。(広農)

くろくせん 九六銭 省銭・省百・九六百ともいい、江戸時代に、銭九六文を「さし」に通してまとめ、百文として通用させた。これを九六銭といい、明治五年(一八七二)に通用を禁止した。(目用)

くろくわ 黒鋤 戦国時代には、築城・道普請などの作業に従事した人夫をいい、江戸時代には、江戸城の警備・作業・防火に当たった者をいう。しかし、後には城内の掃除や荷物の運搬などに従事し、黒鋤頭・黒鋤同心が置かれた。(広辞)

くろずみうんじようぎん 黒炭運上銀 鋳物師が使用する黒炭に課す税で、「一かま」につき銀四十匁を課した。(白木)

くわさきしんがい 鋤先新開 地続きの隣村の空地を開発した時には、その新開を鋤先新開といい、鋤先見取米と称して年貢を課した。安政六年(一八五九)沼田郡相田村の「年貢米人別取立算用帳」を見ると、相田村では取り立てた鋤先見取米は隣村へ送り、隣村の見取米として上納していたようである。なお、「鋤下新開」は「鋤先新開」と同義語ではないかと思われる。

(美多・剰語)

くわしたしんがい 鋤下新開 ↓鋤先新開

くわしたねんき 鋤下年季 新開が造成されると、はじめ数年(四、五年)間は鋤下年季として年貢・諸役が免除された。こうした年季が済むと、およそ十年間は見取米(鋤下年季見取米)が、年々の収穫に対して年貢として賦課された。そして耕地の状態が安定したと認められると、地詰が実施されて石高が確定し、

高付地となった。(県二) ↓見取米・見取免

ぐんかく 郡格 村格。藩政時代には、郡や村にはそれぞれ格(法律・規則)があり、これを郡格・村格といい、一度制定されると特別のことがない限り、変更されることはなかった。

ぐんがたぎんみやしき 郡方吟味屋敷 宝暦九年(一七五九)に、郡方の公事吟味のために広島に置かれたもので、代官が当事者をこの屋敷に召喚し、「郡廻り」を目付役として立ち会わせ、直接に吟味した。但し、郡中村々で捕えた盗賊で、郡方に懸り合のないものは、町奉行所へひき出していたが、文化十年(一八一三)十一月からは、郡方吟味屋敷へひき出して吟味した。郡方吟味屋敷では、代官の手におえない場合には、郡奉行が直接吟味した。なお、化政期以降は世情不穏により、広島城下に近い郡は、町方吟味屋敷で吟味することもあったようである。

(県一・横山)

ぐんがたしゅうだんとうしよ 郡方集談頭書 郡内の割庄屋たちが、郡用場(郡用所ともいう)に集まって、会合(集談)を行った結果を書き留めたものをいう。賀茂郡では幕末頃、定例的な会合が年三回ほどひらかれており、一回に付十日余りを費やしている。このほかにも臨時の会合が時折開かれていた。(文書館資料)

ぐんごようたししよ 郡御用達所 ↓代官制

ぐんごようやしき 郡御用屋敷 文化十一年(一八一四)に設けたもので、従来の各郡役所を統合した新庁舎をいい、十六郡を九局(安芸五、備後四)にした。「代官惣役所」または「惣郡務所」

とも称された。その後、文政十年（一八二七）八丁馬場の郡御用屋敷を廃し、各代官の役宅を復し、郡奉行以下の吏員は勘定所で執務することとなった。更に天保六年（一八三五）再び郡御用屋敷を設けた。（県二・広島市史）

ぐんざほう 郡座法 盲人が各郡につくった組織をいう。郡座

法（郡中座法）では郡中各戸の「御家運の御繁栄万々歳」を座法（仏徒などが座をくむ方式）にて祈念すると称して、妄りに各戸の富の程度を査定して、配当銀なるものを祝儀不祝儀ともに徴求した。一般の失明者が座法に加入するには、勝手に座頭の一人を師として、その紹介によって、定員に欠員を生じた際に仲間入りをした。（広村）

ぐんしはい 郡支配 正徳二年（一七二二）従来の郡村支配の根幹であった代官制を廃し、六人の「郡廻り」を「郡支配」と決め、各百石ずつ加増のうえ、格式を引き上げ、「郡奉行」の下に諸郡一円を支配させた。そのため城下に郡役所が設けられた。しかし享保一揆後に廃止され各郡本に代官所が置かれた。（県二）
↓正徳の新格

ぐんだい 郡代 *一〇万石以上の幕領（天領）を支配する役人を郡代と称し、五万石以上一〇万石未満の天領を支配する役人を代官という。江戸初期には甲州・摂津・河内・尼崎・三河・丹波など、ほぼ一国規模で支配する郡代が見られたが、中期以降は関東郡代（関東の幕領の支配の外・水系整備・治水・灌漑・検地を司る）、美濃郡代（美濃及び伊勢国桑名郡の幕領支配）・飛騨郡代（飛騨国及び周辺の幕領支配）・西国筋郡代（豊前・豊後・日向の幕領支

配）を置いた。職務は代官とほぼ同じで、代官は年貢徴収・法令伝達・戸口把握・訴訟の受理と審理等・場所によっては鉱山・山林の管理を行った。なお、郡代・代官は勘定奉行の管理下にあった。（徳川・日広） *広島藩では宝暦九年（一七五九）に郡奉行を郡代と改称したが、以後も郡奉行名は用いられた。↓郡奉行

ぐんたくわえぎん 郡貯銀 郡方では、各郡ごとに銭銀を積み立て、あるいは資金を抛出して郡貯銀（郡用銀ともいう）と称して、非常に備えることが試みられた。なお、これには藩府の貸下米などを基金として、これにあてた例もある。（新三）

ぐんたくわえまい 郡貯米 凶作の救恤用または郡普請入用のため、郡に貯えていた米で、藩庫に納めるものと異なつて、百姓に還元される性質のものであった。（広農）

ぐんちゅうざほう 郡中座法 ↓官途銀

ぐんちゅうふせいすじただしかた 郡中不正筋紮方 江戸末期に、郡中の博奕・盗賊・その他不正行為を取り締まるため、郡が藩の許可を得て自主的に設けた役で、人柄がよく敏腕家が選ばれた。なお、文政十年（一八二七）沼田郡では、この役に對して毎年銀二百目を支給した。さらに、出飯米については、郡全体に関するものは郡割で、一村に関するものは其村割でそれぞれ組頭並に支給し、他郡出は一日二升、他郡町方出は一日二升五合を郡より支給した。（横山）

ぐんながや 郡長屋 「正徳の新格」によつて、城下の鉄砲屋町に設置された所務役人・頭庄屋専用の宿泊所をいう。（県二）

↓所務役人・頭庄屋

ぐんぶわり 郡夫割 郡の諸普請に要する夫費は、郡内各村が負担した。これを郡夫割といい、社寺の修復・橋のかけ替・川掘り・洪水による損所の復旧費などにあてた。(白木)

ぐんまわり 郡廻り 郡廻りは、藩内を七区に分け、それぞれ二、三郡程度を担当し(時代により異なる)、郡奉行の下に属した。郡廻りは時々郡中を巡回して、代官以下の政務の監察・農作の検閲・林政の監督・宗旨の監督(文化六年以降は宗旨改役の兼任)・田畑租額の増減・土免の高下等の管理を掌った。なお、慶安二年(一六四九)郡廻奉行と改称され、民間では御免奉行とも呼ばれたことがあった。その後、正徳二年(一七一二)郡廻りの職名を改め「郡支配」としたが、享保三年(一七二八)郡廻りの職制に復した。なお、文久三年(一八六三)に郡廻りは廃され、その事務等は郡奉行が司ったが、元治元年(一八六四)郡廻りは再び置かれた。(新二・芸志)

ぐんめんわりかた 郡免割方 ↓賞罰方

ぐんもと 郡元 郡の府、つまり郡役所の所在地をいう。広島藩では祇園(沼田)・海田(安芸)・廿日市(佐伯)・可部(高宮)・吉田(高田)・三次(三次)・西城(奴可)・庄原(三上)・四日市(賀茂)・本郷(豊田)・甲山(世羅)・吉舎(三谿)・後地(御調、現尾道市長江町)・本郷(甲奴)・本地(山県)・宮内(恵蘇)にあった。ちなみに、享保三年(一七二八)郡元と広島の間、月六回(吉舎・甲山などの遠隔地は三回)の定期飛脚が設けられた。(理勢志・吉長公御代記)

ぐんやくしよ 郡役所 郡役所は正徳二年(一七二二)に農政の官庁として城内の郡奉行が執務する席に置かれたが、享保三年(一七二八)三月に生じた百姓一揆により城内の郡役所を廃し、各郡元に代官所を置いた。その後再び城内の郡奉行の執務する席内に郡役所が置かれた。郡役所は御用所とも言われ、大郡には独立郡役所(賀茂・豊田)を、小郡には二郡を合併(組合郡)して置き、所管する郡中の租税をはじめ、一切の事務を掌った。なお、郡役所には郡役所吟味役・歩行組等の属吏を置き郡制の事務を分掌させた。(白木・県二・吉長公御代記)

ぐんようぎん 郡用銀 ↓郡貯銀

ぐんようしよ 郡用所 広島藩では割庄屋に郡の事務を執らせするために、郡元(例えば高田郡の郡元は吉田町)に、割庄屋の溜場(執務所)として郡用所(沼田郡の郡用所は祇園町の古物屋利兵衛方)を設けた。なお、略して用所ともいう。(横山・続老)↓郡役所

ぐんわり 郡割 一村に限らず郡中一般に係る諸経費を村々へ、その高に応じて賦課することをいう。その諸経費には、幕吏の通行等で人馬賃金等の不足を補充する米銀、宿駅の茶屋・牢獄等の修理費、割庄屋以下村吏が公用出張の雑費等があった。郡割は郡方の役人、殊に割庄屋が扱った。ちなみに、高田郡では上記郡割費目のほか、宗旨奉行泊休賄銀・郡中盲人官途銀・異国人通行入用銀・国泰寺初尾銀・代官等の泊休賄銀・諸方飛脚償銀など、二五の郡割の費目があった。なお郡割と郡夫割とに分けていたが、後には郡割・盲人割・送り人馬割・出飯米割に分けた。(芸志・広農)

ぐんわりちようのさくせい 郡割帳の作成 郡割の決め方に

ついては、従来は割庄屋全員と、手伝人として殆んど全員の村庄屋とで決めていたが、宝暦十年（一七六〇）の定では、「自今は割庄屋二人と村庄屋の内二人が、郡割方の見届と手伝を兼ね、都合四人を年番で決めて郡割帳を作成し、年番外の割庄屋がそれを見届け、不審・相違がなければ、郡割帳へ連印するように」と改めた。その後宝暦十二年に「割庄屋の了見で作成せず藩の免許を受けて作成するように」と改められた。（広農・宝暦十二年沼田安芸郡割免割方相しらべ書写）

け

げいしゅうさんぶつつうようふだ 芸州産物通用札 天保末年にもなると、銀札の濫発により札価が下落して信用が失われていたので、弘化元年（一八四四）に木綿改所から新たに銭一〇文から金一両の「金銭之切手」を発行した。この金銭切手は「芸州産物通用札」といわれ、大坂置為替の為替銀に利用され、木綿改所はもとより、広島・尾道の札場、大坂蔵屋敷で正金と引き替えられたが、銀札の価値が日々変動するなかであって、正金銀と等価交換されるものであった。（県二）↓大坂置為替の制

・木綿改所

けきようせいど 化境制度 主として安芸国中・北部地方で用

いられた言葉で、同一真宗地域内の門徒、および信徒の集団である講・同行は、その地域内の寺院によって仏事を執行され、

教化を受けた。こうした制をいう。（県二）

げさくにん 下作人 地主から耕作権を預かって小作し、本年貢・作得分などを納入する者をいう。下作人はさらに小百姓に小作させる場合もあった。なお、納入義務を怠ると、耕作権没収やまた耕作権の売買もあった。（日用）

げしゆにん 下手人 百姓・町人に対する死刑をいい、殺人犯・殺人容疑者の逃亡の手引者等に科せられたが、死罪よりは軽く、死骸は晒物にはされなかった。また、自ら殺人を犯した者をも下手人という。下手人は「解死人」と書かれたこともある。（日用）

（日用）

けじようこうろく 毛上合力 年貢米の未進百姓がいる場合には、未進百姓の引当物を処分し、それでもなお年貢完納に不足する部分は、毛上合力といって、村中へ割賦して完納した。（県二）

げだい 下代 *広島藩では代官の配下にある職で、勘定所支配の物書役と足軽とをいう。享保以降は、専ら勘定組番組と称した。（白木） *江戸の公事宿に雇われた手代をいい、訴訟のために田舎から出て来た人の補佐人として、訴状・差紙・返答書の世話をはじめ法廷内の諸手続きほかの斡旋などをした。（日用） *江戸初期に、代官頭の下におかれた手代の別称をいう。（日用）

けつけ 毛付 田畑の作物を毛あるいは作毛といい、稲の植付を毛付あるいは毛上という。

けつけだか 毛付高 村高から、荒や川成などによる闌高を差し

引いた高をいう。(広農)

げにん 下人 一般には隸属民をいう。江戸時代においては譜代奉公人として主家に使役されていたが、中期以降は、年季奉公人化していった。(古用)

けみとりほう 検見取法 作柄の実状に応じて免を決める方法で、「秋免制」ともいう。この方法は、坪刈(一坪の稲を刈り、その収量を規準として全収量を算出する方法で、例えば坪六合の稲の収量があれば六合穂という)を行って収穫量を決定し、それによって免を決定した。この方法を検見取法という。しかし、坪刈には藩の役人が出張し、それに村役人も従うので、費用や時間がかかり、そのうえ収穫期になるまで免が決まらず、従って収穫ができないという欠点をもつが、余剰米収奪体制を定着させる仕組として、有効に用いられた。なお、この法が支配的に施行されたのは、元和元年(二六二五)から寛永九年(一六三二)の期間である。(県一・本郷町史)

けむりぎん 煙銀 煙銀はカマド役銀などと同じく一戸単位に課せられた家割の性格をもった賦課で、福島時代に始まり、領内一般に行われたものではなく、主として山間地方に限られていた。なお、煙銀は一般には「いろり銀」の呼称が用いられていた。(廿日)

けむりやくぎん 煙役銀 福島時代における小物成銀で、炭の生産に課せられた税をいう。(県一)

けんぎよう 検校 元来、寺院において、一山を監督する僧侶の名称であったが、鎌倉中期頃より、平家琵琶を語る法師の最

高官を検校というようになった。室町初期に、明石検校は総検校に任ぜられ、盲人の支配権が与えられ、且つ、盲人統一の職屋敷が京都に設けられ、四官十六階の盲人社会の職階制が設けられた。江戸時代、將軍綱吉の頃杉山検校を関東惣録に任じ、惣録屋敷を与え、関八州の豊旨を支配させた。以来検校の下に、別当・勾当・座頭の職階が設けられた。これらの職階は、京都の職屋敷・江戸の惣録屋敷で受験し、合格者は一定の上納金を納入し、京都の久我大納言家より、「何々検校(勾当)と可名乗者也」の免許証が下附された。なお、この制は明治四年に廃止された。ちなみに、検校は十検校(極老以下十人)で合議し、全盲人を支配した。(日用・郷土)

げんべい 花形独楽の一種で、八面の半分を白・赤に染めつけたもので、赤は負、白は勝ちとして、多人数が赤・白に分かれて勝負をした。ちなみに、花形独楽とは、厚紙で梅・桜・菊などの花の形を切り抜き、それに銀地・胡粉地を塗って着色し、中央の軸をつまんで廻すようにした独楽をいう。



こうえんしよ 口演書 藩や郡の役人が、村方等に対して指示・命令すべきことを、口述の形で渡したものをいう。なお、その内容を書き留めたものを「口演書」という。

こうぐら 郷蔵 近世、村内に設けられた一村共有の穀倉をいう。本来は年貢米の一時的な収納庫として造られたが、のちに

備荒貯蓄として農民によって創設され、非常救済の機能が中心になった。郷倉は通常は村役人宅に付置し管理された。(日用)

ごうけ 後家 田畑・屋敷は名請けしていても、現実に役目を果たす家父長がいないので、小家身分におかれた者をいう。(県一)
二) ↓ 小家

こうさくあらためぶぎょう 耕作改奉行 島原の乱後凶作が続いたので、郡中の実情を調査し、また、作食米や牛代銀を貸与して農村の撫育をはかるため、寛永十七年(一六四〇)臨時に設けた奉行をいう。(県一)

こうじやぎん 糶屋銀 広島藩府は、広島町方における家中の借銀について、寛保二年(一七四二)以降は相对貸借を禁止して、すべて勘定所貸銀方の統制下で行わせることとした。すなわち同年、広島 of 質商糶屋吉右衛門・胡屋市左衛門を勘定所用聞として、家中の押証文による借銀はすべて両名の扱いとし、糶屋銀・胡屋銀といわれたが、借り受けた者はあらかじめ貸銀方の許可を得なければならぬことにした。なお、糶屋・胡屋がいつごろまでこの用聞を勤めたかは明らかではない。(新三)

こうじようがき 口上書 *口上の次第を述べた文書をいう。

*江戸時代、裁判上における寺社関係者ならびに士分の口供を筆記したものをいう。(広辞) ↓ 口書

こうじようだい 口上代 口上の趣を認めて差し出す簡単な文書をいう。(広辞)

こうしんこう 庚申講 庚申待。庚申の日の夜に行う祭事。祭神として仏教では青面金剛・神道では猿田彦。本来は中国の

道教における人の体内に住む三尸虫^{さんしちゅう}が、庚申の夜に天に上って、その人の罪科を告げるという信仰から、その夜は潔斎して、三尸虫の昇天を阻むという行事が日本に伝わり、民俗的祭事となつて庚申講が組織され、講中の家を輪番に廻つて行い、終わると酒食が出て雑談を夜明けまで行つた。なお、庚申の日には「洗濯をしてはならない」・「肥料をまいてはいけない」などの物忌があつた。(日本故事物語)

こうぞおんうちがし 楮御内貸 楮御内貸銀。紙蔵は村(楮栽培人)に対し、楮苗を文化九年(一八一二)には有料で下げ渡していた。この場合に、藩は購入代銀の全部または一部を、村(楮栽培人)の願により前貸しをしていたようである。この代銀を楮御内貸(銀)というのではないかと思われる。なお、楮御内貸銀は当年中に貸与した。ちなみに楮の育成所は高宮郡深川村にあつたが、藩営か民営かについては不詳である。(横山)

こうぞなえ 楮苗 文化九年(一八一二)三月、村は楮苗の無償配布を藩に要求したが、聞き入れられなかった。その後藩は文政十二年(一八二九)に、楮苗と桐苗を無償で配布し、その植栽をすすめた。しかし、安政二年(一八五五)に楮苗について、村(栽培人)が半分負担するか、それとも全部自作するかの何れかについて、申し出るようにとの達を出している。なお、文政十二年(一八二九)楮苗・桐苗を無償で配布し、その植栽をすすめている。(倉橋島野村家文書・横山)

こうぞもときん 楮元銀 楮仕入銀。広島藩府は慶安・承応の頃から、楮栽培農民や紙漉農民に楮元銀(仕入銀)の前貸(御紙蔵

と庄屋の間で契約)を行い、積極的に増産をはかった。楮元銀前貸の額は、前年の皮楮の生産量を毎年同量と査定して、一定の割合で前貸をしたが、それは時代により村により異なっていた。例えば、安永十年(一七八二)高宮郡上原村では総皮楮生産量は二三貫目であったが、前年の皮楮生産量の二一貫六〇〇目に対してのみ、六貫目に付一〇目の割で、三四匁を前貸をしている。

また、文化九年(一八二二)沼田郡相田村の例では、総皮楮生産量は二一六貫五〇〇目であったが、前年の皮楮生産量二一三貫六〇〇目に対してのみ、六貫目に付一〇目の割で、三五六匁を貸しつけている。なお、皮楮の藩の買い上げは、総皮楮生産量より前貸し分の楮元銀に相当する皮楮分(返楮)は相殺し、残りの皮楮(過楮)についてのみ、一定の割合で買い上げた。このことを前掲の相田村の例で示すと、次の通りである。

(図表)

(総皮楮生産量)(楮元銀相当皮楮) (過皮楮)
216 貫500 匁 — 213 貫600 匁 = 2 貫900 匁

過楮については、五貫目に付一〇目の割で買い上げているので、次のようになる。

(過楮の買上価格)

10/5 匁×2 貫900 匁 = 5 匁8 分

ちなみに、前掲の上原村の過皮楮の買い上げは、六貫三〇〇目に付一〇目の割になっている。藩は相殺した皮楮や過楮は、すべて村毎に集荷させ、検査の上収納した。紙蔵に収納するものは官印を一帖ごとにまとめて押し、公用に供するものの外は、特定の紙商人(享保の頃は紙屋株)に払い下げ、紙の勝手な売買は

禁止した。ちなみに、文政期における紙渡人からの藩の買い上げ価格は、「一丸」につき並半紙は五四〜六四匁、上質紙は七〇〜九〇匁、塵紙は一五〜二〇匁であった。なお、藩は特定の百姓に楮苗を栽培させ、それを購入?して村(百姓)に下げ渡ししていた。しかし、後には購入代の半分を百姓に負担させている。

(県一・県二・横山・上原村覚書)↓丸

こうそんいちばしようにん 郷村市場商人 毛利氏時代に、農村の有力農民や土豪で、郷村市場で商業活動をしていた者という。(県一)

こうちよう 郷帳 幕府の直轄領において、代官が支配下各村からの本途物成・その他高掛物などの明細を、村毎に記した年貢徴収の基本帳簿をいう。代官はこの帳簿を勘定所に出し、その決済を得て、年々年貢の割付状を各村へ出した。(郷土)

こうのいけぎん 鴻池銀 ↓岩井屋銀

こうめつけ 郷目付 ↓惣山守

こうりかみや 小売紙屋 紙屋株から、紙の請売の看板を申し受け、紙の小売りをする者をいう。文化九年(一八二二)広島藩府は小売紙屋に対して「束売ハ不相成候事」「諸紙買請候節、望之通有合無之候へハ、株紙屋通し合候上、買受候事」「御紙蔵改役見廻り之節ハ、有合之紙速ニ差出シ、見分を受候事」などを決めた心得書を下達している。(横山)↓紙屋株

こうりよくまい 合力米 こうりきまい。*貧民を救済するための米をいう。また、江戸幕府が二条在番・大坂在番、二条・大坂・駿府の諸奉行に、俸禄・役禄の外に給した米をいう。た

たとえば、二条の蔵奉行は四〇石、鉄砲奉行は六〇石、大坂の金奉行・具足奉行・蔵奉行・鉄砲奉行は各八〇石等であった。(日用・日広) * 広島藩は、藩専売制による三次・恵蘇郡産の鉄類を、広島あるいは忠海から大坂へ運び、享保十年(一七二五)からは、同地の海部屋善次(商人)によって売り捌かせ、藩は海部屋に合力米一〇〇俵を給している。このことから合力米とは、自藩の侍士以外の商人等で、自藩にとつては重要な役割に關与している者に対する褒賞、あるいは手当として、与えられた米ではないかと思われる。ちなみに、宝永六年(一七〇九)には、鴻池善右衛門に対しても、合力米三〇〇俵を与えている。(県一・事蹟緒鑑)

こうろく 合力 自家労力の燃焼によつて成り立つ小農経営においては、田植え時などの労働力の不足は克服できず、農民相互の労働力の交換で作業を行った。このことを「合力」とか「ゆい」という。(県一)

こおりぶぎょう 郡奉行 浅野藩政では、領内十六郡に対する農政の総括者(但し勘定奉行の所管に係るものを除く)として、二名の郡奉行を置き、官庁を城内に設け郡役所と称した。宝永元年(一七〇四)には両名の支配郡を二分割した。郡奉行は用人役から選り兼務させ、郡廻りや代官の行政事務の統轄・郡方吟味役所における郡中犯罪人の吟味等にあたった。なお、郡奉行は宝暦九年(一七五九)郡代と改称された。しかし、『青枯集』の記事中に「郡奉行」名での「触」があるので、「郡奉行」名は以後も使用されていたと思われる。(県二・芸志・青枯集)

こかじずみうんじょうぎん 小鍛冶炭運上銀 農具の製作や修理に当たっている鍛冶(小鍛冶といい、細工場を構えている)が納める運上銀をいう。税額は炭十俵分とか十二俵分とか小額で、一俵分の運上は銀四分であった。なお、郡方の鍛冶には、小鍛冶炭運上銀を納める小鍛冶と、職人水役銀を納める鍛冶(二工一匁六分の作料で出向いて働く)とがあった。(白木・剩語)

こぎそ 扱芋 はぎ取った大麻の皮を扱ぎ、晒したものをいう。元禄十年(一六九七)、各郡から広島城下に移入売買される扱芋・荒芋に対しては、以後、運上銀を賦課した(税率はそれぞれ十貫目につき銀一匁五分七分)。しかし、この運上銀は、享保二年(一七一七)からは、領内から他国・他領へ移出する分についてのみ課すようになり、城下で売買するものについては、徴収をとりやめた。(県二)

こぎそかた 扱芋方 藩府は弘化二年(一八四五)二月、「扱芋売買取引趣法」とよばれる専売統制を実施した。専売制実施の藩の意図は、近年特産扱芋の荷仕立が粗末となり、領外市場で安く買いたたかれ、藩や生産者農民のためにならないので、城下に「扱芋方」役所を設け、ここで集荷・点検された扱芋荷を、一手に大坂丹波屋七兵衛方へ積み登せ、販売するというものであった。すなわち、藩が扱芋荷の領外販売を一手に握り、販売代価の正銀を藩庫へ収納し、生産者農民へは藩札をもつて支払うという、いわば藩財政の補填に役立てるためのものであった。扱芋方には勘定奉行を主役に、歩行組七人、番組三人を懸り役とした。また城下の扱芋改所には、その頭取に広島町の有力商

人五人を登用し、郡方にも「扱芋方御用懸」を設け、割庄屋をこれにあてた。なお弘化二年九月、山県郡太田筋農村の生産者農民が、扱芋専売反対の一揆（太田騒動という）を起こしたので、藩は専売統制を撤回した。（県二）

こきりがみ 小切紙 ↓折紙

こく 石 容量の単位で斗の十倍をいう。和船の積載量としても古くから用いられ、船荷は米を主としたので、船に積載可能な米俵を目安として設定され、米一石の重量にもとづく単位として、千石船などよんだ。やがて船底の長さ・幅・深さを尺で計り、三者の積を十で割って求めるようになったが、明治十七年（一八八四）以降は、一石が十立方尺と定められた。（日広）

ごくぎんしょ 極銀所 円滑な貨幣流通を促進するため、城下に極銀所を設け、掛屋（三原屋庄左衛門）にその業務を担当させた。主な仕事は、銀貨改めと、包封印をすること、ならびに金銀貨の両替業務であった。なお、藩札の通用が行われるようになる

と銀貨通用が停止されたため、極銀所は廃止され、その仕事は銀札場の兌換業務に吸収された。ちなみに、広島藩では、毎年銀二〇枚と包封印賃銀の中から諸入用費等を、掛屋に与えている。（県一・広寛）

こくさんごようがかり 国産御用懸 ↓諸品方

こくせん 石銭 江戸時代に全国の重要な港や河川で、船石または積荷高に応じて賦課した入津・通行税をいう。石銭徴収のため各港の周辺に、石銭番所が設けられたが、賦課基準・税率・徴収方法はそれぞれ異なっていた。石銭は港湾の維持・船の

安全等に使用された。（日広）

こくだいのう 石代納 畑方の年貢は米を以て算定するのが普通であるが、金銀銭で上納する場合もあり、これを石代納という。（日法）

こくだか 石高 斗代・斗代盛・分米・石盛ともいい、一定の土地の収穫量をいう。石高はいちど決定されると妄りに増減することはなく、若し天災等によって田畑が流出、あるいは凶作になっても石高の変更はなく、それらによる減収分に相当する年貢米は同村内農民の闡として上納した。（県二）

こくだかせい 石高制 検地できめられた村高（村で生産される米の生産量）を基準にして、免（年貢率）をかける制をいう。

こくやくぎん 国役銀 夫役銀ともいう。幕府から諸藩に命じて江戸城または河川堤防等の普請手伝いをさせる夫役を国役と称し、領内全般に臨時に賦課され、それぞれの現地で夫役に従事した。広島藩でも度々の出役を命じられ、そのつど領内に臨時課税を強制していた。しかし、元禄十一年（一六九八）以後は、夫役を現地調達し、その費用として国役銀を代納させるようになった。

ごけにん 御家人 旗本の下に位する譜代の幕臣のうち、一万石未満で御目見以上（五〇〇石以上）を旗本といい、以下を御家人（五〇〇石未満）といい、両者を総称して直参という。御家人は旗本の下に位する譜代の幕臣で、御家人のうち、家康より家綱までの四代の間に、留守居・与力・同心等の職にあった者の子孫を、譜代の御家人という。また、同じく四代の間に大番与

力・同心等に抱えられ、及び五代以後に召し抱えられた者を、抱入の御家人という。御家人中輕輩者に対しては、「高何石」或いは「何百俵」として、切米を支給した。なお、切米は二月に四分の一・五月に四分の一・十月に四分の二を分割支給した。

こけん 沽券 主に土地・家屋の売渡証文をいい、沽券状・沽却状・売券とも称した。江戸時代には高請のある農民の土地売買は禁止されていたので、主として町人の町屋敷の永代売買が行われた。(郷土)

こごしぶね 小越船 江戸時代伊勢湾を中心に、小廻しの廻船として使われた。百石積前後の船で、船型・構造とも弁財船に似ている・瀬戸内方面の「いさば船」に相当する。(国大) ↓ いさば船

こしこく 越石 例えば知行二〇〇石の侍士に対し、高一九五石の村を充行った場合に、不足高五石は隣村から充行った。この場合その五石を越石という。越石に対しては諸掛り物・人足役等は課さないという定法があった。なお、越石すべき高が十石以上になる場合には越石は行わず、高・地所・百姓とも引き分けて分郷を行った。(地方)

こしばやし 腰林 農民利用の林野のうち、個別利用の林野をいう。腰林は農民個々の薪炭源・家屋維持の材料給源であり、肥飼料の採草が目的ではなかった。しかし、その利用については、たとえば家廻りのものであっても御用木の無断伐採は禁止されていた。そこで用水整備や各自家作に使うときには、願書(庄

屋の添書付を必要)を代官へ届出て許可を必要とした。腰林には個人持・共有的寄合・入会的寄合・村中入会の形態があった。

文政元年(一八一八)には、腰林の材木売買には、歩銀を差し出すべきの触を下達している。腰林の松枝の下刈については、一割五分の運上銀を出していたが、享保一揆後廃止された。なお、無断で腰林の横・竹木を伐った者、あるいは伐り置いた薪を盗んだ者は、一人に付米一斗五升を払わされた。ちなみに故田淵実夫氏の研究によれば、明応期〜享保期にかけて、中世からの系譜を引く名主的百姓による腰林の独占的な所有形態が崩壊し、腰林の分割化が進み、本百姓による所有が確立し、所有農家は本家が五二・八% 小家・浮過は三一・五%であったという。(県一・竹内家文書・山県有田家文書)

こしびやくしろう 越百姓 他村に耕地を所有し、出向いて耕作する百姓をいう。(県二)

こしぶ 越夫 雨池内堀などの普請の際に、自村の人夫(所志以外に、他村より遣わされた人夫をいう。宝暦十二年(一七六二)賀茂郡風早村では、川筋所々の堀普請に必要な人夫二五〇人のうち、風早村は七人、他の二四七人は賀茂郡内の数ヶ村から、郡役所の命によって遣わされている。

こしまい 越し米 村が年貢米を藩の御蔵へ納入する際に、他村の年貢米分として、自村の年貢米の払済過米を融通してやることがあった。この場合の融通米を「越し米」という。この「越し米」は、藩にとつては収納上、紛わしいことが多いので、文政十年(一八二七)沼田・安芸郡番組では「菟角紛敷義数々相見

申候ニ付、当年方者、仕分ケ書へ其様子村下へ附紙ニノ可被差出、(中略)右之趣者両郡へ御手元方通達可有之と存候」と町宿宛に通達している。(横山)↓町宿

こしやうぐみ 小姓組 侍士によって編成された家臣団で、騎馬をたてまえとし、藩の政務を司どった。小姓組は幾組かに分かれて、それぞれ組頭をおいた。(新二)

ごじやうばん 御定番 江戸時代に、大坂城または二条城を守った番士の称をいう。(国大)

こしやうや 小庄屋 正徳二年(一七二二)、いわゆる「正徳の新格」によって置かれた庄屋の別名をいう。(県一)

ごぜんごよう 御前御用 ↓御直支配

こだまぎん 小玉銀 銀塊でナマコ形をしていて銀座で鑄造、大黒常是宝の字の刻印があり、まめいた・まめぎん・つぶぎん・こつぶともいう。豆状の秤量貨幣で、丁銀の補助的役割をした。従来、切遣いと称して、丁銀を適宜の量目に切って用いた不便をさせた。一枚は約五匁。(広辞)

こだわらとんや 小俵問屋 ↓大俵問屋

こちやう 小帳 年貢納入の実際に間違いがおきないように、庄屋と納入者が相互確認の上、村ごとに帳面(納目録)をつくり勘定奉行へ提出した。この帳面を小帳あるいは免帳という。

こづかいぶ 小遣夫 小遣夫は、村において重要な任務や、急を要する場合等に雇用される者を言い、飛脚夫という名で雇用されることが多かった。従って「小走り」や「状持夫」のように、村常置の職(村によっては「小走り」に状持夫を兼務させた)で

はなく、また「免割帳」への記載はされていない。小遣夫は夫銀(夫役の代銀)の取り立てや、御年貢米納方の催促等に従事した。こうした場合には一人一日一升の賃米支給の規定(創始年不詳)があつたが、実際にはこの賃米での雇用はなく、増し夫(日当)をする村もあつた。高田郡古屋村の例(年代不詳)によると、村内出張は、一人一日一升五合、諸願書を広島へ飛脚夫として持参させる場合は米六升、郡内へ飛脚夫として出張させる場合は一里に付五合、但し荷物送りは一里に付九合をそれぞれ支給した。なお、文化十三年(一八一六)世羅郡赤屋村では、「小遣夫」という名称は用いず、「飛脚」という名称を用いていたようであり、同年の「年中諸入役米銀并諸飛脚小廻夫賃小帖」には次の記事がある。「極月廿五日 一、米式升 丈兵 御上納銀持セ割庄屋許小国村江飛脚」。ちなみに、広島藩では宝永元年(一七〇四)に「御用並急飛脚之義者、一人一日賃銀式匁ツ、遣候事、但夜通者昼夜四匁ツ、可遣事」の定を出しているが、前述の古屋村や赤屋村のように、飛脚夫への賃米はこの定どおりに支給されていない。(広農・白木・廿日市町史・甲山町史)

こどおり 小通り 西国街道の通行者のうち、公儀普請役・堂上方御内・諸国家中・長崎奉行手付などは、小規模の通行で、これを「小通り」という。「小通り」には宿人馬を動員して伝馬役を果たした。(県二)

ごにんぐみ 五人組(帳) 「五人組」は江戸時代における庶民統制(就中年貢負担者の農民・キリシタン宗徒の取締まり)のために設けられた制で、整備されたのは寛永年間(一六二四〜四三)で、寛文四年(一六六四)には「五人組帳」が制られ、明治二年(一八

六九)に廃されるまで、庶民にとっては犯すべからざる生活規範となっていた。すなわち地域によっては次に列記したような掟があった。

・年貢米未進者があれば組の連帯責任として納入する。

・不審者・死人・贋金銀遣い・盗賊・牛馬盗人等がいれば申し出る。もし隠したり脇より顛れた場合には、庄屋・五人組へは越度を仰せつける。

・親孝行者・主人によく仕える者・仲良き夫婦・兄弟親類に親しくする者があれば申し出ること。

親不孝・老若に対して我が儘をはたらき、耕作を怠け、博奕等を行う者等がいれば申し出ること。隠し置き脇より顛れたときには、庄屋・五人組とも越度を仰せつける。

以上等々掟は多岐にわたっていたようである。なお「五人組」は三、四人・一五、六人が一組とされていた。(広辞苑・新東海道五十三次)

ごにんくみあいちょう 五人組合帳 五人組内の規約などを定めている帳をいう。五人組頭へは少々ずつの給米を遣わしている村があり、藩はそれを禁じている。(広農)

このはまい 小の葉米 ↓ 貫

こばしり 小走り 元来、庄屋の事務を補佐する役をもっていた「大走り」(状持夫の役)と「小走り」(小遣夫の役)を「走り」と称していたが、「大走り」は延宝四年(一六七六)頃に廃された。その後、「小走り」については宝永元年(一七〇四)七月に、蔵入・丸給知においては、一人給分米一石と定め、明知給知入組の

村では一石を高割りにして負担させた。なお、小走給は壺斗割にし、村高の多少にかかわらず、何れの村も一石を支給することになり、さらに「大高村或者飛郷多、壺人二而手張候者式人三人二而可相勤候」と定め、宝暦十年(一七六〇)に至り、「小走り壺人二付壺石五斗、但壺人二而相勤難村者、式人宛二而茂可相勤候」と緩和している。なお、「小走り」は村の常置の職で、庄屋の指示で、雑務やその他の仕事に従事していたのではないかと思われる。(白木・広農・宝暦拾貳年沼田安芸郡割免割方相しらべ書写) ↓ 壺斗割

ごひやくかけそうば 五百掛相場 広島藩では、弘化四年(一

八四七)明和札の改印札発行以後、金相場は高騰をつづけてきたので、嘉永五年(一八五二)その対策として、銀札三二貫五〇〇目を以て、金一両とするという公定価格を布告した。これは弘化四年には金一両(弘化札)が六五匁であったのに対し三二五〇〇目、つまり五百倍になったので、五百掛相場と称せられた。

なお、旧札(明和札)と改印札(弘化札)との併用を止め、旧札(明和札)はすべて改印札と引き換えるように布告するとともに、引き換えの期間は同年閏二月四日以後の偶数日とした。さらに同年六月には、引き換え期間を八月末とし、以後は無効とした。

(県二) ↓ 四拾掛相場

ごひやくめつつみ 五百目包 ↓ 丁銀包

こびろいちよう 小拾帳 田畠などの内訳を一筆ごとに詳細に記したもの。例えば、土地の質入れまたは売却をする場合、反別が多く一筆ごとに記すことが困難なときには、合計の反別の

みを記し、別帳に水帳どおりの一筆限り字・位・反歩を書いて出したが、この別帳を小拾帳と称した。(郷土)

こぶぎん 五歩銀 ↓十歩一銀

こふく 呉服 ↓太物

こぶしんいり 小普請入り 宝暦六年(一七五六)に定められた刑名で、侍士・歩行・足輕の職務上の怠慢・私曲等が摘発されて、役儀取上・小普請銀の負担が課せられ、普請奉行の支配下におく懲罰をいう。なお、小普請とは、屋根や垣根の修理のような、補修工事の意味である。(県二)

ごほんざんさんこう 御本山三講 広島城下で、真宗門徒によ

って組織された御花講(宝暦十年)・御仏飯講(明和七年)・尼講(天明元年)をいう。本山では芸州広島三講といわれていた。(県二)

(二)

こま 小間 江戸府内で公役を課す場合の標準単位をいい、屋敷地二十坪(間口一間、奥行二十間)を一小間とした。(日用)

こまえばやし 小前百姓 本百姓のことをいい、また、

平百姓ともいう。年貢諸役を負担し、村政に参加した。(日用)

こまかりよう 小間過料 数家の過料銭の高を合計し、これを数家の小間の数に応じて課するものをいう。(江戸)

こまぎん 小間銀 ↓定小間銀

こます 小升 * 込米を含まない斗切三斗一升八合(三斗俵)を小升または切升という。(広農) * 百姓・町人が取引に用いる枡で、町枡とも称した。(剰語)

こまつなぎ 小間續 ↓水役銀

こみじんば 込人馬 街道の公用旅行者には、携行諸荷物につ

いて重量運搬する人馬数が定められ、その取り締りに東海道・中仙道には貫目改所が置かれていた。しかし、西国街道には無く、過重荷物のために規定以上の人馬を要した。これを込人馬という。込夫の賃金相当部分は郡方で、足し賃米分は村方で負担した。(県二)

こみまい 込米 俵の正量(元禄四年に年貢米の俵は三斗と定められる)以上の入実(欠米・詰米・延米など)を一括して込米といい、また入米ともいう。ちなみに、宝暦十二年(一七六二)沼田郡相田村の高野藏人の給人法には、込米は一俵(三斗)につき二升一合と定めている。(広農・横山)

こむそうあい かん 虚無僧合鑑 虚無僧合鑑とは、藩府(支配方)から郡役所・割庄屋を通じて各村の庄屋に対して一枚ずつ下付した虚無僧に関する合鑑(符票・通用期間が記入)をいう。虚無僧が村から賄や宿泊を受けようとする場合には、藩府(支配方)から虚無僧世話人(身分は虚無僧)に渡している合鑑の合印を受け取り、それを村に提出する。村は割庄屋から庄屋へ渡している手元にある虚無僧合鑑と引き合わせ、相違ないと認めれば、賄や宿泊を許した。この制は、虚無僧姿で領内を徘徊する輩を取り締まるために設けたものであり、広島藩は、この制に関する達を、安永二年(一七七三)に布告している。(安芸風土記・躍場)

こめいれ 米入 村では免割を行う前に、その年の年貢米納入に要する費用を、百姓の一般入札に付し、最低額を入札した者

を米入と定めた。米入は、村と契約し約定書（文化十三年世羅郡赤屋村では一俵につき五合の約定を入れた。米入の任務は、年貢米を受け取り、広島御蔵所に運ぶことであつたが、蔵払の間は町宿に逗留し、町宿の助力を得て「下し米の浜受」や御米蔵庭場での「配巻」などを行うことであつた。この制度は享保年中から始まつたらしく、また、入札した額は村から支給し、その額は高田郡三田村では、納米百石につき七く八石を要したようである。なお、米入は年貢米を郷倉で受け取るが、郷蔵までの年貢米輸送の責任者は組頭であつた。ちなみに、入札時の記録を「御蔵払歩米入札帳」と称した。（白木・郷史）↓町宿・配巻

こめきつて 米切手 米札ともいう。慶応三年（一八六七）五月、「米ハ人命之係る所是より貴きものハ無之ニ付、成丈ケ他邦江不出様、御売払可相成」として、米切手を発行した。この米切手は前年に再開された「御残し米」制度によつて、在方にとどめ置かせた貯米の三分の一を抵当としたもので、二斗・一斗・二升・一升・二合・一合札の六種から成り、正米や藩札と引き換えされて（金銀銭との交換は不可）、一般商品の売買にも使用された。また、正米との引き換えは、当年秋の年貢収納後とし、それまでは必要な飯米だけの引き換えを認めた。なお、引換への相場は、当初は「上り銀相場」によつていたが、後には石六百目の定相場とした。米切手は天保く弘化期に藩札濫発によつて札価の大暴落をきたしたのに懲りて、藩札の代わりに便法として発行したまでで、実質的には藩札と同様の性質をもち、危険性においては藩札と同一であつた。（県二）↓御残し米

こめぐら 米蔵 ↓浦辺蔵奉行

こめそうばねつけしよ 米相場値付所 広島藩における公定米価は、毎月四・九の日に、城下の米穀商が藩の勘定組役人の立会のもとで定めていた。その際の米相場値付所は、米屋が輪番制で受け持つていた。文化十四年（一八一七）藩はこれを廃して新たに新川場町に「直付集会所」を設け、町・新開組六組から、それぞれ値付改役六人を命じて、その事務にあたらせた。（県二）

こめとめぶぎよう 米留奉行 城下における米価の維持をはかるために、租米納入期に城下へ売り込まれてくる米の移入等を取り締まるために、臨時の職として設けたもので、寛永十一年（一六三四）本川筋と平田屋川筋に置かれた。その後承応ごろには本川口・西堂川口・平田屋川口の三ヶ所に二人ずつ置いたが、元禄十二年（一六九九）以降は定置の職となり、川口番所の制となつた。（新三）↓川口番所

こめとめふだ 米留札 広島藩は、早くから他国米の移入・販売、領内の米の移出などについて厳しい統制を行つた。他国からの移入については、寛永八年（一六三一）山県郡の石見国境五ヶ村へ「米留札」を立て、米の流入を禁止した。また、寛永十一年（一六三四）には米留奉行（寛永十一年に本川筋・平田屋川筋に置く）・川口番所を設け、領内一円にこれを実施した。（県二）

こめばかり 米計 庄屋は農民から年貢米を受領すると、組頭とともに米質を検査し、数量を調べた。この場合に、数量を調べる者を米計（宝永元年（一七〇四）の定では「一人に付米三斗、一人で調べ難きは二く三人でも可」といい、宝暦十年（一七六〇）の

定では、村から一人に付米三斗五斗の支給を受けた。なお、年貢米は、大村においては郷藏で、小村においては「廻り計り」と唱え、組頭や米計の自宅で収納した。(広農)

こめばらい 米払 広島藩は、宝暦十年(一七六〇)に次の覚を出している。「右米計りの外米払仕来り候得共、去年も申付候通、大勢罷出候ては下方不利益に付、米払迄にて可相済候(中略)米払は村内長立候もの老人宛、代り代り指出可申候、給米は不相成、出飯米迄にて相済可申候」右の覚によれば、米払とは年貢米納入者のうち、有徳者(富裕者・徳行のすぐれた者)が一人宛交代で、年貢米納入に立ち合っていた者をいう。(広農)

こめばらいぶまいにゆうさつ 米払歩米入札 毎年八月、その年の租米納入に要する総経費を、惣百姓の入札に付すことをいい、最低入札者(米入という)に納入を請け負わせた。(広農)↓
米入

こめひきやく 米飛脚 文化三年(一八〇六)大坂北浜の島屋佐右衛門によって、西国筋の米飛脚が開発され、毎月一〇度往復した。この飛脚は、書状の場合、定日はなく、いつでも発送できた。しかし、この米飛脚は天保八年(一八三七)に廃止された。(県二)

こめみのもの 米見の者 下見帳の作成は重要な事項であり、村では相当な機構を設けて作成したと思われ、作成に従事した者を米見の者という。後年には作成が庄屋の机上の事務になったと思われる。(広農)

こめやど 米宿 藩の御藏所の所在地には各郡村の宿舎があり、

これを米宿という。村で収納された年貢米は米宿に運ばれた。

(芸志)

ごめんぶぎょう 御免奉行 ↓郡廻り

ごめんやま 御免山 個人所有の山でも妄りに伐採は許されず、藩の許可を必要とした山をいう。

こもしき 薦敷 神主や神社総代の指示をうけて、祭礼やその他神社の種々の世話をする者を薦敷という。広島市安佐南区沼田町久地地区では、現在でも薦敷同様の役が年番で置かれ、その役は「こまひき」といわれているようである。(横山)

こもの 小者 武家などに雇われ雑役に従事する者をいう。江戸時代には小人と称され、目付の支配に属した。

こものなりぎん 小物成銀 福島時代より課せられたいわば雑税(もとは現物で徴収、浅野時代になり定額の銀納となる)で、綿・漆・茶・楮・柿・雉子・栗・蜜柑・鹿皮などに課せられた。小物成銀は半方を六月、半方を九月にそれぞれ納めた。給知に対する小物成・高掛り物はすべて藩庫に納入した。なお、小物成銀は村ごとに徴収し、割庄屋一名・庄屋二名が郡の総代として広島へ持参し上納した。ちなみに、綿は十匁に付銀一匁・漆は十匁に付銀六分五厘・茶は一斤に付銀五分五厘・雉子は一羽に付銀一匁五分・栗は一斗に付銀一匁・鹿皮は一枚に付七匁・鉄砲は一挺に付一四匁、鮎は三百目に付一匁、蜜柑は百個に付一匁、真綿は百目に付十匁であった。しかし、この規定を守る給人は少なかった。(芸志・広農)

こや 小家 *村内で「一軒前」の百姓として認められていない

ものをいい、その態様はいろいろであり、「脇百姓」や「後家」があった。(県一)↓脇百姓・後家 *本百姓(本家)の分家筋をいう。

こやまもり 小山守 ↓山番

ごようぎん 御用銀 藩の借入銀のうち、豪商・豪農などからの百匁以上の借入銀をいい、(百目以下は寸志銀)勘定所から証文を出し、正式に債務として扱った。御用銀は藩財政の窮乏を補うために募集したが、元禄以降になると、村高割りに強制することも行われた。御用銀は借入した月から月五朱の利息をつけ、毎年利息のみを払うというものであったが、延享二年(一七四五)には、利息の引き下げを、天明元年(一七八二)には御用銀・寸志銀の利下げ(ほぼ半減)をそれぞれ申し渡している。御用銀は新規を募るにつれて、古い分は利息の支払いを停止し、元金の支払いも長期の年賦にした。但し、類焼にあうとか他国へ移住するなど非常の場合には、請願すれば元金を還付することもあったといわれる。ちなみに、次のように御用銀を差し出している。寛永十二年(藩主婚礼に付、広島町中より銀二〇二貫五〇〇匁)、享保十一年(郡中より差し出し)、享保十八年(参勤帰国のための費用を郡方・町方より差し出し)、天保元年(将軍家斉の二四女と藩主斉肅の婚儀のため差し出し)(新三・玄徳公済美録・吉長公御代記・横山)

ごようぼく 御用木 広島藩は、元禄十四年(一七〇二)御用木制度を設けた。この制は松・榎・杉・檜・栗・榿・楠等を御用木(種類は時代によって多少の異動あり)に指定し、たとえ農民の所

持・利用に委ねられた林野であっても、無断伐採は禁じられた。なお、「御帖付木数人名帳」に樹種・本数・持主を登録させ、風折・枯木になったときは藩に届出、検査後払い下げになり、また伐り跡には御用木の植栽を義務づけた。(県二)

ごようまい 御用米 江戸時代には備荒用に米が貯えられた。

藩府自らの貯穀、譜代の諸城に貯えられたもの、及び幕府直轄地における貯米を城米という。城米は享保十五年(一七三〇)以後、御用米ともよばれるようになった。(日用)

ごようやしき 御用屋敷 宝永七年(一七一〇)藩政の中枢機関

として設置され、毎月六回の会日を定め、大目付以下郡・町奉行などが会同して、重要な政務について協議することになっていて、重要な裁判もここで決せられた。その後御用屋敷での集会は、寛保三年(一七四三)十一月に諸事簡素化のため取り止められ、評定所としての機能は失われた。その後はすべての裁判は、各分野それぞれの関係役宅で吟味されることになった。しかし種々の弊害が生じたので、宝暦八年(一七五八)町方吟味屋敷が、翌年に郡方吟味屋敷が、それぞれ城下に設けられた。(県一)↓町・郡吟味屋敷

こわり 小割 年貢米の津出しに要する諸入用・組頭給・状持給・長百姓の出飯米など、村の特定の地域で負担するものをいう。(刺語)

こわりき 小割木 榿・榿等の闊葉樹の割木をいい、高田郡三田村では、榿・榿等は約十年目毎に伐採し、長さ一尺三寸にひいて二つ割とし、二尺五寸に束ね、三田木の名で燃料として売

り出された。安政元年（一八五四）には、五九二二五〇束を広島に送り出した。広島では京橋の浜に荷揚げして、問屋で町売りの束に締め直したが、正徳年中に藩用につくさせた大束は、長さ一尺五寸廻り二尺であったので、それに近い束にしつらえたと思われる。小割木の売買値段は不詳であるが、山元で小割木商人に売り渡した値段は、上木一荷につき、天保六年（一八三五）には一匁三分五厘、同九年には九匁であった。（広村・三田雑記）

こんやばいぜい 紺屋灰税 紺屋灰運上銀ともいい、紺屋職を開業する者に課す税で、灰の購求を出願すると、灰一石につき銀八匁を毎年十二月に徴収された。紺屋灰は櫓を焼くので、それを制限するものであったといわれる。郡中の紺屋は灰運上と唱え、些少の税銀（紺屋灰運上）を、灰一斗に付四分ぐらいを上納した。（白史・芸志）

さ

さいかくぎん 才覚銀 近世初頭には、大名が財政補填の目的で、豪商や有力町人から募った借銀をいう。支配体制が整備するにつれて、凶作や飢饉・幕府の公役・慶弔等で臨時費過大のときに限り、豪商等より募った。なお、広島藩では凶作等による年貢米納入の困難な村に対しても、才覚銀を遣わしている。

（横山）

さいかくまい 才覚米 横山家の明和三年（一七六六）の文書に、次の書付がある。「去ル午年（宝暦十二年）日損二付、町才覚米致

立用、年々利息取立、元之内茂年々可差出処、去酉年（明和二年）作方不宜、下方難洪之趣嘆出、依之元利之内取立差免置候（以下略）。右の記述から才覚米とは、藩が御用銀・才覚銀を抵当にして、町方の米屋から借用した米をいい、その米は凶年には百姓に貸しつけたのではないかと思われる。

さいきよじょう 裁許状 山論・水論等の村方間の訴訟につき、奉行所や評定所が裁定して、下した文書をいう。（創元社『古文書学入門』）

ざいごういち 在郷市 慶長期や寛永以後の検地・地詰において、町方または町屋敷分として分離されることもなく、在村の中に包括された地域をいい、ある程度屋敷が集まっていて、農民が生産物を持ちより交換する市立の場である。多くの場合、村の中心となる本郷とよばれる地域である。（県二）

ざいもくとめぶぎょう 材木留奉行 元和五年（一六一九）浅野氏は、可部口・廿日市・深川・玖波・友田等に材木留奉行を置き、材木の搬出を取り締った。なお、これが口屋の制の起りといわれている。（県一）

ざいもくば 材木場 正徳五年（一七一五）山奉行を廃止し、山方支配とその事務は一切勘定奉行所管となり、運上場役所を山方役所に、また運上場（寛永十五年白島に設置を材木場と改称した。材木場は藩用材の収納・管理・城下材木問屋への払い下げ等を行った。材木場の設置により、領内の立木を自由に商品化することを禁じ、領内流通の木材は、材木場の管理下におかれることになった。なお、山方役所は享保元年（一七二六）に廃され、

事務を郡役所と材木場とに分けた。(県二)

ざいもくぶぎょう 材木奉行 享保十年(一七二五)、材木場に

おかれた職で、勘定方に属し、山奉行の監査を受けて、仕入方

・払方事務を統轄した。(県一)

さいりょう 才領 宰領。年貢米や荷物を馬や船で運搬する者

を指揮すること、また、その指揮者をいう。(古用)

さおいれ 竿入 竿打。↓地概

さおいれしんがい 竿入新開 竿入(間竿で地積をはかる)をし
て、高を決めた新開をいう。

さかやあらため 酒屋改 寛永十九年(一六四二)の幕府の酒造

統制令によって、村方の酒造は禁止され、町方のみ認められた。

その後も統制令が出されて、天和元年(一六八二)には、二分の
一減石令を、さらに徹底させるため、酒屋の米買次や酒販売所
の設置が制限され、月一度の酒屋改めが行われた。(県一)

さかやかぶ 酒屋株 酒屋仲間ともいい、酒造業者の結合した

仲間をいう。広島藩ではその起源は明らかではないが、藩が正
保元年(一六四四)に、従来からの営業者のみに酒造許可を与え
ているので、この頃から成立したのではないかと思われる。ち
なみに、広島城下においては、寛文十二年(一六七二)には九十
六軒の酒屋仲間が構成され、享保元年(一七一六)には新町組の
平野屋(松井家)などの酒屋仲間十二軒が天神講(同十六年に太子
講に組織換を組織し、年三回定期的に集合し、米や酒の値段・
賃銀の協定・他国酒の移入禁止や取り締まりについて協議して
藩に上申し、これを認めさせている。(県一)

さがりだか 下り高 慶長六年(一六〇二)、福島正則は芸備両国

の検地を行い、各村の生産高を公定した。その後、その公定生
産高が実際の生産高より少なく、貢米も困難な村に対しては、
相応に公定生産高を下げた。この減生産高を「下り高」という。

(海田)

さきぶれ 先触 あらかじめ通告すること。前触と同じ意味に

用いられることもあるが、多くは、旅行者がその目的地までの
必要人馬や休泊予定地を知らせて、宿駅でその準備をさせるた
めに出した通知書に用いられる。(国史大辞典)

さきんぶ 先ん歩 町方では一般の金融として、質物なしの貸

借が広く行われていた。いわゆる高利貸がそれで、藩府はその
利息を月二歩以下に制限していたが、実際には利銀のほか口銭
その他「色々ト申立不義二銀子ヲ銀主手前へ納」め取り、しか
も「先ん歩」と称して、それらを貸付銀からあらかじめ差し引
いて渡すので、借主には元銀の三、四割しか手に入らない実情
であった。(新三)

さくじきまい 作食米 *端境期における食糧の欠乏や凶作な

どとき、藩から村(百姓)に対して、貸し付けた米をいう。広
島藩では寛永十六年(一六三九)の早魃の際に、村高百石につき、
米二石の割で貸し付け(利米三割)ている。なお、享保三年(一七
一八)以降は、元米はすえおき毎年九月に、利足米二割を上納(銀
納)させている。(県二) *江戸時代、農民の農耕生活に必要な
飯米、または穀物をいう。(国大)

さくじきまいかぶん 作食米過分 ↓浮地種枵

さくじしよゃきいんふだ 作事所焼印札 藩府の作事所の焼

印を押した木札をいい、それには職人の名前と職種、それに技倆の位付け(上・中・下)が記してあり、それぞれの職人に渡した。その焼印札は諸職人が藩府の公用に出るときはもちろん、一般の雇傭に応じて作業に従事する際にも、約束の仕事が完了するまでは焼印札を渡しておいて、仕事途中で他の仕事に応じさせないように戒めている。これは職人らに公定賃銀を守らせ、仕事途中で不当な賃金の要求をさせない等の措置として、行われたものである。(新三)

さくときまい 作得米 *年貢米を納めた残り米をいう。また、作徳米とも書く。(広辞) *地主が小作人に小作させた場合に、小作人が地主に納める小作米をいう。(広辞)

さけうんじょう 酒運上 元禄十年(一六九七)幕府は全国の酒造業者に対して、酒運上銀を課すこととし、酒一石銀百目の相場であれば、これを百五十目に売り、うち五十目を運上銀として上納させた。しかしその結果は密造の弊が続出したので、宝永六年(一七〇九)に中止し、酒屋の醸造高は、しばらくの間飛躍的に増大した。(新三)

さげふだ 下札 年貢その他の諸上納を皆済すると、翌年の八月頃迄に、庄屋は組頭と連名で、各百姓に領収書を交付した。これも下札という。(沼田町史)

さしあげまい 指上米 差上米。広島藩では宝永五年(一七〇八)に、世羅・山県・佐伯・高田・高宮郡の百姓の廃止要望出訴により、藩への指上米制度を撤回した。(顕妙公済美録)

さしがみ 差紙 *近世の裁判役所などの召喚状をいう。尋問

や命令の伝達のため役所へ出頭を命ずるときに用いられ、召喚理由・場所・日時・召喚者名などが記されている。(日用) *広島藩では、蔵米の落札人(次屋)が、落札米売却の便宜のために作成して売り出す有価証券をも差紙と称した。↓差次払

さしがみだい 差紙代 年貢米の所払いにおける米の値段を「上り銀相場」といい、「上り銀相場」は藩から差紙を以て通達されたので差紙代ともいわれた。文化八年(一八一二)山県郡本地村の例によると、差紙代(上り銀相場)は積次口銭とともに一石につき銀六十三匁六分四厘五毛であつたが、所相場は一石につき五十一匁で、租米一石を納めるためには、米一石二斗四升八合を必要とした。(広村)↓上り銀相場

ざしきもち 座敷持 新吉原の遊里で、中期以後部屋持の遊女をいい、細見(さいけん)青楼名・娼妓名・芸妓名・揚代などを明細に記した江戸吉原の案内書には入山形の印がついていた。(広辞)

さしだし 指出 差出とも書く。戦国時代から安土・桃山時代にかけて行われた検地の方法で、大名が領内の家臣に知行地の面積・耕作者・年貢などの明細を申告させたものをいう。検地奉行を現地に派遣して実地調査をするようになったのは太閤検地からであるが、指出を基礎にしたことも多かった。(日用)

さしだしちょう 差出帳 一種の村勢要覧で、藩が必要に応じて、また代官が代わる度に、村から村内の状況(百姓別に、高・毛付高・田畑の品毎の分米・牛馬数・腰林等)について、実態に関する報告を求めたものをいう。

さしつぎばらい 差次払 凶作や畑がちの村で米収の乏しいと

きは、藩に請願して年貢米の一部を代銀で上納した。これを差次払といい、寛文四年（一六六四）から行われた。差次払の必要が生じた時、郡村役人（割庄屋一人・庄屋二人）は藩の許しを得て、年貢米の代銀を城下の次屋（米問屋）に持参して、勘定所の発行する差紙（米券）を購入し、その差紙を藩庫へ納入した。これによつて代銀納をしたことになり、現米は次屋が上納した。但し差次払は広島のみ蔵に上納する貢米に限り許され、上質米の御調郡においては認められなかった。なお、享保の一揆後年貢米の代納銀は、従来広島町の米相場に、一石に付き三匁の上乗せをしていたが、以後は広島町の相場通りになった。（県一）

さしつぎまい 指次ぎ米 村から、直接地損（川成・溝用地など）

を受けた百姓に対し、「川成米」・「掛下げ米」・「溝の代米」等の名称で、一定の補償額を定めて渡した。これを「指次ぎ米」という。この米は年を経ると土地を離れて資産視され、株の如く勝手に売買されるようになり、本来の目的から外れていった。

（剩語）

さしまい 刺米 *御蔵所では納入される年貢米の検査をする

場合、刺を入れて抜き取った米をいう。刺米は検査終了後、俵の中に戻すのがたてまえであるが、取り扱う者が着服するのが慣例（明治になって廃止）になっていた。刺米は、後日代官を通じて村から償っていた。（白木） *年貢米収納の場で、容量の不足がある場合に、これを補うために予備に持参した米をも刺米という。年貢米はいちど庭場（収納所）へ入れたら、持ち出せな

いという慣例があったらしい。（広農）↓払切余米

さしむぎ 刺麦 ↓永貸穀（穀）

さしむら 指村 差村。助郷役負担に耐えられなくなったとき、

代わつて負担をする村を指名することをいう。指定された村の中には、拒否する村もあり、さらに他村を指名することもあった。（日広）

さだめち 定め地 意は判然としないが、次のような悪所の辺

地を指している例がある。「飛郷一カ所可部山の内、中倉居百姓式人、此処の儀山中故毎年耕作不熟、猪鹿猿作方荒し申候ニ付先年方百姓相談の上、畝高村かづき足米式石に相究、此米村方請入多足二仕申候」とあるように、「かづき高」にした耕地（悪所）を「定め地」というのではないかと思われる。なお、このかづき米を「定め米」という。（南原村安永六年指出帳・剩語）

さだめまい 定米 「地こぶり」の結果、「かづき高」に指定し

た耕地（悪所）に対する貢租は、「定め地かづき高」といい、村かずきにした。この貢租を「定米」という。（剩語）

さつかいしよ 札会所 銀札場・札場・札座ともいう。江戸時

代諸藩において、藩札の発行や両替を担当した機関をいう。多くの場合、奉行の下に領内の資産家や有力な御用商人を起用して札会所の業務（にせ金の廃棄・紙幣の交換・破損札の交換・金銀紙幣の包装を行わせ、特権の代償として運上御用金を課した。

広島藩では、宝永元年（一七〇四）幕府の許可を得て革屋町に札場を設け、辻次郎右衛門（京都）・三原屋清三郎（広島城下町）・天満屋次兵衛（広島城下町）の三人を札元として、初めて藩札（二

分・三分・五分・一匁・五匁を發行し、以後、享保十五年（一七三〇年）、札元は三原屋清三郎・三原屋小十郎・伊予屋吉左衛門・元文元年（一七三六）・明和元年（一七六四）・弘化四年（一八四七）にも發行している。なお、広島藩では札元へは扶持米を支給（例えば宝永札の札元へはそれぞれ二〇人扶持）した。札会所は広島町のほか、貞享四年（一六八七）に三次札会所が設けられ、宝永二年（一七〇五）に尾道（久保町）・享保十八年（一七三三）頃竹原（下市）へも設置している。札会所は明治六年（一八七三）に廃止された。（県一・県二・日用）

さつぎんあずかりきつて 札銀預り切手 広島藩は慶応二年（一八六六）、小額面の藩札では高物価の取引には対応しきれないという理由で、新たに札座から五百匁・二百匁・百匁の切手を発行した。これを「札銀預り切手」という。（県二）

さつば 札場 ↓札会所

さつみ 札見 広島藩は、贋造の藩札を取り締めるために、村廻り・番組・手代らをして、領内を巡回させた。これを札見という。

さむらいいたいしろう 侍大将 平安末期よりみえる武家の役職。軍勢を編成する時に臨時に任命され、大將軍を補佐し、一軍を統率した。（日広）

さんかんじょう 三勘定 租税は年三期、即ち夏（六月）・秋（九月）・暮（十月より十二月）に上納した。これを三勘定という。三期のうち、夏・秋は主として小物成の上納期とし、暮期は主として物成を上納した。（芸志）

さんくやく 三工役 延宝初年頃までは、庄屋には給田があり、百姓が年三日（田植・草取り・稲刈）庄屋元に勤務する慣行があった。これを三工役（村によっては三ケ夫といい、この夫役を代納する場合には、一軒に三升を差し出した。これを家軒三升という。庄屋への給田は延宝年中に廃止され、庄屋給を免割に入れ、村入役の内から支給するようになった。しかし、当時は未だ庄屋給に関する藩内一定の規定はなく、村々で勝手額の支給していたようで、支給規定をつくったのは、宝永元年（一七〇四）の定から以降である。（県一・剩語・続老）↓庄屋三歩給・庄屋

さんせんまい 散銭米 神仏に供物として献上する米をいう。

ざんち 残地 のこりち。例えば、地面一町歩を質に入れ、余計に金子を借り受ける場合に、五反歩は地主方に残して直小作をし、五反歩は金主が手作りをし、質に入れた一町歩の年貢・諸役は、地主が負担する制をいう。（地方）

さんばい 生飯 田植始に生飯と唱え、土神・穀神へ御神酒・肴・飯などを備え、家内や縁者が寄り合饗応する慣しをいう。ちなみに、田植仕廻を代口満で・泥落などと唱え、一日休日する村もあった。

さんぶぎん 三歩銀 広島町においては、田畑を売買の場合に、代価の百分の三を上納させた。これを三歩銀という。（芸志）

さんぶまい 三歩米 ↓庄屋三歩給
さんまい 散米 ↓内撤（うちまき）

さんようば 算用場 ↓勘定奉行



しおき 仕置 幕府は刑罰を仕置と咎に分けた。仕置とは所払

以上をいう。すなわち、所払・江戸払・江戸十里四方追放・軽追放・中追放・重追放・遠島・死刑・磔・獄門・死罪をいう。咎とは手鎖以下(手鎖・屹度叱・叱)をいう。(江戸)

しおそこり 塩素凝 干潮のことをいう。(県二)

しおはまねんぐ 塩浜年貢 竹原塩田の場合、開発された数年

は鎌下年季として、年貢は免除され、塩浜一軒について年間運上銀一枚を札銀として差し出していた。承応三年(一六五四)地詰によつて高付され、以後元禄十一年(一六九八)まで塩浜年貢として免米で徴収されたが、翌年「俵懸り運上」(運上銀)に改められ、さらに、享保元年(一七一六)には、塩年貢銀と改称された。(県一・広寛)

しかがわぎん 鹿皮銀 小物成の一種で、鹿皮一枚につき銀七匁を課した。(芸志)

じかた 地方 町方に対して村方をいい、それが転じて土地制度・村政一般をも称するようになった。(日用)

じかたちぎょうせい 地方知行制 藩士の給与形態のうち、実際に知行地(給知)を指定して与える地方知行制と、藩が年貢米の中から、現米を支給する俸禄制とがあった。近世初期にはこの制を採用する藩が多かったが、外様の大藩を除いて、だいた

い寛文・延宝頃までには、俸禄制に切り換えた藩が多かった。

広島藩では延宝三年(一六七五)〜元禄十一年(一六九八)・享保十八年(一七三三)〜同十九年・宝暦四年(一七五四)〜同六年の三度にわたつて全知行地が藩に召し上げられ(凶作・飢饉などの対策として行われた)、藩の直接支配(代官の支配)が行われたが、それ以外はこの制が採用され、版籍奉還まで続いた。(県二)↓給知・俸禄制

しかてつぼうふうんじょう 鹿鉄砲札運上 猟銃の鑑札に

対する税で、元和六年(一六二〇)から始まり、一枚につき十四匁で六月と九月にそれぞれ半納した。この運上銀は、請主を定めて増減は許されず、請主が死亡して継ぐ者がいない場合には、村受となり課税された。(白木)

しきぎん 敷銀 江戸時代においては、妻の持参金・持参田畑

は原則として夫の所有に帰した。持参金のことを関西では敷銀、関東では土産銀といい、妻に過失なきにかかわらず夫より離婚する時は、夫はこれを返さなければならなかった。(目法)

じきこさく 直小作 質に取った地所を、直に質入主に小作させることをいう。(徳川)

じきさん 直参 ↓御家人

じきばらい 直き払い 年貢米の納入において、自分の全所有地に対する年貢米を、自分が生産した米で自ら納入することをいう。(広農)

しきりじょう 仕切状 商品の買い入れに当たつて、商品とともに、売主から買主に渡される品名・数量・価格・諸入費などを詳細に記した文書をいう。(古用)

じぐちせん 地口銭 京都・奈良市内の家屋に対して賦課され

た臨時の課税で、寺社の造営や修理の用途のため、道路に面する間口の長さにより賦課された。(目広)

じげにん 地下人 位階・官職など、公的な地位をもたない者をいう。(古用)

じげやくにん 地下役人 *清涼殿に昇殿を許されない官人、またはその家格、通常六位以下の者を「地下」という。或いは「地下」とは宮中に仕える者以外の総称でもあり、とくに中世後期以降は、一般の百姓また地元・領内の村落をも「地下」といわれた。(日用) *広島藩の高宮郡地方では地元のことを「地下」と申ししていたので、「地下役人」とは庄屋・組頭など村の世話役の呼名であつたのではないかと思われる。

じこぶり 地こぶり 元文二年(一七三七)以後村方の申請にもとづき、村が独自に実施する一村限りの地概をいう。「竿入れ」ともいう。「地概」は必ずしも完全ではなく、また「地概」以後に災害や、田方用水施設のため耕地が失われ、土地の位が変わることがある。しかし、再び、「地概」は余程のことがない限り行われなかった。そこで各村は「地こぶり」(村が行う竿入)を行った。(県一・剩語)

しじゅうかけそうば 四十掛相場 広島藩は、弘化四年(一八四七)新銀札(旧来の明和札の表に、茶褐色の六角形内に「改」を、裏に朱色の円形内に「弘化未定」を押し、紙巾等を少し変えただけの改印札。弘化札)を発行し、新銀札(弘化札)では金一両の公定相場を六五匁とした。旧銀札(明和札)の公定相場は、金一両が

銀二貫六〇〇目であつたので、両者の比率は六五匁(新銀札)対二貫六〇〇目(明和札)、つまり明和札は四十分の一の値打になつたので、四十掛相場と称せられた。なお、翌嘉永元年(一八四八)から両替屋(豊島屋円助・大原屋才次ら)を指定して、明和札と新銀札(弘化札)との引換を行った。(県二)

じしんばん 自身番 江戸時代に江戸・大坂・京都などで、主として町内警備のために設けられた自警制度。町内の大通りの両端に木戸があり、木戸に接して番屋を設け、一方の番屋に木戸番、他の一方に自身番が詰めたので、転じてこの番所をも自身番と称した。自身番の任務は、交替で町内を巡回し、不審者が町内に立ち回れば捕らえて番所に止め置き、奉行所に訴え出る。喧嘩口論をいましめ、夜は火の元を用心させる。また町廻りの奉行所同心などが犯罪容疑者を捕らえたとき、一時ここに留置して取り調べを行うこともあつた。

じそこまい 地底米 土地を売り渡して受け取る代米をいう。高田郡某村には、寛文十二年(一六七二)に書かれた次の地底米の受取書がある。「一高壱升七合之分、永代売り申候、此地そこ式升、米只今慥二うけ取申候」。(郷史・続九)

じぞり 自剃刀 自分の頭髮を剃ること。つまり僧侶を志すことをいう。文政十二年(一八二九)高宮郡下町屋村光正寺の弟子の大安・順誓・宝潤の三名は、夫々自剃刀の御札金として、夫々四十八匁を、西本願寺の役人上田与左衛門へ差し出している。但し四十八匁のうち三十八匁は、仏飯講銀から借入し、五ヶ年賦で返済している。(野平家文書、文政十二年諸書付控帖)

したみちょう 下見帳 その年の米の收穫予想をすることを下

見という。村では庄屋・組頭・長百姓らが、八月中・下旬から九月にかけて、早稲・中田・晩田の三田を見わけて、その收穫予想(畑・宅地・荒所の圃高を除く)についての下見帳をつくり、代官に提出した。下見帳は早稲と中・晩田(又は早・中田と晩田)の二度に分けて作成し(早稲・中田からは定物成を徴収し、晩田は村入用及び百姓の食糧米に充てた、それには一筆毎の畝数・一步穂の収量・作人名などが記入された。下見帳は「有米目録」(有米帳)ともいう。ちなみに、升突前に提出した下見帳は、升突の結果に照らして訂正し、再度提出させられた。(広農・瀬野川町史・三田雜記・踊場)

したやまばん 下山番 山番の補佐役として、村毎に置かれ、

下山守とも言い、藩有林の番人にした。天保十一年(一八四〇)沼田郡相田村では、下山番を置き、年に米二斗を給している。(横山)

したやまもり 下山守 ↓山番

したわけ 下分け 日々藩の御蔵所で、村から収納した年貢米の明細をいい、町宿(請宿)は村の納米に立ち会って、その数量を記録していたようであり、勘定終了の際には、日々の収納高を御米蔵の帳と照合して割印し、「御年貢下分け通」を作って町宿主の名で村に交付した。なお、「御年貢下分け通」は、「御年貢米津出し通」ともいう。(広庄・横山)

しちち 質地 金銭貸借の際、担保物件として入れた田畑・屋敷などをいう。江戸時代初期は土地売買の禁止が行われたが、

農民は止むを得ない金融の手段として、売買という名目をさけ、質地あるいは年季売りを行った。このような質地は、多くの場合村の財産家や近廻りの商人との間に行われたが、その一部は年季明けとともに旧持主に返されるが、大部分は質流れとなり、このような人に集中された。(郷土)

しちちしょうもん 質地証文 江戸時代、農民が借金する主な

方法に「書入れ」と「質入れ」とがあった。「質入れ」とは田畑などを質に入れて借金する方法で(この場合の借用証文を「質地証文」という)、質取主が質地を耕作(手作)して、年貢諸役を提出した残りを、借金の利子とする方法である。従って、質入れ主は、原則的には借金の利子を払わなかった。「書入れ」とは質地と違い、土地を担保として借金し、利子を支払うもので、書き入れた土地は所持者(地主)が耕作した。質地証文には、質地の字・位・面積・借入期間等を記入し、証人を立て、庄屋が加判した。(大領・地方)

しちりんまい 七厘米 ↓厘米

じっかんなり 十干成 高一石に対して貢米一石を納めることをいい、同じく一斗を納めることを「一つ成」という。文政九年(一八二六)沼田郡相田村の給主箕浦五郎一は、給百姓友吉に對し、所有高七斗八升四合につき、免「十干一步一厘」(一・〇一二)を課し物成七斗九升三合を徴している。(芸志・横山)

じつめ 地詰 地詰とは、幕府に対する配慮から用いられた言葉であり、非公式の一藩限りの検地という意味である。広島藩は、慶長六年(一六〇二)の検地以来、村によっては現実の生産

力にかなりの差異が生じていた。そこで、寛永十年（一六三三）には広島廻りの地誌を実施し、寛永十三年（一六三六）頃から地誌にとりかかり、寛永十五年には蔵入地、正保三年（一六四六）には給知について実施した。地誌の方法としては、各村から慶長六年の検地帳を提出させ、その記載内容と現況とがあまり違わない村については、そのまま再確認するか「地概」ですませ、福島検地の際に「指出」ですまされていた地域や、土地の状況がかなり変化している村については、検地奉行を派遣して徹底した地誌を実施した。この地誌によって、新しい村高が決定し、藩全体として約五万石の石高の創出があった。その後藩主吉長の時、大規模な地誌が計画され、正徳二年（一七一二）に広島町組新開を実施、同三年には新開（大須賀村・明星院村・江波新開・段原村・比治村・山崎新開）の地誌を実施、同四年には蔵入地・給知を問わず実施することを示達したが、高宮郡可部町（同五年に実施し、可部町御茶屋を免除地にする）・中島村など一部で実施されたのみで、中止になった。その後、元文元年（一七三六）地概を実施した。（県一・知新集）↓地概

じとう **地頭** 江戸時代、幕臣では一万石以下の知行を領した者、各藩では知行地を与えられ、徴租の権を有した家臣をいう。また、主として東北地方で、名子を使役した地主をいう。（広辞）

しどうきん **祠堂金** 寺社がその受けた寄付金等を庶民に貸し付けるものをいう。（日法）

じどこぎん **地床銀** ↓地床米

じどこまい **地床米** 藩の直営工事による新開地を、百姓に小作させて小作料を徴収した。この米を地床米といい、銀納の場合、地床銀という。（続九）

じどりみ **地鳥見** 地鳥見は、百姓の中から人物・生活程度・筆算の出来不出来などを考慮し、村役人の推挙によって選ばれた者（郡に一・二名）であり、常時御鷹野を巡視して、鳥類の保護・繁殖に意を用い、特に密猟を取り締まる役を有していた。なお、「鳥見」の御鷹野の巡見の際には、同道して指示を受けた。ちなみに、文化二年（一八〇五）には佐伯郡佐方村御鷹野の地鳥見に対し、その心得条々を下達している。（原村・廿日市役場文書）

じない **寺内** 寺中と同意で、己自身は門徒を持たず、本坊の境内またはその近辺に居住し、本坊経営を補佐するいわば本坊譜代の従属的僧侶と、その家族をいう。（県一）

じならし **地概** 地槩とも書き、斗代概・地坪・竿打・地押・竿入ともいう。村高を変更せずに、村内の耕地の現状に即して年貢米を公平に賦課するためには、耕地の状態を把握し、これに適當な石高を盛ることが必要であった。そのため実施された検地を地概という。つまり、検地の場合は、一筆毎の分米を総計して村高を確定するが、地概はその逆で、従来の村高を現にある耕地に割りつけることである。従って、当然土地の等級の変更が行われた。広島藩は、寛永十三年（一六三六）頃から行われた地誌においても一部は地概ですませ、その後元文元年（一七三六）に、郡中の明知・給知で一斉に地概を実施した。しか

し、地概は村内限りで耕地の広狭・高の高下のみの部分修正にすぎず、村相互間の不均衡は解消せず、翌元文二年（一七三七）郡中で地概に対する不満から動揺が生じたため、従来どおり寛永・正保の地詰帳によって年貢を徴収することにした。（県二）地概以後に地損が生じても、新らしく闌高を決めず、元のままの闌高を踏襲し、その代り村から一定の額を、地損分の闌高に對して、直接地損の百姓に補償した。この補償米（指次ぎ米）は、川成米・掛け下米・溝の代米等の名で補償された。なおこの米は、後には土地から離れて資産視され、株のように勝手に売買されるようになった。（剩語）

じならし 地槩 地押（じおさえ）↓地概

じにん 神人 神社の保護を背景にして、独占的な商業活動を行つた者をいう。

じめしてづくり 地主手作 年季奉公人の労働力によって行う、地主の直接経営をいう。（大領）

じのり 地乗り 中世以来の海上の航法で、広島藩では安芸路乗りともいう。この航法は、陸岸に沿い山や地形を目標に航行するため、昼間航海を主とした。近世になると、地乗りに加え沖合を航行する沖乗りが、行われるようになった。（県一）

しばぎん 柴銀 自家消費の薪炭に課した小物成銀をいう。（広島）

じふく 時服 時候に相応する衣服。朝廷から毎年春・秋、または夏・冬の二季に、皇族以下諸臣に賜つた衣服をいう。（広島）

しほうぎん 四方銀 よつほうぎん。略して「四つ」ともいう。

正徳元年（一七一二）に鑄造された宝字を四つ刻した悪質の銀貨で、後に鑄造された享保銀の四分の一で通用した。（単位）

しまぶしん 島普請 島のまわりに干拓地を造るため、汐留めの堤防を造り、地面を固める普請をいう。広島城築城の際にも島普請が行われた。（県一）

じみやくにん 地見役人 土地の位を決める者をいい、その郡担当の郡廻り・代官及び御歩行目付・郡村の役人の中から選ばれた者によって構成された。（広島）

しもんせん 四文銭 文久通報をいう。当四銭・四当銭とも。

一枚で寛永通宝一文銭四枚に通用させた銭。明和五年（一七六八）から発行された真鍮四文銭が最初で、一文銭と区別するため裏面に波紋を鑄出した。天明八年（一七八八）いったん鑄造停止のち、文政四年（一八二二）から五年間増鑄。万延元年（一八六〇）から製鉄四文銭。文久三年（一八六三）には小型の銅四文銭も造られ銭貨の主流となった。広島藩では明治以前から四文銭を幕許を得て鉄の四文銭を鑄造していたが、世上信用がなく、天保銭（当百）を造ることとし可部の鑄物師・木坂文左衛門に鑄造を命じた。しかし巨額を要する藩費を補うには効果はなかった。

（日広・可部レポート）

しやくち 借知 広島藩では、赤字財政を建て直すために、歳出を切りつめ、諸経費を節約するとともに、家臣の俸禄を借り上げた。これを借知という。借知は寛永十六年（一六三九）が最初で、家中の給知割替を行うとともに、五歩（五〇％）の借知を

申し渡している。その後、延宝三年（一六七五）には総給知を代官支配とし、同時に藩士に給する物成を四つ五歩（四五％）渡しとして五歩の借知を実施した。以後、借知は恒久的に行われるようになった。ちなみに、宝暦三年（一七五三）には、来年から七ヶ年の半知（五割の借知）を行うと、家中に申し渡している。

（県一・大領）

しやそう 社倉 社倉とは、備荒貯蓄の制度の一つで、麦等（広島藩では原則として赤麦を、村の特別事情によつては米・雑穀を貯えたを貯える蔵をいう。広島藩では、寛延二年（一七四九）安芸郡矢野村尾崎八幡宮の祠官香川将監によつて始められ、以後、社倉は近隣の村々にも普及した。藩は明和七年（一七七〇）社倉の設立にふみ切り、「社倉法意頭書」を發布し、設立を具体的に指示した。これに基づいて天明六年（一七八六）には、広島藩のほぼ全領内に社倉が設立された。広島藩の社倉は、救荒対策と農民への社倉麦貸付による利殖を目的とし、藩の御貸麦と農民の持高に応じた出資等をもつて元麦とし、救麦（穀）・永貸穀・永利穀の三種を貯えた。なお社倉には、割庄屋の下に四人（郡

により異なる）の社倉支配役・庄屋の下に一人の拾人組頭取（麦庄屋と称す）および組頭の下に十人組頭（五人組二組を拾人組とした。概ね長百姓が兼務）を置いて、管理・運用にあたらせた。ちなみに、文政六年（一八一三）高宮郡上原村では、社倉麦二四石一斗九升四合七勺（社倉麦二三石四斗九升・刺麦七斗四合七勺）の内刺麦から、蔵下年貢二斗・十人組六人給三斗・舛取給七升・筆者給二升・縄俵仕替井手伝夫鼠喰升欠一斗四合七勺を差し引き、残りの二三石五斗を社倉麦として貯えている。なお、社倉

麦の貯穀が不足する場合には、囲初（代替に麦を貯蔵の場合）から麦を流用することがあった。例えば文政六年（一八一三）高宮郡上原村では貯蔵の麦二三石五斗に、囲初からの麦五石九斗二升を転用して二九石四斗二升とし、その内訳を、一七石一升六合を百姓七二人分の救用、一二石四斗四合を永貸麦用に充てている。但し、後に囲初からの転用分は返却している。ちなみに、上原村の社倉麦の一俵は三斗三升であった。（県二・上原村諸控）

しやそうぎん 社倉銀 広島城下町をはじめ町方では、慣行的に、家畑の売買分一銀を積み立てて、町の公金にすることが早くから行われていた。城下町ではこれを社倉銀と称して、町組の自主的な管理のもとに、常時は低利で貸付を行い利殖をはかつて、非常に備えた。ちなみに、この社倉銀は享保十七、十八年（一七三二、三）の飢饉に際し活用された。（新三）

しやそうほうじようじゆ 社倉法成就 ↓救麦（穀）

しやそうようがかり 社倉用懸 社倉の運用・管理等についての指導・看視等を司るために、設けた職と思われる。ちなみに、文化十年（一八一三）御勘定所の代官手附下田市十郎が、沼田郡の社倉用懸に任用されている。（横山）

しやにち 社日 春分及び秋分に最も近い前後の戌の日をいい、土の神を祭つて春は成育を祈り、秋は収穫を奉養する。春のを春社、秋のを秋社という。（広辞）

しやまい 社米 給知特有のもので、村の神社の費用としてあてられる米をいい（この制のない給知もある）、年貢米から（例えば、文化九年、沼田郡相田村の給主関左内は社米五升を、また、同年同村

の給主高野直衛は、社米三升)さし引いた。江戸中期以降になると、すべての知行地で行われるようになった。(横山)

しやまい 車米 ↓車貸し

しゆ 朱 *秤量の単位で、一両の二四分の一が一朱、一両は二四朱、両とは重量の単位。 *江戸時代の貨幣の単位で、一朱は金一両の一六分の一、また金一分(歩)の四分の一。 *利率の名目で、百分の一の歩合、一割の十分の一、または分(歩)の十分の一。 *菓種の重量で、ふつうの四匁を一朱というが、四匁四分、五匁のこともある。

しゆいんだか 朱印高 ↓拝知高

しゆいんち 朱印地 將軍の發給する朱印状によつて土地の所有權が認められ、年貢・課役を免除された寺社の所領をいう。大名領・旗本領にもあるが、通常は寺社領に限った。將軍の代替ごとに朱印状を示して所領の確認(御朱印改を受ける必要があった。(日用)

しゆうしあらためごようがかり 宗旨改御用掛 宗旨改御用

懸。 宗旨改御用掛とは郡内における宗門改の直接指揮者で、割庄屋格の者を充てた(割庄屋・同見習が兼務する場合もあった)。任務は庄屋を指揮して「宗旨人別帳」や「代判願書」を作成させ、代官へ提出させることであつた。八月の宗旨改の際には立会した。なお、宗旨改御用掛は宗門御用懸、また、宗判方御用掛ともいう。(横山)↓代判願書

しゆうしてがた 宗旨手形 宗門手形。 ↓寺請証文

しゆうしにんべつあらため 宗旨人別改 宗門改ともいう。

幕府は寛永十二年(一六三五)に津川権兵衛を広島藩に派遣して藩内の宗門改を実施している。広島藩では、宗旨鉄砲改奉行(元禄九年に設置、以前は切支丹奉行という。文化六年からは宗旨鉄砲奉行を廃し、「郡廻り」の兼務が年一回出郡して、宗門改を実施した。その際、寛政三年(一七九二)以後においては、檀那寺・割

庄屋・庄屋二人の村は、一人が出頭し、檀那寺は人別帳に記入されている者が、門徒であることを証明するため寺印を押印した。なお、宗旨人別帳作成の責任者は庄屋であり、事前に代官を経て宗旨鉄砲改奉行に提出した。ちなみに、庶民はキリシタンでない証拠として、次のようなことをする者があつたと言われている。すなわち、財のない者は米を、財・米のない者は雑穀や野菜を寺院に寄贈した。何もない者は寺院の掃除・草取等をした。寛文十一年(一六七二)麴屋の乳母等五人のキリシタンを己斐村河畔において火刑にする。(躍場・白木・玄徳公済美録)

じゆうたくはま 住宅浜 塩田経営のうち、塩浜内に家族と居住して、直接経営(專業浜師)を行うことをいう。貞享元年(一六八四)竹原塩浜には住宅浜が一八軒あつたが、元禄十五年(一七〇二)には一六軒に減少した。(県一)

じゆうにんこう 十人講 十人(元人を除く)で構成されている講をいう。年一回の会を開き、期間は十年であつた。初会には連中が枕掛け銀を持参して枕銀を揃え元人に渡したが、第二会からは連中の入札に付した。(広農)

じゆうぶいちうんじよう 十歩一運上 人民所有の山林で伐採した木材、または薪炭等は、妄りに他方へ移出することは禁

じられていた。但し、広島城下へ移出するものに対しては、移出する物品の価額の十分の一を銀納させた。これを十歩一運上、または十分の一税という。この運上銀取り立ての始まりは寛永五年(二六二八)で、同年廿日市・古江、その後大野・五日市・矢野など藩内二十九ヶ所に設けられた口屋ないしは十歩一所によって徴収され、その品木は、綾木・榑木・つづら草・木地材・折敷材などの林産加工品の原料材や燃料材であった。後にはあらかじめ年間の運上銀を見積もって責任者の請負制で行われる所もあった。なお、竹原塩浜へ賀茂・豊田・安芸より薪を伐り出す者、また、浦辺島々の山から柴を伐り出す者へも、この税を課した。これを「沖十歩一銀」(沖十歩一運上)ともいう。(県一・大崎町史)↓口屋

じゅうぶいちぎん 十歩一銀 広島町では、家屋の売買に際して十歩銀(代価の十分の一)五歩銀(代価の百分の五)を納めた。市街地では十歩銀を出し、半額は市街の雑費に充て、残額は藩へ上納させた。五歩銀はすべて該村の雑費に充てた。その後両税とも藩へ上納させ、臨時に町村の雑費として補助した。腰林の樹木でも、所有者は勝手に伐木することは許されず、伐木せんとする者は、伐木の使用目的を定めて藩に請願し、その調査を受けて許可された。その場合に、使用目的以外の物品を製作することは許されず、またその製品は居村外へ売ることも許されず、違反した場合には、その物品は官に没収された。なお、居村内に売る時には、その代価の十分の一を上納した。その納税を称して十歩銀という。(芸志)↓腰林

しゅうもんおくりてがた 宗門送り手形 ↓送り手形

じゅうろう 十老 ↓検校

しゆくおくり 宿送り 藩の書状や荷物を運送することをいう。

しゆくかご 宿駕籠 雲助駕籠ともいう。宿駅に置かれた粗製の駕籠であるが、御定賃錢で旅する者は、さらに粗製の駕籠となり、これを問屋駕籠という。(日広)

しゅうみょうがきん 酒造冥加金 安永元年(一七七二)以降、広島藩では免許税としての酒造冥加金の徴収をはじめた。

その後享和三年(一八〇三)・文化三年(一八〇六)ごろには豊作で、米価下落のため新規の営業を認め、また従来の株高にかかわらない増石を、願い出させることにした。これは酒造冥加金の増徴をねらったものであろう。(県二)

しゅうせしゅうもん 出世証文 借銀証文の一つで、出世(金儲)したならば返済するので、それまで猶予してほしいということを書いた証文をいう。(広農)

しゅうまい 趣法米 広島藩では恵蘇郡の天保の凶作等による農村疲弊防止のため、村に対して貸米(趣法米という)を行い、これまでの年貢未進や拝借米銀の上納を免除した。そのかわりに利子二割で年賦償還をさせ、これを郡役所で管理し、生産開発や借銀返済に苦しむ農民に融通した。ちなみに、元治元年(一八六四)における恵蘇郡の累積借米高は六七四二石余で、全村とも村高より多かった。(県二)

じゅんけい 閏刑 士人・僧侶・婦女などに対し、正刑以外に科した刑罰をいう。広島藩では、切腹・閉門・逼塞・遠慮・小普請・差控などの刑がそれであった。(広辞・芸志)

しよあしがるねんぶおさえまいしよもん 諸足輕年賦押

米証文 各種足輕・輕輩の一代者に対する押証文であり、組ごとの連帯証文により、小頭または組頭の保証を必要とした。但し、右記以外のことについては不明である。(県一)

しようか 小家 こや。＊小さい家、貧しい家。＊村内において一人前と認められず、ある程度本百姓に隷属していた家という。次三男が分家した場合や、下人が主家から独立したものがこれに当たる。

じようかこ 定水主 ↓浦水主

しようがつさしとめ 正月差止め 享保十七年(一七三二)の大凶作以後不作が続き、且つ行政への不信が、年貢米の取り立てに影響するようになると、藩は割庄屋をして、年貢米未進の村に制裁を課すようになった。その一つが「正月差止め」であり、年内に年貢米を皆済できない村に対して、餅つき・初詣など一切の正月行事を差し止めた。(白木)

じようこまぎん 定小間銀 ていこまぎん。広島城下町の町財政は、各町内で要する費用としての小間銀と、町組全体で要する費用としての大割銀とがあり、ともに家の表間口の広狭に応じて家持が負担した(大年寄・町年寄等は役引により免除、借家人も免除)。宝暦八年(一七五八)藩は町民の負担軽減を理由に、小間銀・大割銀を藩庫に納入する水役銀・その他の續銀の額を一括して定格銀とし、これを定小間銀とよび、月割で徴収することにした。その経理は五組の大年寄の中から大割年番が出てその経理にあたり、その経理内容は、家持に公開することを義務

づけた。これによって定格銀以外の諸續銀の徴収は禁じられ、もし臨時支出の必要がある時には、町奉行所支配銀に繰り入れられていた十歩一銀(家の売買に対する税)の半分から、支弁することにした。(県二・芸志)

じようし 上巳 五節句の一。即ち陰暦三月三日。主に女兒を祝う節句で、ヒナを飾り白酒・草餅・菱餅・桃花などを供えてヒナ祭をする。不浄を祓除するために祝賀し、祓をし、また曲水の宴を行った。(広辞)

じようだい 城代 江戸幕府の職制中の大坂城代・駿府城代の略。大坂城・駿府城の警備と、管轄する地域の訴訟を担当した。初期には二条・久能・伏見にも置かれた。これら城代には譜代大名や上級旗本が任じられた。(日広)

しようつくのしんかく 正徳の新格 広島藩は正徳二年(一七一三)代官制を廃し、郡奉行の下に「郡支配」を(従来の郡廻り六人を充て、百石加増し諸郡を支配した)、その下に「所務役人」(郡代官ともいう・大割庄屋格・領内を四〇区画で四〇人・切米一二石三人扶持・役料銀一ペ目・在職中姓の名乗・藩士待遇として帯刀皆具・村方の請願届受を、その下に「頭庄屋」(有力農民を充てる。各區画に二人・領内八一人・御扶持人格二人扶持・役料銀三百目)を、その下に「庄屋」(扶持役銀支給)を、その下に「組頭」(扶持役銀支給)を置き、直接の郡中支配に関与させた。その後享保三年(一七一八)三月十一日以降領内に一揆が起こり、そのため藩は三月廿二日(説には六月十二日)に、城内の郡役所を廃して各郡元に代官所を置くとともに、「所務役人」「頭庄屋」を罷免し代官

じようもちぶ 状持夫 庄屋の事務を補佐し、とりわけ村内や

他村へ書状や、藩から下達された重要な通達等を送送する常置の職に在る者をいう。宝永元年（一七〇四）の定では状持給は禁止されていたが、宝暦十年（一七六〇）の覚では、

○状持給は一人に付一石五斗迄とする。但しそれ以下で支給している村はその通りにすること。

○それより多く支給している村は、一石五斗迄に改めること。

○「小走り」に状持夫を兼ねさせている村は二石迄認めるが、状持夫の人数を増してはならないこと。

以上のように定めている。ちなみに、文政二年（一八一九）佐伯郡原村では状持夫は置かず、「小走り」に兼務させ、米二石を支給している。（広農）

じようものなり 定物成 ↓物成

じようや 庄屋 庄屋は郡廻りと代官の詮議により、各村に一名（村高やその他の事情によつては二名）が置かれた。庄屋の重要な任務は年貢米の収納であり、その他、藩の法令や通達の村民への伝達・農作業（田植・山焼など）の報告・差継吟味等への出

役・災害の報告などが義務として課せられていた。庄屋の給料は、宝永元年（一七〇四）七月の規定では、蔵入地と明知・給知入り組村の明知分については、高百石につき米二石を基準とし、高千石までの村は、高百石を増す毎に五斗ずつを増。但し、高百石以下の半高は十石につき五升増。但し、千石以上の半高は十石につき三升増。丸給知村と、明知・給知入り組村の給知分については高百石につき三斗とした。その後延享元年（一七四四）

蔵入・明知の村では藩の命により、高百石につき米一石とした村もあったが、概ね宝永元年の規定が守られていたようである。ちなみに、慶応二年（一八六六）即今の形勢により、庄屋以上の者の帯刀が許された。（江田島久松家文書・白木・広農）

じようやくだされきゆう 庄屋被下給 ↓庄屋三歩給

じようやさんぶきゆう 庄屋三歩給 庄屋被下給ともいう。

創始年は不明（元禄七年には実施されていた）であるが、蔵入地・明知では藩より庄屋に対して、定物成（物成の村あり）百石に付米三斗を差紙で加給したと思われる。これを庄屋三歩給といい、三歩米ともいう。年貢徴収責任者（庄屋）に対する報償の意味を持っていた。従つて庄屋給とは別に支給した。しかし、沼田郡相田村の給知では、給知高の三厘を給主より給庄屋に支給していたようである。（広農・横山）↓三工役

じようやはんやく 庄屋半役 庄屋の事務には、米銀方事務（年貢米その他の税に関するもの）と、民政方事務（農作業等に関する報告、村内のもめごとの調停等）とがあり、何れか一方の事務を司る庄屋をいう。但し、何れを司ったかは不詳。

じよくにんあらためちよう 職人改帳 広島城下町における一般の職人は、すべて藩の作事所に届け出た後、職人改帳に登録（帳付け）され、藩の随時の徴用には、優先的に応ずるように義務づけられていた。正徳五年（一七二五）には、職人改めを行い、作事所焼印札を交付している。（県一・芸藩襍誌）

じよくにんみずやくぎん 職人水役銀 大工・木挽・左官・鍛冶・桶屋・畳屋等が営業を藩に出願して、許可を受けた者へ

の課税を職人水役銀という。広島町在住の諸職人は往昔藩主は居城内諸家屋の修理を要する時には、一ヶ月に一日宛招集して、無償で使役していたが、寛文十一年（二六七一）から代銀（水役銀）に代え、一月より六月までの分を十二月に、七月より十二月までの分を翌年六月に徴収し、それを定雇職人の給料に充てた。

諸職人には本役（持家）と半役（持家なし）とがあり、例えば本役の大工は一ヶ月銀貳匁六分（貳工分）の本役銀を、半役は一ヶ月銀壹匁三分（壹工分）の半役銀を納入した。（但し、本役・半役とも閏月のある年は十三ヶ月分を納入）なお、大工・左官など棟梁職にあった者は扶持職人であって、多くは家屋敷を貰って拝領屋敷と称し、一般の町役を免じられ、家中屋敷に準じた扱いを受けていた。寛文十一年（二六七一）以前の農村在住の諸職人は、本業が農業であるので、農閑期にのみ職を稼ぐものとされ、すべて半役とみなされ、しかも、高二石五斗以上を有する者のみが職人として許可され、他郡で働くことは許されなかった。水役銀は半役一ヶ月一日分の日当（郡により異なる）を藩へ納めた。但し、官用のあるときは、広島に徴用・就役させられ、その工数をもって水役を勤め、未進は米で納入した。また、郡夫割で徴収されたときには日当を支給された（高田郡三田村では、家大工は十五匁と米一升・舟大工は十八匁と米一升）。しかし、農村在住の諸職人については寛文十一年に改められ、徴用の職人には賃金を給し、別に水役銀を取立てることにしたといわれている。ちなみに、本役は一人につき高五石、半役は高二石五斗分が、壹歩米・厘米の対象から除外（職人引石という）されるとともに、一般の夫割は免除された。（芸志・白木・県二・剩語）

しよぐんかみとりやく 諸郡紙見取役 紙蔵では、番組の中から諸郡紙見取役を任命して郡中を巡視させ、官印のない紙類と、楮を任意に売買する百姓をとりしまるなど、犯罪の予防に当たらせた。（芸志）

しよけ 所化 ↓ 能化

しよしなかいしよ 諸品会所 広島藩は、十九世紀以降の国益政策の推進期に、国産諸品の額外移出を促進するため、天保八年（一八三七）尾道町に諸品会所（弘化四年諸品御役所と改称）を開設して、商事資金の融通業務を取り扱った。（県二）

しよしながた 諸品方 物産方ともいい、文化十四年（一八一七）積極的な国益政策の中核として、勘定所に設けられた役所で、国産開発・領外販売などを担当し、前貸による実質的な生産・流通統制を通じて、中間利潤の獲得を目的としたものである。諸品方は広島城下の太田屋七郎兵衛（鉄商）ら豪商数名を用聞とし、彼等から生産者に資金を貸与して国産の開発・助成をはかる一方、生産物を買収し占めて、江戸・京・大坂への移出・販売を行わせた。そのための下部機構として、郡中には郡単位で数人の「国産御用懸」を任命し、国産開発に必要な資金貸与と、製品買上げを保証するしくみをつくった。諸品方の蔵は堀川町にあった。その後、嘉永二年（一八四九）堀川町諸品役所を廃し、ここに木綿方役所を移した。（県二・広島市史）

しよだしべいぎん 諸出し米銀 村負担のうち、「諸出米」と「銀方の分」とを合わせて「諸出し米銀」という。延享二年（一七四五）賀茂郡兼沢村（村高三七六石七斗三升）では「銀方の分」と

して、入役銀・村用需要費・寺社関係費・その他・郡割銀・夫割銀・黒瀬組飛脚貸割・座頭暫女賄米をあげ、合計は、五一一匁(六石三斗九合)になっている。ちなみに、兼沢村では、定物成(二五四石七斗六升八合)と諸出米(二〇石九斗二升八合)・「銀方の分」との合計二八二石五合が兼沢村百姓の負担総額となっていた。(県一)↓諸出米

しよだしまい 諸出米 村負担のうち、定物成以外の雑租・村入用などを諸出米という。延享二年(一七四五)賀茂郡兼沢村(村高三七六石七斗三升)では、諸出米として、七厘米・秋毫歩米・種米利息・庄屋給・組頭給・筆取給・米計給・年貢蔵払米積賃・蔵払い諸入用・出飯米・入役米・座頭暫女賄米などをあげ、合計は二〇石九斗二升八合になっている。なお、諸出米には、物乞いなどに与える少量の米などがあつた。(県一)

じよち 除地 寺院境内や、免田畑居屋敷・無年貢の証文のある土地等で無税地をいう。(日法)

しよとりうんじよう 諸鳥運上 三谿郡においては、元禄十二年(一六九九)より、小鳥を取る者に対しては諸鳥運上銀(年四〇三匁)を課した。(広覚)

しよむ 所務 年貢米そのものをいい、物成の別称としても用いられた。また、田租以外の雑税をいい、収入の意味にも用いられた。

しよむやくにん 所務役人 正徳二年(一七二二)代官制を廃し、同年三月一日郡中に四十人の所務役人を設けた。所務役人は郷代官ともいわれ、郡中最有力の農民(大割庄屋階層)をもつて任

命し、居村を中心におよそ高一万石の村を支配(郡役所の指示事項の伝達・百姓が提出する諸願事務・郡役所から委任され処理できる許可事務・租税取り立てに関する請合事務等)させるとともに、在任中は苗字帯刀と廻村には乗馬を許し、御歩行の格式を与え、切米十二石三人扶持と役料として銀一貫目を給した。所務役人の旅費は、郡内の廻村は郡割、広島や郡外は藩の厘米より支給した。享保三年(一七一八)正徳の新格廃止により所務役人は廃止され、代官制に復帰し、割庄屋等がおかれた。(県一・白木)↓参考資料

しんがい 新開 寛永十五年(一六三八)以後の開墾地をいい、高を盛った新開と、高を盛らない見取新開との別があつた。なお、官吏がその任にあたる新開を見立新開といい、村落が共同して拓いた新開を村受新開といい、商人が行った新開を町人請負新田という。(広農)↓見取新開・見取米

しんがいだか 新開高 開発された新田畑が、一定の歛下年季を経た後、藩の地詰をうけて、公式に高付されたものをいう。

しんがいがぶぎよう 新開奉行 宝暦七年(一七五七)に新開奉行および新開方綿改所を設けて、これまで町奉行の支配下にあつた広島近郊の新開二八ヶ村を独自の行政単位とした。これは領内新開地の高付政策の一環であり、同時に「入役等相減し、上納滞無く」を期しているごとく、政務の簡素化を意図したものである。(県二)

しんぎん 新銀 新たに鑄造発行した銀貨、特に享保銀をいい、銀八銅二の割合で、従来の四方銀の四倍の価値があつた。(單

位)

しんせいぐみ 新整組 ↓浮組足輕

しんそう 神草 朝鮮人参のことをいう。元治元年(一八六四)山
県郡大朝村で藩宮の神草畑を開いたが、その後間もなく廃業し
た。(県二)

しんたて 新建 新建山。↓御留山

じんや 陣屋 *江戸時代、無城の大名・地頭(幕臣では一万石未
満の知行地を与えられた者)などが、領地・支配地に設置した屋
敷・役宅をいう。(古用) *郡代や代官の居所、また、軍兵の
営所・軍営や宿衛の詰所をいう。(広辞)

す

すいちようば 水丁場 出水の際、川筋堤防の護衛にあたる場

所をいい、例えば、白島の材木場に設けられた水尺が水かさ一
丈二尺を越えると、家老をはじめ藩士卒が出勤し、所定の丁場
の護衛にあたった。なお、藩は寛文十年(一六七〇)に、三家老
の水丁場を定めた。(県二)

すえぶち 居扶持 ↓官途銀

すぎかみおんうちがし 過紙御内貸 紙蔵は楮栽培人から買
い上げた皮楮を、各村の紙漉人に交付し、紙の種類とその数量
などを決定して割り当てて漉かせた。この場合に、割り当て以
上の紙を願いによって漉く者へは、その買い上げ代銀の一部又
は全部を、村単位で前貸したようであり、この前貸を「過紙御

内貸」というのではないかと思われる。ちなみに当年中に交付
した。(横山、文化十年諸扣帖)

すくいむぎ 救麦 救穀。社倉に貯えられる麦(麦不足の村は米・

雑穀)のうち、飢饉の際の救済に充てるものを救麦(穀といい、
六ヶ年毎にその村の戸口を調査し、持高四石未満(村により異な
る)の百姓および浮過の者を救済の対象とした。救済の時期は
十一月から翌年四月迄とし、男子十五才以上六十才未満の者は
一人一日二合、女子は同上二合二勺、男女共十四才以下六十才
以上は同上二合とした。救麦を救助に要する額まで貯穀した場
合、これを社倉法成就という。(矢野町史)

ずくせん 銃銭 ↓鍋銭

すくみどり すくみ取り 福島時代の屋敷に対する賦課方法

をいい、慶長六年(一六〇一)福島正則は屋敷の検地高の全額を
収取した。なお、浅野時代では町屋敷の地子に対して、寛永元
年(一六二四)ないし同十五年まで適用された。(県二)

すてふだ 捨札 罪人の罪状・氏名・年令を書き、公示した高
札をいう。磔・獄門など重刑に用いられ、刑の執行後も三〇日
間立てておいた。(日用)

すみくちしようもん 済口証文 内済済口証文ともいう。近世

訴訟の際、内済(和解)が成立して、被告・原告双方で取り交わ
した証文をいい、これが裁判役所に提出され認められれば、裁
許(判決)とほぼ同様の効力があつた。(古用)

すんしぎん 寸志銀 藩財政の窮乏を補うために、一般の百姓
からの借入銀(百目以下)をいう。月五朱の利息をつけ、毎年利

息を払うものであったが、借入が重なるにつれて、古い分の利息の支払いは停止し、元金も三十年賦とした。(広農)

すんしまい 寸志米 広島藩では農民が、年によつては大豊作になり、予想外の余剰が生じた場合には、口実を設けて寸志米(上納米)を藩へ納入した。例えば宝永六年(一七〇九)は豊作であったので、お殿様入国祝儀として上納米を願い出て、聞き届けられている。ちなみに「享保百姓一揆」に際し、山県郡農民が藩への要求事項(二十七箇条)の一つに、「先年上ケ置申寸志米、殿様不被為召上候間、御代官所預り置、悪年之御御下可被下由、当年御下ケ可被下候」の記事がある。以上の記事から推察されることは、寸志米は農民が自主的に上納したということと共に、農民への救恤米としての意味も含んでいたと考えられる。なお、寸志米は農民の意志によつてではなく、暗に藩の上納するようにとの強制があったのではないかと考えられる。(県史近世資料編) 文政六年(一八二三)高宮郡上原村の庄屋らが、御役所宛の願書には「(前略)指上置寸志米、両度御下残六石御座候処、此度御慈悲ヲ以、御下被為遣難有、慥ニ頂戴仕候(後略)」の記事がある。(文政六年上原村文書) 寛政五年(一七九三)佐伯郡能美島の各村(十六村)は、従来凶作により難渋していたが、今年は難渋も柔いできたので、寸志米(百俵)を差し上げるといふ願書を藩へ出している。(踊場)

せ

せいけい 正刑 一般的な刑罰をいう。広島藩では、死刑(磔・獄門・火罪・斬罪・討首)・永牢・追放(領分追放・郡追放・村追放・城下追放)・附加刑(入墨・闕所・曝)・牢舎・追込などの刑がそれであった。(芸志)

せいとうまい 政道米 町村において警察事務(犯人逮捕等)と犯人の護送及び監視に従事する者に支給する米をいう。(広村)

せきしゅううんじょうぎん 石州運上銀 大森銀山で採取した銀の大坂への輸送には、赤名峠を越え三次——吉舎——甲山——尾道のコースと、吉舎から上下——府中——神辺——笠岡へ出るコースとがあった。尾道・笠岡からは瀬戸内海を東上し、大坂の御蔵に搬入された。この銀を石州運上銀という。(県二)

せがき 施餓鬼 法会の一。餓鬼世界に墮し、飢餓に苦しめられている生類または無縁の亡者に飲食を施す法会。釈迦牟尼在世の時、焰口餓鬼の請によつて、阿南が行ったのに始まったという。ちなみに阿南は釈迦十大弟子の一人で、釈迦入滅まで常に侍従した。(広辞・国大)

せきぶね 関船 *海賊を防ぐために使用した早船で、下関で作ったからいう。艀数四二挺立から八〇挺立まであった。(広辞) *中世の海賊が海上の要衝に関所を設け、航行する船舶から通行税を取ったことから、関船と呼ばれるようになったといわれている。

ぜに 銭 せん。「ぜに」という場合は、貨幣の異称の意で、「せん」と読む場合には「匁」の唐名の意。(広辞)

せんごくふ 千石夫 ↓壹歩米

せんちやかかりぎん 煎茶掛り銀 領外から広島町へ茶を移入

した者に課す税銀で、元禄十年(一六九七)から行われ、宝永六年(一七〇九)に廃止された。(県一・吉長公御代記)

ぜんびこく 全備穀 ↓永利穀

せんわりかじ 千割鍛冶 千割鍛冶(細割鍛冶ともいう)は、長割鍛冶に次ぐ規模のもので、長さ七寸から一尺余の鍊鉄をつくる鍛冶をいう。(県二)

そ

そういりあい 惣入会 村中入会山のうち、村内の全農民によ

って利用されるものをいい、他に村内の郷を単位に利用される郷中入会・小入会などの形態があった。(県一)

そうぐんむしょ 惣郡務所 ↓郡御用屋敷

ぞうしきやく 雑式役 雑式は雑色とも書き、古くは蔵人所雑色などとよばれて下級官人として雑役を勤めた人をいうが、中世の寺社、武家などに隷属して雑役を勤める人も多くこの名で呼ばれた。その仕事は走り使いや掃除、警固など雑事が中心であった。(廿日)

そうじゃ 総社 総社は国府の所在地に建てられ、参拝の便宜のため数社の祭神を一箇所に統合して、勧請した神社の称。一国の総社。寺院の総社などがある。また合祀せず、鎮守または一の宮を総社とする所もある。(広辞)

そうじょうや 惣庄屋 給知方百姓への政治的支配は、代官が

任命した村庄屋が行った。従って、村庄屋は明知・給知全般を支配したので、惣庄屋ともいわれた。なお、給知方では、惣庄屋に対し、給米を高百石につき米三斗を負担した。(白木)

そうばかいしょ 相場会所 相場会所は、綿改所と米会所から構成され、米・雑穀・綿・相場物の御取引を行う役所で、宝暦五年(一七五五)に設置された。城下町の有力町人から頭取七名・懸り役一四名が選ばれて運営に当たった。なお、明和元年(一七六四)に相場会所を、銀山町に移した。(知新集)

そうびやくしょう 惣百姓 検地帳に登録された村中の本百姓の総称をいう。(県二)

そうやまもり 惣山守 慶安三年(一六五〇)に、それぞれ郡毎に大割庄屋格の中から二、三名置かれた職で、山守役(宝永元年の定では給米〇・三石〇・五石ともいい、領内の林野の管理・育成にあたった)が、享保十二年(一七二七)に廃止され、代わりに郷目付(代官役に属し「郡廻り」の指示をうけた)が置かれた。(県一)

そえふだ 添札 ↓圖取制

そく 束 たばねたものを数える語で「たば」ともいう。稻・草花・半紙・竹・苗など広く用いられる。ものによってその量は異なり、稻は一〇把、藁目の矢は二〇本をそれぞれ一束という。ふつうは長さで三尺の縄で縛ったものを一束という。(単位)

そくしゅう 束修 寺子屋入りをするとき持参する金品をいい、銭・酒を持参することが多く、また、日用品や魚・茶です

ませることもあった。(日用)

そさつりよう 粗札料 藩府への上納銀を藩札で納入する際には、汚損した藩札があるという意味であろうか、余分の藩札を上納させられた。これを粗札料という。(広村)

そではん 袖判 文書の右端の余白に花押を書くのを袖判といい、日付の下などに書くのに比べれば、非常に尊大・権威的な形式である。

た

だいいち 大一 第一。 ↓三笠附

だいかん 代官 *幕府は五万石以上十万石未満の天領の支配のために、六〇人程度の代官を置いた。代官は年貢の徴収・法令の伝達・訴訟の受理と審議・場所によつては鉱山・山林の管理も行つた。役高は一五〇俵程度で、旗本の役職としては下位に属した。(日広) *広島藩における代官は郡毎にだいたい二名ずつ置かれ(全部で十八人)、知行高百石以上二百石以下の侍士をあてた。職務上は郡奉行・勘定奉行の支配下におかれ、所管郡中には代官所を置き(広島に於ては各自の邸宅に事務所を設置)直接郡方の支配に任じ、諸役の賦課・収納、郡の責任で施工する普請、割庄屋・村役人の監督・指揮等にあたつた。代官は通常城下の役宅で事務処理にあたつたが、春は麦の作柄の見分や、年貢米上納後の農民の食生活の状況視察・社倉貯麦への見通しをつけるため、秋は租米の津出し状況を視察(享保百姓一揆以後

は中止するためなど、少なくとも春秋二季に入郡した。その他所要によつては随時入郡して、郡元(郡府)の代官所に出仕した。代官には代官の事務を整理するために、勘定所物書役・番組(後に勘定所支配足輕と称す。五〜六人、一部は常住在郡)・代官所手附(勘定所支配の者で若干人)・村廻り(宝暦七年(一七五七)以後は歩行目付と改称され、年番で一人を代官所に置いたが、やがて一時中止され、文化十年(一八一三)に年番制は復活した)が置かれた。ちなみに、代官は司法事件には関係せず、百姓の事件の取り調べは歩行目付が行つて、罪科を申し渡した。(白木・横山・芸志・新四・九十年の枯葉) ↓歩行目附・代官所

だいかんしょ 代官所 代官は広島にいて執務した。元来御役所とは郡奉行が執務する役所の謂である。従つて、代官が郡奉行が執務する御城郡御役所の内に、席を与えられた場合には、代官の席が何郡御役所となつた(代官が自宅執務する場合もこれに当たる)。代官が郡奉行の役所を離れて、別の郡御用屋敷や郡元で執務すると、代官の席は郡御代官所であつた。なお、郡元には番組が常勤していた。(白木)

だいかんせい 代官制 正徳二年(一七二二)代官制を廃し、郡奉行(二名)下に郡代――所務役人(四〇人)――頭庄屋(八一人)――庄屋――組頭という制度(正徳新格)をしいたが、享保三年(一七一八)三月廿二日に、一揆農民の要求を容れ、所務役人・頭庄屋を罷免するとともに、城内の郡役所を廃し、各郡元に代官所を置いた。しかし同年六月十二日代官制に復した(時期不詳)。その後文久三年(一八六三)城下にある各郡の代官役所を廃し、元の郡方吟味屋敷に代官役所を設け、郡中には郡御用達所を設

けた。(吉長公御代記・芸藩志)↓正徳の新格

だいかんそうやくしよ 代官惣役所 ↓郡御用屋敷

だいかんてつき 代官手付 ↓代官

だいきくまい 大黒舞 正月の祝福芸能の一つ。大黒天に扮して各戸を訪問し、祝言を唱える遊芸者の存在は、室町時代にはすでに認められた。江戸時代には大黒天の仮面をつけ頭巾をかぶり、三味線による祝福の歌にあわせて踊る形態がうまれた。

(国大)

だいそく 大束 松の割木を大束という。高田郡三田村では、正徳年間に藩用に作った大束は、長さ一尺五寸廻り二尺の束にした。ちなみに、榎・槇などの割木を小割木という。何れも燃料、特に大束は鍛冶用として使用した。(広村・三田雑記)↓小割木

だいとうまい 大唐米 米粒がやや小さく細長で赤味があり、赤米・太米たいまいともいう。不良米の一種で、年貢米には一粒でも混入することは許されず、この撰別は特に厳しかった。宝暦六年(二七五六)広島御米蔵で年貢米を収納する際の日雇人夫の賃米の規定には、「大唐米撰忝俵に付七合、但し同日大唐米撰は忝俵に付壹升」となっていた。(広庄)

だいはんねがいしよ 代判願書 代判願書は、宗旨人別改においても、必要に応じて書かれた。年一回八月に実施される宗門改においては、檀那寺・割庄屋・庄屋(二人いる村は一人・年寄は、その場に必ず出頭しなければならないが、病氣(医師の容態書が必要)その他の理由で出頭できない場合には、代役として、

檀那寺には近在の他の寺、割庄屋については同役の者、庄屋・年寄については同役の者、同役不在のときは上役が、それぞれ出頭した。但し、代役が出頭する場合には、庄屋は事前に宗旨鉄砲改奉行に代判願書を提出し、許可を得て置かなければならなかった。↓宗旨人別改

たうえまい 田植舞 田植の動作を模倣的に演ずる踊りの総称。小正月(陰暦で正月十四日から十六日までの称・二番正月)などに、その年の稲の豊作を予祝して、寺社で演じられた。(国大)

たかかりもの 高掛り物 定物成に付加される貢租で、忝歩米と厘米とをいう。

たかごめ 高籠 ↓鉄山役高

たがたうけ 田方受 雑穀・木綿・麻苧・紅花・藍などを栽培する耕地で、稲作を凌駕する物産地であれば、田方(稲を植える耕地)と同じ地位にあるものと認めた。これを田方受という。(芸志)

たかつき 高付 石高(斗代)が定められている土地、つまり、年貢米が賦課される土地をいう。

たかまえなつしよ 高前納所 高前納所とは、秋上納米(定物成・忝歩米半納・種米利息)・諸入用(庄屋以下村方諸給分・諸上納米銀納入費・免割年行司小帳辻)・夏割(忝歩米半納・厘米・小物成銀など)・夫割(夫割年行司小帳辻)・郡割の五種の租税を合計すると、百姓の負担は持高に等しいという意味である。天保六年(一八三五)高田郡三田村御明知方では、高一〇七四石八斗七升八合に対し、上記租税の合計は一〇二石四斗九升で殆ど高に近

かった。(三田雜記)

たかもちひやくしよう 高持百姓 検地帳に登録されている本

百姓をいう。(県二)

たかやくぎん 高役銀 広島藩は藩財政補填のためか、宝永二

年(一七〇五)に郡方蔵入・給知ともに、高一〇〇石に付銀二五〇目の高役銀の提出を命じている。(顕妙公済美録)

たぐみ 田組 村では近隣が協力し、組(グループ)で田植を行った。その組をいう。(広農)

たくわえもみ 貯粃 寛政二年六月(一七九〇)に、広島藩は幕令の「囲穀いたし候様」をうけて、「是迄之貯粃直二右之内(囲穀)江見込二相成、已来御囲ひ粃と唱二相成」の触書を出しているので、貯粃とは、以前から郷倉に貯えさせておいた詰米(後に置米と改称)ではないかと思われる。(躍場)↓詰米の制

たけうんじょう 竹運上 ↓竹代銀

たけだいぎん 竹代銀 浅野氏が創始したもので、竹に賦課する税であり、請竹銀ともいう。竹は福島時代から各郡とも三年に一度の割合で、竹のある村で伐らせて現竹で納めさせていたが、元和七年(一六二二)に「夫役多く遠郡は別て難儀に付」、代銀を取り立てる(六月と九月に半分ずつ)竹運上の制に改めた。寛永四年(一六二七)竹藪を調査して生産額を代銀に見積り、寛永五年よりその三分の一ずつを、同七年より毎年銀で取り立てた。これを竹代銀という。郡中受竹という言葉通り、郡単位で課税した。但し、沼田・佐伯・高宮郡は竹で召し上げ、遠郡の奴可・三上両郡は竹代銀を免除した。(県二)

たしだか 足し高 ↓足知の制

たしちのせい 足知の制 本来、藩士に給与される家禄は世襲を原則とし、減禄給付を例とした。そして、本人の武勲・役功等によって随時加増した。また、それとは別に、元禄八年(一六九五)から足知の制を始めた。この制は、家禄三百石以下で目付以上の役職を勤める者に対しては、その役職にある間三百石に不足する禄を加え(足し高・足し米)、また、一定の職務手当(役料)を支給するというものである。なお、正徳三年(一七一三)には、足知の称を役料と改めるとともに、目付以下の役職に対しても、禄高不相応の場合には、役料を付けるのが一般となった。(県一・新二・事蹟緒鑑)

たしまい 足し米 ↓足知の制

たそんいりあい 他村入会 ↓村々入会

たたみおもてぜい 畳表税 広島藩では、御調郡へ職員出張させて畳表を購入させ、購入した畳表は広島作事所へ送り、藩庁使用に供し、もしくは藩士へ売却した。この官用の畳表の購入が終わった後、その他の畳表は小さい尾道の畳表問屋へ送られ、問屋から市内の需要者・他郡村・他国へ売却した。この場合、他郡村・他国等への売却には税を徴した。これを畳表税といい、問屋から税銀を在尾道町運上奉行へ上納させた。税額は種類によって差があり、例えば書院上畳表は一枚につき銀三分八厘、呉座は一分三厘であった。(芸志)

たたら 鑪・炉 元来送風用の「ふいご」をいうが、中国地方では砂鉄精錬用に大きい「ふいご」を使用したことから、砂鉄

精錬用の「ふいご」のことをいうようになり、更には、製鉄作業そのもの、及び「たたら」を含む作業場全体を、「たたら」と呼ぶようになったものと考えられる。なお、近世以降「たたら」には鑪(炉)の漢字があてられた。(県民)

たたらふだ 炉札 炉とは「ふいご」のことをいい、砂鉄からの製鉄に使用した。炉には運上銀が課せられ、これを炉札という。炉の大小・性能に応じ上鈔・中鈔・下炉に分けられ、運上の額にも差がつけられた。(県二)

たちがえりぞうりゅう 起返造立 寺社など建立に際して、新材を使用せずに元の古材のみを使って、再建することという。

たてがみ 堅紙 普通に用いられる横長の紙で、紙の繊維の漉目が堅になるところから堅紙と呼ばれる。漉目に沿った堅には裂け易いが、いわゆる「横紙破り」は裂け難い。江戸時代には公文書用紙と定められ、最も普及した美濃紙の中判で、ほぼ縦二八糎余・横四一糎弱が一紙の大きさである。

たてきりがみ 縦切紙 ↓折紙

たてもの 立物 ↓前立

たにんばらい 他人払い 自分の負担すべき年貢米を、他人が生産した米で、他人に支払わせることをいう。(広農)

たねまいりそく 種米利息 元和五年(二六一九)浅野氏入国後、直にはじめたもので、二、三月の端境期に百姓に種米を貸しつけ、秋に元利を返済させた。元来は救恤的性格をもっていたが、後には藩の一方的な利米収取へと目的が変わり、給知の場合には給人の収入になった。蔵入・明知では勘定所から、給知では

給人が、何れも高百石につき三石を貸しつけ、三割の利息と元米とを、毎秋(九月)に返済させていたが、延宝三年(一六七五)からは元米は据え置き、利米のみを返済させた。その後、享保三年(二七一八)一揆以後百姓の要求により利息は二割(給知では実施したかどうか疑問)になり、米銀何れで納入してもよいように改めた。(広農・芸志・続九)

たのみおさめしち 頼納質 田畑を質入する場合に、通例の質金より金高を多く借り受け、その代り田畑は金主が耕作・収穫し、年貢諸役は地主が勤めることを頼納質という。この制は貞享四年(二六八七)より停止になり、また、裁判になったときは、地主は重い咎、質に取った金主は地所を取り上げられて咎、加判の名主(庄屋)は役儀を取り上げられ、証人は「叱り」を受けた。(地方)

たのみすき 頼漉 ↓詔紙

たのもし 頼母子 「頼む」という意味から生じた講で、「馮母子」「頼子」と書く場合もあり本来は互助的無利息・融通組合的な性格のものであった。頼母子講のうち「講親救済」を目的としたものは、講員全員が出す最初の掛金は全部講親へ渡し、二回目以降からは「入札」「抽選」により一人が取得し、講親は酒食を提供した。また「物品を購入」を目的としたものもあり、それには「牛頼母子」「豊頼母子」「蒲団講」などがあり、方法は前者同様であった。頼母子は前述の性格から無利息・無担保であったが、講金を受け取り逃げる者が鎌倉末期頃より生じてきたので、室町期からは担保をつけ、利息を取るようになった。

った。(民俗学辞典)

たばこうんじょうぎん 煙草運上銀 煙草運上銀は慶安元年

(一六四八)から始まり、尾道・三原で煙草刻みを業とする者からと、他国へ積出す場合に買問屋から徴収した。寛文九年(一六六九)煙草の耕作を禁止したため一時中絶し、延宝六年(一六七八)に復活した。(県二)

たはたのばいばい 田畑の売買 幕府が公布した「田畑永代売買禁止令」(寛永二十年)や「分地制限令」(正徳三年)が、広島藩

でどの程度守られていかたは不明であるが、寛文頃には、田畑の永代売買はかなり自由であったらしい。田畑の売買には、代価を年貢米の未進に充てるという条件があつて、年貢米の不足を調達するためにのみ売買が許された。売買の場合には、予め蔵入地は代官、給知では給主の許可を受けたらしい。しかし、寛文頃には条件が緩和されて、給知ではいちおう給主に断つてゐるが、明知ではそのことすら行われていない。ちなみに、田畑永代売買の禁止は、明治五年(一八七二)三月に解かれた。(広庄)

ため溜 囚人が重病になったとき一時加療のために預かったり、十五才未満の者が遠島刑に処せられたとき、十五才まで預かる所をいい、江戸では浅草と品川に置かれていた。非人が預かつていたので、非人溜とも呼ばれていた。(江戸)

ためあずかり 溜預 ためあずけ。江戸では入牢中の者が病気のとき溜に収容した。逆罪の者は病気でも不可。幼囚も刑の執行される十五才までは溜預され、また引取人のない病気の無宿、

遠国者の行倒れも病氣回復まで溜に預けられた。溜とは江戸(浅草・品川)大坂・長崎などで、幼囚・病囚を収容された施設をいう。(日広)

ためいけしたみぞした 溜池下溝下 用水池をつくり、用水溝を通すために失われた田畑をいう。(広農)

ためしこうぞあらためやく 試楮改役 広島藩は楮の増産をはかるため、江戸末期には、楮作りの各村に一名の試楮改役(長百姓の中から任命)を置き、家廻りへの楮苗の植付を試植させた。但し、この試植の詳細については不明である。(横山)

たもん 多門 *下級武士を住まわせている長屋をも多門という。広島藩では、城内の三之丸内・御作所内・元御勘定所内・元御武具方内に多門があり、また広島町では白島町・水主町・空鞘町等に多門があつた。*松永久秀が、近江国佐和山に築いた多聞山城にならつた、一種の築城法(長屋造にした城壁をいう。また、本宅の外周に建造した長屋、さらには、部屋方の女をいう。(広辞)

だるまき 達磨忌 禅宗で始祖達磨の忌日(十月十五日)に行う法会。始祖の達磨は南印度香至国の皇子。初め般若多羅に学んで大いに大乘禅を唱えた。後に魏の明帝の正光二年(五二二)慧可に禅の奥義を伝えた。寂後、唐の代宗から円覚大師と言う諡を受ける。(広辞)

たわらかかりうんじょう 俵懸り運上 竹原塩田に対し、元禄十二年(一六九九)に塩浜年貢(元禄十一年までは免米で徴収を廃し「俵懸り運上」に改め、大俵塩(五斗一升俵)は、一俵につ

いて銀三匁を課した。ちなみに、この年には七五貫七三〇匁の運上銀を納めている。(県一)

たわらくちいりみ 俵口入実 込米の一種と思われる。(広農)

たわらづけまい 俵付米 俵附米は蔵入地や明知にはなく、給知特有のものであり、年貢米納入に際し、運搬途中の目減りを補うという理由で、多くの場合一俵(三斗)につき三合を加えた米をいう。但し、俵附米の量は、給主によって異なっていた。

例えば、文化十年(一八二三)沼田郡相田村では給主十二人の内、四合としている者四人、三合としている者七人、徴収していない者一人である。なお、俵附米の算出の仕方についても、給主により異なっていた。例えば、文化九年(一八二二)沼田郡簡瀬村の給主青木与太夫は、「定物成」と「種米利息」を加えた数量に対し、一俵(三斗)に付三合の割で算出している。また、同年沼田郡相田村の給主関左内は、「定物成」と「種米利息」を加えた数量から「上げ米」「社米」「給米」「押米」を引き去った数量に対し、一俵(三斗)に付三合の割で算出している。ちなみに、この制の起源は不詳であるが、宝暦九年(一七五九)山県郡川小田村の給主望月左忠太の給人法では、「俵付石二付壺升」と定めているので、この頃にはすでにこの制はあったようである。(大朝町史・横山)↓入実

たわらなおしちんまい 俵直し賃米 所蔵で俵(年貢米)の山積の形を直す人夫の賃米をいう。寛政五年(一七九三)高田郡三田村では、一俵につき一合の割であった。(広農)

たわらもの 俵物 幕府は対清貿易において金銀が流出するの

を憂い、銅による決済を行ったが、銅も不足してきたので、元禄十年(一六九七)から不足を補うものとして、海産物を決済にあてた。俵物とは、長崎から清国へ輸出した海産物で、煎海鼠・干鮑などを俵装して、長崎へ輸送したため起こった呼称であるが、瀬戸内海の漁村では、煎海鼠が主に生産された。広島藩では対馬屋忠八郎が藩から「俵物糺し方」に任ぜられ、領内の煎海鼠を集荷したが、俵物の他売は禁じられたため、産出高は衰退していった。(県二)

たんせん 段銭 戦費徴収など、臨時に掛けられる田地への租税をいう。なお、鎌倉・室町期における段銭は、天皇の即位・内裏修理・道路修理などに充てるために、臨時に諸国の田地の段別高に応じて課せられた。

ち

ちぎようしよぶぎよう 知行所奉行 家老の上田給知の役職で御屋敷惣御奉行ともいわれ、藩の郡奉行に相当した。知行地支配の最高責任者として村方役所を統轄し、年貢免状の下付などを職務とした。また、勘定奉行や用人などを兼ねることも多かった。(県一)

ちぎようはんもつ 知行判物 広島藩では、百石以上の藩士に對しては、すべて禄として知行地を与えた。そして、その与え方には「知行判物」によるものと「配置目録」(御勘定奉行ら数人の署名のある書状を御勘定所から下付する)によるものとがあつ

た。「知行判物」による方法とは、右筆や奉行が執筆し、藩主の黒印が押されている書状を、藩主が直接に下付するやり方である。(川上)

ちくみよう 竹名 虚無僧の法名をいい、尺八にも自分の竹名を書いていた。

ちし 地子 地子銭。市街地(町方)に賦課した宅地税をいう。屋敷は大別すると、武家屋敷・町人屋敷・百姓屋敷があり、百姓屋敷は検地高付されて貢租が賦課された。武家屋敷は拝領屋敷で無税。町人屋敷の場合、城下町にあるものについては、地子銭が賦課されないものと、されるものとがあった(表間口に対して賦課)。港町・宿場町・在郷町にある屋敷は検地高付され貢租を賦課した。ちなみに、宮島町では慶長六年(一六〇二)以降、毎年地子銀一貫五十三匁三分が徴収されており、福島氏はこの地子銀を、すべて座主・大願寺・棚守に配当している。(大領・県二)

ちしりよう 地子料 地子料とは、公事訴訟において、他村の庄屋が他村で聞約めを行う場合や、村の異なる者の争論について両村の庄屋が一方の庄屋宅で聞約めを行う場合に、場所の引受料として計上される費用をいい、天保元年(一八三〇)の「郡中村々工事出入約所入用仕出規則」によれば、一日(但し日数により異なる)銀一匁四分五厘から一匁八分であった。(芸備地方史研究八十号)

ちなみたのもし 因頼母子 *因講ともいい、寺社の再建・修理や寺社困窮を理由に興行される富くじ類似の頼母子をいい、

広島藩は嚴重に取り締まった。(県二) *困窮者を救済するためにつくられる頼母子があり、この場合には、因縁のある者によつてつくられるので、因(よしみ・ゆかり)頼母子とよばれていたようである。

ちやぎん 茶銀 小物成銀の一種で、茶の木を上・中・下に分けて株数を調べて生産高を決め、茶一斤につき銀五分五厘を課した。(白木)

ちやのみとき 茶飲み伽 配偶者に早く離別した者が、老年になつて同棲する同じ年恰好の老婦をいい、老婦へはいくらかの財産を分与していた。(郷史)

ちよういわい 帖祝 正月十一日または四日に、商家ではその年に用いる帳簿を新たに綴じて、これを祝うことをいう。(国大)

ちようがい 帳外 ちようはずれ。帳外とは、近世初期では検地帳に名請されていない隷属民のことを称したが、中期以降では、欠落者・不行跡者に対して、親や親類から勘当や久離が申し渡され、人別帳から除外することをいうようになった。帳外にされた者は、家督や財産の相続権、妻があればその婚姻関係は消滅した。なお、親や親類は縁坐制から免れた。帳外にされた者を無宿者という。(日用)

ちようぎり 帳切 江戸時代には、高請のある農民の土地の永代売買は禁止されていたので、主として町人の町屋敷の永代売買が行われた。その際に、売買譲渡に伴う水帳(検地帳)の張替、即ち名義書換を帳切という。また、転じて、破産して財産を他

人に譲り渡すことの意味にも用いられた。売買に当たっては、当事者双方が町村役人・五人組にその旨を届出、水帳の張替を請求すると同時に、沽券状（売渡証文）の授受を行った。この際、買主・譲渡人は町内・町役人その他へ、祝儀金を出すのが慣例になっていた。また、買主は帳切銀（名義変更料）を町奉行へ納めた。ちなみに、大坂では売買価格の四十分の一（後には二十分の二）の帳切銀を納めたが、寛永十一年（一六三四）以後は、これを町の収入として、町内の家軒別に配分した。（郷土・古用）

ちようぎん 丁銀 江戸時代の銀貨の一つで、秤量によって流通したナマコ形の銀塊をいう。重さは約四三匁前後。常是（鑄造者大黒是常の意）の字、宝の字及び大黒僧の刻印があり、一枚二枚と数える。一〇貫匁（丁銀約二三〇枚）を一箱とした。丁銀には、慶長・元禄・宝永・宝永永字・宝永三宝・宝永四宝・正徳・元文・文政・天保・安政の十一銭がある。（広辞・単位）↓
銀貨

ちようぎんつつみ 丁銀包 多額の丁銀を包封をしたものをいい、包封には何の銀というように銀の種類を明示しない習慣があった。丁銀包のうち、五百目包は、本両替屋（金銀の大量取引をするもの）が、多額の銀の取引上、包封をしたもので、五百目包を二〇個箱に容れたものを銀箱といい、その銀箱の表には銀拾貫目と大書した。（日本通貨変遷図鑑）

ちようせん 丁銭 長銭とも書き、丁百・調百ともいう。銭九六枚を百文とする「九六銭」に対して、百枚で百文と計算したものをいう。（日用）

ちようづけ 帳付 書役ともいう。近世宿駅の下役人で、宿駅の間屋場で門屋・年寄の指図に従い、宿継ぎ関係の帳簿付けなどの実務にあたった。小商人・小農から選ばれて、給金をもらって勤めた。（国大）

ちようめんならし 帳面概 居概^{いならし}。帳面の上で斗代盛を変更することをいい、居概ともいう。享保年中から元文の頃にかけて帳面概を試みようとした村（小村に限られていた）があったが、実施には至らなかったようである。（広農）

ちようもく 鳥目 銭の異称。中に穴があいて鳥の目に似ているからいう。（広辞）



ついいん 追院 江戸時代、僧に科した閹刑。犯罪に対し宣告を受けた僧を、直ちに職を奪い居住の寺院から追放したこと。

（広辞）

つこういんかん 通行印鑑 他藩へ出かけていく商人に対して、藩が往来手形の代わりとして発行したもので、行先を定めて発行した書付をいい、それには旅行する商人名と、行先の人名とが記されていた。

つきぎようじ 月行司 がつぎようじ。月行事とも書く。町方では町の各組毎に、有力商人の中から数名の月行司が置かれた。月行司は町年寄と共に輪番で一ヶ月交代で、町貯銀の運用・町内の救恤・自身番等の企画運用を司った。元和三年（一六一七）

尾道町では、五人の年寄と十二組各五名、計六十名の月行事が設けられ、町の運営は一名の町年寄と五名の月行司が月毎の輪番制で行い、必要に応じて臨時の「惣寄合」や「衆議」が持たれ、町の財政に関すること、藩から町に大きな負担が課せられた場合に、相互に協力して負担すること、場合によっては奉行の命令をも断ることなどを定めている。なお、宝永元年（一七〇四）の定では月行司は無給。宝暦十三年（一七六三）の覚では、毎暮相応の骨折料を支給している。（県立文書館資料）↓年寄役

つぎつみちん 継積賃 年貢米を川船で輸送する場合には、継船制によって、河川の各港で他の川船へ積み替えた。その積み換え人夫賃を継積賃という。継船制は継積賃を川港の経費等に充てるために定められたものであるといわれている。

つけあれ 付荒 災害等の特別の事情がないのに、事実上荒廃にまかせられた土地で、これは百姓の窮乏による離村で、放棄された荒地をも含んでいる。（剩語）

つけこみこちよう 附込小帳 「年行司」の制は、庄屋の村費支出が、既定どおり施行されているか否かを監督するために置かれた。村費に必要な支出は、庄屋が「年行司」に議り、納得の上で「年行司」の小帳に記入された。この帳面を「年行司附込小帳」また「附込小帳」ともいう。（広農）

つだしまい 津出米 年貢米の払い方には「津出し」と「所払い」とがあり、年貢米を御米蔵に運んで勘定するのを「津出し」といい、その米を津出米という。（広庄）↓所払い

つちめんせい 土免制 前年の作柄、村の盛衰、田畑の肥瘦等

を総合的に評価し、作付前の春先に免を決定し、郡廻りと代官の連名で郡へ布告する制をいい、春の内に免を土地に据えて、百姓に落ち着いて耕作させるとい意味であるといわれている。土免制は慶長八年（一六〇三）から翌年にかけて採用され、また、元和六年（一六二〇）にも採用されている。寛永十一年（一六三四）浅野光晟は、部分的に土免制の併用を算用方に申し渡しているが、実施の詳細は不明である。土免制が領内いっせいに実施されたのは、蔵入・明知では慶安四年（一六五二）、給知では延宝三年（一六七五）である。その後、享保元年（一七一六）には郡方だけが定免制が採用されたが、享保三年四月に享保一揆の要求を容れ土免制に復し、以後は変わることはなかった。なお、この制は、豊作であっても既定の免率以上の年貢は徴収しないので、農民が耕作に励み、農民の手元に残る米も多くなるというものであった。然し現実には、豊作であればそれを次年度の基準とし、凶作は無関係とされた。もともと大凶作の年は、「破免」といつて土免が破棄され、検見取で徴収することもあった。（県一・本郷町史）

つつみぎん 包銀 銀貨の量目を証明するために秤量して、紙に包み、表に「銀何両」「銀子白銀何枚」などと記した物を行い、贈答取引に用いた。（単位）

つつみふうはんちんぎん 包封判賃銀 極銀所の仕事のひとつは、銀貨の包封印をすることであり、掛屋（三原屋小十郎）に行わせた。包封印とは、銀貨の種類とその秤量はもとより、その年月日と依頼者の名前を細字で記し、証印を押したものである。包封印に対しては、手数料としての公定の包封判賃銀が定

められており、例えば、一匁〓三〇目には一分、三〇目一分〓六〇目には一分五厘であった。(県一・広寛)↓極銀所

つどめ 津留 江戸時代、藩が領内の経済事情のいかんにより、臨時に米穀をはじめ、その他の物資の領外との移出入を禁止することをいう。但し、藩によっては、特定の品目を留物にして、常時その移出を禁止したり、許可制をとって津出し許可の「津切手」を必要としたりしたが、さらに密積出を防止するため、津の口などに番所を設けて監視する場合も少なくなかった。とくに凶作の際など、領内に米穀が払底し、米価が騰貴するのを抑制するため、しばしば津留の令を発して、他領への移出を禁止した。そして新穀出来の時期が来て、米穀が潤沢に出廻り、価格の下落をみとどけて、その禁を解いた。これを「津開き」「津明け」という。ちなみに広島藩では酒造業保護のため、寛永五年(二六二八)ならびに正保元年(一六四四)には、他国酒の移入禁止の津留を行っている。(郷土・県一)

つなぎまいぎん 繰(繰)米銀 一般に村入用は、村役人があらかじめ立て替えておき、年末に百姓から徴収する方法と、繰米銀制とがあった。この制は、前もって百姓から一定額を徴収しておき、収支を相殺する方法である。(県一)

つひらき 津開き ↓津留

つぶれかぶ 潰株 潰株式。 ↓跡株

つぼがり 坪刈 ↓検見取法

つみちんもみ 積賃糶 米蔵で俵の入実の入れ換え、見分などのため、俵の積み直しに要する人夫賃をいう。文化十年(一八

一三)沼田郡大町村では、囲籾二二五俵に対し、二斗六升七合七勺の積賃糶を負担している。(横山)

つみつぎこうせん 積次口銭 小物成銀の納入において、米での納入を命ぜられた場合には、納入米に対して口銭を付加した。この口銭を積次口銭という。(広農)

つめいん 爪印 拇印・爪判・爪形ともいう。親指の先に印肉をつけて捺す。江戸時代には、印章を持ち合わさなとき、または、庶民のうち戸主以外の者で、印章を持たない者が用いた。**つめまいのせい 詰米の制** 広島藩は、凶年における藩兵への手当や兵糧米(後には救恤米)として詰米の制を設けた。この制は、年貢米のうち特に良質米を選んで別俵に仕立てさせ、詰米と称して城内の蔵に運ばせて貯蔵するものである。しかし、この制は、享保三年(二七一八)百姓一揆の要求を容れて一時中止した。その後この制は「置籾」として籾での差し出しが再びはじまり、村々から集め各郡の郷倉に貯えさせ、毎年古籾と詰め替えた。(県二)

つるのふくみほ 鶴の含穂 「くわへ穂」とともに餅米の二品種。広島藩は文政十三年(一八三〇)に、この米は御用米にもなるので、沼田郡毛木村・筒瀬村・西原村・中調子村・長楽寺村の特定の百姓に種米を下げ渡し栽培させ、その結果について報告するように命じている。これに対し、收穫が少なく藁の利用も限定され、沼田郡の土地には適さないので、用捨したいと報告している。(横山)

つるはん 口縁に対角線上に、鉄製の弦(弦てつという)を渡し

た枡を「つるかけます(弦掛枡)」「つるかけ(弦掛)」などという。この枡は北条時代に始まったと言われている。弦は斗概(斗搔・斗棒)をかけるとき、水平にかつ平均に、搔きとるためとされているが、櫛の形がゆがまないように、補強したものであるかも知れない。太閤検地の際、石高を統一算定するために定められた枡を京都で布令したが、この枡は「京枡」「京番」「京判」とも言われた。京番の「番」は「判」の借字であり、「判」は書判や印章のことで、枡に例えば「斗枡」などの書判や印章(烙印)をつけ、枡の規格を示した。以上のことから、「つるはん」とは、枡に弦をつけ、且つ、書判や印章(烙印)のある枡ではないかと思われる。(単位)

て

であいぐみ 出合組 郡役所や勘定所等に勤務し、時打・道具

番・早道等の仕事を担当した下級武士(歩行)をいい、四石二人扶持から六石八斗二人扶持を支給されていた。(芸要)

てあまりち 手余地 近世中期の農村人口の減少で、労働力不足から、耕作を放棄した土地をいう。貢租収入が減少するため、大きな政治問題となった。(古用)

ていし 手医師 大名などの召抱え、かかりつけの医師。かかえの医師をいう。(日用)

でいり 出入 もめごと、けんか、紛争をいう。江戸時代には出入物・公事出入・公事訴訟などともいい、主として民事関係

の事件、または訴訟の手続きをさした。刑事事件を吟味物と言うのに対するもの。(日用)

できぎん 出来銀 御手洗において、雁木や寺社の修復などには、一度に多額の出費を要するため、備蓄としてはじめて貯銀をいう。米・雑穀の取引にかかる壺合米・問屋口銭の割取を取り立てた歩一銀など、問屋・仲買の負担するものと、遊女を抱える茶屋の年間定まった出銀が、その主なものである。(県二)

てじようおいこみ 手錠追込 ↓追込
てだい 手代 江戸時代に奉行・郡代・代官等の下にあつて、年貢徴収その他の一般の農政事務にあたつた地方役人をもいう。(日用)

てつぎでら 手次寺 浄土真宗で、本山と檀家との中間にあつて、本山からの教化を檀家へとりつぐ寺をいい、また、菩提寺をもいう。(県二・国大)

てつぎぼうず 手次坊主 安芸国では、世俗の住人が僧形となつて、信徒を勧化する者を手次坊主、または毛坊主ともいう。

てつぎ 鉄座 元禄九年(一六九六)広島元安川畔の鉄座に設けたもので、領内産鉄のすべてを、広島元安川畔の鉄座に集めて買い上げ(鉄の専売制実施)、その多くは大坂へ積登せるというものであった。そのため、同十二年には、広島川口六ヶ所に番所を設け、抜荷などの検問を行い、一方では、仕入銀の前貸や飯米の支給なども行い、出来鉄でこれを決済する措置も講じた。(県二)

てつぎんあずかりてがた 鉄山預手形 ↓鉄山札

てつざんおろしまい 鉄山下し米 年貢の代銀納の一つで、三

次・恵蘇・奴可・三上郡などを中心に行われていた。山県郡においては、寛文期以前から為替米とよばれる鉄山下し米を採用した。これは、山県郡で稼行する鉄山労働者の飯米に、年貢米をあてる制度で、村々の年貢米を為替人(鉄師)に納め、為替人はその代銀を年内と春越との両期に、差次払いで年貢方に上納するといふものである。その下し米は年により、鉄師の申請により異なったが、村方を指定して、千石から千五百石程度であった。(県一)

てつざんかくしき 鉄山格式 鉄山法則ともいう。炉・鍛冶屋

の鉄山山内で働く労働者たちは、村から隔絶した状態におかれていて、その労働組織や性格には独特なものがあつた。藩府は彼等山内労働者をはじめ、鉄山経営者・関係村民たちを規制するため、取締法令に相当する鉄山格式を、明暦二年(一六五〇)以降しばしば布告した。(県一)

てつざんふだ 鉄山札 広島藩が宝暦八年(一七五八)から、幕府

の許可を得ず発行した藩札の一種で、三次・恵蘇両郡の藩営の鉄山だけに限って、通用させたものと考えられる。その後、正徳二年(一七二二)に鉄山藩営化政策がとられた際に、その政策から除外され、民営の存続が許された山県郡の佐々木家鉄山においては、鉄山預手形(鉄山札と同様の銀札)の発行が認められ、同家が勘元(札元)になって、同家鉄山の山内に限り通用させた。

(県民)

てつざんやくだか 鉄山役高 砂鉄採集(鉄穴・かなら)・炉・

鍛冶(吹屋)の稼業経営による収益の中から運上銀を徴し、それをもつて拝知の石高に換算して、それを拝知高に組み入れた(高籠といふ)。組み入れた高を鉄山役高という。それは、まさに藩が年貢米を徴してこれ売りさばき、藩の収入としていたのに類する性格の措置であつたと、みることが出来る。(県一)

てつぼうあらためがかり 鉄砲改懸 割庄屋が、村毎に庄屋

・組頭の中から選んだ者で(但し五村に三人、二村に一人でも可)、鉄砲の所持者を監視し、特に密猟の取り締まりに当たつたものと思われる。ちなみに、文久三年(一八六三)沼田郡上安村では、鉄砲所持者が十一人、今後所持したい者が十人いた。(横山)

ではんまい 出飯米 村役人等が、年貢の勘定・代官の廻村・

宗判御用・吟味人の付添などで村外へ、或いは諸用で村内や広島へ出張する際には、それぞれ規定の旅費があり、これを出飯米という。宝暦十年(一七六〇)の定によると、村外出張の場合は、割庄屋は三升外に人足一升、庄屋は二升五合外に人足一升、組頭は二升、筆取・年行司・長百姓は一升五合、百姓は一升になつてゐた。村内出張の場合は、腰付と称して、給米を取つてゐる者(庄屋・組頭・年行司・筆者等)は、一律に昼食代として三合と木銭として二分、給米取でない百姓は一升と定められてゐた。なお、庄屋・組頭・年行司・長百姓・筆者などが、相談(正月の年中申合せ・六月の夏割・九月の秋割・暮の免割など)のために集合した時は、腰付として三合の中食代が支給された。広島出張の場合には別の規定(郡によつて異なる)があり、例えば、高田郡の場合には、割庄屋は五升と外に本馬一疋、庄屋は四升五合と定められ、豊田郡の場合は、割庄屋は四升五合と外に木銭と

して六分五厘・宿貸銀七分、庄屋は四升・木錢六分五厘、外に軽尻一疋と定められていた。何れの場合にも出飯米は村が負担した。但し、村役人や長百姓が盗人をつれて広島へ行く場合は、郡割で負担した。(広農)

でめ 出目 ↓吹替

でめまい 出目米 ↓延米

てらうけしようもん 寺請証文 宗旨手形・寺手形・寺請状・

寺切手・寺証文ともいい、寺院が某人の檀那なることを証明する証文であり、初めは切支丹よりの改宗者について用いたが、後には一般化し、旅行・奉公人の雇入等の場合に、一種の身分証明書のように使用された。婚姻・養子縁組・離婚等の場合には、人別送と共に寺送が行われた。(日法)

てらきって 寺切手 ↓寺請証文

てわざべらし 手業減し 幕末になると、士分の仕事の一部を割庄屋が行った。このことを手業減しという。

てんかおくり 天下送り 駅役ともいう。長崎や西国以西の天領と大坂・江戸とを往来する幕府の書状や荷物の通送は、各領主の重要な公役とされ、その取り扱いは、元来宿駅の重要な任務であった。広島藩においてはこれを重視し、宿駅固有の業務とせず、特定の家(寛文十二年広島城下の楠屋次左衛門、延宝四年草津屋次左衛門天下送り役となる)や村を指定して専門的に行わせ、他の飛脚業務と区別して「天下送り」と称した。「天下送り」で多人数を要する場合には、村夫の動員を命ずるとともに、「宿送り」という藩用通送役を整備し、各継宿に宿送り役を置

いて、「天下送り」と抱合わせて差配させた。(県一・堀川町覚書)

てんば 転派 寺院が宗派を変えることをいう。特に広島藩の真宗寺院に置いては、慶長七年(一六〇二)二月徳川家康の真宗に対する分裂支配策としての東本願寺の創建や、法中の運営に対する不満等により、西本願寺派(西派)から東本願寺派(東派)に転派する寺院が、元和元年(一六一五)頃より宝暦初年頃にかけて続出した。(但し東派より西派へ、また元の派に帰参する寺院もあった)こうした転派に対し、西本願寺はしばしば転派の禁止を幕府に要請し、要請を受けた幕府は「諸国改派押」を出した。広島藩では仏護寺の「改派留」の要請をうけ、天明六年(一七八六)頃より文化年間にかけて、たびたび同触を出している。(野間家文書・横山・久枝家文書)

てんぽうつほう 天保通宝 天保六年(一八三五)以降、金座におかれた鑄銭定座で鑄造され、天保銭ともいう。楕円形で方孔があり、表の孔の上下に「天保・通宝」。裏の孔の上に「当百」孔下に金工の花押があり、一枚をもって並銭百文にあてたので百文銭・当百銭とも呼ばれた。鑄造は明治二年まで続く。

維新後は一枚八厘で通用し、明治二十四年まで貨幣の命脈を保った。(古事類苑)

てんまきもいりやく 伝馬肝煎役 広島城下では、古町(猿猴橋町)・猫屋町に馬継場(伝馬所)が置かれ、そこには伝馬肝煎役(馬頭)がいて、人馬の継立や貨物輸送のいつさいを扱った。(県一) ↓伝馬所

てんまぎん 伝馬銀 宿駅の窮状を救済するため、広島藩は低

利で資金を宿駅に対して貸与した。これを伝馬銀という。(県二)

てんましよ 伝馬所 主要な街道沿いには宿駅(伝馬所・馬継場

とも称した)が決められて、伝馬・人足が常備されていた。享保初年広島藩内(除三次支藩)の伝馬所は十九ヶ所あったが、これに享保四年(一七一九)以降、本藩に属した三次藩の三次を中心にした出雲街道の六駅と、広島城下の二ヶ所、それに草津を加えた二八ヶ所が藩府所定の伝馬所であった。伝馬所には伝馬(公用を便ずるための宿継ぎの馬)が用意され、藩府の発行した伝馬手形を持つ者は、無賃で各駅の準備する馬を使用することができた。(新三)

てんまやく 伝馬役 宿駅の重要な任務の一つに、公用旅行者のための人馬の継立てがあった。公用貨客輸送は宿駅の責任において駅で人馬を準備し、宿から宿へ継送することになっていった。これを伝馬役といい、歩行役(人足)と馬役とがあった。(県二)

と

といやば 問屋場 江戸時代は街道の宿駅で、人馬の継立などの事務を行った所をいう。(広辞)

とうあれ 当荒 凶年などによる一年限りの荒地をいう。(剩語)

どうぎよう 同行 禅宗においては「どうあん」と読み、同伴

・同朋・同法と同義で、志を一つにして仏道修行に勤む法友をいう。浄土真宗では、門徒・信徒をいう。また、社寺への参詣・巡礼・勧進などの道づれをいう。(古用)

どうぎようばね 同行ばね 講中の寄合いで決めたことを守らなかつたり、務めを果たさないような場合には、講中から除名された。これを「同行ばね」とか「講ばね」とかい、当時の農村でこの制裁を受けることは、殆ど家の存続を不可能にすることであった。(県二)

どうじよう 道場 真宗で、寺院と称するには至らない念仏の集りを行う場をいう。特に近世では、仏像を安置しているだけで、寺格もなく、住僧の定まらない寺をいう。(国大)

とうじようべいさつ 東城米札 東城蔵役所から発行された米札で、文政七年(一八二四)の四種(二升・二升・四合・三合)、同九年の二種(二升・一升)、天保五年の三種(二斗・二升・一升)が現在知られており、東城町の有力商人である丸山屋茂四郎・大坂屋九右衛門などが札元となっている。(県二)

どうしん 同心 江戸幕府の諸奉行・所司代・城代などの配下に属し、与力の下にあって庶務・警察の事を掌った下級役人进行う。(広辞)

とうぶんしようや 当分庄屋 ある村の庄屋が、臨時に他村の庄屋事務を分担する際の名称をいう。また、割庄屋や社倉支配役など庄屋より上席の郡役人が、居村の庄屋を兼務し、そのうえ、臨時に支配下の村の庄屋事務を司る際の名称でもあった。

(白木)

とうようかた 当用方 ↓賞罰方

とおみけみ 遠見検見 えんけんけみ。作柄が一般的に不同なく且つ実検に多くの日数を要するような場合に、職権または願により、一隅より遠望して実検を略し、租税を前年額通り、または多少増加させて税高を決定することをいう。(目法)

とが 咎 ↓仕置

ところばらい 所払い 年貢米の上納に際し、その一部が在所で売り払われ、その代銀をもって上納することをいう。これは、百姓の運送負担の軽減を意味し、年貢米を収納する広島(深川)及び三原蔵を起点にして、道程九里以上の村に対して認めた(八里分は米納)。所払額を算出する方法は、村の定物成を蔵所までの里程で割り、さらに八里を引いた里程で掛けた額とし、これを所払いの定法とした。年貢の所払相場は、年貢銀の上納相場を基準にして、高田郡(二〇ヶ村)の場合は米一石につき二匁五分下り、山県郡(三〇ヶ村)は二匁下り、三谿郡(三一ヶ村)は三匁下り、奴可(三九ヶ村)・三上郡(二八ヶ村)は四匁五分下り(正徳四年から六匁五分下り)であり、遠郡に至るほど低位な値段になっていた。この制度は上記の諸郡にのみ認められ、慶安の頃から始まった。なお、奴可・三上両郡で鉄山へ払い下げる米は、その所払いに二匁上りであった。(県一・剩語・広覚)↓参考資料

としとくじん 歳徳神 年徳神とも書く。その年における福德を司る神。この神のいる方角を恵方といい、年によって異なつた。毎年正月にはこの神を招き入れるために、恵方にむけて棚

(歳徳棚)を作り、酒肴を捧げた。棚を恵方棚ともいう。(国大)とじめ 戸ノ 戸締。近世、庶民に科せられた刑罰。釘で雨戸

を閉じ辱めるもの。元文五年(一七四〇)からは町家のみに科し、農村は人家散在して恥辱の効果がないために廃止し、叱りまたは過料にかえた。(日用)

としよりかく 年寄格 永年割庄屋を勤め、その間功績のあった者に対して与えられた名称で、町年寄や郡中の市街地に置いた年寄役とは異なり、単なる名譽の称号にすぎなかったと思われる。↓年寄役

としよりやく 年寄役 *郡中の市街地(吉田町・廿日市町など)へ置いた役人という。職務は住民に関することのみを預り、土地・租税ならびに賦課等については関係せず、従つてその権限は庄屋に劣り、また、職務に関する給料もなく、(但し、文政二年廿日市では紙・筆・墨代として銀五〇目を支給している)名譽の閑職であった。なお、町政は庄屋が司つた。*地方によつては長百姓や組頭を年寄(年寄百姓の略)という。(県二)

どじん 土神 土公神とも言い、土を司る神。春はかまどに、夏は門に、秋は井に、冬は庭にあつて、その時にその場所を動かせば祟りがあるという。(広辞)

どそうしようにん 土倉商人 毛利氏時代に、領主に前貸しを行ひ、知行地の年貢収納等にあたつていた商人をいう。(県二)

とだい 斗代 とだいもち 斗代盛。↓石高

とびごう 飛郷 飛地同様に、本村とは地域的には孤立しているが、そこには人家があり、組合や講等もあり、農作業・災害

等に対しても協力して対処するなど、本村同様の生活を営んでいる地域をいう。

とびち 飛地 本村から離れた開発地をいう。また、村境の川が洪水のため、隣村と高請地の入組が生じた場合に、その入組地を飛地あるいは飛入地と称した。なお、その入組地は洪水前の村が保有した。(日用)

とめいけふだ 留池札 郡奉行が広島新聞廻りの御留池に、鷹狩や無用の殺生を禁ずるために建てた札(一八枚をいう。ちなみに、御留池は豊田郡本郷村・荻路村・沼田郡中須村・長束村・西原村にもあつた。(広寛)

とりおい 鳥追 農家の年中行事の一。正月十四日の晩から十五日の暁にかけて、田畑に害を与える鳥獣を追い払う歌をうたい、若者たちがささら又は杓子・棒などを打って家々を廻る行事をいう。また、新年に乞食が人家の前に立って、扇で手をたたき乍ら、福詞を唱えて米銭を乞うこともいう。(広辞)

とりかえせい 取替制 村割当への年貢米の一部が調達できない場合に、藩府へ願い出て米の貸し付けを受け、翌年、年貢米ともにその利息を返済する制をいう。

とりたてめん 取立免 ↓概免

とりたてやく 取立役 村高百五十石以下の組頭を置かない小村で、庄屋が他村の者をもって任命された場合、自村に一人の村役人も居住しないという不便に備えて、置いたものではないかと思われる。しかし、大村でも組頭の死後、格を一段下げるという意味で、その子を取立役に任命した事例がある。要は、

取立役とは組頭の事務を執る者をいい、組頭の前の段階にある者をいう。なお、取立役の取り扱う事務は、組頭と全く異なることはなく、給分も組頭と等しかった。けれども、村によっては取立役給とせずに、取立役世話料と称する場合があつた。(広村・白木・剰語)

とりはなちどめ 鳥放留 鳥を鉄砲で捕ることは禁止されており、その遵守状況を見廻るために設けられた役ではないかと、思われる。(横山)

とりみ 鳥見 御鷹役所に置かれた職で、足輕級の武士が充てられ、山野・河川を巡回して鳥を見分し、その状況を九日に一回の割で報告した。また、釣猟禁止場所の見廻りをするともに、時々御鷹野の巡見のため、一、二人で入村し、地鳥見に対して指示を与えた。(原村・芸要)

とんやおんやくしよ 問屋御役所 尾道港町商事の不振に対して、明和三年(一七六六)問屋御役所を設け、問屋株を縮小し、従来の問屋・仲買・仲仕など、いっさいの商行為を監督させ、それによって乗り切りをはかった。(県二)

な

ないさいい 内済 公事訴訟の調停解決方法。奉行所や郡役所まで持ち込んで表沙汰にはせず、原告・被告の談合によって和解し、事件を解決することをいう。広島藩では、民事訴訟については内済を原則とし、利害関係のない第三者が(取)唆人に任じ

られて内済に及ぶように調停した。内済成立の場合は当事者同士が「内済証文」を取り交わした。

ないみちよう 内見帳 代官所が稲毛の検見を行う前に、予め村方をして上・中・下など各田の各筆の坪刈を行い、その額及び等級を定めさせて、字・地番・畝歩とも詳細に列記させ、類別の合計をつけた帳面を提出させた。この帳面を内見帳とも立毛内見帳・内見合(毛)附帳ともいう。なお、広島藩では、これに類するものを下見帳という。(日法)↓下見帳

ないわし 菜鯛 自村の浦で漁が行われたとき、村人がそれを少し手伝っただけでも、漁獲物のいくぶんかを無償でもらう権利や、また、地先で取れた鯛については、居村の者が優先的に購入する権利が慣習になっていた。こうした慣習を菜鯛という。(県二)

なうけにん 名請人 福島検地のころ、検地帳に登録された土地を名請地といい、保有者を名請人という。名請人は村に緊縛され、貢租負担の基礎として固定されることになった。(県二)

ながえいじよう 長柄以上 侍士の格式をいうもので、家老以下年寄・番頭・寄合・旗奉行・用人・大小姓組頭・騎馬弓筒頭・中小姓頭・大目付等がこれにあたり、行装として、長柄傘の使用が許された。(新二)

なかかんじよう 中勘定 年貢米は十一月中に完了しなければならず、十一月には代官へ所取立完了の報告をしなければならなかった。これを中勘定といい、蔵払が終了した際の報告書を、蔵払勘定目録という。(瀬野川町史)

ながたずね 永尋 逃亡した罪人を日限を定めず、永くかかって搜索することをいう。

ながわりかじ 長割鍛冶 長割鉄をつくる鍛冶屋をいい、藩宮が多かった。長割鉄は、長さ二尺七寸〜三尺、巾一寸〜三寸、厚さ三〜四分、質がよく上割とも呼ばれ、大坂へ送られる特産品になっていた。(県一)

なげだししうもん 投出し証文 貸主と借主との間で紛糾が生じ、双方で解決がつかない場合には、五人組頭・長百姓・組頭・庄屋、村内で未解決の場合には、更に他村の組頭・庄屋・割庄屋・番組・御歩行目付の順で外部に持ち出し、調停を依頼した。依頼された者は、裁決の条件を両者に内示し説得し、解決することが多かった。しかし、支払能力のない債務者は、調停条件を履行することができず、こうした場合には、債務者は、その事件を投げ出す(一任する)ことを記した書付を、村方へ提出することがあった。この書付を「投出し証文」という。村方ではこれを受け取り、債務者に代わって、調停条件に示された義務を履行した。(広農) 文政十年(一八二七)三谿郡のある村の百姓作十郎は、年貢未納が重なり、財産のすべてを村に投げ出した。その「投出し証文」には、田畑・山林・家・小屋・頼母子質地の外、「家族共残らず」と記している。(県立文書館資料)

なだい 名代 ↓大坂蔵屋敷

なつあがりふゆとりたて 夏上冬取立 ↓冬上り夏取立

なつなり 夏成 ↓秋成

なつものあらため 夏物改め 広島の新開の内、東新開・西新

開・大黒新開・亀島新開・比治村・山崎新開の六ヶ村は夏物改めと称して、夏作物の畑は考慮して、土免から一つ三步ずつ引き下げて徴税した。(芸志)

なべせん 鍋銭 なべせに。江戸時代通用の寛永通宝鉄銭の俗称。銚鉄(ずくせん・ずくぜに)ともよばれ、鏝銚ともいわれた。

(図録日本の貨幣)

なよせちよう 名寄帳 田畑・屋敷反別の筆数を各所有者別に

区分し、納租及び村費賦課等の標準を取る基礎として、村役場に備えて置く帳をいう。なお、所有者等の移動があれば作りかえた。形式は一筆毎に記され、土地の所在地・等級・種別・面積・石高が書いてあり、村役人名で作成されているが、村で話し合いや調査が行われた上で作成された。(徳川・文書館資料)

ならしとだい 槩斗代 概斗代。概とは平均の意、従って反当平均收穫量のことをいう。

ならしめん 概免 * 圃高や切免所がある場合等には、免を變更して年貢米を取り立てた。この変更した免を概免または取立免という。 * 圃高がある場合には、例えば高五〇〇石、免六ツ(六〇%)の村では、定物成は三〇六石(含口米六石)となる。しかし、この村に圃高が五〇石あったとすれば、概免は次のようにして算出した。すなわち、

$$500 - 50 = 450 \quad 306 \div 450 = 0.68$$

つまり、この村の概免は六ツ八歩(六八%)となる。

* 切免所がある場合には、例えば高一〇〇〇石、免五ツ(五〇%)

の村で、内二〇〇石が切免所で免四ツ(四〇%)の場合には、村全体の定物成は五一〇石である。しかし、高二〇〇石の切免所では免が四ツ(切免所は他地区より一ツだけ低率なので、物成二〇〇石口米四斗が不足することになる。これらの不足分は、高によって比例配分して平等に負担するので、本郷(八〇〇石)の概免は、免五ツ・物成不足二〇石を高一一〇〇石で割ると二歩・口米一歩($800 \times 0.5 \times 0.02 \div 800 = 0.01$)・口米の不足分四斗を高一一〇〇石で割ると四毛、つまり本郷概免の合計は五ツ三步四毛となる。同様に切免所(二〇〇石)の概免は、免四ツ・物成の不足二〇石を高一一〇〇石で割ると二歩・口米八厘($80 \times 0.4 \times 0.02 \div 200 = 0.008$)・口米の不足四斗を高一一〇〇石で割ると四毛・つまり切免所概免の合計は四ツ二歩八厘四毛となる。(広農) * 明知・給知入り組の村で、給知方の免が明知方の免より高率の場合には、これを平均して取立免をつくり、両知とも同率で免を取り立てた。この免をも概免と称した。(三田雜記)

なりたちひやくしyou 成立百姓 持高三石以上の百姓をい

い、凶年でも救済の対象にならなかった。なお、三石未満の百姓を難済者といい、救済の対象になった。(広村)

なわごころ 縄心 検地の際に、厳しく丈量すれば、以後の検

地は更に厳しくなっていく弊がある。従って、最初の検地を寛大に行い、その結果の畝歩を実際の畝歩より少なくしておけば、以後、酷吏が過当な税を課することがあっても、納税者は畝歩に余裕があるので、それでもって償うことができた。この余裕を縄心といい、また、余歩ともいう。なお、広島藩においては、

繩心は行われていないようである。(徳川)

なんざん 南山 *南方にある山、特に世俗を離れた住居から

望む山をいう。 *吉野山をいう。また、南朝の意に用いる。

*比叡山を北嶺と呼ぶのに対して、高野山をいう。 *「南山の寿」から人の長寿を祝うことをいう。ちなみに「南山の寿」とは、「終南山」(中国陝西省の終南山脈中の一峰)が崩れないのと同様に、いつまでも丈夫でいることを寿ぐ意。 *江戸の芝、三緑山の俗称。また増上寺のことをいう。(国大)

なんりょう 南鐐 支那南方より伝わった「白銀」より上等な良質の美しい銀をいう。また、江戸時代の貨幣の「二朱銀」をいう。これは二朱(二両の八分の二)に相当した小型長方形の銀貨である。なお、「二朱銀」には、安永元年(二七二)九月から文政七年(一八二四)にかけて鑄造された。「安永二朱銀」(安永南鐐・明和二朱銀ともいう)や、文政七年二月から天保元年(一八三〇)にかけて鑄造された「文政二朱銀」がある。(単位・日本通貨変遷図鑑)

に

にこ 荷紛 米検査の時にできるこぼれ米等をいう。

にしほんがんにじのかろう 西本願寺の家老 旧佐伯郡畑村躍場家文書中の文化十一年(一八一四)六月の記事に「一昨年本山御家老九条様より御頼二付云云」がある。この記事により推察すれば、当時は西本願寺の家老職に公家の九条家があたっていた

たと思われる。ちなみに、現在の西本願寺には、館長の下に坊官・事務局長に相当)がおかれ、下間氏(しもつま)が任じられている。(本願寺資料研究所)

にじゅうさんやつきまち 二十三夜月待 旧暦の二十三日の

夜に月を拝む行事で、二十三夜講ともいう。この日は勢至菩薩(せいしぼさつ)・月読尊(つくよみのみこと)・月天などを描いた掛け軸を飾って礼拝する。一・三・五・九・十一月に行われることが多いが、とくに十一月の祭は、その年の収穫を感謝する新嘗祭とも関係があるとされている。ちなみに月天とは月天子・月宮天使・月神(がっしん)ともいわれ、インド神話から仏教に取り入れられた護法神をいう。(目広)

にしゅぎん 二朱銀 ↓南鐐

にちよううり 荷帳売り つけによる信用貸(売)をいう。(県二)

にちれんき 日蓮忌 法華宗で始祖の忌日(弘安五年十月十三日逝去)。日蓮は十二才の時道善に師事し、十六才で受戒して蓮長と称した。二十二才の時、初めて南無妙法蓮華經の題目を唱えた。弘長元年「立正安国論」の筆禍により伊東へ流された。後に佐渡に流され、赦されて鎌倉に帰り身延山を開いた。(広辞)

にとうじょう 二答状 訴人(原告)が提出した二回目の訴状に対して、論人(被告)が提出した二回目の答弁書をいい、重陳状ともいう。(古用)

にぶきん 二分金 江戸時代の金貨の一種で、二分判ともいう。文政元年(一八一八)に初めて鑄造された。同十一年品位の異なる二分金が作られたが、貨幣の背に刻された「文」の字が、前者は楷書、後者は草書であったため、それぞれ真文二分金(判)

・草文二分金(判)とよばれた。その後も安政三年(一八五六)・万延元年(一八六〇)・明治元年(一八六八)に鑄造された。(単位)

にもつひきやく 荷物飛脚 文化三年(一八〇六)に大坂の島屋佐右衛門によって西国筋に開設されたもので、毎月一・六日の日の月六回を出日とし、賃金は備後の国までが一貫目につき銀七匁であった。また、書状(量目一〇匁以内)の賃金は、大坂から尾道・三原までは一匁五分、広島は二匁、宮島二匁五分で、過重書状はそれに応じて増賃金をされ、また脇道に入る場合は、一里につき銀六分増しで加算された。(県二)

にわちよう 庭帳 年貢の納入に際し、現場において年貢米の出納を記しておく帳簿をいう。庭とは収穫物の調整作業をする場所をさしたが、年貢米の員数調べを庭場において行い、年貢納入の準備をするところの名が起こった。(古用)

にんじんざ 人参座 幕府は朝鮮人参を専売制にして、自由の販売を禁じた。統制専売する役所を人参座という。

にんそくよせば 人足寄場 幕府が寛政二年(一七九〇)に江戸石川島に設置。罪人が牢内で悪に染まるのを防ぎ、職を授け、獄中の作業に対して金を給し、出所後の生活安定をねらったものである。(日用)

にんべつちよう 人別帳 人別改の帳簿。初期は家族構成の外、家畜・家産の規模まで書き上げたが、享保十一年(一七二六)以後は人口のみに限られた。(日用)

ぬ

ぬき 貫 村入用は、年間必要とした額を、年末に高に割賦して

決算するやり方が多くとられていたが、入用の一部を途中で取り立てることがあり、これを貫という。「小の葉米人別貫」というのが免割の貫であり、「番給米家別取立」というのが、夫割の貫である。貫の取り立ては禁じられていたので、長百姓が庄屋に代わって組内からそれぞれ取り立て、村に貸与する形をとった。なお、庄屋に貫の扱いを禁じたのは、村入用緊縮のためと思われる。(広農)

ぬきぶ 抜歩 検地の際に、田畑の中に大石などがあれば、その部分を除いて行った。除外された部分を抜歩という。(日用)

ね

ねうまのじんばあらため 子午の人馬改 広島藩は、寛文二年(一六六二)に戸口調査・家人牛馬改めを実施し、享保五年(一七二〇)に郡中人家牛馬改めを命じているが、享保十一年(一七二六)以降は、幕府の指令によって、子の年と午の年の六年目ごとに、全国一円に人馬改として実施された。村ごとに各家の筆頭者の身分・職業別人数・男女別家族成員の集計・前調査との増減を記し、加えて牛馬数を調査した。(県一・事蹟緒鑑)

ねこく 根石 弥石。*毛付高に対して、「地こぶり」を行った結果生じた「かずき高」を「定め地かずき高」といい、毛付高から「定め地かずき高」を引き去った高を根石という。なお、

根石を基準として、貢租を徴収した。(剩語)↓地こぶり *元禄六年(二六九三)賀茂郡志和堀村の「地こぶり帳」には、「高一八七五石六斗八升・かずき高五二〇石八斗八升四合・毛付高三五四石一斗八升四合・定地高一三四石三斗三升二勺(定地高とは一般の割賦ができない悪所の高・残一二一九石八斗五升三合八勺根石)」と記している。つまり根石とは、村高より「かずき高」や定地高を引き去った高をいう。従って志和堀村の場合の高一石は、根石、「六斗五升五勺六才五」二対〇・六五〇(五六五)となり、諸算用には高に右の数を乗じて決めた。(広庄)

ねつけしゅうかいしよ 直付集会所 ↓米相場値付所

ねまち 子待 子待・甲子待・甲子祭ともいう。甲子の夜、大黒天を祭ることをいう。俗説に大黒は大国主命にして、父素戔鳴尊に苦しめられた時、弟が来て命を助けたという故事によって、この夜はこの神を祭るようになった。

ねんあらし 年荒 片荒ともいい、土地がやせ農業技術も未熟なため、連作ができず、何も植えず休ませている土地をいう。

(千代田町史)

ねんぎようじ 年行司 *年行司は、長百姓階層から庄屋が任命し(長百姓が交代で(年番)勤めた村もあった)、庄屋が支出する村費を日々附込小帳(年行司小帳という)に記した。免割はこの帳面によっても行ったので、庄屋の村費使用を監視する目付の役でもあった。年行司は、大村では三、四名、小村では長百姓が兼務し、宝永元年(一七〇四)の定では給料の支給を禁じていたが、村から若干の骨折料を受けた。しかし宝暦十二年(一七六二)の

規定では、一〇〇石〜五〇〇石の村は〇・五石、六〇〇石〜九〇〇石の村では〇・七石、一〇〇〇石以上の村では一石の給米を支給している。なお、年行司が置かれたのは、宝永元年(一七〇四)頃ではないかと思われる。(白木・剩語)

*江戸時代、一年交代で勤める江戸の町内や、株仲間における総代をいう。(目用)

ねんぐあがりぎんそうば 年貢上り銀相場 ↓上納銀相場

ねんぐさげふだ 年貢下札 村に免状(村が負担する年貢米の徴収令状)が代官(給知では給人から下付されると、庄屋(給知では給庄屋)は年貢米を百姓の持高に割賦して、納入額を各人に通知した。この通知書を年貢下札という。なお、「年貢米通帳」は年貢下札と同格のものとされた。(五日市町史) 年貢の過納分や借入分については、二割ぐらいの利息をつけて、翌年分の年貢下札で精算した。才覚米や村借の返却・年貢米未進の立替払などは、庄屋の下札を通じて行われた。(芸備地方史研究二三〇号)

ねんとうしゅうぎ 年頭祝儀 年頭に藩府へ米銀を祝儀として献上することを言い、村は勿論寺院も献上していた。天保十三年(一八四二)国前寺は、鳥目五百文を献上している。(国前寺文書)

ねんとうおしゅうぎまい 年頭御祝儀米 ↓給役

ねんぷしゅうもん 年賦証文 借銀証文の一つで、利息をつけることを中止し、元金の返済を支払い可能な長期間にして、なくすことを承認したものをいい、貸主の温情に頼らねばこ

の証文は成立しなかった。(広農)

の

のうけ 能化 師となって弟子を教化する者をいい、その弟子を所化という。仏・菩薩を能化とすると一切衆生は所化となる。また、一宗門の学事処理する者や、指導的立場の者をも能化という。(日用)

のざん 野山 農民利用の林野のうち、主として村方の入会地(村中入会)になっているものをいう。野山は農民にとつては、薪・牛馬の飼草・肥し草、また、用水施設材などの、村方諸普請等の給源になっていた。村中入会には、村内の全農民によって利用される惣入会、村内の郷・組を単位に利用する郷中入会・小入会・名付入会と呼ばれる形態があった。また、一つの山の山頂部が惣入会で、麓が小入会という形態をとるものもあった。ちなみに、野山・腰林での採草は、口明けの時に藩の許可が必要であった。(県一・野平家文書)

のとちちよう 野執帳 野取帳。毛利氏は惣国検地において、郷村を単位に、一筆ごとの面積・分米・分銭・名請人を決定し、その台帳を作成した。この台帳をいう。(県一)↓打渡坪付

のひにん 野非人 近世初頭には、年貢負担の重圧・凶作・飢饉等により、出奔・走り百姓となる者が続出した。彼等は野非人と呼ばれ、町村を徘徊する社会層を形成した。とくに、寛永末期の凶作・飢饉は大規模で、野非人の急増をもたらした。(県

(一)

のべまい 延米 付加税の一種で出目米ともいう。江戸初期には貢租米は枡に盛って納めたが、元和二年(一六二六)に斗搔が用いられ、切り落した余米を見積って、本石三斗五升につき二升を延米と称し付加した。なお、これは関東を中心に広範に行われたが、広島藩では込米の一種類であったと思われる。(日用・広農)

は

はい 盃 配巻の際に、仲仕の要求に応じて米等を与えることがある。これを盃という。(広農)↓配巻

はいうんじよう 灰運上 郡中の紺屋は、些少の税銀(灰一斗代四分位、多くても七、八斗から一石代)を上納した。この税銀を灰運上という。但し、広島・山県・御調郡にはこの税銀がなく、また、藍染ばかりの紺屋にも、この税銀はなかった。(芸志)

ばいきんしち 倍金質 田畑は永代売が禁止されていたので、それを避ける手段として用いられた。例えば、十両相当の田畑を、金主と相談の上、質地証文には、質金二十両とも三十両とも直段を上げて質入人(地主)に書かせ、金主は十両相当の田畑を受けた。従って、地主は年季が明けても、二十両〜三十両の返済ができない場合には、田畑は返してもらえなかった。こうした質入れを倍金質という。なお、倍金質は禁制になっていたので、庄屋は証文には加印せず、訴訟になっても「質入れ」で

あるように、金主・地主は謀計をした。(地方)

はいちさしがみ 配知差紙 郡村における明知高は、年々一定していなかった。それは、例えば給主がその子弟に家督を相続させる場合には家禄を減少し、その減少分は、給知から明知に移すなどを行ったからである。勘定奉行はこうした異動を、毎年代官所へ書面で通報した。この書面を配知差紙という。(芸志)

はいちだか 拝知高 配置高。大名の領地高をいい、束印高ともいい、配置高とも書く。大名の家格を示す目安になるとともに、幕府が賦課する公役や軍役の基準とされた。(県一)

はいちもくろく 拝知目録 配置目録 ↓知行判物

はいふきぎん 灰吹銀 灰吹法によつて精練された銀で、山吹銀・山出し銀ともいう。灰吹法とは、銀鉾に鉛を合わせて合銀鉛(貴鉛)を作り、これを灰皿あるいは灰吹炉で熱して鉛を灰に吸収させ、餅状の灰吹銀を残して取る方法である。灰吹銀は貨幣(はい銀子ともいう)としても用いられたが、形状・量目が雑多で、一々秤量しなければならなかった上に、銀産地あるいは極印が異なるごとに、品位が相違していたために、あまり流通せず、元禄の貨幣改鑄の頃までには、諸国通用の灰吹銀は漸次丁銀に切り替えられたようである。(国史大辞典) ↓丁銀

はいりようけ 拝領家 一般の職人は町屋敷に住んでいたが、扶持職人(切米などを支給される職人)に登用されると、多くは藩から家屋敷を貸与された。この屋敷を拝領家と呼び、町役免除等の特典を受けるなど、家中屋敷に準ずる取り扱いをうけた。

(県一)

はいえまき 配巻 年貢米の収納検査を受けるために、御蔵所の庭に、俵を配列することをいう。これに従事する者は、常時御蔵所で働いている町日雇の仲仕で、「米入」が割場(仲仕の帳場)から雇った。検査は蔵奉行が行い、俵装・米質を調べ、米質の劣るものなどは不合格(勿米)にし、翌日再び検査をした。配巻では六割前後しか合格させないという不文律があったともいわれる。それは御蔵所役人と町日雇との癒着とされ、容易に改めることはできなかった。(白木) ↓米入

はいえろくぶいり 配へ六歩入 配巻の際に勿米になると、良質の米と取りかえるか、または、その米を調整し直して納入しなければならなかった。「配へ六歩入」とは、六割が収納されて四割が勿米になるという意である。(広農) ↓配巻

はかりあらため 秤改 秤改は地区毎に適当な場所へ集めて実施した。沼田郡相田村より奥組の村々は、大塚村へ集めている。なお、改所には「御秤改所」と書いた高張提灯を立てた。検査の結果合格したものには刻印を押して持主へ返し、不合格品は取り上げた。(横山) ↓秤座

はかりきり 斗切 秤ではかっただけで、少しも添えないことをいう。例えば、米一俵(三斗・三斗一升等あり)に対して、米を付加(込米)しないことをいう。

はかりきりまい 斗切り米 ↓切枰
はかりぎ 秤座 秤の製造・販売・修理を独占し、不正・不良秤を没収する権限をもっていた幕府の機関をいう。守随・神の

二家が、それぞれ江戸・京都で秤制を司る特権を認められ、承応二年（一六五三）守随が東三十三か国、神が西三十三か国を支配し、その地方出張機関としての地方秤座があった。秤座では、ほぼ十年ごとに秤改めを行い（広島藩では宝暦十二年・寛政十二年・文化十年・文政十二年・嘉永三年等に実施）、秤の検査をした。秤座は明治八年（一八七五）に廃止された。ちなみに、広島藩は寛政十年（一七九八）に諸秤のうち、神善四郎秤を使用するように、厳重に申し渡している。（日用・横山・堀川町覚書）

はくぎん 白銀 銀を九センチほどの平たい楕円形にのばして、紙に包んだものをいい、通用銀の三分にあたり、多くは贈答などに用いた。（広辞）

はくしまくちやふねうんじよう 白島口屋船運上 延宝四年（一六七六）白島材木場内に運上役所を設け、水運によつて城下に搬入されるもののうち、年貢米・板・材木・紙などの公用物資以外のすべてについて運上銀を徴収した。（県一）

ばくふのだいかん 幕府の代官 郡代支配下以外の天領（五万石以上二〇万石未満）に置かれた職で、幕末頃には全国で四一人置かれた。職務は年貢の徴収・鉦山山林の管理・法令の伝達・訴訟の受理と審理等であった。↓郡代

はこそ 箱訴 目安箱による訴訟をいう。箱訴には多くの条件がつけられていた。正徳二年（一七二二）の規定によれば、①訴えの内容は目安箱設置以後の事柄に限ること、②箱訴前に嘆願したが村役人・町役人に受理されなかったか、受理されても藩に上申されなかった場合、③村（町）役人に願ひ出にくい内容で、

郡奉行・郡支配に直接申し出たい場合、④郡へ出張した侍等が農民に「非道之儀」や「法外之儀」を行った場合、⑤村役人が「私欲」「我まま」で、「礼物」をしなければ事が運ばない場合、などで、藩役人・郡方役人・村役人の「ざん訴」は厳禁されていた。（県二）↓目安箱

はしり 走り 庄屋の事務を補佐する役目を持ち、「大走り」と「小走り」（小遣夫の代りをするこも有）とがいた。「大走り」は延宝四年（一六七六）頃に廃された。なお、「小走り」の給米は、宝永元年（一七〇四）の定（但し蔵入・丸給知の村）では、一人に付一石（明・給知入り組の村では高割で給付）とし、大高村・飛郷の多い村等で一人で勤め難い村は、二人或いは三人が許された。さらに宝暦十年（一七六〇）の覚では一人に付一石五斗（明・給知入り組の村では高割で給付）に改められた。（白木・広農）

はしりはまこ 走り浜子 浜主からの前貸しをふみたおして、逃去する浜子をいう。浜主は「月々御改帖」などを作成して逃亡を監視した。なお、走り浜子を捕らえた際は、片かしらを刺つて塩浜中を引廻し、再び当所へ寄せつけないようにするのが、刑罰の原則であった。（県一）

はしりびやくしょう 走り百姓 貢租負担を逃れるために耕地を放棄し、他国奉公や日用稼等になる百姓をいう。浅野氏はこれを厳しく取り締まった。なお、この禁止令がはじめて出されたのは、元和五年（一六一九）である。（県二）

はしりみず 走水 台所の流し。食器・食物などを洗った水を、洗台の隅の小穴から下へ走り出すところからいう。（国大）

はたぎん 烟銀 烟の年貢米納入の困難な村では、藍・紫根(染料をとる)などを植えさせ、その収益の中から代替納入をさせた。

これを烟銀といい、沼田郡・安芸郡にはその例があった。

はたご 旅籠 江戸時代に庶民の休泊した旅宿をいう。慶長十

六年(二六二)幕府は木賃宿の制を定め、薪炭料(木銭)として、旅宿へ「人ハ三文馬ハ六文」を払わせた。その後交通量の増大とともに、旅宿は整備され、賄いをつけて入浴させる旅籠となり、木賃宿は宿場の場末に残され、貧者のみの宿所となった。旅籠は中期以後異常な発達をとげ、留女・飯盛女などを抱えるものが現れ、風紀をみだすことが多く、幕府は度々禁令を出したが、淫風は容易に解消しなかった。旅籠には平旅籠の外、商人を主な対象とする商人宿、牛方馬方を対象とする牛馬宿、近郷の村民が助郷に出たときに、主に泊まる宿があった。広島藩では、寛永十八年(二六四)広島城下の西土手町に限って許された「旅人一宿之宿」は、賄つきの旅籠と見られ、その後各宿場に旅籠が設けられるようになったと考えられる。(郷土・県

二)

はたもと 旗本 旗本とは、將軍直属の家臣で、家禄一万石未

満、御目見以上(五〇〇石以上)で、將軍に拝謁する格式のある者を旗本といい、それ以下を御家人という。ちなみに、享保七年(二七三)の調査では、旗本五二〇五人・御家人一七三九九人で、彼等は江戸に住み、石高・才能に応じた役職に就き、軍役を負担した。なお、十八世紀初における旗本の知行地は、三〇〇万石であった。↓御家人・参考資料

はちぶまい 八歩米 早稲は上質米とされ、年貢米はできる限り早稲より徴収した。その米を八歩米という。それは、升突有

米の八割を徴収するのを常としていたからである。(白木)↓升突

はちまい 鉢米 寺院に対して寄進した米をいう。鉢米には厚

薄があり、また、総ての村が一様に寄進したわけでもなく、それぞれの村の事情によったようである。例えば文化八年(一一八二)山県郡本地村では四斗、安永六年(一七七七)高宮郡狩留家村では二斗五升を寄進している。仏護寺への鉢米については、元禄十六年(二七〇三)に寺中十二坊との間に争論が生じ、そのため寺運が傾いた。藩は救済のため、宝永三年(一七〇六)蔵米二百俵を給し、各郡より鉢米寄付の制を定め、町新開よりは法施銀・灯明錢を献上させた。(白木)

はちりんきゅう 八厘給 組頭の給米は、宝永元年(二七〇四)

の定めでは、一人に付米一石五斗となっていたが、宝暦頃に八厘給または九厘給という制度が始まり、組頭の受け持つ高に対して八厘または九厘の米を給した。従って各村一様ではなかった。(広村)

はつうしき 初卯式 初卯参ともいう。毎年正月の最初の卯の

日に社寺に詣でることをいい、上方では住吉神社、江戸では亀戸の妙義社へ参詣して、神符を受けた。(広辞)

はつうま 初午 二月の初午の日を祭る行事。京都伏見の稻荷神社の神が降臨した縁日として、全国各地の稻荷社で祭礼を行った。広島藩府では三之丸の稻荷社へ朝五ツより夕七ツまで

一般の拝参を許した。但し、出家は許されなかった。(天保十三年国前寺文書御触留帳・日広)

はっさく 八朔 陰暦八月朔日をいう。この日農家ではその年の新穀を収め、田実の節句といって、子供は紙細工の人形などで遊ぶ処もあり、またその日は仕事を休む村もある。(広辞)

はっぼぎん 初穂銀 初尾銀とも書き、その年、最初に収穫した作物の代わりに、神社や寺院に捧げる錢銀をいい、村によって一定していて、一匁から十匁ぐらいであった。伊勢神宮・出雲大社・熊野権現からは御師、高野山からは使僧がそれぞれ受持の村を廻って募った。また、山伏の廻在に対しても二〜五匁くらいの初穂銀を寄施した。(白木)

はっほまい 初穂米 その年に収穫した米を、神社や寺院に寄施したものをいう。天保十一年(一八四〇)沼田郡相田村では、正伝寺へ五斗、仏護寺へ一斗、感神院へ二升寄施している。(横山)

はっよせ 初寄 割庄屋や庄屋が新年初頭に村役人等を集めて、種々の指示を与えることをいう。初寄では種々のこと(当年中の諸普請・前年の村方諸算用等)を話し合い、その後惣百姓を集め、去年分惣算用の読み聞かせ・触書の通達・村法度・「教訓道しるべ」等を読み聞かせる。(横山・千代田町史)

はとあみふだうんじょう 鳩網札運上 元和五年(一六一九)に制定された網締の鑑札に対する税で、一枚について三匁五分であり、請主を定めて増減は許さず、もし請主が死亡して継ぐ者がいない場合は、村受として納入させた。(白木・自得公済美録)

はねまい 刎米 年貢米の納入において、青米・赤米・大唐米などが混入している俵は不合格になった。これを刎米といい、刎米にされた俵は「米直し」をして、翌日に配巻に廻した。(白木)↓配巻

はまこ 浜子 塩業労働者を一般に浜子という。浜子は、浜を主宰する大工だいぐ以下最下層の炊かしきにいたるまで、階層的に編成されていた。経営者が浜子を雇う場合、年雇い(二ヶ年)と月雇い(数ヶ月)とがあり、経営者自ら大工以下の浜子を直接雇うこともあったが、多くは大工だけを雇い、他の浜子の雇い入れは大工に委す場合が多かった。(県二)

はやご 早具 紙製の小筒に火薬を包んだもので、小銃にこめるのに用いた。(広辞)

はやみち 早道 飛脚の別名。広島藩では、月々再度(十日・廿四日)ずつ広島・江戸間を往復して書状を持参する者(足輕格をいう。この場合御家中をはじめ、末々の衆の書状をも持参した。通常広島・江戸間は十五日かかった。(芸要・新三)

はらいきりよまい 払切余米 藩の米蔵へ、必要以上の米(余米)を納入した場合に、十俵以上の米は代官へ、九俵以下の米は御米蔵へ、それぞれ書付をもって願ひ出て下げ渡しを受けることができた。この米を払切余米という。(広農)

はりがみねだん 張紙値段 幕府が旗本切米取に俸禄を支給する際に、その一部を代金で支給することがあり、その換算基準を張紙値段といい、江戸の時価に応じて定めた。例えば文化三年(一八〇六)における一〇〇俵(三五石)の張紙値段は、三二両で

あった。但しこの値段は、冬(十月)支給の切米の値段である。

はるこま 春駒 年の始めに馬の頭の作り物を持ち、戸ごとに歌ったり舞ったりした芸人、また、その歌をいう。なお、子供がまたがって遊ぶ道具で、馬の頭の形に造ったものを竹の先につけ、他端に車をつけたものをいう。(広辞)

はるめん 春免 前年の作物の豊凶によって、作付前に決められる免をいう。この制度は福島時代から随時実施されていたが、後になって「土免」といわれるようになった。(白木)

ばんきゆうまい 番給米 延宝四年(一六七六)頃「大走り」が廃止され、百姓が廻り廻り勤める人役に改められた。これでは老人・婦女子のみの家では勤めかねるので、状持夫を定め、その代わりに夫米を取り立てることにした。しかし、それは百姓が便宜のために行うことで、夫米を村割に入れることはできないので、番給米と称して、長百姓が別途に取り立てた。(刺語)

はんぐみ 版組 塩田経営の場合には、浜主が浜子の逃亡を監視するため、浜子三人を一組としたものをいう。版組の一人が逃亡したり、勤めを怠った場合は、同じ版組の他の浜子に弁償させた。(県一)

ばんぐみ 番組 代官の配下には、勘定所支配の足軽五、六人が手付として付けられた。これを番組(後に勘定所支配足軽と称す)といい、その一部は常住在郡した。宝暦五年(一七五五)番組一人が沼田郡相田村に入村して、昼食をしたときの費用三匁六分七厘(但し村役人・年行司・肝煎共五人の昼食代二匁七分を含む)については、番組用の米三合代二分七厘が御銀出・残りについ

ては郡割が二分、相田村が三匁二分を負担している。なお、番組一人に要した費用は九分七厘で、その内訳は次のとおりである。米三合二分七厘・味噌一分・醤油五厘・午蓐五厘・川魚一分・酒塩酒一分・茶五厘・香物五厘・薪二分。(新二・横山)

はんげしろう 半夏生 半夏ともいう。夏至の第三候(七十二候の二)にあたり、夏至から数えて十一日目。半夏とは、カラスビシャクという多年草の毒草のこと。この日には天から毒気が降るとか、地が毒草を生ずるなどの俗信があり、野菜を食べない、種まきを忌むなどの風習があった。半夏生は新暦の七月二日頃。(単位)

ばんさつせい 番札制 太田川筋で、各浜所で各船に番札を渡し、その順番に従って荷積みする制をいい、御用炭、板類などの公用物資には早くから行われていた。しかし、輸送物資の増大していくなかで、文政元年(一八一八)からは木地・下駄・棟木・鍛冶炭・商人荒荷・浜鉄の六品が加えられ、さらに天保十一年(一八四〇)には公用荷・商人荒荷・自分荷など、いっさいの荷物を対象とするようになった。(県二)

はんじょうせん 半畳銭 芝居小屋で見物人の敷いた小さい畳、またはござの貸し賃をいう。半慮銭ともいわれたようである。(広辞)

ばんせんせい 番船制 太田川筋で、一ヶ年ごとに株船の通船回数を概し、この平均回数を越えた船の船持は、それ以下の船(不足番船)の不足回数を買い取る制度を番船制といい、違反すれば「船遣急度差留メ」になった。不足番代は、天明六年(一

七八〇までは、一川（二川は川船一往復の単位）につき銀二匁五分（うち世話料五分）、翌七年から三匁に増額、天保十一年（一八四〇）には銀一〇匁（世話料なし）と申し合わせている。（県二）

はんせんひょうしき 藩船標幟 広島藩は寛永十二年（一六三五）に藩船の標幟を定め、白地に黒の三つ引とした。（広島市史二）

はんたかば 反高場 新田の中で、地味悪くあるいは出水で流失の恐れがあり収穫不足のために、田租の外は高掛役を負担させ難いので、反別のみを丈量して、軽租を課す土地をいう。（日法）

はんたのみおさめ 半頼納 田畑質入の際、金高を少なく借り受け、地主が直小作をし、年貢は金主より納め、諸役は地主が勤める制を半頼納という。この制は禁止されていて、もし裁判になった時には、地主は「叱り」金主と加判の村役人は過料になった。（地方）↓頼納質^{たのみおさめし}

はんち 半知 ↓借知

はんちん 判賃 ＊藩府へ税銀を納入したり、米納に代わって銀で代納するような場合には、銀の品質の鑑定料を徴収させられた。これを判賃という。この制度は承応二年（一六五三）から始まったといわれている。判賃はいちいち納税者が専門家の鑑定を求めて、その後に納入することは難事であったので、村が一括し、村入役から納めた。判賃は上納銀額によって異なり、承応二年（一六五三）の制では、一匁〃三〇目までは銀一分・三一匁〃六〇目までは銀一分五厘・六〇匁一分〃一〇〇目までは

銀二分・一〇〇目一分〃二二〇目までは銀三分・一三一匁一分〃一六〇目までは銀三分五厘・一六〇匁一分〃二〇〇目までは銀四分であった。（広農） ＊材木・薪売などの商事目的で伐木した場合に上納する税銀（歩銀）に対しても、判賃が徴収された。例えば、文化九年（一八一二）沼田郡相田村百姓善六は、松五五本を伐り、大束二七五束を五五匁で売却したときに八匁二分五厘の歩銀と、一分の判賃を納入している。（横山）

はんやく 半役 農村における諸職人水役銀の場合、農村在住の諸職人の本業はあくまでも農業であって、農閑期に限って職を稼ぐもの、つまり半役とされており、例えば、農繁期においては官用といえども、辞することができた。従って、諸職人水役銀も本役の半額を上納した。（広農）

ひ

ひき 疋 錢を数える語で、古くは鳥目十文を一疋とし、次いで二十五文を一疋とした。また、布帛二反を単位として数える語でもある。

ひきすてえず 引捨絵図 幕府の巡検使来藩の度に作成・提出された絵図をいう。この絵図は第一回目の巡検使来藩（宝永七年）か（時に提出された絵図と同様のもの）でなければならなかった。すなわち、村名をはじめ、一里塚などにいたるまで、浅野氏入国時のものと符合して厳重にチェックされるので、例えば、橋の位置が変わっていたならば、元の位置に架け替えねばならな

かった。

ひけだか ひけ高 永年、年貢米を徴しない田畑をいう。(広農)

ひきやくぶ 飛脚夫 宝永元年(二七〇四)には「御用並急飛脚の義は、一人一日賃銀二匁づつ遣し申候事、但夜通しは昼夜四匁づつ可遣事」と定めている。

ひぜにかし 日銭貸 江戸時代庶民の間で行われた高利貸しの一つ。少額の金融であったが、毎日利息を取り、貸借契約を更新した。毎日の利息を滞納すれば元金に直し、不法なども多かった。享和三年(一八〇三)幕府はこれを禁止した。なお、この貸金を「日なし銭」とも「日済」・「日成」とも書く。(日用)

ひぞんまい 日損米 日照りのために、質が悪くなった米をいう。

ひっしや 筆者 ↓筆取

ひっそく 逼塞 閨刑の一つで、広島藩では、昼には門を閉じて謹慎し、夜中は表門の潜り戸よりの、穩便の通用が許された。なお、火災に際し居室が危い時には転居が許され、また、重病になったときは、親類・縁者・医師等がひそかに出入りすることが許された。(芸志)↓閨刑

ひでんしゅう 悲田宗 日蓮宗の一派で、法華経の信者以外からは布施を受けず、また施さないという主義のもので、悲田派・不受不施派。(国大)

ひとおさえ 人押え 大名の行列等で、先頭に立って人を押さえる役(頭を下げさせる)、つまり先払いをいう。

ひとがえし 人返し 逃亡農民を、もとの土地に返しつけることをいう。毛利氏は、年貢と高利貸付の出挙の負担に耐え切れず逃亡する農民を、もとの土地に返しつけている。(県一)

ひとくるび 一來尾 製鉄作業は山鉄穴師やまかんなんじ砂鉄含有土砂を掘り崩す)と、池鉄穴師(流し子ともいい、精洗池で選鉱を行う)に大別され、この作業は濁水被害を出す関係から、農繁期をさけて、秋の彼岸から翌春の彼岸前後までの期間に限り、行うものとされていた。これを一來尾という。(県二)

ひとつなりあげまい 一つ成上げ米 ↓家中上げ米

ひとばらい 人払い 近世の芸備両国における最初の戸口調査は、天正十九年(一五九二)に、毛利氏によって行われた。この調査は豊臣秀吉の命によるものであり、これを「人払い」といい、領内の家数・人数を村毎に帳面に書いて差し出した。(県二)

ひとわり 人割 人夫等の割当をすること、あるいはその役をもつ下級武士をいう。

ひまち 日待 日の神を祭ってその恩恵を受ける祭で、大抵一月・五月・九月の吉日を選んで行う。なお日待は日祭とも書く。

ひもりきゅう 樋守給 宝永元年(二七〇四)の定が長く行われ、一人に付き米三斗五斗。但し樋の大小数の多少により異なり、なお明給入組の村は高割にした。(広農)

ひやくいちもん 百一文 江戸時代、朝百文を借り、晩に利息を添えて百一文として返すことをいう。なお、これには借用証文は不要であった。(広辞)

ひやつぴょうえん 百俵塩 元禄十一年(一六九八)まで竹原塩浜から召し上げていた運上をいう。元禄十二年に竹原塩浜は御手浜になり、従来の御年貢並びに百俵塩を止め、新たに運上を課した。(横山)

びょうにんおくりじよう 病人送り状 旅人が旅の途中、某村で病気になる時には、某村は療用を加えることになっていた。但し、病人の意思によつては、病人送り状をつけて隣村まで送り、以後は村々の継送によつて生所まで送り届けた。病人送り状には、病人等の名前と年令・生所・所持品(往来手形その他)・送り届先・継送にしてほしい等のことが記されていた。(横山)

ひよりじゅう 日和中 牛馬や流行病に対する祈禱をいい、その費用は村が負担した。負担額はそのつど代官の許可を必要とし、宝暦十年(二七六〇)及び寛政三年(一七九二)の触では、一度分は銀八匁以内で年に三度まで許し、それ以上はその度毎に許可を要した。(広農)

ひよりもうし 日和申 晴天になるように、神に祈願すること。をいう。また漁師の主だった者たちが酒を飲みたくなった時に、何かの口実をもうけて飲酒すること。をいう。(国大)

ひらいぶ 拾歩 山間などの棚田数枚を、一筆にすることをいう。(徳川)

ひらたぶね 平田船 艀船。平駄船ともいう。上代から近世に至るまでは、大型の川舟として貨客の輸送に重用された吃水の浅い細長い船。概して上代から中世では大きいものは百石積以

上で、しかも貴族の御座船にもなった。近世以降は比較的薄板でつくる平底の構造船形式に発展し、大船になると帆装など海船に近い儀装を有していた。(国大)

ふ

ふいごまつり ふいご祭 十一月八日、鍛冶・鋳物師が守護神稲荷神を祀る神事で、神棚並びにふいご・神酒・鏡餅等を備え、因人を呼び、神酒開と唱えて、酒宴饗応を行う。(平凡社大辞典)

ふいち 歩一 分一。 *近世の海難荷物取り揚げの際の、褒賞制の一つで、すべて海底に沈んだ荷物を引き上げた者に対しては、積荷の評価額の十分の一を荷主から与えた。*江戸時代の税法の一で、分一金・分一銀ともいう。商業・漁業・山林などの業者に、その売上高・収穫高の何分の一かを課税した。(日用)

ふきかえ 吹替 貨幣改鑄のことを吹替といい、改鑄による益金を出目、これが収納を出目納といったが、文政以後は御益納とも呼んだ。(日法)

ふきたて 吹立 金・銀の精錬をすることをいう。(日史)

ふきや 吹屋 鍛冶屋のことをいう。千割吹屋鍛冶というようない方もされ、「割鉄ニする拵へ候所ヲ吹屋ト云」といわれている。(県一)

ぶぎん 歩銀 材木売り・薪売りなど、商事目的のために伐木する場合には、歩銀(取引税)を藩へ納めた。例えば、安永十年(一

七八二に、高宮郡中島村の次郎兵衛が、腰林から松三十四本を伐木して、沼田郡温井村・中調子村の用水唐樋仕替用の材木として売った際には、銀十五匁四分を納めている。また、文化九年（一八二二）沼田郡相田村の百姓善六は、腰林から松を伐り薪にして売った際には、一束につき三厘の歩銀を納めている。

（可部町史・横山）

ぶぎんわり 夫銀割 ↓足子引高

ふけしゅう 普化宗 臨済宗の一派で、開祖は唐の普化禪師。

わが国へは鎌倉時代に「覚心」によって伝えられ、十七世紀初期に開宗した。宗徒は虚無僧（薦僧）と称し、尺八修行で解脱することを本旨とした。しかし、十八世紀中頃になると偽虚無僧や郡中を徘徊して、喜捨などを強要する虚無僧が出現するようになり、幕府は取り締まりを強化した。普化宗は明治四年（一八七二）に廃宗になったが、虚無僧は明治二十一年（一八八八）に設立された京都明暗協会などの所属となり、現在も命脈を保っている。ちなみに普化宗の本山は、京都白川の明暗寺であった。

（国大）

ぶげんちよう 分限帳 ぶんげんちよう。江戸時代に、幕府や

諸藩が家臣の一人一人について、その役職や石高を記した帳をいい、何度も作成された。ちなみに、幕府では正徳期の「御家人分限帳」が著名である。（目広）

ふじき 夫食 近世農民の食料一般のことをいい、その中心に

なったものは、米・麦・粟・稗である。（日用）

ふしみやしきばん 伏見屋敷番 伏見の藩邸（寛永十年設置）に

定勤する者の支配役をいい、京都役人とともに、呉服物その他の仕入・京銀の起債・処理等にあたることも多かった。（新二

↓京銀

ふじゆふせは 不受不施派 日蓮宗の一派。京都妙覚寺の僧日

奥を祖とし、備前国御津郡金川村（御津町）の妙覚寺を本山とする。法華宗以外の信者の施物をうけず、また法華宗以外の僧に施しをしない主義で、徳川時代は堅く禁じられていた。明治九年（一八七六）四月に公許された。（国大）

ふしんのけんぶん 普請の見分 天保十四年（一八四三）東能美島

各村の春普請見分のため、代官新保彦兵衛が来島した際に、中村では庄屋・社倉十人組頭取・与頭二名・徳正寺が出迎をしている。なお、長百姓惣代・百姓浮過惣代・医師等も出迎している村もある。（踊場）

ふしんぶぎょう 普請奉行 普請奉行の主管は、藩府の事業と

して行われる土石工事を支配することである。直接民政に関するもの（築堤・用排水・道路など）は、藩府の工事として施行することは稀であったが、大規模な治山・治水工事は管掌した。その他小姓組に対する諸触達し・家中の宗旨改・屋敷替等を担当した。宝永六年（一七〇九）以前は、大目付役をも担当していた。

（新二）

ぶせん 夫銭 夫米。中世・近世に、百姓・町人が領主に対し

て勤める夫役（人足役）を金銭で代納したものをいう。夫金・夫銀も同じで、米で代納するものを夫米（人足米という。百姓・町人からの夫役徴発が、農業や営業に支障をきたし、早くから

夫役の代納化が行われていた。(日広)

ふたいのくらい 不退位 仏教用語。再び迷いの世界に入らない位置。真宗では信心を得れば、必ず成仏する地位に定まることをいう。(広辞)

ふだやくぎん 札役銀 札役銀とは、一種の營業税ともいうべきものの総称で、すでに元和六年(一六二〇)には、鹿・雉子・鳩獵札を定め、郡奉行がこの鑑札を發行して、年間定額を徴収した。(県一)

ふちしよくにん 扶持職人 ↓ 拝領家

ふちまい 扶持米 俸禄米の一種で、幕府や諸藩は下級武士に対し、多くの場合本給(切米)以外に、玄米を一日五合を基準にして支給した。これは一人扶持とよばれた。広島藩では切米六〇石未満の下級武士に、一日五合にして一ヶ月分を前月に支給した。(足輕等では、切米はなく扶持米だけの者も多かった。なお一人扶持を取っている者に対しては、外に塩噌代と称して、一ヶ月に米四升宛を渡した。扶持米は宝暦四年(一七五四)以降は、代銀渡しに改められた。ちなみに幕府では、御目見以下の御家人に対し、浅草御蔵から月俸制で、一人扶持としては一日五合を基準にして、月一斗五升ずつを支給している。(新二・日広・芸藩三十三年録)

ぶっさんがた 物産方 ↓ 諸品方

ぶっしまい 仏飼米 村内の寺院に対する初穂米をいう。豊田郡船木村では天保十二年(一八四二)に、村内の四か寺に対し、計三斗五升を供している。(本郷町史)

ぶっぱんこう 仏飯講 蓮如上人の時代に、真宗信者が御念仏

仲間の組織をつくつた。これを講といい、本山からその講に対して南無阿弥陀仏の名号を下付した。こうした講は全国的に形成され、仏飯講はその一つの講の名称である。なお、大阪には「十三日講」、鹿児島には「煙草講」があった。

ふでとり 筆取 筆者ともいい、庄屋に付随している職で、庄屋には村内の用向がすべて集まるので、重要なことを書き調えることを役目とした。筆取には給米が支給されたが、宝永元年(一七〇四)七月の蔵入・丸給知村の定によれば、百石から四百石の村では米二石、五百石から九百石の村では米二石五斗、千石より千九百石の村では米三石、二千石より三千石の村は米三石五斗であったが、後には村高百石より四百石の村は一石五斗に改められたようである。但し、明給人組の村の給知方の負担分は、高一〇石につき一升五合であった。(白木)

ふでとりきゆう 筆取給 宝暦十年(一七六〇)に広島藩は次の定を出している。「村二寄、組頭元筆取給と申儀、内割二而立遣候由ニ候得共、甚以心得違ニ候、村内用向之義者、万事庄屋元へ相集候事ニ候、若秋方取立之時分筆遣可有之候得共、是者組頭共自身筆遣申格之者ニ候、重キ義者為其村中筆者相極り居候得者、此者書調候答ニ依而、組頭元筆取給米別立而、堅不相成、自今堅無用ニ候」。宝永元年(一七〇四)の定では、

100石〜400石の村	米2石
500石〜900石の村	米2.5石
1000石〜1900石の村	米3石

(広農)↓筆者

ふともの 太物 絹織物を呉服というのに対して、綿・麻織物などを総称して太物という。(日史)

ふなさし 船差 馬差が陸上交通の人馬を采配したように、船手の采配をする役人をいう。寛政七年(一七九五)には廿日市には船差が二人おかれ、その給銀として銀百目(米一石一斗九升五合)が与えられている。(廿日)

ふなづみきもいりやく 船積肝煎役 ↓大坂登せ米支配所

ふなとこぎん 船床銀 浦々川々の船持は随時船奉行の改をうけて、公用に徴発されていたが、寛永元年(一六二四)からは、所定の代銀を冬中に上納する制に改められた。これを船床銀という。川船については、船数が定まっており、また、その場所により出荷等に差があるので、船床銀は一樣ではなく、例えば元禄四年(一六九一)高宮郡狩留家村では、一艘四十目、可部では六十五匁、高田郡三田村では二十七匁、沼田郡久地村では十五匁であった。海船については、船数の定めがなく、また、船床銀は帆数によって定められ、帆一反について銀一匁であった。なお、川船では、一艘につき年一匁であった。(県一・広寛)

ふなとしより 船年寄 広島の内川には、早くから四人の船年寄がおかれた。船年寄は、町新開各川筋の船舶の管理をはじめ、出入りする船舶や乗組員・積荷等を支配した。(県一)

ふなぶぎょう 船奉行 船奉行は、船頭・定加子を預り、藩船の管理・領内の廻船・漁船・川船の取り締り、浦辺島方の村々

に割賦された加子役家の支配に当たった。はじめはその村役人の任免等にも関与したが、享保二年(一七一七)以降は水上のこのみを管掌することになり、宝暦七年(一七五七)以降は、領内の廻船・漁船・川船・加子役のことは、町奉行や代官の支配に改められたので、直接民政に関与することはなくなった。(県一)

ふねあらため 船改め 川船数・船床銀・積荷慣行・操業範囲

を確定することをいう。太田川水系では、明暦二年(一六五六)・寛文七年(一六六七)・延宝三年(一六七五)・貞享二年(一六八五)等に行われているが、元禄四年(一六九二)の船改めは太田川水系全域を対象とした大規模なものであった。これは、登録した船数(可部五〇・太田四二・三田三〇・深川三〇・山県郡五四)を船株として固定し、船株仲間の結成を許して権益擁護を認め、さらに積荷の集荷地域・操業区間を確定し、年により変動していた船床銀(寛永元年創始、一般につき三田船二十七匁、深川組四十六匁、太田組十五匁)を固定化した。浦辺・島々においても、船改めは行われ、船ごとに焼印を捺し、船型・年数・帆端数等を調査し、帳外れの船・焼印のない船は没収し、船の売買に対しては、船奉行へ届け出なければならないことにした。その後、享保十年(一七二五)には、藩船二〇八艘・民船四八三三艘の船改めを行っている。ちなみに、太田組とは、山県郡の下筒賀・下殿河内・上殿河内・中筒賀・加計・津浪・坪野の各村が結成した組合、つまり船株をいい、寛文年間の川船数の総数は三七艘、享保年間の総数は四四艘であった。(県一・広寛・川筋船株連判帳・吉長公御代記)

ふねうんじょう 船運上 広島藩は、寛永期に入ってから、林

産物の流通統制をはじめた。すでに元和八年(一六二二)安北郡(高宮郡)深川筋から、城下へ積下す炭薪船に船運上(船の積荷に対する税)を課し、寛永三年(一六二六)には可部から城下へ下る炭薪船に、同五年には太田川水系を利用する全ての割木船に、船運上を課した。(県二)

ふねかぶ 船株 ↓船改め

ぶはんまい 夫飯米 災害があつたときなど、その復旧作業等に従事する人夫の飯米をいう。

ぶまいだいぎんわり 夫米代銀割 ↓足子引高

ぶやくぎん 夫役銀 臨時の課税である。元来、百姓が藩府から幕府の普請の手伝いを命じられたときには、百姓を江戸に徴して夫役を勤めさせていたが、往來の費用、そのほか何かと負担が大きいので、元禄十一年(一六九八)から、夫役に代えて銀納させることにした。これを夫役銀という。ちなみに、元禄十一年(一六九八)には、高一石につき米三升分代の夫役銀を取り立てていた。(白木・広村)

ぶやくひきだか 夫役引高 西国街道や脇往還の維持・管理は、本来藩費支弁であつた。しかし藩で賄いきれない場合は郡割で処理され、それは農民には大きい負担であつた。そのため往還筋の村に対しては、「道造り夫」「天下送り夫」等の村に指定し、村高から夫役高を免除した。これを夫役引高といい、例えば、安永二年(一七七三)賀茂郡寺家村では、村高五三〇余石に対して、引高は三二五石であつた。なお、享保三年(一七一八)

には西国街道の外、三次・石州・吉舎・甲山・尾道筋の往還筋でも夫役引高を定めている。(県二)

ふゆあがりなつとりたて 冬上り夏取立 職人水役銀は年間

二回、六月(前年七月〜十二月分)と十二月(一月〜六月分)にまとめて徴収した。そのうち六月徴収分を「冬上り夏取立」といい、十二月徴収分を「夏上り冬取立」という。(芸志)

ふりうりふだうんじょう 振売札運上 藩府は、広島町にお

いて野菜等の振売り商事を行う者に鑑札を渡して、定額の営業税を課した。これを振売札運上という。この制は、広島町の町人や近郊の農民らの中に、振売り商事を行う者が多く、武家奉公人が払底して困っていたので、それを抑制するために、寛永二年(一六二五)以後始められたといわれている。なお、この運上の徴収は同九年までで行われ(但し毎年徴したかどうかは不詳)、同十年から同十四年までは中止し、同十五年から同十九年までは徴収し、同二十年にこの制は廃止された。(新三)

ふるあれ 古荒 古くからの荒地をいう。古荒は検地の際にそ

れを無視して高をつけ、年貢の対象地としたものが多かった。なお、地概の結果を検地帳に照らして、理由が不明で不足している土地(畝不足を一括して、「古荒川成」と称したようである。古荒と川成とは、一つの成語と見てよいと思われる。(刺語)

ふれがきかいたつちよう 触書廻達帳 割庄屋が管下の諸村

に、藩の法令などを通達する際に使用した文書をいう。この通達は回覧という方法で行われたので、宛先として割庄屋の管下の各村が列挙されている。なお、各村名には、それぞれ押印が

ある。これはこの廻達をみたという証拠に、村役人が捺したものである。中には何日の何刻に廻達を受け送りしたかを、書いてある村もある。順送り各村に回覧されたあと、再び廻達帳は割庄屋のもとにかえされた。(文書館資料)

ふれがしら 触頭 録所(幕府や藩の宗教行政の命令を伝達する機関。江戸の築地別院、後には全国で七か寺が受けた幕命を引き継いで、地方寺院へ伝達する役目をもつ寺院をいい、およそ一国に二、三か寺ずつ定められていた。また、触頭は藩の命令を伝達する役割も課せられていた。広島藩では、寺院に対する触・達あるいは寺院からの諸願の受理等について、宗派ごとの、いわば肝煎役ともいうべき寺を指定し、管理的な役割をさせた。

この寺を触頭(触頭寺院・触口)という。(県二)↓録所

ぶわり 夫割 夫割とは、該村において堤防等の工事、藩庁官吏等の作況の見分、その他出家・社人・警女・座頭等の送迎等、年中これらに使役する人夫についての、割りつけをいう。これらの人夫は、順番に就役させ、代用としての米銀は課さない定めであったが、とかく郷中役人の附近居住者には多く課せられ、遠方居住者は、急を要する場合には用を為さないので、夫役の平均を得るため、米銀を課すようになった。(芸志)

ぶわりひきだか 夫割引高 ↓足子引高

ぶんせん 文銭 寛永通宝(寛永十三年から万延元年まで铸造)の一つで、寛文の頃に方広寺の大仏をくずして铸造した銅銭をいう。背に年号の一字である文の字がある。文字銭・大仏銭ともいう。(広辞)

ぶんづけひやくしよう 分付百姓 分付ともいい、江戸時代の隸農をいう。永小作人の一種であり、ある人に隸属した形で、その持地を耕作した。後進地域の検地帳に多くみられる。(日用)

ぶんまい 分米 検地によつて、田畑宅地とも一筆ごとの土地について、境界を定め反別を改め、土地の位を札して、石盛をしたものを分米という。つまり、分米は土地の生産力を評価したもので、これを集計したものが村高である。(広庄)



べいぎんかた 米銀方 勘定所の一分課で、米銀の出納・勘定を管掌した。(日用)

べいこくねつけしゅうかいしよ 米穀値付集会所 広島藩では文化十四年(二八一七)に、新川場町に設け、六人の値付改役を置いて米の値段を決めた。(新二)

べいさつ 米札 ↓米切手

へいもん 閉門 門を閉じ(釘附はしない)て謹慎させる閨刑をいう。但し広島藩では、病気の節には夜中に医師を招くことが許され、また、火事に際しては転居が、不時の用事があるときには夜中ひそかに知らせることが、それぞれ許された。(芸志)

べがいせん 弁才船 近世における海運の主力となった代表的な和船で、瀬戸内を中心に発達した。四角帆一枚の船で、帆走性が高い。(県二)

べつこさく 別小作 質に取った地所を、質入主以外の者に小作させることをいう。(徳川)

べつとりたて 別取立 年貢米のほか、粍歩米・七厘米等の納入や、村役人の給米・初穂銀・入置米・年行司の立換銀・郡割の御貸銀などの返済等を別々に取り立てることをいう。但し、明知村においては、この制はなかった。(横山)

へんしょう 返抄 請取証・受領証をいう。(日用)

ほ

ほいいじょう 布衣以上 侍士の格式で、留守居以下先手者頭

・郡奉行・町奉行・船奉行・勘定奉行・普請奉行・持弓筒頭・歩行頭等の職にある者、ないしはこれに準ずる者をいう。礼式のとき布衣(織紋のない素襖)を着用し、藩外にでるとき、長柄傘の使用が許された。(新二)

ほうこうかまい 奉公構 江戸時代の刑罰の一つで、奉公を禁止

することをいう。武家や武士奉公人の犯罪が、主家にとつて不都合を生じた場合、再び主家や他家への奉公が禁じられ、最終的には無宿などになる場合が多かった。(目史)

ぼうしよ 亡所 耕作者がいなくなり、荒廃した田畑をいう。

ほうらい 蓬萊 主として関西で、新年の祝儀に三方の上に白紙・羊歯・昆布などを敷き、その上に熨斗鮑・勝栗・野老・馬尾藻・橙・蜜柑などを飾ったものをいう。(国大)

ほうろくせい 俸禄制 藩士の給与形態のうち、年貢米をい

ったん藩庫に納入し、ここから現米を支給する形態をいう。ちなみに、福山藩では水野氏の初期は地方知行制が行われていたが、寛永十九年(一六四二)からあまり降らない時期に俸禄制に切り換えられ、以後、松平・阿部氏ともに、完全な俸禄制を採用した。(県一)↓地方知行制

ほかけえぼし 帆掛烏帽子 武士の着用する烏帽子で、形が帆

をかけた形に似ているところからいう。多くの武士がかぶったもので、行動しやすいように折りたたんだもの。(国大)

ほそわりかじ 細割鍛冶 ↓千割鍛冶

ほつちゆうめつけ 法中目付 西本願寺派においては、数ヶ村

内の寺院が一つの集団を結成していた。これを法中といい、例えば、高宮郡には西部・中部・東部の法中があった。江戸末期には教団組織の弛緩・統制の減退に対し、本山(西本願寺)には目付役をおき、諸国の郡或いは組・講などを単位に、法中目付を設けた。法中目付は特定の寺(高宮郡では可部町の西光寺・中島村の超円寺)を指定し、管轄内の僧侶・寺院の状況を監視し、悪しき所業がある場合にはその処分の原案を本山に上申し、困難な事例例えば寺院・什物が焼失した場合には建築・再下付を要請、また、法中講会(西本願寺学林より僧侶が派遣される)などを司った。(県二)

ほのぎ 穂の木 保の木。田の区画。小部落。小字のことをいう。

(広辞)

ほんけひやくしょう 本家百姓 ↓本百姓

ほんごう 本郷 古くから開けていた村落(地域)をいう。親郷と

もいわれ、村の中心になつていることが多い。(原村)

ほんそく 本則 免許や許可をすることをいい、特に虚無僧の場合に多くこの用語がもちいられている。(躍場)

ほんちよう 本帳 三原市に編入されている旧豊田郡諸村の文

政二年(二八一九)国郡志書出帳には、元朝に村中の百姓が、庄屋宅へ「御本帳拝み」「御本帳拝礼」に参上したと記されている。村中の百姓が「拝み」に値するものは、検地帳以外にはないので、本帳とは、慶長六年(一六〇二)に福島正則が行った検地の際の、検地帳ではないかと思われる。または、「合穂概し」ではないかと思われる。(刺語)↓合穂概し

ほんちようにん 本町人 毛利氏による広島開府のときから、

広島城下に来住し、活躍していた者をいう。(県一)

ほんとう 本斗 広島藩では、「本途」のことを「本斗」と称していたようである。「本途」すなわち「本斗」とは、田畑に課せられる本年貢(物成)をいう。(地方・横山)

ほんとなり 本斗成 ↓見取免

ほんともものなり 本途物成 本斗・物成・取箇^{とりか}などともいい、田畑に課す本年貢をいい、村を単位として決められた。(日用)

ほんびやくしよ 本百姓 役家・本家・本役家・役目本家・

本家百姓とも呼ばれ、知行地内に屋敷を有した。本百姓は村役人とともに村落の正式構成員であり、村政参与の資格があった。本百姓は検地・地詰において、耕地だけでなく居屋敷を正式に「屋敷地」として名づけし、領主に対する特定の夫役(公用)の伝

馬役や普請夫役などを負担した。(県一・日用)

ほんぼうじようじゆ 本法成就 ↓永貸穀

ほんま 本馬 宿駅において、荷物を専門に運ぶ荷駄をいい、その荷重制限は四十貫目(広島藩では寛文七年まで米六斗目)であった(日用)

ほんまい 本米 もとまい?。俵一俵の容量(入実・入味)は、時代によりまた給知により異なっていたが、給主によって定めたい俵の、容量が本米と呼ばれていたようである。ちなみに、文化九年(一八一二)沼田郡相田村の給主高野直衛は、一俵の容量を三斗二升四合とし、同年同村の給主関左内は、一俵の容量を三斗とし、それぞれ納入させている。(横山)

ほんまつせいど 本末制度 江戸幕府により定められた本山・末寺の制度。幕府は「寺院法度」によって制度化し、本山を各宗一か寺に限定したうえ、寺院の重層的関係を構築し、(例えば真宗では本山―本寺―中本寺―末寺―孫寺―孫々末寺)、支配機構の中に組み入れ、本山は末寺に対して命令権・住職の任命権・寺号免許権を有した。なお、末寺に対し様々な名目の上納金を強要するとともに、本山での主要行事への出席などを義務づけた。(日広)

ほんやく 本役 ↓諸職人水役銀

ま

まうちぎん 間打銀 三原城下東西両町の町分では、藩に納め

る水役銀の外、町入用を賄うために、表間口一間につき三匁を本役として負担した。これを間打銀という。但し、二分の一役、四分の一役もあつた。(県二)

まえたて 前立 万延元年(一八六〇)沼田郡東山本村では、庄屋

・組頭の連名で、その年の定物成・種米利足・秋壺歩半納として計二七八石一斗三升四合と、庄屋給として七斗九升八合とを記し、「右闇当村御年貢米前立内立等如此御座候」と付記した書付を、割庄屋宛に捏出している。以上の記述から、前立とはその年の年貢米等については、規定どおりという意味ではないかと考えられる。なお、内立(内引ともいう)とは、その年に貢納する年貢米等から差し引かれる規定どおりの庄屋給等のことではないかと思われる。また、前立と内立を合わせて立物という。(横山)

まぎせん 蒔銭 散銭。昔、伊勢神宮に参詣する者が巡拝するときに、散米のかわりにまく銭で、「鳩の目銭」(円形で丸い孔のある鉛銭)を用いた。(広辞)↓打撒うちまき

まくらぎん 枕銀 頼母子において、第一回目の掛銀をいう。(広農)

ますあと 升跡 升突の結果の適否を調査し、その年の稲の出来柄と、租税の徴収高との均衡を見定めることをいう。(美多)

ますつき 升突 村から提出した下見帳について実地調査をするため、代官又は代理の番組が入村して、村役人らとともに村中を巡視し、村内数か所の作況良好の畝について、一坪の中へ竹四本を四方に入れ、その中の稲を刈り取り、その初の実収量

を査定することを升突という。これは村役人から提出のあつた下見帖の籾数と合致するか否かを調べるものであつた。下見帖に一步穂一升二合の箇所、升突の結果一升五合あればこれを下見に三合過とし、全村の収穫量を下見より二割五分増とした。なお、これを「上り米」といい、下見の有米(下見の際の収量)とを合わせたものを「升突有米」と称した。なお、番組によって升突が終わった場合には、代官は稲毛見分の巡視を行うことになっていたが、幕末には形骸化していたようである。しかし、これが終わるまでは、稲刈はできないことになっていた。(広農・本郷町史)

まちかた 町方 広島藩では、領内を地方と町方・浦辺・浜方に区分して支配した。町方とは、広島をはじめ、宮島・尾道・三原・三次などの城下町・港町をいい、広島には町奉行・宮島奉行・尾道町奉行を置いて支配させた。但し、三原には家老がいたので、藩の町奉行は置かず、また、一時、三次町奉行や忠海町奉行が置かれたこともあつた。(県二)

まちかたおさえまい 町方押米 不作で租米を収納し難い年には、百姓は代官の名で町方より借りて貢租を皆済し、年賦償還の方法で返済した。町方押米とはこの年賦米をいう。(広村)

まちかたぎんみやしき 町方吟味屋敷 御用屋敷廃止後、宝暦八年(一七五八)町方の公事吟味のために、広島に置かれたもので、町奉行が当事者をここに召喚して、直接に吟味した。(県一)

まちがりおさえまい 町借押米 ↓押証文の制

まちぐみ 町組

『広島藩御覚書帳』には、沼田郡の御配知高について「但公儀御帖面沼田郡之内、唯今町組支配二成候分」として川田村・箱島村・広島新開・広島町はつれ・同新開を挙げている。従って、行政上は広島町ではないが、広島町奉行の支配を受けている新開地等というのではないかと思われる。それとも町組とは、広島町組には畝・段の定がなかったため、広島町同様に年貢に代わるものとして水主役銀が課せられる地域という意味ではないかとも考えられる。なお、安芸郡明星院村・尾長村なども沼田郡同様であり、二か所以上の場合には相組といわれたと思われる。

まちぐんちゆうきじんきゆうまい 町郡中飢人救米 享保十

七年(二七三二)の飢饉は、広島藩では領知高四八万石余のうち、収穫できなかった田畑の石高は三万四〇〇〇石余、同十八年三月の調査では、飢渴人三二万四二五五人、飢死人八六四四人を数えた。これを救済するため、藩は同十八年五月に、町郡中飢人救米として三万三四七〇石、家中扶持米不足の者へ、賃米として一万五〇〇〇石を放出した。(県一)

まちさいかくぎん 町才覚銀 沼田郡では未年(未詳)に、百姓

から割庄屋に差し出した書付の中に、次の記述がある。「日損二付、去秋作不熟仕候二付、去年暮御年貢方差間、(中略)御上御慈悲之御影を以、町才覚被為成遣、御勘定向相調、大悦至極仕(後略)」。この書付でいう町才覚とは、藩が凶作・飢饉・その他臨時費過大等に備えて、町の有徳者また一般から、同趣旨で募った才覚銀ではないかと思われる。

まちしやそうぎん 町社倉銀 町社倉銀は、公共的な町方の金

融機関で、享保ごろに設立された。これは町・新開の家や畠を売買したとき、当事者から十歩一銀を差し出させ、これを貸しつけ、その利(月一歩、一般の貸付は一歩半から二歩)を凶年のとき、町・新開の者の救済に当てるというもので、町・新開の者は大いに便宜を得たが、ともすれば返済の滞る者も少なくなかった。なお、町社倉銀は町大年寄が管理したが、寛延二年(一七四九)に「町奉行所支配銀」と改称され、町奉行所の直接的管理に移された。(県二)↓町奉行所支配銀

まちしょうや 町庄屋 ↓目代

まちとしより 町年寄 ↓大年寄

まちぶぎょう 町奉行 広島城下町・新開を東西に分けて各役

所を設け、町奉行を置いた。役所には、侍士の町奉行付の者・歩行の町方詰・町廻り・新開方村廻り等が配属され、町中新開の政務を管掌し、公事を吟味し、扶持人・神官・僧侶を支配した。広島町以外では、宮島奉行・尾道町奉行が置かれた。(新広)

まちぶぎょうしよしはいぎん 町奉行所支配銀 町社倉銀

は、寛延二年(一七四九)に町奉行所支配銀と名称が改められ、町奉行所の直接管理に移された。同年、町方付歩行串田孝八の献議によって綿改所の機構を改革し(銀山町に移転)、綿座改所と称し、ここに町奉行所支配銀貸付方受引の町人(肥後屋太郎兵衛・茶屋新平)を任用して頭取職につけ、町奉行所支配銀の運用を任せることにした。すなわち、当時四、五百貫の正銀が、凶

年手当のため町奉行所支配銀として備蓄されていたのを綿座改所の管理に移し、これを働銀と称する有利な運用をはかり、大いに利潤をあげようとした。その方法としては、改めに差し出した繰綿を質入れの形式で、すべていったん綿座改所に格納することとし、これを抵当として資金の貸し下げを行うのであるが、その場合発行される預り手形(質札)が相場物として売買され、自然繰綿取引の活況をはかることにもなり、綿座改所としても利潤を大きくすることができるといふものであった。(新三)↓町社倉銀・綿改所

まちやくぎん 町役銀 村の市町に課した小物成銀をいう。(広農)

まちやど 町宿 請宿とも用所ともいわれていたようであり、設置年代は不明。町宿は「米入」と御米蔵との間を幹旋する機関で、日々村の年貢米の納入に立ち会って数量を記録し、勘定終了の際には、日々の収納高を米蔵の帳面と照合して割印し、「御年貢米下分け通」を作って、宿主の名で村へ交付した。(横山家文書によれば、「米入」に対しても「用所」名で「下分け通」を交付している)。町宿は村の広島出張所のような性格があり、村役人が広島へ出張の際には、必ず立ち寄らねばならない宿でもあり、また、年貢米納入の期間は、「米入」の旅宿でもあった。なお、郡では宿主に対して郡の用係として給与を支給し、村では「下分け世話料(または貸米)」を支払っていたようである。ちなみに、年貢米納入に際しては、「米入」は御蔵所内で、納米の過不足を他の「米入」との間で融通し合っていたようである。ちなみに、高田郡の町宿は煙草屋八兵衛方・山県郡は高田

屋新兵衛方・沼田郡は木屋仁左衛門方であった。(広農・横山・芸志)

まめいた 豆板 ↓小玉銀

まる 丸 *形が丸いところから銭・貨幣の俗称をいう。 *江戸初期の輸入生糸の取引単位として使用され、一六〇匁の斤で五〇斤入りをいう。 *煙草の生産数量にも用いられ、一丸は八〇斤として計算された。 *和紙を数える単位としても「丸」が使われた。広島藩では和紙(二五種あった)の種類によって丸の数量が異っていた。例えば、半紙は六匁(一匁は一〇束・一束は一〇帖・一帖は二〇枚)、海田紙は八束(一束は一〇帖・一帖は五〇枚)、大奉書紙は三束(一束は一〇帖二帖は四八枚、勝木紙は五束(一束は一〇帖・一帖は六〇枚)、大杉原紙は一〇束又は七束・六束(一束は一〇帖・一帖は四八枚を、それぞれ「一丸」と称した。(県一・単位) *草履を数える単位としても「丸」が使われた。広島藩では、文政元年(一八一八)大形(普通の草履か)一〇〇足と、相形(踵の部分のない草履、つまり足半か)一一〇足計二一〇足を「一丸」といい、文政元年(一八一八)頃には「一丸」の値段は凡そ十二匁であった。なお、当時、沼田郡相田・上安・高取・長楽寺・伴の五ヶ村での年間生産量は一七〇〇〇丸で、大坂へも送り出していた。なお、文政初年(一八一八)広島より大坂までの一七〇〇〇丸の運賃は、一七貫(一丸に付二匁)で、また、各村より広島までの駄賃は一丸に付三分で、年中では五貫一〇〇匁であった。草履に使用する緒紙の売りについては紙蔵より緒紙の貸下げを受け、毎月末に売却の勘定収支を紙蔵に報告した。ちなみに文政五年(一八二二)沼田郡相田村

の百姓兵右衛門は出売りの許可を藩から得て、前記五ヶ村の外大塚村・後山村へ出売りをしている。なお、文政元年頃?には、相田村より伴村までの草履仲買人は二〇人いたが、彼らの中には資金がなく、藩から借り入れする者もいた。(横山)

まわき 間脇 分家のことをいう。本家の屋敷内の間借りをしていたので生じた呼称と思われる。(大領)

まわりばかり 廻り計り ↓米計

まわしまい 廻しま 浦辺御蔵所において、郡村からの貢米の収納が完了すると、それを広島の米蔵へ廻送した。これを廻しまという。廻送には、おおむね五十石積程度の船が用いられ、一定の俵数を積載した。(芸志)

まわりびきやく 廻飛脚 広島藩では、江戸在府の藩主と国元の連絡を行うために、寛永十年(一六三三)から月一度の飛脚便を設けた。これを廻飛脚という。(県二)

み

みおぎん 水尾銀 竹原では、寛延二年(一七四九)藩の資金援助のもとに、本川浚えが行われたが、その完成を機に水尾銀仕方がとられた。これは普請費用の確保を目的に、入津した船から積石数に応じて石銭を取り立てるもので、支配方三人が月番で、その管理・運用に当たった。(県一)

みおこしまい 見起米 従来、高付になっている田畠のうち、池下や古荒・川成の荒地分の租米を村が負担している場所を、

後に百姓が開いて作付・収穫した場合には、村方はその収穫高に對して、幾分かの使用料を村に納入させた。この納米を見起米、または見出し米という。(広農)

みかさづけ 三笠附 中国筋では大一(第二)と唱えている。俳諧宗匠が金もうけのため始めたもので、元文年間江戸では俳諧三笠附とは冠付(かぶりつけ)の一つで、選者が前句である冠の五文字を三題だし、之にそれぞれ七・五句の文字をつけて三句とする。宝永(二七〇四)一頃から始まり、点の多い者を勝ちとして、

商品を与えたりした。のちには賭博の一つになり、胴親が上段に一から七、中段に八から一四、下段に一五から二一までの数字を並べ、各段のいずれかを選んで〇印をつけ封じ置き、他の者が一〇文を出して上・中・下の〇印の各数を当てさせた。二つあたれば一〇〇文、全部当たると二両を得た。なお享保十一年(二七二六)に禁令が出されたが、効果はなかった。ちなみに禁令の内容は、三笠附点者・金元・并に宿を提供した者は遠島にし、三笠附句拾いをした者は、家財取上・非人手下にした。

ちなみに、点者とは、連歌俳諧で評点し、その優劣を判ずる者をいい、句拾いとは、点者に雇われて町々を廻り、数字を書いた用紙を売り歩き、句を集める者をいい、あつめたものは点者の会所に持参され、そこで当否を決めた。(国大)

みかんぎん 蜜柑銀 小物成銀の一種で、蜜柑百箇につき、銀一匁を課した。(芸志)

みこみます 見込枰 升突は毎年実施することを原則としたが、

大凶変のない年には升突は行わず、庄屋から提出した下見帳へは、升突をしたように記入した。こうしたことを見込枅という。見込枅は、事務の簡素化のため行われたものであり、村役人も現地を全く査定せずに、下見帳を調整することもあった。(芸志)

みづちよう 水帳 水帳とは検地帳の別称をいい、御図帳とも

書く。文政元年(一八一八)高田郡においては、「水帳改め」が代官によって企図されたことがあった。これは古荒・川成の「かずき高」が百姓一統の迷惑になっていた。しかし古荒・川成所の内には田畑になって、荒所と見えない所もあったので、村中の田畑に竿入れをして、水帳をつくり替えるというものであった。そのため郡中から十人の庄屋を用掛に任じて、その作業に取りかかった。しかし、この事業に要する多額の経費の負担を危惧する等の、郡中役人層の不納得により、この事業は中止になった。(続老)

みすてち 見捨地 墓場・火葬場・斃牛馬捨地・仕置場をいい、無税地であった。(日法)

みずのみびやくしよう 水呑百姓 田畑を所有しない貧農階層をいい、検地帳には記載されず、地主階層に隷属した。(日用)

みずやくかじ 水役鍛冶 ↓釘地鍛冶

みずやくぎん 水役銀 広島町内には、畝・段の定めがなく、町通り表の間数で、前年分の銀を二・三月頃に上納した。これを水役銀と称した。水役銀は裏への間数は関係なく、表間口の間数で定めた。なお、町内の諸費(大割といい、一町限りの入用を

小間續という)も表間口の間数で割賦した。(県一・広寛)

みずろん 水論 すいろん。江戸時代に、水田の用水をめぐる争論をいう。(日用)

みそかやまぶし 晦日山伏 宮島では、大晦日に晦日山伏といって、供僧等が松明を数多く手に燃して、厳島神社の拝殿に馳参して読経し、除夜の鐘が鳴れば大鳥居の下の洲で若潮を汲み、神社で清めてその潮水で自家を清めた。(県二)

みぞしろまい 溝代米 灌漑溝を作るために失われた耕地で、収穫されていた米をいい、この耕地に対して課せられていた年貢米は村闖にした。

みだしまい 見出し米 ↓見起米・荒起し地

みちしろまい 道代米 道路の新設・拡張等によって田畑が潰された場合、これを村高から除かないで、その貢租のみを免除した。これを道代米という。しかし、これは他に方法がない場合のみに限られ、すべての道路に許されたわけではない。(廿目)

みつけ 見付 凶年(村全体で三割以上の損毛)の場合には、該村役人は農民と協議して代官に対して、見付を請願することができた。見付とは、「郡廻り」「代官」等が凶作の状況を实地に見分けることをいい、代官は見付の請願があれば事情を調査し、やむを得ないと認めたときは、村役人や調査役員に実情を調査させ、その結果についての帳簿を提出させた。これによって「郡廻り」「代官」(または代官所職員・勘定所吟味役等)は巡検し、升突をして年貢米の額を定めた。早稲・中田・晩田の三田がある

時には三回の見付を実施した。寛永地詰帳によれば、高宮郡矢口村の見付田の石盛は一反が五升、見付田は二升であった。(芸志)

みつけばた 見付畠 見付田。「みつければの畠」の意で、検地

や石盛のできないような劣悪な土地のうち、比較的よい土地で、検地を行い石盛を付した畠をいう。下々畠よりさらに下級で、田の場合は見付田という。ちなみに、寛永地詰帳によれば、高宮郡矢口村の見付田の石盛は一反が五升、見付畠は二升であった。(日用・県二)

みとりしんがい 見取新開 見取田畑。寛永十五年(一六三八)

以後の開墾地(新開)で、川や海沿いの土地、即ち堤防外等の土地は洪水や海波の災害を蒙りやすく収穫が定まらないので、本高や本免は課せず、毎秋作況を検して、その収穫高に応じて納租させた。こうした田畑を見取新開または見取田畑という。(芸志・広農)

みとりしんまい 見取新米 ↓見取米

みとりまい 見取米 寛永十五年(一六三八)以後の新開で、未だ高のついていない新開については、その村の庄屋以下の職員は、毎年作毛を概算して草高を定め、これによって下見帳を作成し郡府に提出した。代官所付属の番組(または代官手付)は下見帳を点検し、その収穫の半額を上納させた。これを見取新米という。而して数年後、年々収穫した米額を平均して定数とし、それによって納租額を出願し、これが許可を得たもの、つまり毎年の租米額が同じであるものを、定見取米という。なお、見取

新米と定見取米とを一括して見取米という。(芸志・広村・広農)

みとりめん 見取免 新開地のうち、藩によって開拓したものは、四、五年後に熟不熟を見合、適当に免(見取免という)をつ

けて納租させた。しかし、およそ十年経過すれば、丈量して畝数・高を定め、これに免を課した。これを本斗成という。また、人民が自費で開墾した土地に対しては、およそ十年間は見取免を課せず、たとえ課することがあっても、急に本高は定めなかった。(芸志)

みはらさつ 三原札 文久・慶応期に、三原居城の家老浅野氏

は、藩の許可を得て、「三原限」り通用の金・銭・米札を発行し(三原札という)、自家の財政補填をはかっている。慶応二年(一八六六)にはその回収に着手したとされるが、その後もしばらくは流通していたようである。(県二)

みまわりやく 見廻り役 一般には巡視役のことをいうが、広

島藩では、文化・文政期以後、藩の財政困難のしわよせは百姓にも及び、村は不穏な状態にあった。そのため沼田郡では、藩の許可を得て独自に見廻り役を置き、不正筋や悪徒の取り締りに当たった。また、三原城下の御調郡では「目明し」を置いた。

(横山)

みみじろげに 耳白銭 江戸亀戸で、正徳四年(一七一四)から享

保四年(一七二九)まで鑄造された寛永通宝の俗称。銅質は黄色を帯び、縁の中が広い。名称の由来は不詳。(日広)

みようおんこう 妙音講 *技芸を守護する妙音菩薩や、弁財

天を祭る集団とその行事をいい、多くは座頭・瞽女・盲僧・巫

女などの集団結束を確認し、衆議を行う場であった。(日広)

*旧賀茂郡阿賀・広・仁方・川尻・内海跡各村では、座頭仲間共が妙音講となえてそれぞれ組合を定め、年に一度九月廿四日の夕方当番の家へ残らず集まり、神像(弁財天か)を床へ懸け、注連縄を張り、御幣・御供米・御神酒・御鏡餅などを供え、武運長久・国家安全・五穀豊穰の祝詞を神前に供え、大般若心経読経し、座法掟を示し合い、それより精進の膳と御神酒をだし、琴三味線の音曲にて賑わい、廿五日昼四ツ時頃退出した。ちなみに、「知新集」によると、妙音講に意義を唱えて欠席した者は領国追放、仲間の悪口を言った者は、二ヶ月間つきあいを止められるなど、数々の厳しい提があった。(呉市史)

みようがえい 冥加永 冥加米。「永」とは永楽銭のことをいう。

江戸時代に冥加金としておさめた銭をいう。家業または営業収益に対する報恩行為として上納した。一定の税率がない点で運上と異なり、元来献金の性質をもつ上納であるが、中期以降は雑税として取り扱われるようになった。なお米納の場合は「冥加米」という。(国大)

みようがぎん 冥加銀 商・工業などに従事するものに賦課されるもので、幕府や藩が営業を認可することに対する代償として、献金的性格をもっていた。一定の税率がない点で運上銀と異なっていたが、後には税率が定められ、毎年賦課されるようになった。ちなみに、冥加金は原則としては金納。なお、永楽銭で税額を表示するときは「冥加永」といい、米の場合は「冥加米」という。(日用)

む

むぎしようや 麦庄屋 ↓社倉

むぎねんぐ 麦年貢 麦作に賦課されるもので、広島藩では文政三年(一八二〇)頃には、十石につき一斗を納入させている。(横山)

むぎみつけ 麦見付 麦の作柄を検することをいい、毎年村から出来麦高辻帳を差し出させ、前年の出来高と引き合わせた。なお、これによつて麦年貢を課したのではないかと思われる。

(広覚)

むしおくり 虫送り 蝗送り・実盛祭りとも言い、虫害を地区から追い払う呪術的儀礼で、数匹の稲虫を藁苞に入れたり棧俵にのせ、御幣を立て松明を先頭に鉦・太鼓を打ちながら地区内を廻り、地区境でこれを焼くか、川・海に流す。斎藤実盛の霊が蝗に化して害をもたらすと言つて実盛人形を作り、これを担いで地区内をはやしつゝ廻り、地区外に送る所では「実盛さん」と言っている。(日広) 安芸郡矢野では人形を最後には川へ流し、山県郡加計では藁人形を作り藁馬に乗せて廻り、サネモリと唱えた。なお庄屋は害虫があると「虫送り日」を決め、各戸一人ずつ出て人形を作った。出ないとその家の田へ虫を追い込んだという。備後地域では藁人形は作らず、鉦・太鼓を打ち、躍った。(県民) 虫送りの費用について、宝暦十二年(一七六二)に次のように定めている。高百石より二百石の村は十二匁、高

六百石より千石の村は十四匁、高千百石の村より二千石の村は十六匁、二千百石より三千石の村は十八匁。但し、格別に祈祷を行いたい村については、その理由や必要経費を委細記した書付を差し出せば、調査の上許可された。なお、蒲刈・倉橋・瀬戸・江田島については端浦が多いので、右の定の外、少々の増銀は願ひ出によりゆるされた。(宝暦十二年沼田安芸郡割免割方相しらべ書写)

むしゆち 無主地 所有者のいない耕地をいう。無主地は村が耕作し、年々若干の収穫はあったが、その生産額では租米を皆済するまでには至らず、村は一定の負担をした。(広農)

むそくにん 無足人 無足組・無足間ともいう。江戸時代、切米・扶持米を給付された軽輩の侍をいう。(日用)

むたかち 無高地 租税賦課の対象となる高請地に対して、対象とならない村高に入っていない土地をいう。(日用)

むちうきよすぎ 無地浮世過 ↓浮過

むちようもの 無帳者 無札者。作事所の職人改帳に登録されていない職人をいい、無帳者には「職業仕らせず」という定めがあった。また、無帳者が職に就くことを取り締まる触書も作られており、こうした規則の類は、一般に職人仲間とはもとより、町組みの共同体的規則の下に、多く行われたものと考えられる。

(県一)

むねべつせん 棟別銭 むなべちせん。鎌倉末期から家屋の棟を単位として課した税銭をいい、朝廷の費用や寺社・橋の修造料として、臨時に課された。(広辞)

むらうけせい 村請制 村高を基準として賦課された年貢に対し村中全体が、貢租収納に責任を持つ制をいい、浅野氏は入封直後から、この制の確立につとめた。(県二)

むらかたさんやく 村方三役 庄屋と組頭を村役人といい、これに長百姓を加えて村方三役と称し、これが近世の村の行政を司った。但し長百姓は村役人ではなく、庄屋と組頭のみを村役人と称した。(剩語)

むらかたやくしよ 村方役所 村方役所は、家老上田給知に設けられたもので、藩の郡役所にあたる。村方役所は、城下の上田屋敷内に置かれ、年貢徴収の実務・頭庄屋以下村役人の任免・知行地百姓の裁判等にあたった。(県二)

むらぎみや 村君屋 村君とは村内浦辺の漁業に関する指導者のことをいう。また、屋号として使われることもある。その外大型漁業に際して指導的立場にもなり、また漁場争いでは、漁民代表として交渉にあたった。(廿日)

むらきり 村切 村支配の単位として、ふさわしい規模にするための、村の創出・分合をいい、寛永・正保の地詰や寛文地詰を機に、かなり行われた。(県二)

むらじゅういりあい 村中入会 ↓野山

むらちよう 村帳 一種の戸籍簿で、村帳に記載されることは善良なる住民の証であった。村帳に記載される者は、次の条件を具備していた。・租米納入のためにまじめに働く者、・村の法度を守る、・親類五人組の双方に円満な関係であること、・仏教徒であること。なお、村帳に記載されない者は、無宿者・除け

者の扱いを受けた。(広村)

むらにゆうよう 村入用 村が年間に必要とする経費を言い、米銀を徴する免割と、夫役を徴する夫割とがある。割は年一回、年内に必要な額を免組に入れて取り立てた。免割には、諸給米(庄屋・組頭・筆者・小走り等の給米)・筆紙墨及灯油代・寺社初穂米銀・諸割諸相談の際の昼食代・出飯米等があり、夫割には、灌漑施設に対する諸普請夫(井手堰・雨池用水路の浚渫・樋の取替等)・小遣夫―飛脚夫―等があった。(広農)

むらまわり 村廻り ↓歩行目附

むらむらいりあい 村々入会 他村入会。一つの野山に他村の者が入会って利用するもので、他村入会ともいわれ次の場合に生じた。その第一は、ある野山を利用していた地域が分村したとき、従来の利用慣行を認め、平等に利用する場合。第二は、ある村の採草源が不足して、他村の野山を利用する場合。但し、この場合には、一定の草手銭(銀)や山手銭(銀)を地元民へ納入させるとか、採草の口明け日を地元村よりおくらせるとか、利用札を発行して採草量を制限するなど、地元民に優先権を与えた。(県一)

むらやくにん 村役人 ↓村方三役

め

めいあんりゅう 明暗流 尺八の一派で普化尺八・虚無僧流ともいう。江戸初期に普化宗の宗教音楽として誕生し、虚無僧が

吹奏しつつ托鉢した。琴古流・都山流の源流である。(広辞)

めいもくきん 名目金 宮門跡寺社が貸し付ける金という。幕府法上特別に保護されたので、一般人がその資金を宮門跡等に供給し、その名義をもって他に貸し出すことがしばしば行われた。(日法)

めつけ 目付 *室町時代―江戸時代にあった武家の職名で、非違を檢察し、これを主君に密告した監察官。江戸時代には老中に直属して、大名を監視する者を大目付、若年寄に直属して旗本などを監視する者を目付という。(広辞) *広島藩では監察を担当する職に大目付・目付・歩行目付(はじめは歩行横目と称す)・小人目付の制があった。藩主に直結して家中・諸役人の非違をただし、政務の善悪を批判させた。なお、歩行目付・小人目付は広く郡中へも派遣されて、具に民情を探索させた。(新二)

めやすそじょう 目安訴状 目安とは簡条書きに要約した文書(目安書)をいう。つまり、争点を簡条書きにした訴状をいい、これを制度化したものが目安箱である。(広辞)

めやすばこ 目安箱 広島藩は、はじめて目安箱を正保二年(一六四五)各郡に設けたが、まもなく廃止。その後、正徳二年(一七一一)には十二郡十四ヶ所(廿日市・可部町・本地市・吉舎町・西城町・本郷町・海田市・祇園町・吉田町・甲山町・庄原町・尾道町・四日市・瀬戸島)、享保八年(一七二三)には城下に三ヶ所(下流川・八丁馬場・中島本町)新設、寛保三年(一七四二)郡中目安箱を一七ヶ所から五ヶ所に整理し、年一度の取替を三度にした。宝暦

三年(二七五三)には城下三ヶ所と三次のみを残して他は廃止し、同九年には三次を廃止し、広島城下のみとなった。目安箱は大目付・目付が管理し、百姓や町人の願い・役人の私曲に関すること・御家中扶持人らの非行等について書き出させ、司政の参考にした。目安箱の取り替えは、城下町では毎月一度、郡中では年に一度(寛保三年からは三度とされ、集められた訴状は、すべて藩主が直轄する建前であったが、訴状に訴人名が記されていないものは取り上げなかった。なお、目安箱には付添の役人が立っていた。(県一・吉長公御代記)↓箱訴

めん 免 石高に基づいて貢租を賦課する率(税率)をいい、免相(免倉)ともいう。「取るだけ取ってその余りを百姓に免じ遣す」の意ともいわれている。免は江戸時代を通じて殆ど変動がなく、明知・蔵入地においては「郡廻り」と代官が、給知においては給人が、それぞれ庄屋・給庄屋に免状を下達した。(広農)

めんかりまい 免借米 天災その他の原因により、自村分の免に対する年貢米が納入できないことがある。こうした場合に、他村等へ自村分の免の一部に対する年貢米の納入を依頼することがある。こうした納入米を免借米というのではないかと思われる。広島藩は宝暦十二年(一七六二)にこの制を止めさせ、さらに先年より免借りをしている村に対しては、次のように命じている。すなわち、免借米については年賦償還をしているように見受けられるが、初年に定めた利息は続いているのか。免借米の総量はいくらか。年々何程ずつ償還しているのか。現在いくら残っているのか。などについて、免割帳へ記入すること。なお、免借米は、沼田郡で多く行われていた。(宝暦十二年沼田

安芸郡割免割方相しらべ書写)

めんぐみ 免組 毎年十月頃に年貢米およびこれが納入に要する諸入用米等の総計数を算出して高に割賦し、取立免を定める割のことをいう。(広農)

めんじょう 免状 村が負担する年貢米徴収令状ともいうべきもので、四、五月頃おそくとも七月までに代官が入郡して各村に下付した。(広農)

めんちよう 免帳 ↓小帳

めんとりたて 面取立 大工や木挽のように、志望者が自由に免許をうけて営業する者に対する個人課税をいい、その職人が就業中は課税されるが、廃業すれば税も廃止される。但し、諸鉄砲札銀のように、鉄砲そのものが株になり、本来は面取立でありながら、村受となるものもあった。(広農)

めんわりちよう 免割帳 村の諸負担を総計算した帳を免割帳という。文化十二年(一八一五)高田郡古屋村の免割帳には、村の諸負担として、定物成・種米利息・壹歩米・厘米・諸入役米(村役人等の給米及び出飯米・神社初穂銀・政道米等)・郡割入用(割庄屋給・山目付給・宗旨判形諸入用・異国人送り入用・盲人居扶持米等)などをあげている。免割帳は隣村(必ずしも限らない)の庄屋が立会の上で、庄屋・組頭・年行司・長百姓が寄り合って作成し、惣百姓に読み聞かせてその承認を得、代官の免許を受けなければならなかった。なお、免割帳は十月頃までに代官所へ提出し、代官から勘定所へ送付するのが常であった。勘定所には、免割帳を審査する専属の御歩行目付と番組が置かれ、審査には

二年以上要したという。なお、上記の村の諸負担は、農民各自の持高に応じて賦課した。これを免割という。(古屋村免割帳・白木・九十年の枯葉拾遺) 免割帖の下げ渡しは、勘定所の御歩行目付と番組が入村して行われた。天保十四年(一八四三)御歩行目付林甚助と番組辺見八蔵が、安芸郡倉橋島に入村した場合には、庄屋二人・庄屋見習一人・組頭三人・組頭格一人・長百姓一人・鍵預り筆者一人・十人組一人が出迎えている。なお、御付廻りとして、社倉支配役呉町庄屋の吾八が来村している。(倉橋町役場文書)

も

もうじんすえぶちふだ

盲人居扶持札

盲人居扶持札(紙製・

支給月・支給量が記入、検校印・郡座元の押印あり)は、検校(屋敷は広島土手町)が盲人の定員分(座頭分と盲女分)の札を毎月一回発行し、各郡の座元(高田郡は吉田町)の頭取に送り、盲人は座元に向いてこれを受け取り、庄屋に提出して居扶持米(座頭一日五合、盲女一日三合)を受けた。庄屋は盲人から受け取った札一ヶ年分を、割庄屋を経て郡役所へ提出した。なお、盲人の居扶持米の負担は郡割(広島・尾道・三原・三次分を含む)であった。盲人の定員(郡毎に定員はあったが、融通は許されていた)は検校が掌握し、欠員がなければ、例え盲人であっても居扶持米は受けられなかった。なお、定員に増減が生じた場合には、その度に検校より書付をもって、年番代官へ申し出た。ちなみに、文化

四年(二八〇七)頃の広島町の盲人は一〇八人(内女三人)、居扶持米は二二七石五斗であった。(広農・理勢志)

もくだい

目代

* 一般には遙任の国司の代わりに在国して、国務を代行した私的代官をいうが、毛利氏の領国においては、市場支配にあたっていた役人をも目代という。(県二)。* 三原町では各町に一人置かれた町役人をいい、以前には町庄屋・町代などと唱えたが、元禄十五年(一七〇二)から目代とよばれた。なお、このほか組頭(十二人・享保十九年から六人)・筆取・走りなどが置かれた。(県二)。* 近世に於いては目付役を目代と称した。

もちごめ

餅米

給知では、年貢米の一部として餅米を納めていた。この制は給知特有の制で、蔵入地や明知にはなかった。

餅米の納入は給知高一〇〇石に付三石という定法になっていたが、安政五年(二八五八)給主寺川九十九が、高宮郡上町屋村に対して定めた給人法には、「餅米闡定法之通、高百石ニ付三石之積ニ差出シ候心得可有之候事、但年々之趣次第二而、納事可申談候事」と定めている。(可部町史)

ものがしら

物頭

中世末く近世の軍制で、歩兵・足輕部隊の指揮官。幕府の場合、弓・鉄砲の与力・同心を統率した先手弓頭・先手鉄砲組、持弓頭・持筒頭等や、鑓・旗の与力・同心を預かった鑓奉行・旗奉行などが物頭に相当した。(日広)

ものなり

物成

年貢・取箇・本途物成・所務(物成の別称)などともいい、田畑の本年貢をいう。高に免を乗じたものが物成である。物成にその額の百分の二の口米が付加されたものを定物

成といい、一般にはこれを年貢米という。但し、化政期以降になると、口米を含めたものを物成といい、口米を含んでいないのに定物成ということもあった。(白木・横山)

もめんあみぎ 木綿網座 安永元年(一七七二)藩府は瀬戸町・

呉町に木綿網座を許し、ここに仕入銀を貸し下げて、漁師・浮過らの家内手工業として「綿・扱苧類貸付手織仕せ」ることを行わせた。綿糸と麻苧による鯛網の生産を助成する目的からであるが、両町が鯛網や干鯛・煎苧商事の中心地として、他国商船の出入の多い事情に着目してのことであった。(新三)

もめんかいしょ 木綿改所 木綿改所は木綿役所または木綿方

ともいい、天保十四年(一八四三)城下の絹座内(嘉永二年木綿方御場所として諸品方の跡に移る)ならびに尾道に、弘化元年(一八四四)には竹原(下市村)に設けられた。木綿改所の機能は、木綿の規格(上、丈二丈八尺・巾九寸五歩、中、丈二丈七尺・巾九寸三歩、下、丈二丈六尺五寸・巾九寸一歩)を一定にして改印を押し、大坂へ積み出す場合はすべて丹波屋あてに送らせ、藩はその見返りとして、毎年永納金五千両を受け取った。木綿改所には頭取として城下の豊島屋四助と伊予屋吉左衛門を置き、各郡には割庄屋格を木綿掛り役に命じ、さらに木綿小寄仲買・地払屋・大坂登せ問屋を鑑札制のもとに統制し、抜荷の防止に意を注いだ。なお、木綿改所では、弘化元年(一八四四)に金銭切手を発行した。(県二・竹内家文書)

もめんかかりやく 木綿掛り役 ↓木綿改所

もろはくしゅ 諸白酒 清酒のことをいう。近世初期に、従来

の濁り酒から諸白酒へと開発され、酒の商品化が促進された。広島辺でも十七世紀中頃、三原屋などをはじめ、各地に広まったものと思われる。(県一)

もんばり 門張り 代官によつて村に免状が下付されると、庄

屋はその年の免を公表し、村民に周知徹底させるため、下付された免状の免率を門前に掲示(掲示書面も代官持参)した。これを門張りという。(芸志・本郷町史)

や

やくぎうけしよ 役儀請書 庄屋や組頭に任命されたときの請

書といい、一時期に限って行われたらしい。(郷史)

やくにんひきだか 役人引高 村役人(庄屋・組頭)は、村内の

会議やもめ事の仲裁等に立ち合っても、日当(一人一日一升の定)を取らないので、村入用(村が年間必要とする経費)の内、夫割(灌漑施設の諸普請夫・小遣夫)に対してのみ引高があった。これを役人引高・夫割引高・足子引高という。但し、村役人も持高に応じた夫割を負担した。宝永元年(一七〇四)には、庄屋引高(一人分)は、高百石〜二百石迄の村は十石、高三百石〜四百石迄の村は十二石、高五百石〜六百石迄の村は十四石(以下略)。

ちなみに村高百石〜二百石の村(引高十石)の場合の庄屋引高は、次のようにして求めることができる。例えば村入用の夫割が、「石に付二・五人」の割であれば、庄屋は自己負担の夫数より、 $2.5(人) \times 10(石) = 25(人)$ 少なく負担ということになる。

ところで庄屋は前述のように日当を取らないので「一人一日一升」が適用される。従って $1(升) \times 25(人) = 25(升) = 2(石5升)$ 。つまり引高は「二斗五升」になる。なお、庄屋の持高が二〇石であれば、割賦高は、 $2.5(人分) \times 20(石) = 50(人分)$ $1(升) \times 50(人分) = 50(升) = 5(斗)$ になる。従って庄屋の実際の負担は、 $5(斗) - 2(斗)5(升) = 2(斗)5(升)$ となる。

なお、組頭引高については村高に関係なく、引高は七石に定められていた。組頭七石になっているのは、組頭はおよそ高二五〇石ぐらいに一人を置き、事務量を平均化していたからである。(白木・広農) ↓ 足子引高

やくめほんけ 役目本家 ↓ 本百姓

やくや 役家 ↓ 本百姓

やぐらおろし 矢くら下し 年貢米を船で広島城の櫓下米蔵まで運ぶことを、「矢くら下し」という。(沼田町史)

やくりよう 役料 ↓ 足知の制

やしきあらため 屋敷改め 太閤検地では、村落だけでなく町地に対しても調査し、町屋敷地を所有し、地子・諸役を負担する町人身分を確定した。これを屋敷改めという。(県二)

やしきばらい 屋敷払い 広島藩では、給知の場合に、給庄屋の責任で、給知組の百姓から年貢米を取り立て、城下の給人屋敷へ納入した。これをも屋敷払いという。(瀬野川町史)

やすみはま 休浜 近世中期の塩ブームに触発された塩田の濫造は、生産過剰・塩価の低落等、いわゆる塩田危機を招来した。この塩田危機の打開策として考案されたのが、休浜法である。

これは、秋冬の間塩田作業を休むことであり、この方法によって経費を節約した。ちなみに、文化八年(一八一二)「休浜取締規則」を藩は定めた。(県二・竹原塩田誌)

やせん 矢銭 戦国期、武将が町・鄉村・寺社に賦課した軍用費。室町幕府の禁制では、一五三〇年代半ば頃より兵糧米とともに矢銭をかけることを禁止。織田信長は永禄十一年(一五六八)に本願寺から二万貫文を課して拒否され、これが石山合戦の一因となった。(広辞)

やどあずけ 宿預 江戸時代に被疑者や罪人などを、未決拘留の目的や刑罰として宿に預けることをいう。宿には町や村の役人の自宅、郷宿等が使われ、預り人の監視のもとで、被疑者らは籠居・謹慎を強制された。(目広)

やどおくり 宿送り 藩の文書などを継送する役をいう。海田町の千葉家はこの役をつとめていた。また、本陣役をもつとめることもあった。(中国新聞社刊・フェニクス)

やどおくりやく 宿送り役 広島藩は、各継宿に藩用の通送役を置いた。これを宿送り役といい、厘米の中から給米を支給した。ちなみに、廿日市駅の宿送り役は、山田次右衛門(金屋)が代々つとめた。(県二)

やどふだ 宿札 各村が出したもので、この札の所持者は自村で食料が与えられ、他村でも与えられた。(明治三年大飢饉万控帖、河見屋文書)

やどわり 宿割 参勤交代の際に、先行して一行の宿の差配をする役をいう。

やなぎん 築銀 小物成銀の一種で、築一口に対して、銀二十六匁を課した。(芸志)

やぶまわり 藪廻り 高宮・佐伯・沼田三郡は竹代銀を納入せず、竹を育成・納入していたので、盗伐を防ぐために、百姓の中から見廻り役として、「藪廻り」を置いたものと思われる。天保十一年(二八四〇)沼田郡相田村では、「小走り兼藪廻り」を置き、一石一斗四升を村から給している。(横山)

やまあらため 山改め 広島藩は、寛文十年(一六七〇)に領内林野の山改めを実施した。これは、実際に山に立ち入り、丈量したのではなく、村方からの申告に基づいて、山改帳を作成したにすぎないと思われる。しかし、この時藩有林は御建山・御留山に、また、農民利用の林野は、村方の入会地は主として野山に、個別利用の林野は腰林に編成され、ここに藩の林野の公式種目が確定した。その後、享保十年(一七二五)に山改めを実施した。これは、各村から出させた山帳に基づいて藩役人が郡中へ出張し、藩有林は山ごとに境目・林相については詳しく実測調査し、野山・腰林は村役人の報告をうけ、不審の場合は再調査を命じた。(県一)↓山帳

やまかたおんばしよ 山方御場所 藩用材の調達のために指定した山林をいう。広島藩は、安芸国北部諸郡を中心に、中でも山県郡加計組九ヶ村や、佐伯郡吉和村などを指定した。なお、指定された太田川上流域からは、筏流しによって白島材木場に運ばれ、ここで極印を捺した上で、藩の材木蔵に納めた。(県一・県二)

やまかたごようぎき 山方御用聞 山方御用聞は、何時設けられたか不明であり、有力農民(大庄屋など)が任ぜられたようである。この職は、一定の請負高を課せられて十歩一所の管理を委ねられ、同時に居村の山からの松鍛冶炭等の藩用を勤めるほか、請山の制といつて、他郡の藩有林からの藩用材・炭の生産・調達(仕入銀は藩より下付)にあたつた。手当として享保元年(一七二六)までは三人扶持を給されていたが、同年支配料として、たとえば、炭一俵は銀一匁というように改正された。(県二)

やまかたぶいちぎん 山方歩一銀 百姓が炭を焼き薪を伐るには、願い出て歩一銀を納めた。これを山方歩一銀という。享保三年(二七二八)までは、腰林で雑木を伐り松の下枝を打つにも課税されていた。但し、家造りや川除け井手普請には、望みの場所で入用次第に、無税で材木の伐採を許していた。(白木)

やまかたやくしよ 山方役所 ↓材木場

やまちょう 山帳 広島藩では、宝永年間(一七〇四〜一二)・享保元年(一七一六)・同十年の三回にわたつて「御建山・御留山・野山・腰林帳」(通常、山帳という)を領内各村から差し出させている。その内容は、山の種別に所在・面積・林相・所持者を一筆ごとに記載登録し、とくに藩有林については、城下までの運賃経路と距離を併記させている。(県二)↓山改め

やまてぎん 山手銀 * 一般には入会権の設置された草刈場に対して納める一定の課税を草手銀といい、銀納の場合は山手銀、米納の場合は山手米・山役米と称した。(目用) * 広島藩では、炉や大鍛冶の製鉄には大量の木炭・木材を必要としたので、大

山林の近くに鉦・鍛冶場を設ける必要があった。その場合に、所要山林をすべて個人で所有することは困難であったので、他の山林(藩有林・腰林・入会山)を借用し、借用料を支払ったが、これをも山手銀と称した。なお、近世末期に沼田郡では、米や米切手による山手銀の代納の要望書を藩に提出している。藩はこれに対し、「相当二増銀割合を以申出候ハゞ差図ぶりも可有之ニ付、書付ヲ以様子可申出」と指示しているが、代納を認めたか否かについては不詳である。(県二・横山)

やまてせん 山手銭 ↓村々入会

やまねんぐ 山年貢 村落または個人所有の山林に課せられる税で、山小物成ともいい、山は郷帳そのほかに記載され、一定の米・銀を上納した。(日用)

やまばん 山番 広島藩は、慶安三年(一六五〇)に郡に二、三名の惣山守(大割庄屋格を充てる)、村ごとに一名の小山守(下山守ともいう)を置き、領内の山林の管理・支配に当たさせた。しかし、享保十二年(一七二七)には、山方の職務を「郡廻り」に兼任させるとともに、惣山守を廃止し郷目付を設置し、小山守は山番と改称した。山番は庄屋によって任命され、村内の藩有林の管理・育成、野山・腰林の保護取り締りにあたった。山番の給分は山の大小・遠近によって異なっていたが、宝暦元年(一七五二)の定によれば村から概ね米三斗から五斗位を給した(明・給入組の村は高割で負担)。但し、厘米の中から代官所が支給する村もあったようである。山番は宝暦七年(一七五七)から同一〇年まで廃止された。(県一)

やまぶぎょう 山奉行 山奉行は山林支配の総元締で、広島藩

では慶安三年(一六五〇)にはじめて置かれた。その後正徳五年(一七一五)には廃止(勘定奉行の所管となる)されたが、享保十八年(一七三三)再び置かれ、宝暦八年(一七五八)には再び廃止され、「郡廻り」の所管になり、更に天明五年(一七八五)には、「郡廻り」から勘定奉行の所管へと変遷した。(県二)

やまぶし 山伏 修験道(山岳修行による超自然的な霊力の獲得と、

呪術宗教的な活動を行なうもので、七・八世紀頃の役小角が開祖における指導的宗教者で、山野に伏して修行し、験力を獲得したことから山臥とも書き、験を修めた者の意味で修験者ともいう。頭巾を被り柿色の鈴懸と結袈裟をまとい、笈を背負って法螺を吹くなど、独特のいでたちで活動した。紀州の熊野から吉野金峰山にいたる大峰山を中心道場とし、天台系の本山派(総本山は京都の聖護院と、真言系の当山派、醍醐寺の管轄を形成した。広島藩においては、宮島の弥山が山伏の活動の拠点になっており、仏道の勤行・勧修のための寺が存在(室町期には大聖院が弥山一帯を管理していたらしい)し、山伏や比丘尼がいたようである。なお、南北朝時代には熊野修験の活動が盛期を迎え、信徒の熊野詣が目立っていた。(日広・県二)

やまふだ 山札 山林の入会、または伐木許可の証として下付される藩の鑑札をいい、山入手形・山切手・山手形ともいう。(日用)

やまめつけ 山目付 郡中山林の管理・育成等の責任者として、慶安三年(一六五〇)に郡に惣山守(山守役ともいう・割庄屋格)を

置き、享保十二年（一七二七）にそれを廃し郷目付（代官役に属し、「郡廻り」の指示を受ける）を置いていたが、享保十八年（一七三三）それを廃し、割庄屋級の者二、三名を山目付として藩は任命した。山目付は藩有林の管理・育成、村役人・山番何れも村内林野の管理責任者を監督した。また、村方からの林野の利用等に関する諸願は、山目付の下吟味と承認を経て受理された。なお、山目付の給米は厘米から差紙によつて支給した。山目付は宝暦七年（一七五七）から明和二年（一七六五）まで一時廃止（その間割庄屋引受されたが、廃藩まで置かれていた。ちなみに、宝暦五年（一七五五）山目付一人が沼田郡相田村に入村し、宿泊した費用二二匁一分の内、一〇匁四分が郡割、残りを相田村が負担している。（県一・横山）↓御山方

やまもとしいれぎん 山元仕入銀 翌年度調達すべき藩用木材・炭・薪などの林産物の伐採費として、藩から前貸しされる資金をいう。（県一）

やまもりきゆう 山守給 宝永元年（一七〇四）の定が長く行なわれ、山守役（惣山守ともいう）耆人に付三斗〇五斗を給した。但し、山の大小・遠近により異なり、なお、山数が多い場合には山守の人数を増加してもよかった。また、明・給知入組の村は高割にした。（広農）↓惣山守

やまもりやく 山守役 ↓惣山守

やまろん 山論 さんろん。野山の利用等に関して生ずる紛争をいい、境界・刈場に関するものが多く、この解決は主として割庄屋が行い、藩の手を煩わすことは極力さけた。山論が生ず

ると先ず「鎌止め」（紛争が生じた山の伐採を禁ずる）を行つた。解決が長びくと、農耕上大きな支障となるので、これに負けて譲歩し、解決をはかることになり、割庄屋は、それを待つて解決をはかる場合が多かった。なお、山目付は山論にはあまり関与せず、結果の報告を受けるくらいであった。なお、山論吟味に「聞約め」として出張して来た他郡からの割庄屋（二名）と出役庄屋（二名）の出飯米については、割庄屋は郡割・出役庄屋は関係村割で賄つた。宝暦九年（一七五九）から郡中の公事出入は、郡方吟味屋敷で代官の直吟味になったので、山論も郡村の段階で解決せず訴訟に及んだ場合には、そうなったと考えられる。文化九年（一八一二）高田郡向山村と上根村の間に生じた山論（詳細不明）は、郡方吟味屋敷で代官山下勘十郎により直吟味された。なお、山下勘十郎が紛争の場所を見分する際に、割庄屋代役として、大町村庄屋直三郎を立ち会わせている。そして、直三郎はこの山論に関した出飯米として、八斗三升を郡から受けている。（川上・横山）

ゆ

ゆい 結 * 銭の名目。百文の称をいう。（広辞）。 * 自家労力

の燃焼によつてなりたつ小農経営においては、田植などの時には、農民相互の労働力の交換で作業を行った。こうした協同労働組織をいう。（県一）

ゆうずうぎん 融通銀 ↓六会法

ゆがね 湯金 鍬などの刃先に焼きを入れ、たたいて刃をつける部分をいう。(日用)

ゆずりでんじ 譲田地 江戸時代、百姓から寺社へ寄進した田地をいう。(日用)

ゆるしじょう 免シ状 鉄山労働者が他の鉄山へ移る際は、鉄師の承認をうけ、前貸などすべて処理した上で、はじめて認められ、さらにそれが正規の移動であることを証するために、鉄師双方の間で、「免シ状」を発給し、持参することになった。(県一)

よ

よういん 容隠 犯罪人を見逃すこと、かくまうことをいう。(日用)

ようしよ 用所 町宿(請宿)の別名としても用いられたようであり、また、一村に二名の庄屋がいる村では、勤番の庄屋の事務所を用所という。組頭不在の村では、裕福な有力者の私宅が村用所とされ、他村からの庄屋の場合には組頭宅が用所とされた。なお、裕福農家の使用には用所給を村から支給した。(賀茂郡中切村では一石支給)。 (安浦町史・横山) ↓ 郡用所

ようにん 用人 ↓ 近習頭

ようば 用場 用場とは村政を司る場所をいい、庄屋宅が使用された。但し、小さな村で、その村出身の庄屋がおらず、他村の庄屋が兼帯している場合には、村の中心部にある組頭宅を用

場として使用した。 ↓ 用場給

ようばきゅう 用場給 百姓が、村内の諸問題について庄屋宅等で話し合いをする場合には、昼食代として、一人につき米三合または銀二分が村入用として決められていた。これを用場給と唱えていた。沼田郡相田村では明和四年(一七六七)に、話し合いが夜に及んだときは、右の昼食代の外に米三合と銀二分の増が以後認められた。(横山)

よこがみきり 横紙切 ↓ 折紙

よこめ 横目 横目付の略で、室町時代から安土桃山時代にあった武家の職名。諸士の行動を監察して、その不正を摘発する者。(日広)

よしぎん 蒔銀 元和六年(一六二〇)から始められたもので、広島 の国泰寺村・竹屋村・観音村・舟入村の葭州から、毎年公用の葭を刈り作事所へ提出すれば、およそ一反歩に対して銀四匁の計算で葭代銀が同役所から下附された。残りの葭について、人民から刈取の請願があれば、作事所から葭刈券が下附され、税銀(一反に付四匁)を徴収した。但し、この税銀と前述の葭代銀とで差引計算を行い、残額は上納した。(芸志・広寛)

よせむら 寄せ村 代官が見廻りに入郡した際に、村役人に指示し、また、報告を聞くため、休息所に近い村役人を召集した。この場合の召集範囲内の村をいう。また、その際、庄屋や与頭の辞令を手渡すこともあった。(美多)

よない 余内 *余荷とも書く。共同責任の仕事を担当して、一方の勘定が悪かった場合、他が金銭でこれを補うことをいう。

(古文書難語辞典) *近世、芸人などがとくに請求した割増給料をいう。(日用)

よぶ 余歩 ↓縄心

よめん 余免 三谿郡三良坂村(愛宕社領)と仁賀村(伊勢神宮社領)は社領のため、免は両村とも二ツ五歩であった。しかし、村の土免は高率で、土免から社領の免(二ツ五歩)を引き去った残りを超免といい、それは藩へ徴した。(広村)

よりあい 寄合 村役人・長百姓その他の役の者が集まって、種々の話し合いをすることをいう。寄合には村中の者が集合する総寄合、役付の者だけの村方寄合(重立寄合)、小前階層(平百姓・本百姓)のみが集まる小前寄合とがあった。正月初めの初寄合は、村の年中行事を決めることが主で、年末に行われる勘定寄合は、年貢米の精算経費の決算が主であった。広島藩では宝暦十二年(一七六二)以後、寄合の際の食事の中止と、人数を少なくするとともに、申し合いが長時間の際には、湯漬・香迄にせよ。また、毎月の寄合は止め、是非相談が必要であれば役人・長百姓・年行司だけで行え、という定を出している。(郷土・宝暦十二年沼田安芸郡割免割方相しらべ書写)

よりき 与力 江戸時代に、諸役所の奉行・所司代・留守居・物頭などに付属して、同心を指揮して上官の事務を分掌・輔佐した職名をいう。在任期間の短い奉行に比べて長期間在職した。家格は御家人で、譜代席・一代限りの抱席(多く世襲であった。給与は給知二〇〇石・切米二〇〇俵・現米八〇俵などで表されたが実質的には大差なく一定しなかった。(目広)

よりぶね 寄船 座礁した船、漂流・漂着した船をいい、難破船に乗員がいない場合は、船や積荷は神社・仏寺の造営費にあて、いる場合は船主の所有権を認めていた。(日用)

ら

らいし 礼紙 書状を差し出す場合に、相手への敬意から、書状の本文を書いた紙の下に、重ねて敷いた白紙をいう。点紙・裏付ともいう。(古用)

らつきよ 落居 事態が解決すること、また、裁判の終結をいう。なお、落城することをもいう。(古用)

り

りつげ 立毛 「りつも」ともいう。田畑の農作物で、収穫以前のものをいう。(日用)

りばいぎん 利倍銀 利倍とは高利で貸しつけて、元金を増やすという意である。広島藩では寛政五年(一七九三)に、沼田郡の安川川浚に対して、銀十貫目を利息月二歩で七ヶ年間郡中へ貸し付け、毎年利息のうち五朱分は郡割をもって御役所へ納めさせ、残りの一歩半の利息は元金へ繰り入れさせて、元銀を増やし、寛政十一年全額を納入させている。但し、其の間寛政八・九・十年には、それぞれその年の元銀の一部を納入させてい

る。この制は、藩財政窮乏の再建策として行われたものと思われる。なお、有徳者（富裕者の）献金や郡・村の出資金などを積み立て、それを貸与するものを利倍銀と称したようである。

例えば、文化四年（一八〇七）に沼田郡の安川堤防の普請に対しては、「安川利倍銀」（安川普請のための貸付金）から、年利五朱で銀一貫五百目を、七ヶ年賦で貸与している。（横山）

りゆうさくじよう 流作場 川筋堤外、湖水池沼等、收穫極めて不足の土地であつて、作付をした年のみ見分の上、税を課す土地をいう。（日法）

りゆうつぽ 立坪 「たてつぽ」ともいう。六尺立方に積み上げたものを一立坪といい、土木建設で用いる。小材料では一尺立方尺または一寸立方をいうこともある。（単位）

りよう 両 *「両」は江戸時代以後、金貨の単位（一両は四分、一分は四朱として用いられ、また銀貨の場合、儀式上の贈答等には、一定の紙包の上書に「銀何両」「銀子（白銀）何枚」としたときの、銀一両は銀四匁三分、銀一枚は銀四三分（銀十匁）であつた。（単位）。*また、重量単位としても用いられた。すなわち、重量単位としての「両」は中国の戦国時代から始まり、一両を二四鉄（二鉄は〇・一五匁、従つて一両は約三・六匁とした。日本では大宝律令によつてこの制を採用したが、その後一〇匁を一両として定め、明治に至るまで用いた。なお、「両」は菓種の重量単位としても用いられ、この場合は普通一両は四匁であるが、四匁四分や五匁のこともあつた。（単位）

りようちはんもつ 領知判物 將軍から大名に与えた領地の宛

行状をいう。元和三年（一六一七）將軍秀忠の福島正則に対する領知判物によると、芸備両国で四九万八二三石を宛行なうとなつてゐる。（県二）

りようぶんついほう 領分追放 広島藩では、犯罪の重い者にはその額（後に右腕に入墨をして投獄した後、藩境において他国へ放逐した。後年になって、初犯者は入墨をせずに放逐し、もし後日帰藩して罪を犯せばはじめて入墨をし、再び藩境で放逐することに改めた。もつとも、更にその後帰藩して罪を犯すと死刑に処した。しかし、犯罪の情状に依つては、加重して幾年か牢舎にし、その後放逐することがあり、あるいは入墨や曝にした後に放逐することもあつたが、孰れも藩境において放逐した。（芸志）

りようこうだされまい 旅行被下米 広島藩は、江戸・京・大坂・伏見詰や、江戸御供御留守居番の侍士、その外不時に領外へ旅行させる者などに対して米（銀）を支給した。これを旅行被下米（銀）といい、文政八年（一八二五）における藩の經常支出額（推定）では四・九%を占めていた。（県二・広覚）

りん 厘 長さの単位では、分の十分の一をいう。重さの単位でも分の十分の一をいう。日本の貨幣単位では銭の十分の一をいう。比率の単位では百分の一、すなわち〇・〇一をいう。但し、「何割何分何厘」というときの厘は、一割の百分の一、すなわち、〇・〇〇一をいう。（単位）

りんじかた 臨時方 ↓賞罰方

りんまい 厘米 厘米は村の高に賦課する付加税で、九厘以下

であったので厘米という。西国街道天下送りの者の扶持切米・渡し守・山林番所・御茶屋番・御小人などの給米・百姓共持分の田畑大破の節の諸入用・道路修理などにあて、税率は高につき、地方は八、九厘、浦辺島方は二、三厘であった。この制は寛永十九年（二六四二）に始まり、享保三年（二七一八）四月からは享保一揆の要求を受け、地方は七厘、浦辺・島方は一厘米・銀何れでも可に改められた。浦辺・島方が低率なのは、水主役を勤め、苦・縄・蒔などを出すことが多いからであった。また、水役銀を納める諸職人がいる村では老歩米同様に、一人につき本役五石、半役二石五斗が村高から差し引かれ、残りの高に対して賦課した。なお、厘米は藩の厘米方で特別会計として運用され、貸付資金（元文三年この制は停止）として、作食米や牛元銀、駅所の馬持への伝馬銀元に運用され、また家中へも貸し付けられていたようである。厘米は郡でまとめて翌年夏（六月）に、一回で上納。町村よりは金銭にて徴収し、郡村の総代（割庄屋一人・庄屋二人）が広島に出て、次屋（米問屋）から米券を購入し、これを米倉へ提出して現米を受け、再び貢米として米倉へ上納した。しかし、実際は米券を米倉に提出して現米上納済とした。（芸志）

る

るいぞくあらため 類族改 貞享四年（二六八七）の幕令（類族改法）によれば、改宗者を転切支丹または「本人」、改宗以前に生

まれた子を「本人同前」、改宗以後に生まれた子及び子孫を、「類族」（延享二年の規定では、男系は「本人」及び「本人同前」より四親等までの卑属、女系は同三親等までの卑属）と規定し、元禄期以降は、特にキリシタン禁制の重点として類族改を行った。広島藩においては毎年八月の宗門改の折、類族の者を残らず呼び出し、一人ずつ改めるとともに、類族のいる村の庄屋・組頭・五人組を呼び出し、充分類族を看視するように申しつけた。なお、類族に子供が出生すれば宗旨鉄砲改奉行に報告させ、類族が死亡した場合には同奉行が死体改をし、別状がなければ檀那寺においての土葬を許可をした。ちなみに、「本人同前」の者が死亡した場合には、死体を塩漬けにして檀那寺に預けるとともに、檀那寺は預かったという証文を、親類・庄屋・組頭・五人組はそれぞれ預けたという証文を、宗旨鉄砲改奉行に提出し、同奉行の許可を得て土葬にした。（海田市加藤新家文書・坪野村竹内家文書）

るいち 類地 検地の際、一人持一枚の大きな田畑を、二筆・三筆にも分割検地することという。当時切畝歩にすることは、種々の弊害が生ずるので禁止されていた。大きな田畑のちに切畝歩にする恐れがあったので、それを防止する方法として、一筆を一反歩以内とし、それ以上に大きな田畑は一反歩以下に分割して検地をした。（目用）↓切畝歩

るすい 留守居 江戸幕府の職名。初期には江戸城の守衛や武器などの管理。中期以降は、大奥の取締り・閑所の女手形・江戸城諸門の通行証の発行などを担当する旗本の閑職となった。役高は五〇〇石であった。（日広）

るすいぐみ 留守居組 ↓馬廻り組

れ

れいび 礼日 江戸時代、毎月一日・十五日・二十八日の三日

をいい、特別の日として祝った。「さんじつ」ともいう。(単位)

れきみよう 歴名 りやくみよう。姓名を順次に書きつらねる

ことをいう。また、計帳の手実を整理・浄書したものをいう。

(古用)

れんぱん 連判 一通の文書に複数の差出者が、署名し判をす

えることをいう。文書作成者の共同の意志を確認する契約状な

どに用いられる。とくに署判相互の地位の高低を明らかにしな

い目的で、円形に署判したものを傘連判という。(日用)

れんれんさく 連々作 見付田よりも更に地質が悪く、毎年

作付が不可能な土地をいい、石盛りはなく、村高に入らなかつ

た。(廿日)

ろ

ろうじ 臈次 僧侶が受戒後、一定期間外出しないで一室に籠

って修業した年数の多少によつて、席次が決まることをいう。

なお、僧侶の修業年数を戒臈という。また、一般には長幼の順

序をいう。

ろくがつかかりじょうのうぎん 六月掛り上納銀 夏割は、

壹歩米半額・厘米・小物成銀半額・諸職人水役銀半額及び竹代

銀等で、納期によつて一般に六月掛り上納銀といわれた。これ

は銀で勘定したが、この季節には、取り立てることが困難な村

があつた。(広農)

ろくしやく 六尺 陸尺とも書く。駕籠かき・賄方・掃除夫な

ど、雑役夫の類の呼称で、彼等が使用する鉢巻、または頬かぶ

りを陸尺裏という。(日用・広辞)

ろくしやくきゆうまい 六尺給米 江戸城に使役する人夫の、

給米分として賦課された米をいう。(古文書学入門)

ろくしよ 録所 江戸時代、触頭のうち特に格式の高い寺院を

いう。真宗西本願寺派では、江戸・越中・越前・河内・紀伊・

播磨・長門の七ヶ所にあり、このうち江戸の築地御坊は幕府と

の交渉にあたつた。(国大)触頭

ろくどう 六道 *一切の衆生が善悪の業因によつて、必然到

るべき六種の迷界。即ち地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上

の六種。*地上に大路・小路の形を描き、銭を投げて争いを

する子供の遊び。むさし。(広辞)

ろくぶ 六部 六十六部の略。六十六部とは書き写した六十六

部の法華経を、六十六か国の靈地に一部ずつ納める目的で、諸

国の社寺を遍歴する巡礼者をいう。後には死後の冥福を祈るた

めに、鐘をたたき鈴を振り、家毎に、銭を乞い歩く者をいうよ

うになった。(目広)

ろくりぶみ 六里踏み 土木工事において、土砂運搬の見積り

に使われた用語で、土砂一斗四升(約十貫)を背負って延べ六里運ぶことが、一人一日の仕事の量とされていたようである。(横山)

ろっかいほう 六会法 広島藩は、凶作等に伴う財政窮乏を脱却するため、天保十四年(一八四三)六会法という融通講を実施

して、金融緩和をはかった。この講は、藩内から集めた米銀を融通銀と称して、国産買占めの費に充て、領外販売することによって、金融打開の方策を講ずることを目的としたものである。

具体的には藩内町村の町年寄・割庄屋を取締役に任じ、持高十石につき一口とし、一口の掛米(米納を原則としたが、実際には銀札納)を五俵(一石五斗)と定め、領高四十二万石加入者延べ数万二千として、年間六万三千石(石六十匁替にして銀三千七百八十貫目)、これを六年間継続して三十七万八千石(銀二万二千六百八十貫目)を見込んだ。集銀の管理・運用にあたる綿座役所では、毎年「花くじ興行」を行い、加入者に千俵から十俵までの四百五十本の「花くじ米」(年額三千九十石藩札払い)を与え、残りは「融通銀」として増殖をはかり、会期満了後に掛米代を返却する方式であった。しかし、弘化二年(一八四五)には廃止された。

(県二)

ろんでん 論田 訴訟の対象になっている田地をいう。(目用)

わ

わきひやくしゅう 脇百姓 「二軒前」の百姓としてみとめら

れていない者の一つで、田畑を名請けしながらも、その経営は、「御役目」を負担するまでには至らず、一般的には、地詰帳に無屋敷登録人としてあらわれ、本家百姓から自立の過程にあるとはいえず、なお従属関係を維持していたと考えられる。しかし、後には本家百姓に上昇する一方、本家百姓に従属していた分家筋や下人なども、石高を分与されることによって、本家百姓として自立していった。(県一)

わたうんじょう 綿運上 ↓綿座

わたかいしよ 綿改所 宝永七年(一七一〇)城下西土手町に置かれた綿改所は、商品としての綿類いっさいの品質を調べて、その風袋に検印を押す業務を行っていたが、享保十四、五年(一七二九、三〇)の頃から生綿の不作が続き、綿改所に差し出される繰綿等の数量も激減して、改め賃ではその入費を償いえない状態になり、町方支配銀(町奉行所支配銀)の中から連年融通して、綿改所の維持費にあてるといふ実情に立ち至った。そこで、寛延二年(一七四九)綿改所の機構を改革し(銀山町に移転)、綿改めのほか新たな業務として町方支配銀を管理し、その増殖をはかることになった。かくて綿改所は公設の機関となり、繰綿・実綿の商事を統制するだけでなく、金融商事にも威力を振るうことになり、さらに、天保十二年(一八四二)には高額の「綿座預り切手」の発行も許されて、銀札同様に流通した。もともと綿改めの業務も、一般に商品統制の強化されたこの頃には、「御国産第一之品柄」として品質の保全をはかり、抜け荷を取り締めるためにも、いよいよ厳重に行われたことはいうまでもない。なお、領内に繰綿の商人を株として公認(繰綿株仲間)し、営業

権を認めるかわりに運上銀を徴収し、藩財政を補った。(新三)
↓町奉行所支配銀

わたぎん 綿銀 小物成銀の一種で桑銀ともいう。桑の木を上

・中・下に分けて株数を改め、一本の桑の木から、養蚕によって生産する真綿の量を定め、真綿十匁につき銀一匁を課した。

(白木)

わたざ 綿座 寛永三年(一六二六)に、広島に綿座が置かれて、

他国移出の綿について、運上銀を取り立てたことが伝えられている。その後綿座は廃止されたようであるが、元禄十年(一六九七)に至って、革屋町伏見屋七兵衛・堀川町松屋新九郎の両名の願い出により、綿座(中島本町)が再興され、実綿・繰綿の改めを行い、運上銀を徴して藩に差し出すことが許され、他国売の実綿・繰綿の運上銀として、銀八貫目を藩へ納めている。

綿座はさらに宝永七年(一七二〇)広瀬組大年寄芥河屋平八によつて、綿改所(西土手町に設置)として機構を改め、半ば公設の機関となり、商品としての綿類いっさいの品質を調べて、その風袋に検印を押す業務を行うことになった。すでに、当時広島には綿屋仲間が組織されていたようであるから、藩府は業者のこの組織を綿商事の統制に利用して、この制度を立てたものと思われる。(新三)↓綿改所

わたざあずかりきって 綿座預り切手 広島藩は天保初年(一

八三〇)以降、藩財政が極度に圧迫され破綻していった。こうした事態に対して、藩はいちずに藩札を濫発することで、正金銀の藩庫吸収をはかったため、経済界は混乱を深め諸物価は暴

騰して、領内は悪性インフレの渦中に投じられた。藩はこうした事態の中で天保十二年(一八四一)城下銀山町の綿改所から、銀二貫目・一貫目・一〇〇目・五〇目・三〇目・二〇目の六種からなる綿座預り切手(綿座預り券)を発行した。これは、繰綿等の売買にかかわる札銀預り手形として発行されたものであったが、銀札と同様に通用したため、しよせん高額紙幣の発行にすぎず、悪性インフレをますます助長していった。(県二)

わたしもやい 渡模相 ↓家中模相銀

わりきぶねうんじょうぎん 割木船運上銀 太田川沿岸の沼

田・高宮・山県の三郡から、船で広島へ積み出した薪にかかる運上銀をいう。高宮郡上深川村では、船一艘につき割木は三匁五分、柴は二匁課税され、二・六・九・十二月の四期に分けて上納した。(広農)

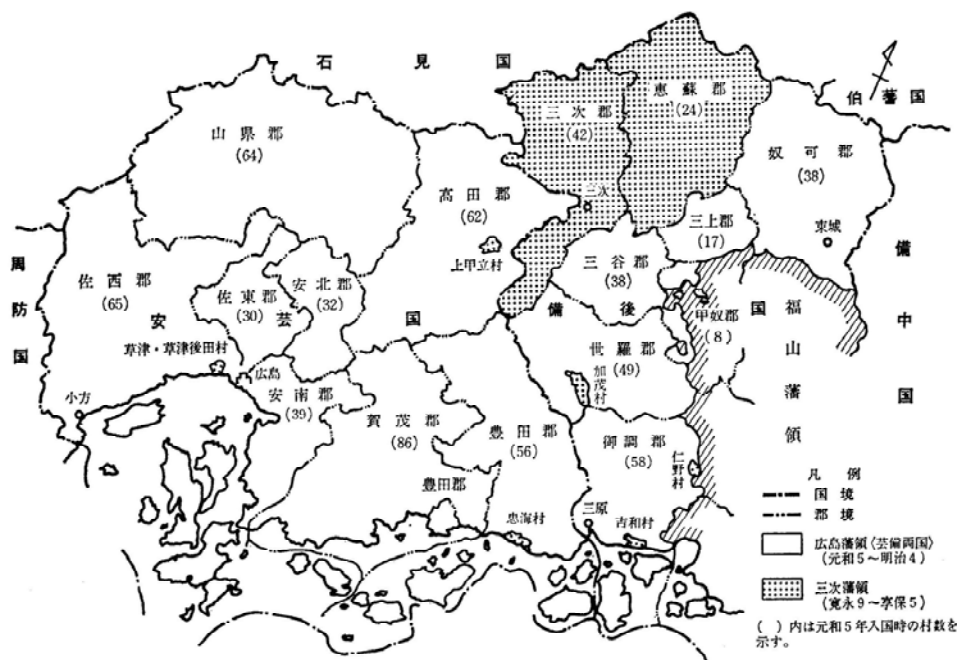
わりじょうや 割庄屋 正徳二年(一七二二)郡制を改革し、代官

制を廃し所務役人等を置いたが、享保三年(一七一八)に再び代官制へ復帰し、大割庄屋を廃し割庄屋を置いた。しかし、当時の村方文書には割庄屋の役名が見られず、役名が見えるのは、享保十一年(一七二六)頃からである。割庄屋は、有力農民の中から、「郡廻り」と代官の協議を経て郡奉行が任命し、各郡に置かれ、二人以上の郡にあつては、郡割年番と唱えて交代して一人宛が(庄屋二人位とともに)あたった。なお、郡割年番の割庄屋・庄屋には出飯米を給した。割庄屋の主な職務は郡割の専務であつたが、そのほか百姓出入の調停・普請時の人足・竹木などの調停管理・郷倉の管理・伝馬人足の割賦・浦辺の取り締り

等であつた。表面上は藩の伝達吏の感があつたが、実際には庄屋以下の指揮監督権を有し、進退の具状・請願許可の意見をも内申した。割庄屋は明治五年まで存置していた。ちなみに、慶応三年（一八六七）に、沼田郡割庄屋庄三郎は、庄屋・割庄屋としての通算四十六ヶ年在勤中、村用・郡用に精勤し、しかも質朴・誠実・温和・親切であるので、生涯苗字帯刀を与えてほしいと、同役の割庄屋から藩府に対して願書を提出している。（白木・横山）

わりぶぎょう 割奉行 普請奉行の指揮を受けて土木工事を分担した。（新二）

参考資料



広島藩と三次藩領

東西町奉行——大町年寄——町年寄・組頭

中島組	新町組	白神組	中通組	広瀬組
本町 材木町 天神町 木挽町 新町 元柳町 山口町 銀山町 東引御堂町 胡町 堀川町 斜屋町 石見屋町 橋本町 京橋町 新愛宕町 東柳町 稻荷町西組 同下組 同中組 同東組 猿猴橋町	三町目 二町目 一町目 四町目 尾道町 塩屋町 紙屋町 猿楽町 細工町 横町 鳥屋町 平田屋町 播磨屋町 革屋町 西魚屋町 中町 袋町 研屋町 立町 東魚屋町 鉄砲屋 新川場町 竹屋町 東白島町 西白島町	塚本町 堺町一町目 同二町目 猫屋町 油屋町 十日市町 西引御堂町 鍛冶屋町 西土手町 唐人町 堺町三町目 西大工町 堺町四町目 寺町		

東西町奉行——大割庄屋——庄屋・組頭

新開分	吉島新開
国奉寺村 六町目村 竹屋村 段原村 比治村 山崎新開 大黒村 亀島新開 皆実新開 東新開 矢賀村 尾長村 古川村 大須新開 西愛宕町 東愛宕町 大須賀村 明星院村 白島村 広瀬村 空鞆町 左官町 天満町 川田村 観音村 西地方町 船入村 江波新開 水主町新開	

広島城下の支配組織 (文政年間頃)

芸備塩田の開発年代

藩	郡名	浜 名	軒 数	開発年代
広島藩	賀茂	竹原古浜	98	慶安3～承応元
	佐伯	海老塩浜	?	万治年間
	豊田	生口古浜	33	寛文10～天和3
	"	大崎古浜(1)	1	延宝4
	御調	富浜古浜	11	" 5
	"	栗原沖浜	4	元禄元
	"	肥 浜	8	" 2
	豊田	生口新浜	7	" 3～" 9
	御調	富浜新浜	14	" 4
	賀茂	仁方浜	12	" 4～" 9
	"	天女浜	11	" 5
	御調	吉和浜	21	" 9～正徳5
	"	津部田浜	2	" 10
	"	三原古浜	15	" 13
	豊田	大崎古浜(2)	9	" 13～正徳3
福山藩	"	忠海浜(1)	1	?
	"	"(2)	4	正徳年間
	沼隈	松 永	52	寛文2
福山藩	"	山 波	1	元禄11
	"	浦 崎	2	正徳5

所務役人・頭庄屋の人数

郡	所務役人 人数	頭庄屋 人数	頭庄屋組 下村数	頭庄屋組 平均石高
沼田	2	4	6～9	5119.708
佐伯	3	6	12～18	6189.326
山県	3	6	8～18	5256.333
高田	4	9	4～9	4782.042
高宮	2	4	8～11	4356.274
安芸	3	6	5～8	5085.402
賀茂	6	12	4～13	4604.409
豊田①	6	12	3～15	4628.581
御調②	3	6	5～20	4353.721
世羅	3	6	6～10	5311.460
三谿	2	4	5～14	4833.336
奴可	2	4	7～13	4917.938
三上	1	2	8～10	6731.115
13③	40	81	(737)	5089.973

注 1. 永井弥六「所務役人について」(『芸備
地方史研究』77号)より加工作成。

2. ①; 三原浅野家知行地須波村を除く。

②; 同御調郡23村9901石余を除く。

③; 同甲奴郡8村4513石余および三次
浅野領分を除く。

広島藩の浦方

郡	浦数	浦名
佐伯	13	大竹浦, 小方浦, 黒川浦, 玖波浦, 大野浦, 地御前浦, 岐島, 西能美島, 東能美島, 廿日市浦, 五日市浦, 海老浦, 井口浦
沼田	1	江波島
安芸	23(5)	仁保島, 屋賀浦, 府中浦, 船越浦, 海田浦, 矢野浦, 矢野町, 坂浦(横浜浦), 江田島, 小屋浦, 大屋浦, 吉浦, 庄浦(山田浦), 和庄浦, 呉町, 宮原浦, 警固屋浦(鍋浦), 瀬戸町, 隠渡島, 渡の子島(田原浦・早瀬浦), 倉橋島, 蒲刈島, 三之瀬町
賀茂	12(2)	阿賀浦, 広浦, 長浜浦, 仁方浦(戸田浦), 川尻浦(小用浦), 内海浦, 三津口浦, 小松原浦, 風早浦, 三津浦, 竹原浦, 大石浦
豊田	14(6)	木谷浦, 吉奈浦, 高崎浦, 福田浦, 豊島(斎島・大浜浦), 大長浦(久比浦・沖友浦), 大崎島, 高根島, 瀬戸田浦, 生口島, 向田之浦(須上浦), 桑木浦, 角南浦(佐木島), 和田浦
御調	8	三原西・東町, 院島, 鯛島, 向島東, 向島西, 立花浦, 尾道浦

「広島藩御覚書帖」3による。()内は附浦。

表342 広島藩の主な風水害・旱魃等による被害状況

年月日	被害状況
文政6. 11. 8. 10	旱魃, 田畑損毛147, 220石余。
12. 5. 24	暴風雨, 洪水, 田畑損毛126, 841石余, 流失全壊家屋1, 603軒, 損家12, 104軒, 死者51人, 船舶破損多し。
天保4. 秋	暴風雨, 洪水, 田畑損毛31, 320石余, 流失全壊家屋162軒, 死者14人, 城下神田橋・己斐橋流失, 城下大半浸水。
7. 6	冷害, 田畑損毛72, 335石余。
7. 夏～秋	雨降り続き洪水, 田畑損毛122, 456石余, 流失全壊家屋406軒, 死者31人, 城下元安橋・猫屋橋・神田橋流失, 城中城下の被害甚大。
9. 夏～秋	気候不順, 田畑損毛133, 061石余, この年の田畑損毛総計255, 517石余。
11. 6. 3～5	冷害, 田畑損毛170, 400石余。
嘉永2. 7. 10～11	雨降り続き洪水, 田畑損毛127, 274石余, 流失全壊家屋320軒, 死者45人, 死牛馬8疋, 水主町・国泰寺村浸水。
3. 8. 7	暴風雨, 洪水, 高潮, 田畑損毛85, 200石余, 流失全壊家屋645軒, 損家8, 701軒, 城下大半浸水。
	暴風雨, 洪水, 高潮, 5月の被害と合わせ田畑損毛298, 434石余, 流失全壊家屋4, 425軒, 損家3, 558軒, 社寺破損134, 死者60人, 城下の被害大。

『新修広島市史』, 『芸備年表』, 『総合地方史大年表』, 『加計町史』, 『安芸府中町史』, 『新修尾道市史』による。

広島藩の年貢所払いの村々

郡名	蔵 所	村数	村 名
山県	広島(深川)	30	東・西八幡原, 杉山, 草安, 奥中原, 川小田, 土橋, 雲耕, 中祖, 才乙, 刈屋形, 岩戸, 宮迫, 大朝, 細見, 新庄, 筏津, 移原, 溝口, 奥原, 小原, 大塚, 米沢, 高野, 大暮, 政所, 南門原, 荒神原, 宮地, 大利原
高田	"	20	稼地, 本村, 北村, 生田, 川根, 原田, 横田, 来女木, 下小原, 上小原, 高田原, 戸島, 深瀬, 栗屋, 浅塚, 羽左竹, 房後, 舟木, 佐々部, 下甲立
三谿	三 原	31	三玉, 小田幸, 吉舎, 和地石原, 海渡, 島井, 灰塚, 長田, 廻神, 志幸, 矢野地, 海田原, 矢井, 清綱, 有原, 高杉, 多利, 三良坂, 安田, 敷地, 三若, 上田, 仁賀, 江田川之内, 大田幸, 茅瀬, 木乗, 岡田, 藁原, 光清
奴可	"	39	栗・大戸, 加谷, 大佐, 三坂, 平子, 油木, 小島原, 入江, 高尾, 宇山, 上千島, 森脇, 小串, 森村, 大屋, 竹森, 所尾, 小奴可, 中迫, 未渡, 久代, 請原, 内堀, 戸字田黒, 川西, 塩原, 川島, 保田, 中野, 川東, 山中, 菅村, 田殿, 始終, 福代, 八島, 下千島, 栗田
三上	"	18	小用, 永末, 大久保, 上谷, 川牛, 高村, 春田, 峰村, 下庄原, 是松, 実富, 川西, 宮内, 一木, 板橋, 本村, 上庄原, 高門

「青枯集」4による。

□町年寄を置いた市町

海田市町 蒲刈三之瀬町 吉田町 可部町 四日市町 竹原町
 白市町 本郷町 忠海町 瀬戸田町 御手洗町 甲山町 吉舎町
 西城町 庄原町 布野町 恵蘇郡三日市町 同郡比和町
 同郡宮内町 同郡新市町

□十八世紀初の領地

○大名領 二二五〇万石 (七五・〇%)
 ○幕府天領 四〇〇万石 (二三・四%)
 ○旗本知行地 三〇〇万石 (一〇・〇%)
 ○寺社領 四〇万石 (一・三%)
 ○公家領 七万石 (一・三%)
 ○禁裏御料 三万石 (〇・三%)

□僧侶官位(本願寺教団)

院家 内陣 余間 二四輩 初中後
 飛檐 国絹袈裟 総坊主

□二十四節気……季節の二十四節にその時期時期の気象の表

徴となるべき言葉を当てたるもの

「二十四節気表」

二十四節気・土用・入梅・半夏生の日付は、太陽の視黄経がそれぞれ
 の値をとる入節の日付を示したもの。節分は立春の前日、彼
 岸はそれぞれの入りの日の日付となっている。

四季	初春	仲春	暮春	初夏	仲夏	暮夏	初秋	仲秋	暮秋	初冬	仲冬	暮冬
二十四 節気名 (旧暦)	立春 雨水 惊蛰 春分 清明 立夏 小满 芒种 夏至 小暑 立秋 处暑 白露 秋分 寒露 霜降 立冬 小雪 大雪 冬至	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月	正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月
新暦による 大体の日付	二月十九日	三月五日	三月二十一日	四月五日	四月二十日	五月五日	五月二十日	六月五日	六月二十日	七月五日	七月二十日	八月五日
雑節名												
新暦による 大体の日付	二月三日	三月十八日	四月二日	四月十七日	五月二日	五月十七日	六月二日	六月十七日	七月二日	七月十七日	八月二日	八月十七日

正月正節
 正月・中気
 二月正節
 二月中気

 ↳「ちゅうき」
 ↳という表現もある(単位の歴史辞典)

○将軍考現学

(一九九八年『諸君』一月号)

○将軍在職期間

- ・十一代家斉 五十年……六十九才没
- ・八代 吉宗 二十九年
- ・初代 家康 二年二ヶ月
- ・十五代慶喜 一年

○将軍の親子関係

- ・庶出子(側室の子)
 - 秀忠(二代)・家綱(四代)・家継(七代)
 - 家重(九代)・家治(十代)・家慶(十二代)
 - 家定(十三代)
- ・嫡出子(正室の子)
 - 家康・家光

○将軍の妻妾

- ・家康 十九人(一説には「二妻十五妾」)

- ・家斉 十六人

- ・家光 九人

- ・家慶 七人

- ・慶喜 三人 正妻六十九才で死亡、子供二十二人?

※妾のいなかった者 家継・家定・家茂(十四代)

※家斉の側室(十六人)が生んだ子

男子二十七人、女子二十七人、計五十四人

(広島九代藩主斉肅の妻は家斉の二十四女末姫)

広島藩御用紙の種類と産地・生産高・規格

種類	享初年 保年高	佐伯郡	山形郡	沼田郡	高宮郡	高田郡	三次郡	三輪郡	奴可郡	三上郡	世羅郡	甲奴郡	安芸郡	賀茂郡	豊田郡	御調郡	規格 縦横	一丸と枚数
諸口 小諸口	丸 4,460	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	寸分 9.7×15.5 寸分 8.4×12.8	一丸=26束ト21束入トアリ, 1束=10帖 1帖=20枚
半紙	3,370	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8.3×11.6	1丸=6束 1束=10束 1束=10帖 1帖=20枚
小半紙	90	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6.6×9.2	同上
上小半紙	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6.6×9.2	同上
浅紙半紙	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8.3×11.6	同上
御森紙	6.2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	7.3×11.4	同上
海田	790	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10.8×15.3	1丸=8束 1束=10帖 1帖=50枚
中杉原	590	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10.5×15.0	1丸=16束ト14束ト10束ト8束入トアリ 1束=10帖 1帖=48枚
大杉原	150	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11.2×16.0	1丸=10束ト7束ト6束入トアリ, 他ト同上
大奉書	20	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12.5×17.3	1丸=3束 他ト同上
小奉書	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11.8×16.0	1丸=4束 他ト同上
障子紙	50	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9.5×15.2	1丸=42束ト39束ト36束入トアリ 1束=10帖 1帖=20枚
上包	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9.2×13.8	同上
大長筒 (大尺)	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11.6×17.4	1丸=8束 他ト同上
中長筒 (中尺)	40	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10.5×16.0	1丸=10束 他ト同上
勝木	190	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10.2×16.3	1丸=5束 1束=10帖 1帖=60枚
厚紙	90	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10.5×15.8	1丸=5束 1束=10帖 1帖=48枚
塵紙	30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	—	(諸口) 1丸=40束ト30束入トアリ 1束=10帖 1帖=10枚 半紙 1丸=4束 1束=10束 1束=10帖 1帖=20枚
紙子	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	10.2×16.3	1丸=30帖 1帖=64枚

紙の種類・生産高・規格・一丸枚数及び産地欄の○印は享保初年の「広島藩御賞書帖」4により、産地欄の×印は文化13年「諸紙定寸賞書」に、△印は「佐伯郡々辻書出帖」に、□印は『芸藩通志』にそれぞれよった。なお、恵祿部でも紙を渡っており、産地欄に入れるべきものであるが、製紙の種類等不明のためここでは省いた。

口郡方吟味屋敷への引出費用

○佐伯郡畑村(寛政四年)——踊場家文書

- ・付添役人・長百姓当日出飯米……………郡割
- ・小頭革田一昼一夜分(賄料二升五合)……………御銀出
- ・下革田(同右二升)……………御銀出
- ・盜賊——男五合・女四合……………男女共御銀出
- 但、当日引出難、翌日引出しの入用……………御銀出
- 数日村内に留置の入用……………郡割

○沼田郡相田村(年代不詳)——横山家文書

- ・村留置入用(飯米・塩・薪・油・番革田)……………御銀出
- ・引出し当日(革田二人)……………御銀出
- ・〃〃(長百姓)……………郡割

○沼田郡相田村(文化十年)——横山家文書

- ・召取中及引出し途中飯米代……………七分銀出・三分郡割
- ・灯油代……………二分銀出・八分村出
- ・引出し当日警固(革田一人に付二升)……………銀出
- ・同長百姓出飯米(一升)……………銀出

口伝馬・旅籠代——「大野古文書管見」より

弘化四年(一八四七)佐伯郡御役所より割庄屋への通達による定法を、次のように定めている。

○泊り 上分老奴式分之處、三十増三拾六匁
下分老奴之處、三拾目

○昼 上下共米二合五勺、代式分五厘
湯代木錢同斷、七匁五分

○人馬賃錢 駅所より駅所迄之處は、御高札前へ三拾倍銀札払。

辺道にて老里に付四拾二文、右同斷拾式匁六分、
人足廿一分右同斷、六匁三分銀札払之事

口子午の人馬改帖 (「弘化三年高宮郡上原村人数改帳」より)

一、人数三百式拾七人

百八拾六人——男

- 内 七拾式人 百姓
- 式人 大工
- 式人 木挽
- 式人 草屋根葺
- 九拾四人 懸り人
- 拾四人 浮過

百四拾壹人——女

男数百八拾六人之内

一、宜男拾八人 式拾才五三十九才迄

内 拾人 上
八人 中

一、牛馬四拾式疋

- 内 式拾疋 男牛
- 式拾老疋 女牛
- 老疋 馬

右者此度人数御改被為仰付、去極月迄之員数(以下略)

午三月

三上勘六様・(他二名略)

庄屋結城兵右衛門・与頭武右衛門

参考文献

□「芸藩志」一五一卷・附図一卷

明治四十二年九月刊行。浅野長勲が旧藩士橋本素助・川合麟三に委嘱して編纂したもので、嘉永六年ペリー来航から明治四年元藩主浅野長訓の上京までの、広島藩が国事に尽くした事績と、藩政改革をした事績を中心に記述されている。

□「芸藩志拾遺」二四卷

「芸藩志」の中で述べることのできなかった「藩政常務」について、租税・財政・勸業・山林・社倉・軍制・教育・刑罪の八項目をたて、その沿革を記述したものである。

□「芸備国郡志」二卷

浅野光晟が京都の儒医黒川道祐を招いて編纂したもの。寛文三年発刊。十七世紀中期の藩領域の状況をうかがう資料として貴重であるが、記述が粗く、その後寛文四年（一六六四）に郡名の変更があり（佐西↓佐伯・佐東↓沼田・安南↓安芸・安北↓高宮・三吉↓三次）、改作の必要が生じ、『芸藩通志』が編纂されるに至った。

※黒川道祐（一六二〇〜九一）は、名は玄逸、字は道祐、号は静庵・梅遠。林羅山に儒学を、外祖父堀杏庵に医学を学ぶ。

□「芸藩通志」一五九卷

浅野齊賢の時代文政八年（一八二五）に発刊した広島藩の地誌で、一五九卷から成り、頼杏坪のもとに津村聖山・山田吉甫・河原南汀らによって編纂された貴重な資料である。

□「事績緒鑑」

浅野家が代々伝蔵してきた武家文書で、元文年間（一七三六〜四〇）より、寛政四年（一七九二）までの事績を記述している。現在には学習院大学が保管している。

□「済美録」四六七卷（清書稿本）

済美録は、歴代広島藩主および三次支藩主の事績を記録した史伝である。構成は、頭書（凡例・目次にあたる）のほか、広島藩主は歴代順に記している。

太祖公（長勝）済美録一〇卷

清光公（幸長）済美録一二卷

自得公（長晟）済美録二三卷

玄徳公（光晟）済美録六一卷

天心公（吉長）済美録一一卷

頭妙公（綱長）済美録三七卷

吉長公御代記四七卷

鶴阜公（宗恒）済美録三五卷

恭昭公（重晟）済美録五六卷

天祐公（齊賢）済美録四六卷

温徳公（齊肅）済美録四一卷

大光公（慶熾）済美録一一卷

長訓公済美録二一卷

長勲公済美録五五卷

つぎに三次支藩の五代について記している。

鳳源君（長治）御伝記七卷 騰雲君（長照）御伝記五卷

天柱君（長澄）御伝記七卷 鳳章君（長経）御伝記

瑞麟君（長寔）御伝記一卷

□「知新集」二五卷

広島藩は『芸藩通志』の編集にあたり、各町村に地誌の書き出しを求めた。各町村では「国郡志御用係」を設けてその編集にあたったが、広島府では文化十一年（一八一四）町年寄同格山県屋九郎右衛門・安田屋理右衛門らが御用係となり、さらに町方付歩行飯田篤老らがこれに加わり、文政五年に完成した。こ

れを飯田篤老が別に書写し、体裁を整えて二十五巻にまとめて「知新集」と命名した。

□「堀川町覚書」

広島城下新町組堀川町の町年寄文書で、旧蔵は橋本町万代四郎左衛門家。広島町組の町方支配が明らかにできる重要なもの。内容は触書・廻状あるいは町方諸願類を書き留めたもので、元禄十四、享保四、十四、十六、元文二、延享二、明和五、安永三、六、天明二、四、七、寛政元、三、五、十、十三、享和二、三年と十八世紀のものが多い。

□「青枯集」五卷(写本)

「青枯集」は郡奉行配下の下級役人「蝙蝠軒」が「旧記に眼をさらし、古役の物語に耳ニ留メ」て、新古の要用を選択・編集したもので、寛政二年(一七九〇)十二月に成った。内容は「地方役人心得以下一三八項目に分かれ、広島藩の享保三年(一七一八)から寛政年間までの郡方支配に関する諸資料を網羅した地方書である。

□「安芸風土記」二三巻

藩の地方支配に関する法制的資料を中心に集成されている。成立は文政初年頃で『芸藩通志』の編纂と同時期にあたり、その編纂資料としてまとめられた。内容は正徳二年(一七一一)の郡制改革とその失敗の覚書からはじまって、文政元年(一八一八)まで二三二項目に分けて収録されている。本書は村役人が郡政執務の参考として写し取り、各地にその写本を残している。

□「尾道志稿」一一巻

『芸藩通志』の下調べ帳として編纂されたもので、著者は当時の町年寄亀山士綱(油屋本助)。内容は公署・街市・畝高・戸口・塔寺・人品・土産・風俗・旧家・詩歌等について記述している。

広島藩における

近世用語の概説

(六訂増補版)

発行 平成十七年三月

編集 金 岡 照